

都城市所在

たか ひ い せき  
高 横 遺 跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

2018

宮崎県埋蔵文化財センター

---

制作環境：Mac OS 10.13.3

使用ソフト：Adobe InDesign CC2017/Adobe Illustrator CC2017/Adobe Photoshop CC2017

データ作成：PDF形式

---



都城市所在

たか ひ い せき

高 横 遺 跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 4



2018

宮崎県埋蔵文化財センター





高槻遺跡近景(遺跡南から高千穂峰を望む)



高槻遺跡第VI層上面遺構分布状況(写真左が北) ※モザイク合成写真



調査区中央部 古代～中世掘立柱建物跡完掘状況(南より)



6号竪穴建物跡出土遺物

# 序

宮崎県教育委員会では、地域高規格道路「都城志布志道路」の一部となる県道飯野松山都城線梅北工区道路整備工事に伴い、平成27年度に都城市梅北町に所在する高櫛遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

今回報告する高櫛遺跡は、縄文時代・古墳時代・古代～中近世の複合遺跡です。なかでも、縄文時代前期～中期の遺物は、県内でもまだそれほど出土例が多くなく、遺跡の南側に所在する笹ヶ崎遺跡出土例とともに、アカホヤ火山灰降灰後の当該時期の様相を解明するための貴重な資料となりました。また、古墳時代中期～後期の竪穴建物跡群や、中世～近世の掘立柱建物跡群等も、古くから人びとの営みが盛んであった都城盆地における南端部、梅北地区の歴史を解明する上で、南隣の笹ヶ崎遺跡に加えて重要な調査事例を提供することとなりました。

この成果が学術資料としてだけではなく、学校教育や生涯学習の場などでより多くの方々に御活用いただき、埋蔵文化財保護に対する理解を深めていただけ一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって御協力を賜りました関係諸機関をはじめ地元のみなさま方に、心より厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 菅付 和樹

## 例言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町に所在する高櫛遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宮崎県県土整備部都城土木事務所の依頼により、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成27（2015）年4月21日から平成28（2016）年2月3日まで行った。
- 3 発掘調査は徳田尚文、後藤清隆、二方和也が担当した。現地調査における図面作成及び写真撮影は、調査担当者が分担して行った。
- 4 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで実施し、本書に係わる業務については、整理作業員の協力を得て徳田が行った。
- 5 空中写真撮影業務は有限会社フジタ、基準点測量等の測量業務は株式会社旭総合コンサルタント、石器実測委託は九州文化財リサーチ、自然科学分析は株式会社加速器分析研究所にそれぞれ委託した。
- 6 本書で使用した測量基準は、国土座標平面直角座標系第Ⅱ系（世界測地系）及び東京湾海拔（T.P.）である。方位は座標北（G.N.）を指す。また、国土地理院発行地形図は真北を指す。個別の遺構実測図には、磁北（M.N.）を用いている場合もある。
- 7 本書で使用した土層・土器等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖（2008年度版）』による。
- 8 石器石材については当センター普及資料課長赤崎広志に、陶磁器については五ヶ瀬町立三ヶ所小学校校長福田泰典氏、西都原考古博物館主査堀田孝博氏に御教示いただいた。
- 9 現地での記録・図面中で使用した遺構略号は、以下のとおりである。

SA…堅穴建物跡	SB…掘立柱建物跡	SC…土坑	SE…溝状遺構
SG…道路状遺構	SH…ピット	SI…集石遺構	Tr…トレンチ
- 10 本書の執筆及び編集は徳田が行った。ただし、第Ⅳ章は各委託業者の報告に基づく。
- 11 出土遺物およびその他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

## 本文目次

### 序文

### 例言

### 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2
第4節 発掘調査の方法	3
第5節 整理作業の経過と概要	3
第6節 普及活動	3

### 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6

### 第Ⅲ章 調査の記録

第1節 基本層序	9
第2節 縄文時代早期の遺構と遺物	11
第3節 縄文時代前～中期の遺構と遺物	11
第4節 縄文時代後～晚期の遺構と遺物	22
第5節 古墳時代の遺構と遺物	28
第6節 古代～中世の遺構と遺物	46
第7節 近世の遺構と遺物	65
第8節 時期不明の遺構と遺物	74

### 第Ⅳ章 自然科学分析の結果

第1節 自然科学分析の概要	106
第2節 樹種同定	106
第3節 放射性炭素年代測定	107
第4節 火山灰分析	114

### 第Ⅴ章 総括

第1節 縄文時代	117
第2節 古墳時代	117
第3節 古代～中世	119
第4節 近世以降	121
第5節 結語	121

## 挿図目次

第1図 高速道路調査区の位置と周辺地形図	4	第41図 1号掘立柱建物跡及び3号横列実測図	52
第2図 グリッド配置図	5	第42図 2号掘立柱建物跡及び2号横列実測図	53
第3図 周辺道路分布図	8	第43図 3号～5号掘立柱建物跡及び4号・5号横列実測図	54
第4図 土刷痕面図(1)	9	第44図 6号～9号掘立柱建物跡実測図	55
第5図 土刷痕面図(2)	10	第45図 10号・11号掘立柱建物跡及び11号横列実測図	56
第6図 縄文時代早期遺構分布図及び1号・2号集石遺構実測図	12	第46図 12号～14号掘立柱建物跡実測図	57
第7図 縄文時代早期土器実測図	13	第47図 1号堅穴状遺構及び1号溝状遺構実測図	58
第8図 縄文時代早期石器実測図	14	第48図 2号溝状遺構及び1号道路状遺構実測図	59
第9図 縄文時代前～中期遺構分布図	14	第49図 2号～5号道路状遺構実測図	60
第10図 1号～3号土坑及び3号集石遺構実測図	15	第50図 遺構出土遺物実測図(1)	61
第11図 4号～6号集石遺構実測図	16	第51図 包含層等出土遺物実測図(1)	62
第12図 縄文時代前～中期遺構出土土器実測図	17	第52図 包含層等出土遺物実測図(2)	63
第13図 縄文時代前～中期土器実測図(1)	18	第53図 包含層等出土遺物実測図(3)及び古鉢拓影	64
第14図 縄文時代前～中期土器実測図(2)	19	第54図 近世遺構分布図	66
第15図 縄文時代前～中期土器実測図(3)	20	第55図 15号～17号掘立柱建物跡実測図	67
第16図 縄文時代前～中期石器実測図	21	第56図 18号掘立柱建物跡及び12号横列実測図	68
第17図 縄文時代晚期遺構分布図及び4号土坑実測図	23	第57図 19号掘立柱建物跡及び3号溝状遺構実測図	69
第18図 縄文時代後～晩期土器実測図	24	第58図 4号～5号溝状遺構実測図	70
第19図 縄文時代晚期土器実測図(1)	25	第59図 遺構出土遺物実測図(1)	71
第20図 縄文時代晚期土器実測図(2)	26	第60図 遺構出土遺物実測図(2)	72
第21図 縄文時代後～晩期石器実測図	27	第61図 遺構外出土遺物実測図	73
第22図 古墳時代遺構分布図	29	第62図 時期不明遺構分布図	75
第23図 1号堅穴建物跡実測図及び出土遺物実測図(1)	30	第63図 20号～24号掘立柱建物跡実測図	76
第24図 1号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)	31	第64図 25号～27号掘立柱建物跡及び6号横列実測図	77
第25図 1号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)	32	第65図 29号～32号掘立柱建物跡実測図	78
第26図 2号堅穴建物跡実測図	33	第66図 2号堅穴状遺構及び5号土坑実測図	79
第27図 2号堅穴建物跡出土遺物実測図	34	第67図 6号～10号土坑実測図	80
第28図 3号堅穴建物跡実測図及び出土遺物実測図	35	第68図 6号～8号溝状遺構実測図	83
第29図 4号堅穴建物跡実測図及び出土遺物実測図	36	第69図 その他時期不明遺物及び鉄製品実測図	84
第30図 5号堅穴建物跡実測図	37	第70図 聖年較正結果(1)	111
第31図 5号堅穴建物跡出土遺物実測図(1)	38	第71図 聖年較正結果(2)	112
第32図 5号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)	39	第72図 聖年較正結果(3)	113
第33図 5号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)	40	第73図 重鉛物組成及び火山ガラス比	115
第34図 5号堅穴建物跡出土遺物実測図(4)	41	第74図 火山ガラスの屈折率測定結果	116
第35図 6号堅穴建物跡実測図及び出土遺物実測図	42	第75図 古代～中世の変遷	120
第36図 7号堅穴建物跡実測図	43		
第37図 7号堅穴建物跡出土遺物実測図	44		
第38図 7号堅穴建物跡出土遺物及び8号堅穴建物跡実測図、 その他古墳時代土器実測図	45		
第39図 小穴群遺構分布図	50		
第40図 古代～中世遺構分布図	51		

## 表目次

第1表 道樋番号と調査時番号の対応表	82	第17表 土器観察表16	100
第2表 土器観察表1	85	第18表 土器観察表17	101
第3表 土器観察表2	86	第19表 土器観察表18	102
第4表 土器観察表3	87	第20表 土器観察表19	103
第5表 土器観察表4	88	第21表 石器・石製品観察表	104
第6表 土器観察表5	89	第22表 古錢観察表	104
第7表 土器観察表6	90	第23表 鉄製品観察表	104
第8表 土器観察表7	91	第24表 振立柱建物跡一覧表	105
第9表 土器観察表8	92	第25表 放射性炭素年代測定結果 ( $\sigma ^{14}\text{C}$ 補正値)	109
第10表 土器観察表9	93	第26表 放射性炭素年代測定結果 (1)	110
第11表 土器観察表10	94	第27表 放射性炭素年代測定結果 (2)	110
第12表 土器観察表11	95	第28表 放射性炭素年代測定結果 (3)	111
第13表 土器観察表12	96	第29表 テフラ検出分析結果 (1)	115
第14表 土器観察表13	98	第30表 テフラ検出分析結果 (2)	115
第15表 土器観察表14	99		
第16表 土器観察表15	100		

## 図版目次

卷頭図版 1		図版 4	
高橋道路近景		6号集石道構造状況	1号土坑完掘状況
高橋道路第VI層上面道構分布状況		2号土坑完掘状況	3号土坑完掘状況
卷頭図版 2		4号土坑検出状況	5号土坑完掘状況
調査区中央部 古代～中世振立柱建物跡完掘状況		6号土坑検出状況	7号土坑土削断面
6号竖穴建物跡出土遺物		図版 5	
図版 1		8号土坑完掘状況	9号土坑完掘状況
高橋道路近景	1号竖穴建物跡遺物出土状況	10号土坑土削断面	1号溝状道構遺物出土状況
1号竖穴建物跡完掘状況	2号竖穴建物跡遺物出土状況	2号溝状道構完掘状況	3号溝状道構検出状況
2号竖穴建物跡完掘状況		4号溝状道構完掘状況	5号溝状道構完掘状況
図版 2		図版 6	
3号竖穴建物跡完掘状況	4号竖穴建物跡遺物出土状況	6号溝状道構完掘状況	7号溝状道構完掘状況
4号竖穴建物跡完掘状況	5号竖穴建物跡遺物出土状況	8号溝状道構完掘状況	1号道路状道構完掘状況
5号竖穴建物跡完掘状況	6号竖穴建物跡遺物出土状況	2号道路状道構検出状況	3号道路状道構完掘状況
6号竖穴建物跡完掘状況	7号竖穴建物跡完掘状況	4号・5号道路状道構完掘状況	発掘作業の様子
図版 3		図版 7	
8号竖穴建物跡完掘状況	1号竖穴状道構完掘状況	縄文土器（早期）土器 1	縄文土器（早期）土器 2
2号竖穴状道構土層堆積状況	1号集石道構検出状況	図版 8	
2号集石道構検出状況	3号集石道構検出状況	縄文土器（前～中期）土器 1	縄文土器（前～中期）土器 2
4号集石道構検出状況	5号集石道構検出状況	図版 9	
		縄文土器（前～中期）土器 3	縄文土器（前～中期）土器 4

図版10		図版32
縄文土器（前～中期）土器 5 縄文土器（後～晚期）土器 1		近世陶器 2（内面）
図版11		近世陶器 3（外面）
縄文土器（後～晚期）土器 2 縄文土器（後～晚期）土器 3		近世磁器 1
図版12		近世磁器 2
縄文土器（後～晚期）土器 4 縄文土器（後～晚期）土器 5		近世磁器 3
図版13		近世磁器 4
縄文土器（後～晚期）土器 6 縄文土器（晚期） 7		近世磁器 5
図版14		図版36
1号堅穴建物跡出土遺物 1	1号堅穴建物跡出土遺物 2	縄文時代石器
図版15		石器
1号堅穴建物跡出土遺物 3	2号堅穴建物跡出土遺物 1	図版37
図版16		時期不明石器
2号堅穴建物跡出土遺物 2	3号堅穴建物跡出土遺物 1	石臼
図版17		図版38
3号堅穴建物跡出土遺物 2	4号堅穴建物跡出土遺物	金床石
図版18		鉄製品
5号堅穴建物跡出土遺物 1	5号堅穴建物跡出土遺物 2	
図版19		
5号堅穴建物跡出土遺物 3	5号堅穴建物跡出土遺物 4	
図版20		
5号堅穴建物跡出土遺物 5	5号堅穴建物跡出土遺物 6	
図版21		
6号堅穴建物跡出土遺物 1	6号堅穴建物跡出土遺物 2	
図版22		
7号堅穴建物跡出土遺物	道橋以外からの出土遺物 1	
図版23		
道橋以外からの出土遺物 2	白磁（外面・底部）	
図版24		
青磁 1（外面・底部）	青磁 2（内面）	
図版25		
青磁 3（外面・底部）	青磁 4（外面・底部）	
図版26		
青磁 5	青磁 6	
図版27		
青花 1	青花 2	
図版28		
陶器、瓦器等	土師器 1（外面）	
図版29		
土師器 2（内面）	土師器・瓦器	
図版30		
古銭	中世陶器 1（外面）	
図版31		
中世陶器 2（内面）	近世陶器 1（外面・底部）	

# 第Ⅰ章 はじめに

宮崎県教育委員会が主体となって、平成27年4月21日～平成28年2月3日まで実施した。

## 第1節 調査に至る経緯

都城志布志道路は、宮崎県都城市から鹿児島県曾於市を経由し、鹿児島県志布志市に至る全体延長約42kmの地域高規格道路である。九州縦貫自動車道宮崎線と中核国際港湾志布志港及び東九州自動車道とを連結することで、都城・大隅生活圏をはじめ、広域の地域振興を支える、きわめて重要な道路として、平成6年12月、計画路線に指定された。この道路が整備されることで、防災対策としての機能、経済対策としての機能、医療対策としての機能での効果が期待されている。

都城志布志道路は、宮崎県側と鹿児島県側がそれそれ約21kmで計画されており、宮崎県側の約21kmのうち、九州縦貫自動車道宮崎線の都城インター（以下LC）～五十町LCまでの約13km区間を国土交通省が、五十町LCから県境までの約8km区間を宮崎県が施工することとされ、平成9年から都城LC～梅北LC間の埋蔵文化財の分布状況について、宮崎県教育委員会に照会が行われた。その後の協議の結果、路線内ではこれまでに平田遺跡（平成15～16年度、平成27年～28年度）、筆無遺跡（平成15～17年度）、諸麦遺跡（平成17年度）、梅北針谷遺跡（平成20年度）、備女木遺跡（平成20～21年度）、平峰遺跡（平成19～21年度）などの発掘調査が行われている。

今回発掘調査を実施した高橋遺跡は、都城志布志道路梅北LCから金御岳LCを結ぶ約2.5km区間の梅北工区に含まれ、梅北LCの約300m南側に位置している。梅北工区では、その大部分に周知の埋蔵文化財包蔵地6か所が含まれることが分かっており、これまでに大年遺跡（平成24～25年度）、中床丸遺跡（平成25～26年度）、笠ヶ崎遺跡（平成26～27年度）の発掘調査が実施されている。高橋遺跡では平成25・26年度に確認調査が行われ、遺構・遺物が確認された4,400m<sup>2</sup>について発掘調査を行って、記録保存の措置がとられることとなった。

発掘調査は、宮崎県都城土木事務所の依頼により、

## 第2節 調査の組織

高橋遺跡の試掘調査及び確認調査、発掘調査、整理作業、報告書作成は、下記の組織で実施した。

【調査主体】宮崎県教育委員会

【調査機関】宮崎県埋蔵文化財センター

平成27年度 発掘調査・整理作業

所長	岩切 隆志
副所長兼調査課長	菅付 和樹
総務課長	上谷 政隆
総務課副主幹兼総務担当リーダー	安藤 忠洋
調査課主幹兼調査第一担当リーダー	松林 豊樹
調査課調査第一担当主査	徳田 尚文
調査課調査第一担当主査	二方 和也
調査課調査第二担当主任主事	後藤 清隆

平成28年度 整理作業・報告書作成

所長	谷口 武範
副所長兼調査課長	菅付 和樹
総務課長	荒木智恵美
総務課副主幹兼総務担当リーダー	寺原真由美
調査課主幹兼調査第一担当リーダー	松林 豊樹
調査課調査第一担当主査	徳田 尚文

平成29年度 報告書作成・刊行

所長	菅付 和樹
副所長兼総務課長	甲斐 久志
調査課長	吉本 正典
総務課副主幹兼総務担当リーダー	寺原真由美
調査課主幹兼調査第一担当リーダー	松林 豊樹
調査課調査第一担当主査	徳田 尚文

【事業調整（宮崎県教育庁文化財課）】

平成25年度埋蔵文化財担当主査	堀田 孝博
平成26年度埋蔵文化財担当主査	二宮 満夫
平成27～29年度埋蔵文化財担当主査	松本 茂

## 第3節 発掘調査の経過

高橋遺跡の本調査は、平成27年4月21日から平成28年2月3日にかけて行った。当初は、一度に全面的調査を行う予定であったが、笠ヶ崎遺跡東側

の養鶏農場へ通じる側道を先行して工事する必要が生じたため、調査対象範囲（4,400m<sup>2</sup>）を2分割し、調査区東側を先行して調査を実施した。なお、高橋遺跡に隣接する調査区北側の傾斜地と調査区南側のテラス状地形についても、確認のためトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった（第1回参照）。また、調査区内の南西部（約500m<sup>2</sup>）は、住宅を作る際に掘削されていたため、本調査から除外し、残りの約3900m<sup>2</sup>に对象として面的調査を実施することとした。

## 1 前半調査区（約2600m<sup>2</sup>）

前半の調査は、同年4月21日から9月25日にかけて行った。試掘調査により、調査区の大部分でⅡ層～Ⅳ層までが存在しないことが判明したため、4月21日から4月27日まで表土及び耕作土であるⅠ層を重機により除去し、5月8日から発掘作業員を雇用しての人力による包含層掘削及び精査を開始した。まず、残存するⅡ層～Ⅲ層の包含層を掘削し、中世・近世の陶器類が出土した。6月は天候不順に悩まされたが、7月にかけてⅢ層～Ⅳ層掘削を行い、古墳時代の土師器や縄文時代後～晩期の土器等が出土した。8月からⅥ層上面の精査を行い、古墳時代の竪穴建物跡9軒や多数の小穴が検出され、土師器などの多量の遺物が出土した。9月15日にⅥ層上面の検出遺構について、第1回の空中写真撮影を実施した。

なお、Ⅶ層以下については、遺構・遺物の有無が把握されていなかったため、先行トレンチにより確認を試みたが、後半調査区との境付近より少量の縄文時代前～中期の遺物が出土したのみで、その他の遺構・遺物は確認されなかった。

## 2 後半調査区（約1300m<sup>2</sup>）

後半の調査は、同年9月28日から平成28年2月3日にかけて現地作業を行った。

9月28日から9月30日までは、排土移動や表土除去を行い、排土については、施工業者と協議の結果、前半調査区内の側道を工事している部分へ置くこととなった。後半調査区は、北西部のⅠ層の堆積が薄く、浅いところで30cmほどしかない反面、東側や南側はⅠ層が80cmほどの深さの場所もあり、

層厚の差が大きかった。10月5日から発掘作業員の人力による掘削を開始し、Ⅵ層面で精査を行った。後半調査区は、前半調査区に比べて面積は少ないものの、竪穴建物跡1棟、道路状遺構1条、小穴が多数検出され、前半調査区同様遺構密度があった。検出された小穴と竪穴建物跡の構造掘削作業は、11月5日まで行い、11月6日にⅥ層上面において第2回空中写真撮影を行った。

Ⅵ層上面の調査終了時点では、側道工事の進行上、排土置き場が確保できない状況となつたため、Ⅵ層以下の調査では、後半調査区を東西に2分割して進めることとした。

### ○ 後半調査区東側の調査（850m<sup>2</sup>）

11月19日～11月20日に、重機によりⅥ層の除去を行った後、Ⅶ層～Ⅸ層の包含層掘削を実施し、縄文時代前～中期の土器片や石器等が出土するとともに、土坑6基、集石遺構3基検出された。また、調査区内のⅩ層まで10%トレチ調査を行い、Ⅺ層から縄文時代早期の遺物が数点出土した。そして、12月14日にⅨ層上面において、第3回空中写真撮影を行った。

### ○ 後半調査区西側の調査（450m<sup>2</sup>）

12月15日～12月16日にかけて、重機によりⅥ層の除去を行った後、Ⅷ層～Ⅹ層の包含層掘削を実施し、縄文時代前～中期の土器片や石器等が出土するとともに、集石遺構が1基検出された。また、Ⅸ層（鬼界アカホヤ火山灰層）の下位層について10%のトレチ調査を行ったところ、調査区南側のⅪ層から礫の出土が多数認められたため、面的調査に変更した。その結果、Ⅺ層から縄文時代早期の土器や石器が出土するとともに散蝶と土坑1基が検出された。そして、1月26日には、Ⅺ層上面で第4回の空中写真撮影を行い、1月27日～2月1日に調査区壁面の土層断面図を作成した後、2月2日～2月3日に重機での埋め戻しを行い、現地調査をすべて終了した。

## 第4節 発掘調査の方法

### ○ グリッドの設定

調査対象地全域に対して、国土座標（世界地系）

に基づいた10m×10mのグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。

#### ○ 遺構の掘削

遺構の掘削については、検出状況から個別に任意の主軸を設定し、半戻もしくは4分法により埋土の状況を確認しながら掘削することを基本とした。堅穴建物跡や土坑、溝状遺構は先行トレンチを掘削し、床面の認定や埋土の堆積状況を確認したうえで、掘削を進めた。

なお、貼床を有する遺構については、床面上の調査後、貼床を除去し、地山面までを完掘した。

#### ○ 作図記録

遺構の作図記録に関しては、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本としたが、溝状遺構や道路状遺構においては1/40で個別図を作成したものもある。また、小穴の記録は、当初トータルステーションにより座標値を記録したが、調査の進捗状況を早めるために調査途中から、㈱CUBIC製の「遺構くん」で実測、作図・記録し、集石遺構は、1/10で個別図を作成した。

#### ○ 写真記録

全調査区とともに、35mm白黒ネガ・カラーリバーサルを用いた撮影を基本として、一部中判カメラによる白黒ネガ・カラーリバーサルフィルム撮影を行った。また、メモ記録写真として、デジタルカメラを併用した。なお、VI層、IX層、XI層のそれぞれ上面において、業者委託による空中写真撮影を行った。

### 第5節 整理作業の経過と概要

現地での調査終了後、出土品及び図面・写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センター本館に持ち帰り、平成28年1月から平成29年3月まで、整理作業を行った。出土品の水洗作業、整理作業の内容としては、注記作業、接合、実測、フローテーション作業、拓本、トレースなどである。また、遺構分布図や遺構実測図などの挿図を作成するとともに、併行して本文執筆を進めていった。石器の実測については、㈱九州文化財リサーチに、炭化材とサンプリ

ングを行った埋土の放射性炭素14年代測定(AMS法)及び樹種同定、テフラ分析については㈱加速器分析研究所に業務委託した。平成29年度は報告書の原稿作成と編集作業を行い、平成30年3月に本報告書を刊行した。



【接合の様子】

### 第6節 普及活動

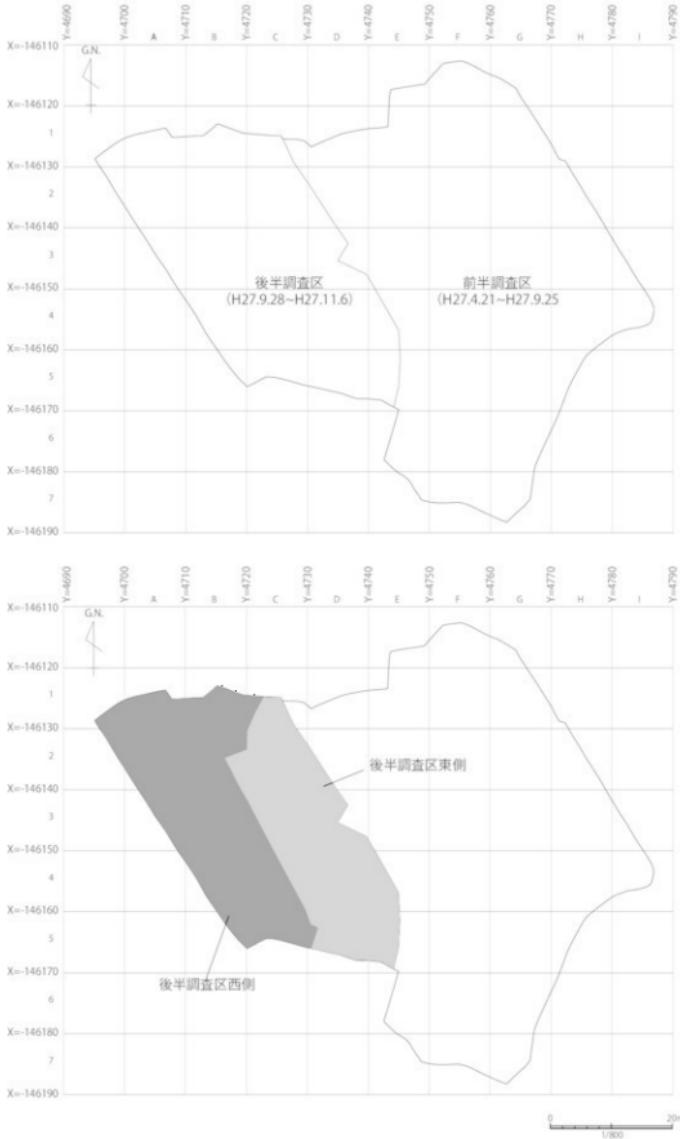
県民の埋蔵文化財センター業務や地域の埋蔵文化財への理解を深めていただくため、平成27年11月8日(日)に現地説明会を行った。都城市や宮崎市などから50名の参加があった。



【現地説明会の様子】



第1図 高槻遺跡調査区の位置と周辺地形図



第2図 グリッド配置図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

高橋遺跡が所在する都城市は、宮崎県の南西部に位置し、宮崎市・日南市・串間市・三股町・高原町、そして鹿児島県曾於市の4市2町に隣接している。都城盆地のほぼ中央部を占め、面積は約650km<sup>2</sup>に及ぶ。人口約17万人の宮崎県内第2の都市であるとともに、南九州第3の中核的な拠点都市でもある。

都城市の地勢概要として、東方向に鶴塚山系、西方向は霧島山系に囲まれた盆地地形を特徴としており、南北へ流れる大淀川を挟んで東に扇状地地形、西にシラス台地が広がっている。高橋遺跡の所在する都城市梅北町は、水田や畑を中心とした農地が多く広がっており、梅北町の南東部に金御岳（標高472m）がそびえている。

調査地点付近の地形の概略としては、遺跡の東部に梅北川が北流し、盆地中央部の大淀川へと流れ込んでいる。梅北川によって形成された低地部には、現在水田が広がっており、調査地点付近は比高差高さ10mほどの台地上に立地している。調査地点の東側や南側には水田があり、台地の縁辺部にあたる場所である。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡では、旧石器時代と弥生時代を除く縄文時代早期から近世までの遺構・遺物が確認されている。ここでは、それらの時期について周辺の遺跡や史跡等をもとに概述する。

#### 縄文時代

早期の遺跡としては、宮野・立野遺跡から、全縄文施文の「五十市式土器」が出土している。その他、円筒形土器、条痕文土器、突蒂文土器、貝殻文円筒形土器が出土している。また、梅北北原遺跡、梅北佐土原遺跡、川原谷出水遺跡、中床丸遺跡からは、土器・石器に加え、土坑、集石遺構などの遺構が、桜島末吉テラを含む遺物包含層で検出されたほか、時期不明ながら陥穴状遺構も確認されている。

前期～中期の遺跡は鬼界アカホヤ火山灰の降灰の

影響により遺跡数は少ないが、その中でも綾毛原第2遺跡、笹ヶ崎遺跡で当該期の土器が出土している。特に、本遺跡と谷をはさんで隣接する笹ヶ崎遺跡では、縄B式土器、曾畠式系土器や深浦式土器、船元式系の土器が比較的多数出土している。

後期～晩期の遺跡としては、野添遺跡において、後期の竪穴建物跡、大岩田村ノ前遺跡では、柱穴らしきピットが梢円形状に巡る竪穴状遺構が検出されている。

#### 古墳時代

古墳時代の遺跡としては、野添遺跡で前期～中期の竪穴建物跡や土坑墓、豊満大谷遺跡で、中期の竪穴建物跡がそれぞれ検出されている。平峰遺跡では、中期～後期の大規模な集落がみつかるとともに、鍛冶関連の遺物も出土している。大年遺跡からは間仕切り付建物跡を含む竪穴建物跡が多数検出されている。

#### 古代・中世

古代・中世の遺跡としては、梅北針谷遺跡の遺構・遺物から、古代に活発な鍛冶関連を行っていた様子がうかがえる。王子原、上安久遺跡、王子原第2遺跡では、中世期の遺構・遺物がまとめて検出されている。大岩田上村遺跡では、中世の溝状遺構や道路状遺構が検出されている。筆無遺跡では、掘立柱建物跡、周溝墓、土坑墓などが確認されている。また、遺物としては墨書き土器、黒色土器、須恵器、縁軸陶器、貿易陶磁器、石帯、小型滑石製石鍋などが出土している。また、笹ヶ崎遺跡では、掘立柱建物跡や犬走状遺構とともに、堀切や土壁といった防御用施設もあり、笹ヶ崎遺跡周辺が地域有力層の居館跡であるとともに、何らかの公的機関を形成していた可能性もある。大年遺跡では、道路状遺構や溝状遺構、畝状遺構が多く検出されており、詳細な性格は不明であるが、長期間にわたって利用されていた状況が判明している。また、鶴尾遺跡・嫁坂遺跡では水田跡、坂ノ下遺跡では中世の畠跡が検出されている。

なお、梅北地区周辺には中世の平季基関連の史跡などが分布している。梅北町益貫は居館跡であるとの伝承がある。季基は万寿3（1026）年頃に当地に下向し、三侯院の主として益貫に居住したとされ

ている。梅北川東岸の丘陵上に立地し、四つの曲輪からなる群郭式城館跡として知られる梅北城も平季基の築城と伝えられている。現在は、城の中央部を残すのみであるが、その北側と東側には土塁が現存し、空堀もほぼ原形をとどめている。

#### 参考文献

大前弘之 地域高規格道路「都城志布志道路」の整備について 一般社団法人九州地方計画協会HPより

[http://kkeikaku.or.jp/xc/modules/pc\\_ktech/index.php?content\\_id=2121](http://kkeikaku.or.jp/xc/modules/pc_ktech/index.php?content_id=2121)

都城市史編さん委員会 2006『都城市史 資料編 考古』都城市

都城市教育委員会 2004『王子原第2遺跡』都城市文化財調査報告書第66集

都城市教育委員会 2007『梅北佐土原遺跡』都城市文化財調査報告書第76集

都城市教育委員会 2007『梅北北原遺跡』都城市文化財調査報告書第83集

都城市教育委員会 2011『王子原遺跡 上安久遺跡』都城市文化財調査報告書第103集

宮崎県埋蔵文化財センター 2002『母智丘谷遺跡・畠田遺跡・嫁坂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集

宮崎県埋蔵文化財センター 2002『鶴尾遺跡・坂ノ下遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第65集

宮崎県埋蔵文化財センター 2003『大岩田上村遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第77集

宮崎県埋蔵文化財センター 2004『豊満大谷遺跡・野添遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集

宮崎県埋蔵文化財センター 2008『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集

宮崎県埋蔵文化財センター 2011『梅北針谷遺跡』

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第204集

宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（3次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報

告書第219集

宮崎県埋蔵文化財センター 2016『大年遺跡』宮

崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第237集

宮崎県埋蔵文化財センター 2016『中床丸遺跡（第一・二次）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査

報告書第239集

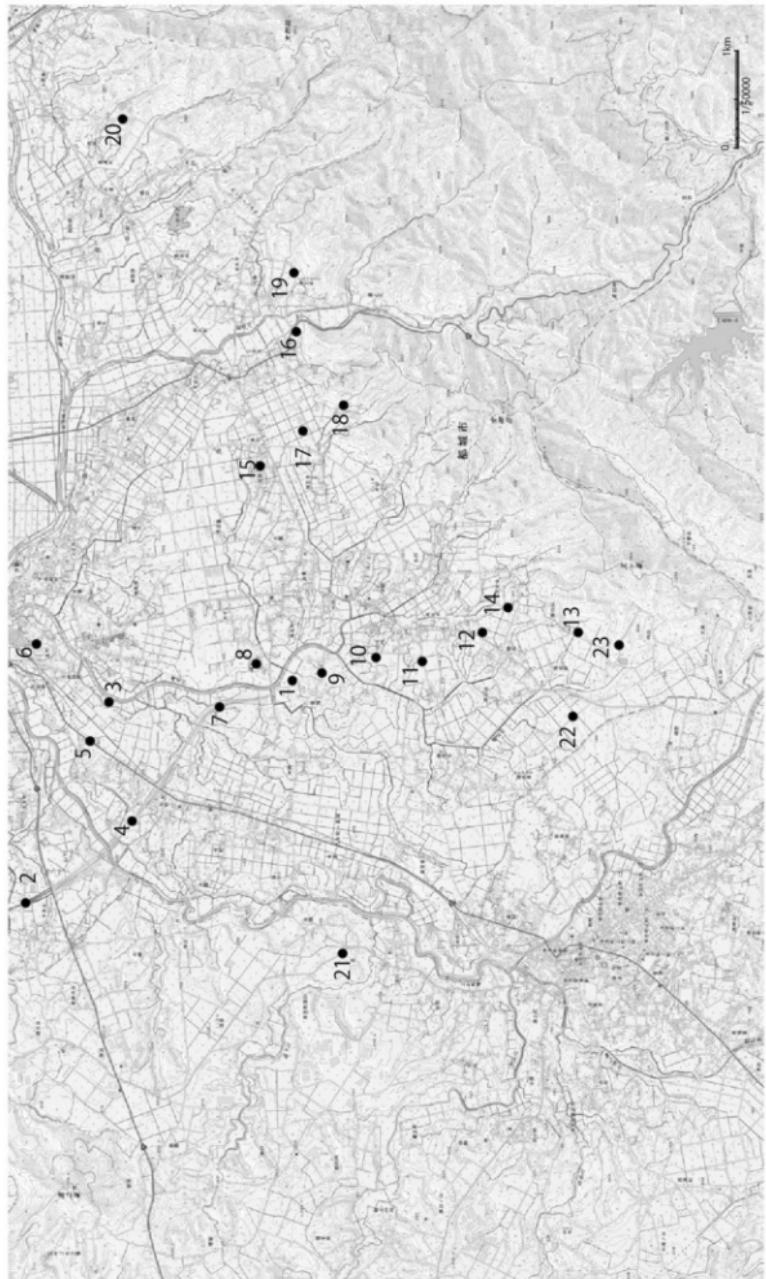
宮崎県埋蔵文化財センター 2016『笠ヶ崎遺跡（第

一次～第三次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発

掘調査報告書第240集

#### 注

桜島末吉テフラは、付近一帯の縄文時代早期の層準で確認される黄橙色の火山灰で、大年遺跡、中床丸遺跡の報告では「桜島11テフラ（Sz-11）、笠ヶ崎遺跡の報告では「桜島末吉テフラ（Sz-Sy）とした火山灰と同一のものである。本書では、以下、桜島末吉テフラと記載した。



1 高根遺跡 2 平峰遺跡 3 大岩田上村遺跡 4 董無遺跡  
5 宮野・立野遺跡 6 梅北佐土原遺跡 7 梅北針谷遺跡  
8 梅北舞路遺跡 9 上安久遺跡 10 梅北北原遺跡  
11 中床丸遺跡 12 保木島遺跡 13 猪居遺跡  
14 猪居第2遺跡 15 梅北佐土原遺跡 16 上高遺跡  
17 王子原第2遺跡 18 王子原遺跡 19 野奈遺跡  
20 曾浦大谷遺跡 21 猪尾遺跡 22 猪毛原第2遺跡 23 上高遺跡

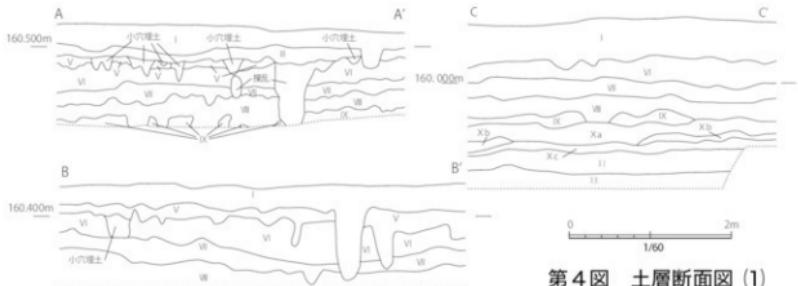
第3図 周辺遺跡分布図

## 第III章 調査の記録

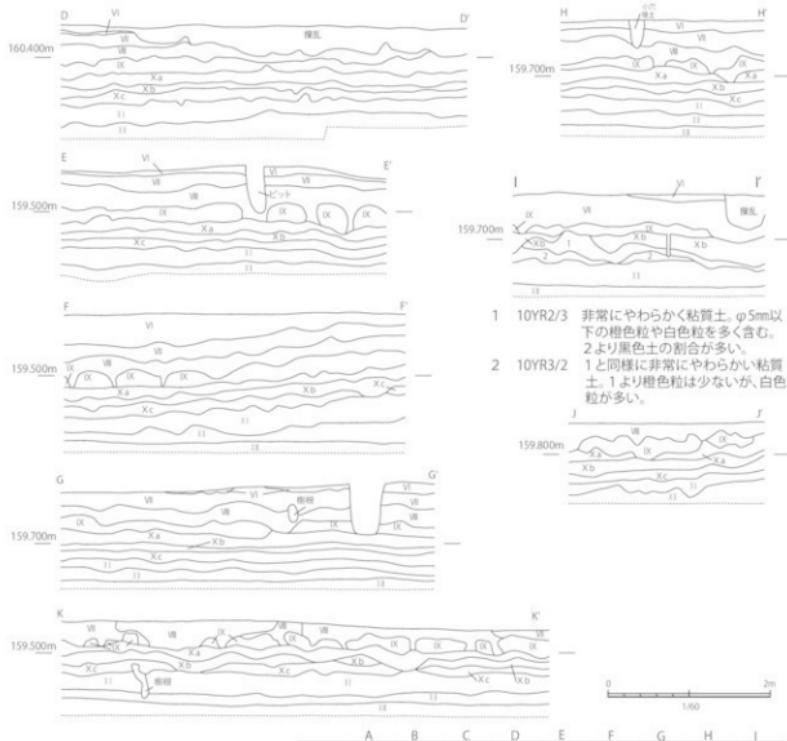
### 第1節 基本層序

調査区内の基本土層は次の通りである。

- I 層 表土もしくは造成土
  - II 層 黒色土 (Hue10YR2/1) に桜島文明軽石 (Sz-3 : AD1471年) を30%程度含む。
  - III a 層 黒色土に3mm程度の橙色バミスを5%程度含む。
  - III b 層 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 遺物包含層
  - IV 層 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に橙色バミスを10%程度含む。
  - V 層 黒褐色土 (Hue10YR3/2) に橙色バミスを30%程度含む。
  - VI 層 霧島御池降下軽石 (Kr-M : 約4600年前) の堆積層
  - VII 層 にぶい褐色土 (Hue10YR4/6) 上位にφ1~2mmの橙色バミスを5%程度含む。遺物包含層
  - VIII 層 黒褐色土 (Hue10YR3/2) 遺物包含層
  - IX 層 鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah : 約7300年前)
  - X a 層 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2) に桜島末吉テフラ (Sz-Sy : 約8000年前) を1~3%程度含む。
  - X b 層 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2) に桜島末吉テフラを10%程度含む。
  - X c 層 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2) に桜島末吉テフラを30%程度含む。
  - XI 層 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) 粘性・しまりがややある。
  - XII 層 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3) しまりが非常にあり、粘性もある。
  - XIII 層 接灰色土 (Hue10YR6/1) に桜島薩摩テフラ (Sz-S : 約12800年前) を5%程度含む。
- I層は表土で、層厚30~80cm程度で、調査区西側は30cm程度となる。II~IV層は、調査区中央北部にのみ残存し、III b層に関しては、さらに一部の範囲にしか残存していなかった。III a層の中には、橙色のバミスが厚さ20cm程度で部分的に堆積しており、火山噴出物の可能性が考えられたため、自然科学分析を行った。III b層は中世の遺物包含層で、IV~V層は橙色バミスが含まれる層である。VI層の霧島御池降下軽石層は調査区の全面で確認され、VI層以下は削平の影響は受けておらず、平均30cm程度の層厚である。VII~VIII層は縄文前~中期の遺物包含層で、それぞれ平均15cm程度の層厚である。調査区の西側にはあまり堆積しておらず、調査区中央部付近の厚く堆積しているところで、20cm以上の層厚を有する箇所もあった。IX層は鬼界アカホヤ火山灰層であり、平均層厚は10cm程度である。全面的に堆積しておらず、一部ブロック状で残存している箇所もある。X層は桜島末吉テフラを含む黒褐色土で、桜島末吉テフラの含有量の差によって、極少量を含むX a層、少量を含むX b層、多量を含むX c層に細分した。XI層は黒褐色土で、X c層~XI層にかけて縄文時代早期の遺物が出土した。以下、XIII層が暗褐色土、XII層が接灰色土層で桜島薩摩テフラの粒子が1%程度混じる。

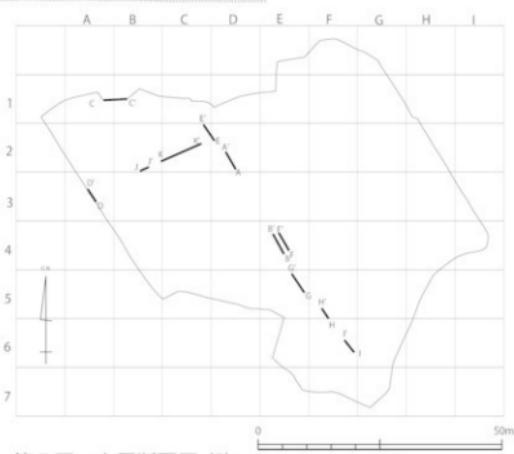


第4図 土層断面図(1)



土層断面図については、以下の土層について表記している。

- A-A' I層～IX層
- B-B' I層～Ⅷ層
- C-C' I層～XII層
- D-D' 表土(擾乱)～XII層
- E-E' VI層～XII層
- F-F' VI層～XIII層
- G-G' VI層～XIII層
- H-H' VI層～XIII層
- I-I' VI層～XIII層
- J-J' VII層～XII層
- K-K' VII層～XIII層



第5図 土層断面図(2)

## 第2節 繩文時代早期の遺構と遺物

### 1 遺構

XI層より集石遺構2基が検出された。いずれも遺物は含まれていない。2基の集石遺構とともに、調査区のやや西寄りに分布している。

#### 1号集石遺構（第6図）

1号集石遺構は、C4グリッドに位置し、XI層上面で検出された。10×12m程の範囲に礫がばらばらに集まっている。下部に直径約0.9~1mの円形プランの皿状の掘り込みを有する。深さは15cm程度である。遺構の埋土は、黒褐色土で粘性があり、非常に硬くしまり、細かな炭化物を含む。遺構の構成礫はすべて砂岩で、総重量4067.6gであった。構成礫の特徴として、黒変や赤化した礫が一部に見られ、ほとんどの礫が割れた角礫である。埋土中より出土した炭化物について放射性炭素年代測定(AMS法)を行ったところ、 $8890 \pm 30$ 年  $^{14}\text{C}$  BPの年代が得られた。較正年代については、第IV章第3節を参照されたい。

#### 2号集石遺構（第6図）

2号集石遺構は、D3グリッドに位置し、XI層上面で検出された。直径9m程の範囲に礫がばらばらに集まっている。下部にボウル状の掘り込みがある。直径約0.9~1mの円形プランで、深さは30cm程度である。遺構の埋土は、1. 粘性、しまりがともにある黒色土、2. 粘性があり、非常に硬く、炭化物も部分的に混じる黒褐色土、3. 粘性、しまりともにある黒褐色土の3層が確認できる。遺構の構成礫は主に砂岩で、赤化した礫が多い。総重量は1258gであった。遺構の掘り込み内より出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行ったところ、 $8830 \pm 30$ 年  $^{14}\text{C}$  BPの年代が得られた。較正年代については、第IV章第3節を参照されたい。

### 2 遺物

縄文時代早期の遺物は、Xc~XI層で出土している。

#### (1) 土器（第7図1~16）

土器の大半は、貝殻文筒形土器であり、器種はすべて深鉢である。

1は口縁部が直立している。口縁部は平らで、刻目を施し、口縁部外面に横方向、それ以下に縱方向の2枚貝による貝殻腹縫刺突文を施す。2~4は胴部で、

斜方向の貝殻条痕文のち、縦位の貝殻腹縫刺突文を施す。そのうち、2の外面には縦位の三角形状の楔形突帯文が貼り付けられ、その左右に櫛状工具による刺突文がみられる。5は胴部下位に貝殻腹縫刺突文を施し、底部側面に縦位の刻線をめぐらしている。6は外面に右下りの貝殻条痕文が施された小型の円筒形土器の底部で、底面に直径5mm程度の種子状の圧痕が2個みられる。7はやや内傾気味に直立する口縁部で、外表面は横位の押型文を施す。角閃石を多量に含む特徴がある。8の外面は風化が著しいが、斜方向の貝殻腹縫刺突文と思われる。9は器壁が厚く、外表面は風化が著しいが、無文の深鉢の底部附近と思われ、内面に黒変が見られる。10~14は、外表面横位・斜位の貝殻点連文を器面全体に施し、いずれも胎土に金雲母を含んでいる。その中で10は、口縁部頂部に瘤状の肥厚部がみられる。15はナデ後、間隔をおいて縦位の網目撚糸文のち、横方向の沈線文が施されている。16は胴部で、内面は剥離により不明だが、外表面に横位の楕円押型文が施され、胎土に2mm以下の大雲母を多く含んでいる。

#### (2) 石器（第8図17~18）

17~18は打製石器で、いずれも二等辺三角形形状である。17はガラス質安山岩製で、基部形態は浅い凹基である。18はチャート製で、基部形態は17に比べてかなり深い鍔形器である。

## 第3節 縄文時代前～中期の遺構と遺物

### 1 遺構（第9図）

縄文時代前～中期の遺構は、土坑3基、集石遺構4基といずれもVII層上部で検出された。遺構の分布の特徴としては、主に調査区の西側に確認されている。

#### 1号土坑（第10図）

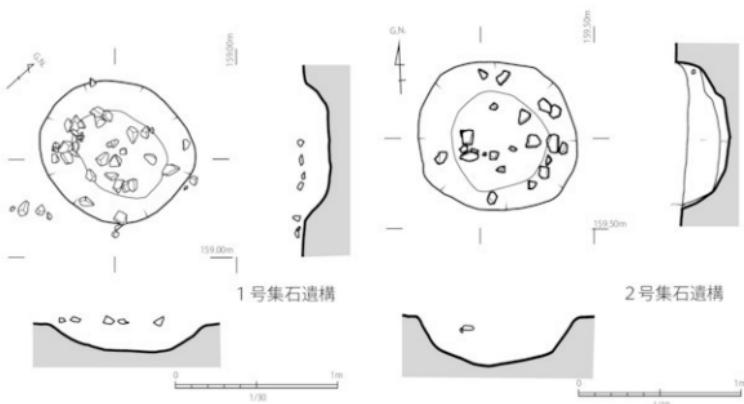
1号土坑はA2グリッドに位置している。平面プランは楕円形で、長軸1.6m、短軸0.8m、検出面からの深さは60cmである。遺構の埋土はVI層の霧島御池軽石のみである。遺物は出土しなかった。

#### 2号土坑（第10図）

2号土坑はB2グリッドに位置している。平面プランは楕円形で、長軸1.6m、短軸1.1m、検出面からの深さは28cmである。遺構の埋土は1号土坑と同様、VI層の霧島御池軽石のみである。遺物は出土しなかった。



縄文時代早期遺構分布図



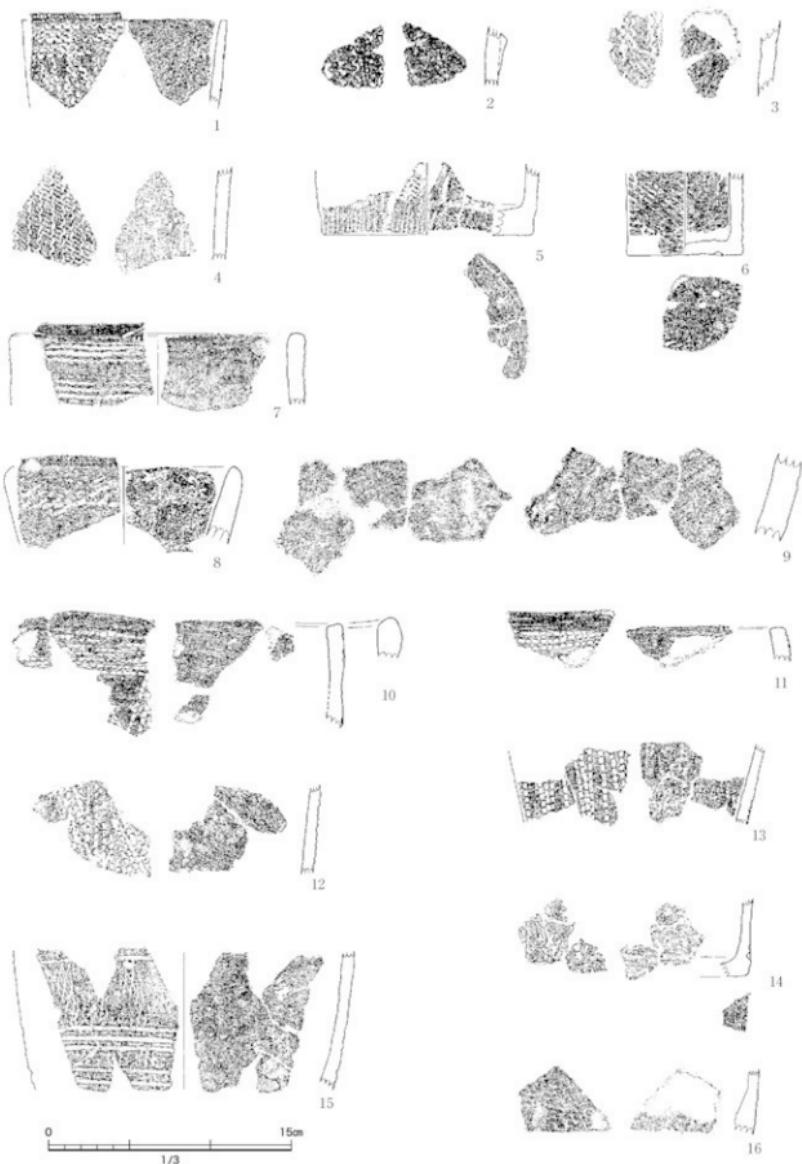
埋土Hue10YR 2/2 黒褐色土 粘性はややある。  
非常に固くしまり、細かな炭化物を含む。

1.Hue10YR 1.7/1 黒色土 粘性、しまりともにあり赤化矯や  
炭化物が少く混じる。周辺に比べて  
非常に濃い黒色土である。

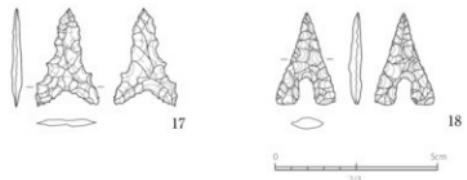
2.Hue10YR 2/3 黒褐色土 粘性があり、硬くしまっている。黒褐色  
色に非常に硬い褐色ブロックが入り、  
炭化物も部分的に多く混じる。

3.Hue10YR 2/3 黑褐色土 粘性、しまりともにあり、1  
と基本土層のV層が混ざったよう  
である。

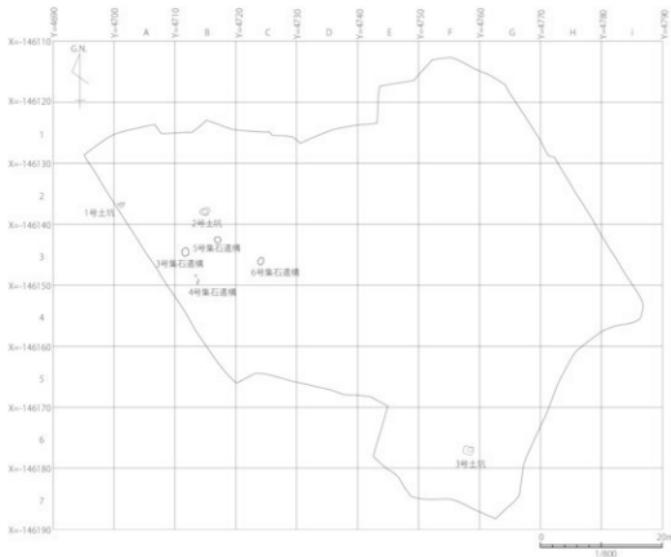
第6図 縄文時代早期遺構分布図及び1号・2号集石遺構実測図



第7図 繩文時代早期土器実測図



第8図 繩文時代早期石器実測図



第9図 繩文時代前～中期遺構分布図

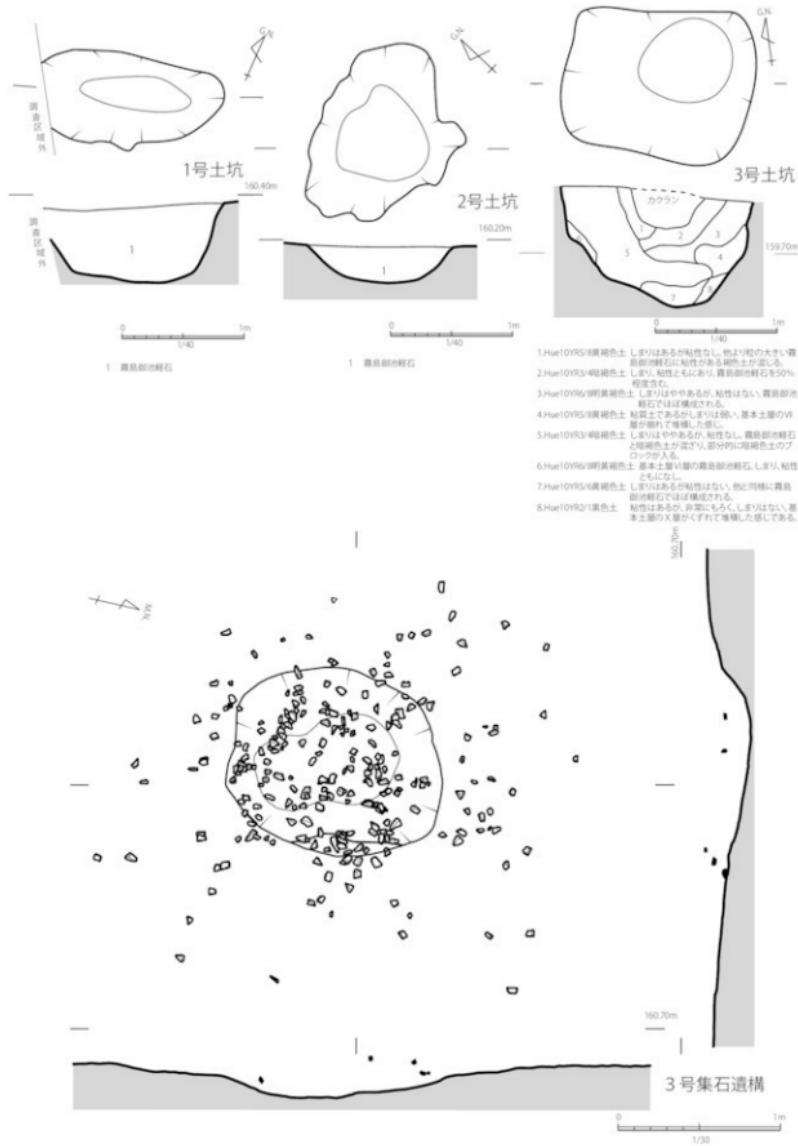
### 3号土坑（第10図、第12図19～20）

3号土坑はF6グリッドに位置している。平面プランは隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸1.2m、検出面からの深さは96cmである。遺構からは、第12図に示した19・20が出土した。

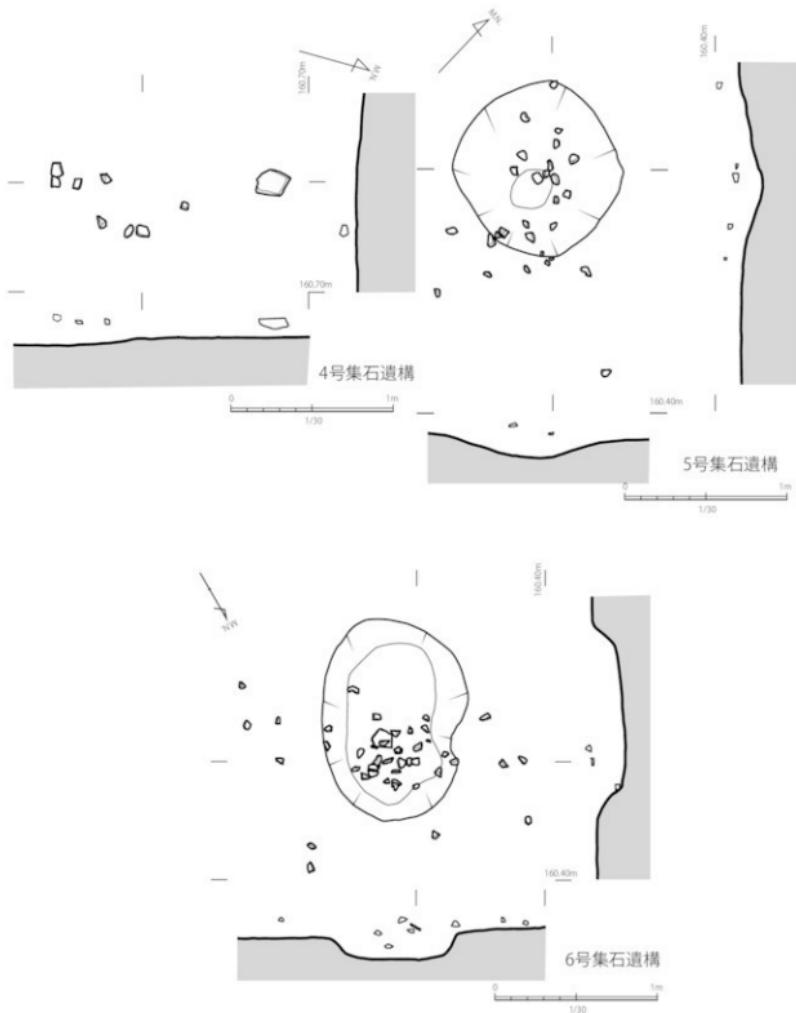
19は深鉢で、口縁部にコブ状突起を貼付し、胴部外面には条痕文を施す。胎土に1mm以下の黒色粒を多く含み、また角閃石をわずかに含んでいる。20は深鉢の底部付近で、外面には多方向の貝殻条痕文の後、一部ナデを施している。胎土に1mm以下の角閃石をわずかに含んでいる。

### 3号集石遺構（第10図）

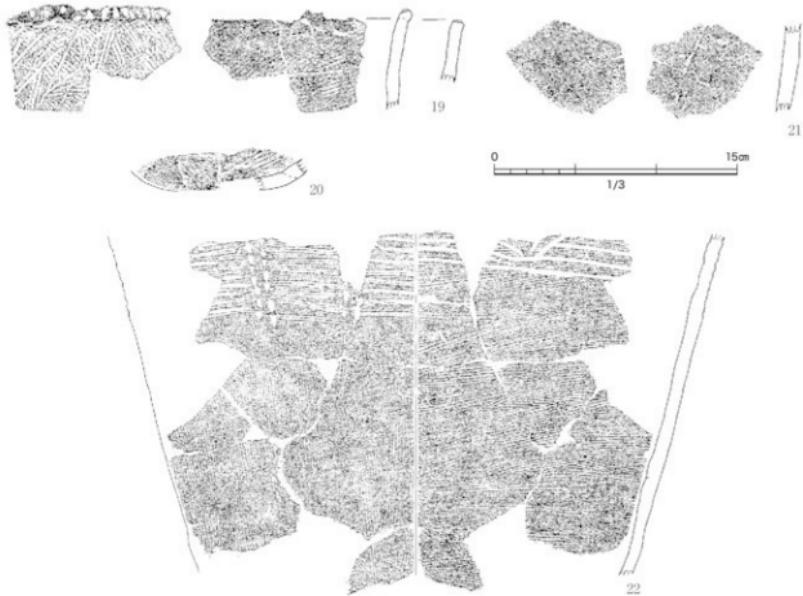
3号集石遺構はB3グリッドに位置している。3.0×2.6mの範囲に小礫が散布している。下部には1.1×1.35mの楕円形プランで、深さ20cmの皿状の掘り込みを有する。遺構の構成礫は主に砂岩で、被碎された小片が多く、総重量は8020gである。また、一部黒変した礫もみられる。遺構に伴う遺物は出土しなかった。なお、遺構内より出土した炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、 $4530 \pm 30$ 年<sup>14</sup>C BPの年代が得られた。較正年代については、第IV章第3節を参照されたい。



第10図 1号～3号土坑及び3号集石遺構実測図



第11図 4号～6号集石遺構実測図



第12図 繩文時代前～中期遺構出土土器実測図

#### 4号集石遺構（第11図）

4号集石遺構はB3グリッドに位置している。1.5×0.7mの範囲に礫が広がり、掘り込みはみられなかった。構成礫は小片が多いが、1個体のみ重量が1kg以上の礫がある。すべて砂岩で、総重量は3350gである。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

#### 5号集石遺構（第11図）

5号集石遺構はB3グリッドに位置している。1.0×1.8mの範囲に礫が散布している。浅い皿状の掘り込みを有する。直径1m程度の円形プランで、深さは15cm程度である。遺構の構成礫は砂岩で、総重量は1475gである。ほとんどの礫がおそらくは被熱によって割れた角礫で、赤化した礫が一部確認できる。

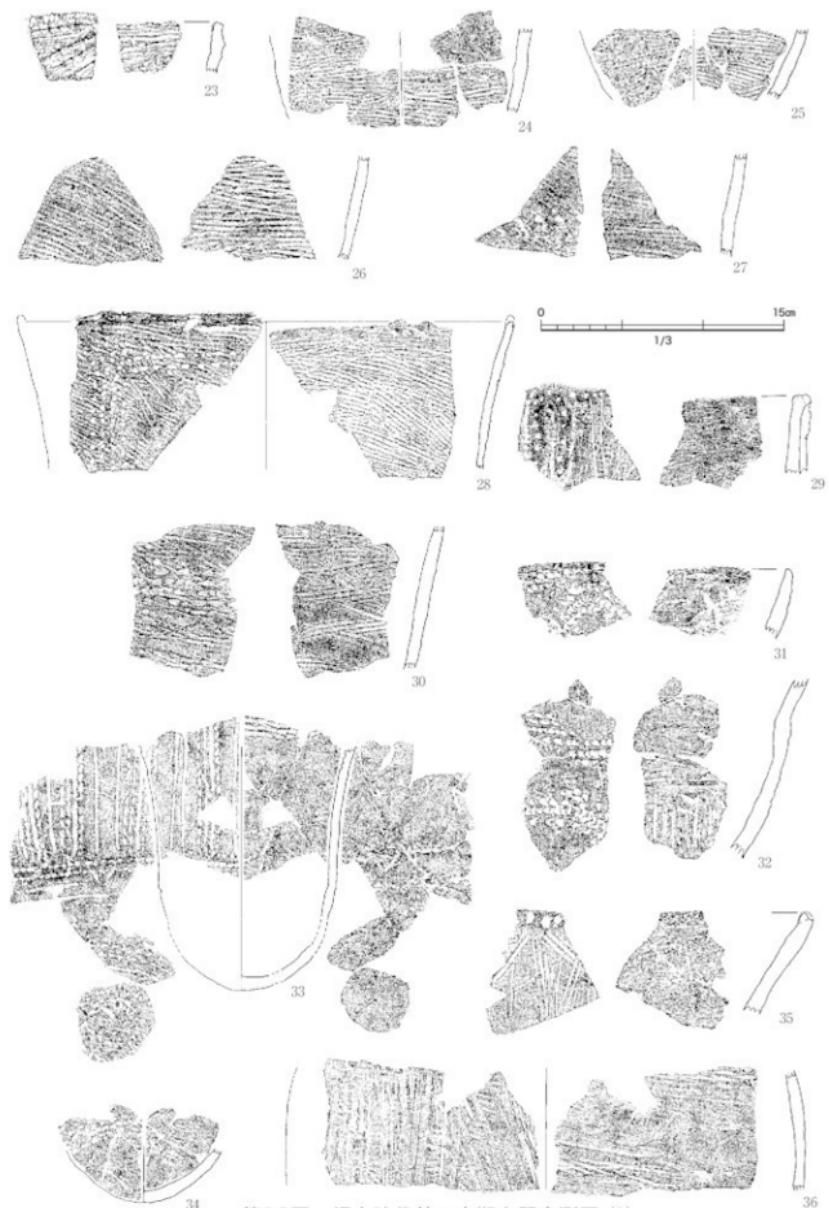
#### 6号集石遺構（第11図、第12図21～22）

6号集石遺構はC3グリッドに位置している。1.2×1.8mの範囲に礫が散布している。下部には、平

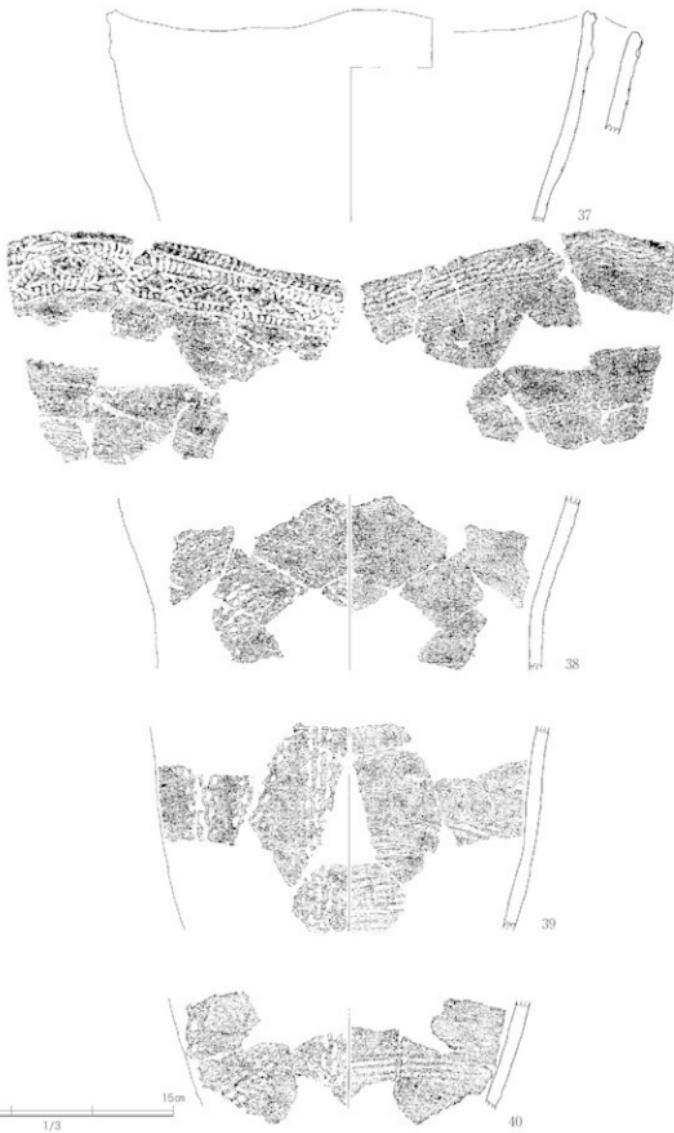
面形が0.75×1.2mの楕円形プランの掘り込みがみられ、深さは15cm程度である。遺構の構成礫は砂岩で、総重量は965gである。半数以上が破碎されており、ほとんどの礫が赤化している。遺構からは、21の深鉢胴部片が出土した。内面、外側とも風化気味でナデ調整と思われる。22は外側の上部には、先端が二叉状になった工具による横方向の沈線文が8条以上あり、横方向の沈線文を区画するように同一工具による縦方向の2条の連続刺突文が施されている。内面の上部には、横方向に4条以上の沈線文、斜位の沈線文が2条施されている。また、外側の全体に縦方向、内面には横位、斜位の貝殻条痕文が施されている。

#### 3 遺物

縄文時代前～中期の包含層から多数の遺物が出土した。また、後の時代の遺構埋土から当該期に属する土器が出土しており、それらもあわせて土器25点、



第13図 縄文時代前～中期土器実測図(1)



第14図 縄文時代前～中期土器実測図 (2)



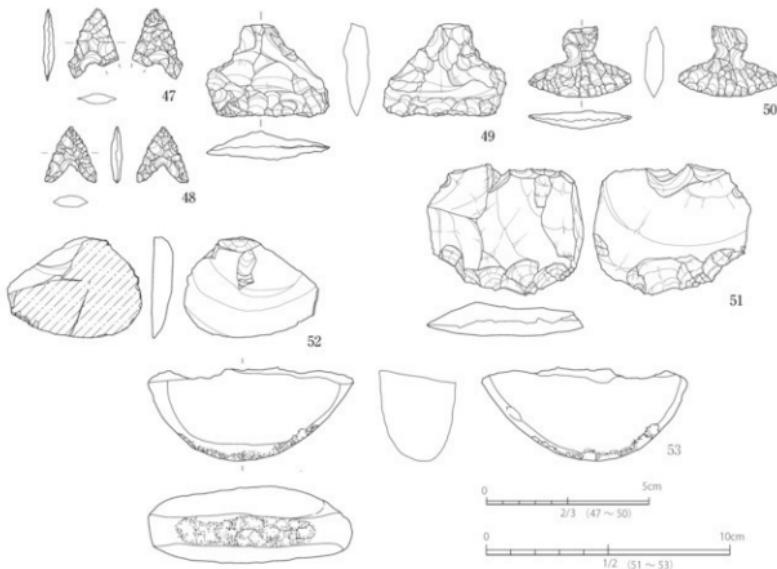
第15図 縄文時代前～中期土器実測図(3)

石器7点を図化した。

(1) 土器(第13図～第15図23～46)

23は口縁部から脣部で、口縁端部は横位の断面三角形を呈する低い隆起線文で、その下には斜位の断面三角形状の低い隆起線文を3条施す。内面には、横位の条痕文を施し、さらに、口唇部内面側には、工具による刺突文を施文している。24～27は内面、外面上とも全体的に条痕文が施されている。24と25は同一個体の可能性がある。26は器壁の厚さが0.5～0.6cmと比較的薄く、外面上部に煤が付着している。27は外面上の全体面に条痕文を施し、一部、貝殻腹縁による斜方向の連続する刺突文を施文する。28は口

縁部にコブ状突起を貼付し、外面には、斜方向の条痕文後、横位から縦位の刺突点文が全体的にみられる。29の外面には、直立する口縁部付近から垂下する縦位の突起文をもつ。突起文と口唇部には棒状工具による刺突文を施し、内面は横方向のナデ調整がみられる。胎土に1mm程度の角閃石をわずかに含む。30は脣部片で、外面に条痕文のち一部に横位の連続刺突文、内面は斜方向の条痕文が施されている。31は脣部外面に波状モチーフの連続した貝殻腹縁文による押引状の連続刺突文が施され、胎土には、多くの雲母が含まれている。32は脣部片で、わずかに屈曲する貝殻腹縁による刺突文と貝殻腹縁による



第16図 繩文時代前～中期石器実測図

連点文を施す。33は砲弾形を呈する丸底の深鉢である。胴部中位は縦方向の連続刺突文、沈線文がみられ、底部に近くなるにつれ、横方向の刺突文や沈線文が施されている。全体的に直線的なモチーフを描いている。34は上部に横位の貝殻連点文が施され、底部付近は斜位の条痕文ナデで、一部条痕が残っている。35は口唇部に刺突文、外面は斜位の条痕文後ナデの調整が施されている。36は外面に横方向の条痕文の後、工具による横・斜方向の条痕文が施されている。37は口縁部付近の外面に、縄による押圧刻みを施した2条の突帯とその間に鋸歯状の突帯を貼付している。その下位には、横位、斜位の貝殻腹縁刺突文を施している。38の外面の文様は、上部に丁寧なナデ後、横方向、斜方向の貝殻腹縁刺突文、下部は斜方向に押引状の刺突連点文の直線的モチーフが施されている。39・40も38と同様に丁寧なナデ後、縦方向、斜方向の刺突連点文を施す。41・42は同一個体と思われ、41は口縁から胴部で、外面頸部付近に縦方向の貼付突帯があり、それ以外は条痕文が施されている。部分的にススが付着して

いる。内面は、条痕文後、粗いナデがみられ、炭化物が全体的に付着している。42は外面、内面とも条痕文後ナデが施されている。43は尖り気味の丸底の深鉢である。外面の文様が多方向の条痕後一部工具による条痕が施されている。44～46は、外面、内面ともに条痕が施されている。

## (2) 石器（第16図47～53）

47～48は打製石鎌である。47は石英製で、右脚の先端部は欠損している。左脚端部は突脚である。48はガラス質安山岩製で、全体的に三角形状を呈している。抉りは深い。49・50は横型の石匙である。49は桑ノ木津留産黒曜石製で、左側縁部に浅い抉りを入れている。50はチャート製の石匙で、上部両側縁に抉りを入れ、基部を設けている。51は珪質頁岩製のスクレイパーで、縁辺に連続する剥離を施し、刃部を形成している。52は珪質頁岩製の使用痕剥片で、扇状を呈している。被熱のためか、赤化している部分が多い。53は安山岩製の磨石で、側縁部に敲打痕がみられる。

## 第4節 縄文時代後～晩期の遺構と遺物

### 1 概要

縄文時代晩期に属する土坑が、VI層上面で1基検出されている。また、III層を中心に一部IV・V層からこの時期の遺物が出土しているが、多くは後世の遺構や攢乱層からの出土である。

### 2 遺構

#### 4号土坑（第17図・第20図、90）

4号土坑はC4グリッドのVI層上面で検出された。平面プランは不整形で、長軸は2.6m、短軸は2.2m、深さは60cmである。遺構埋土の上位から90が出土した。鉢の胴部から底部付近で、外面には全体的に組織痕がみられる。内面は、多方向の工具ナデが施され、一部黒変も見られる。このほかに、81・91も出土している。

### 3 遺物

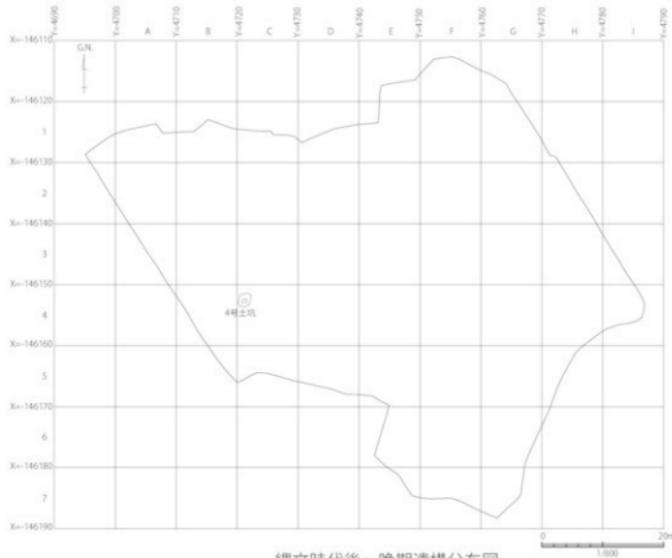
#### (1) 土器（第18～20図54～91）

54は、土器片加工円盤の一部と考えられる。文様は、沈線文と刺突文が施される。口縁部付近であろう。最大幅2.9cm、最大長6.1cm、最大厚1.2cm、重量は14.6gであり、穿孔があったと考えられる。55は胴部で、外面には沈線文と連点文、さらに全体的に横方向のミガキが施されている。56は口縁部で、外面は横方向のナデ、内面は横方向の条痕後ナデが施され、外面には全体的に黒色物が付着している。57は逆「く」字形に鋭く屈曲して稜を形成する胴部片である。外面・内面ともに横方向のミガキが施され、外面の一部に黒斑がみられる。58は口縁部で、外面はヨコナデを施し、内面は剥離している。59は底部で、外面・内面ともにローリングにより調整が不明となっている。推定底径は6.4cm。60は深鉢の口縁から胴部片で、波状口縁である。外面は横方向の粗いナデで、部分的に横・斜方向のナデが施されている。外面の一部に煤が付着し、頸部に段が形成される。内面に黒変がみられる。61は口縁付近で、外面、内面ともに横方向のナデが施され、外面には黒斑と煤が付着している。62は外面、内面とも横方向のミガキが施され、内面には黒斑が認められる。

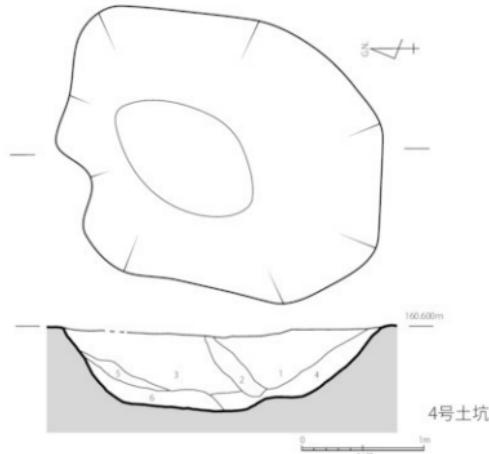
63～67は口縁部で、粘土帶を貼り付けて口縁部を肥厚させ、断面三角形を呈する突帯を巡らせる。

68と69は口縁部で、わずかに肥厚させるものである。68は外面、内面とも条痕後、粗い工具ナデやナデが施され、胎土に微細な雲母が含まれている。69は外面、内面ともにナデが施され、内面に顔料が塗布されている可能性がある。70は口縁から胴部で、残存率が約2/3の比較的まとまった破片である。推定口径は約26.3cm、胴部の最大径は29.0cmで条痕による調整が施されている。71は胴部で、上部に焼成後の穿孔がある。外面は、主に横方向のナデを施している。外面上部に煤が付着し、下部は火熱を受けた痕跡が認められる。72は底部で、外面・内面ともナデを施し、一部黒変がみられる。推定底径は約9.75cmである。胎土に微細な棒状の黒色粒をわずかに含む。73～81は鉢である。73は、外反せず直立する口縁部である。外面、内面とも横方向のナデが施されている。74は口縁部で、外面は粗いナデ、内面は丁寧な横方向のミガキを施している。75は口縁から胴部で、胴部上部に2か所の穿孔があり、外面は粗いナデが施され、ススが全体的に付着している。76は口縁から胴部で、外面は横方向の粗いナデ、内面は横方向のミガキがそれぞれ施されている。外面には煤、内面には黒斑がある。胎土に3mm以下の灰白色粒を含んでいる。77は口縁から胴部で、上部に穿孔がある。外面は横方向の粗いナデが施され、煤が全体的に付着している。内面は横方向のミガキが施され、黒斑がみられる。器壁は比較的薄く、胎土に微細な透明光沢粒が多く含まれている。78は口縁から胴部で、頸部は「く」の字に屈曲している。外面はナデ、内面は横方向の条痕文後ナデが施される。79は口縁から胴部で、口縁部付近は貝殻条痕後横方向のミガキ、胴部上部は縱方向、下部は横方向のミガキが施されており、胴部上部には煤が付着している。80は口縁部から胴部で、口唇部に沈線、外面はナデ、内面は粗い工具ナデが施されている。胴部上部に、直径3mm程度の焼成前の穿孔があり、いわゆる孔列文と考えられる。81は口縁部が「く」の字に屈曲し、直径3mmほどの小孔が並んでおり、孔列文と考えられる。

82～91は浅鉢である。82は逆「く」字形に内折し、口縁端部に浅い横方向の沈線文が1条巡る。外面、

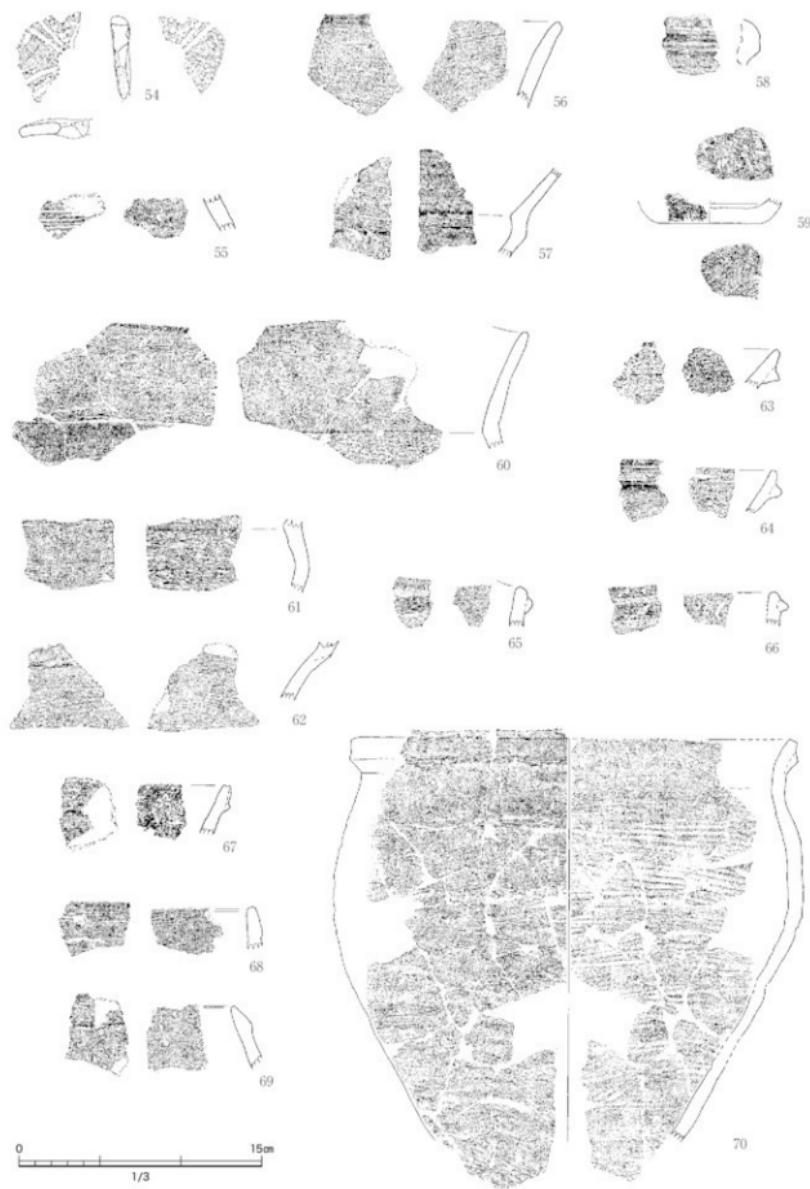


縄文時代後～晩期遺構分布図

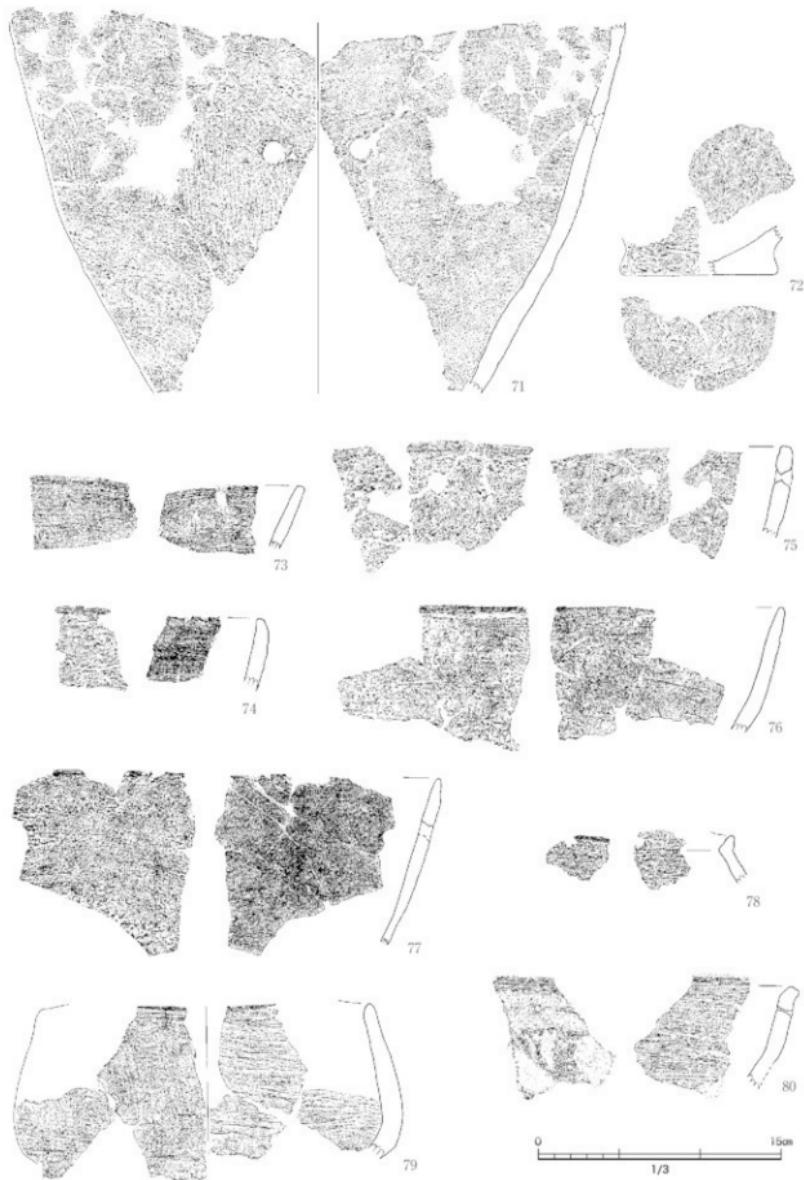


- 1.Hue10YR 2/1 黒色土 φ1～7mmの褐色粒子（霧島御池軽石）を30%含む。粘性はないがしまりがある。  
 2.Hue10YR 2/2 黒褐色土 φ1mm～10mmの大小さまざまな軽石が集中しているところもある。非常に硬くしまっており粘性もある。  
 3.Hue10YR 3/3 暗褐色土 φ10mm以下の軽石が40%混じる。比較的硬くしまっており、粘性もある。  
 4.Hue10YR 5/6 明褐色土 しまりはあるが粘性はない。軽石がくすぐってきて流れ込んできたようにみられる。  
 5.Hue10YR 3/5 暗褐色土 軽石の混じりも少なくなる。粘性はあるがしまりはややある程度である。  
 6.Hue10YR 3/4 暗褐色土 軽石も少なく、黒色土が混じるところもある。部分的にしまっている箇所もあるが、ほとんどはしまりがない。

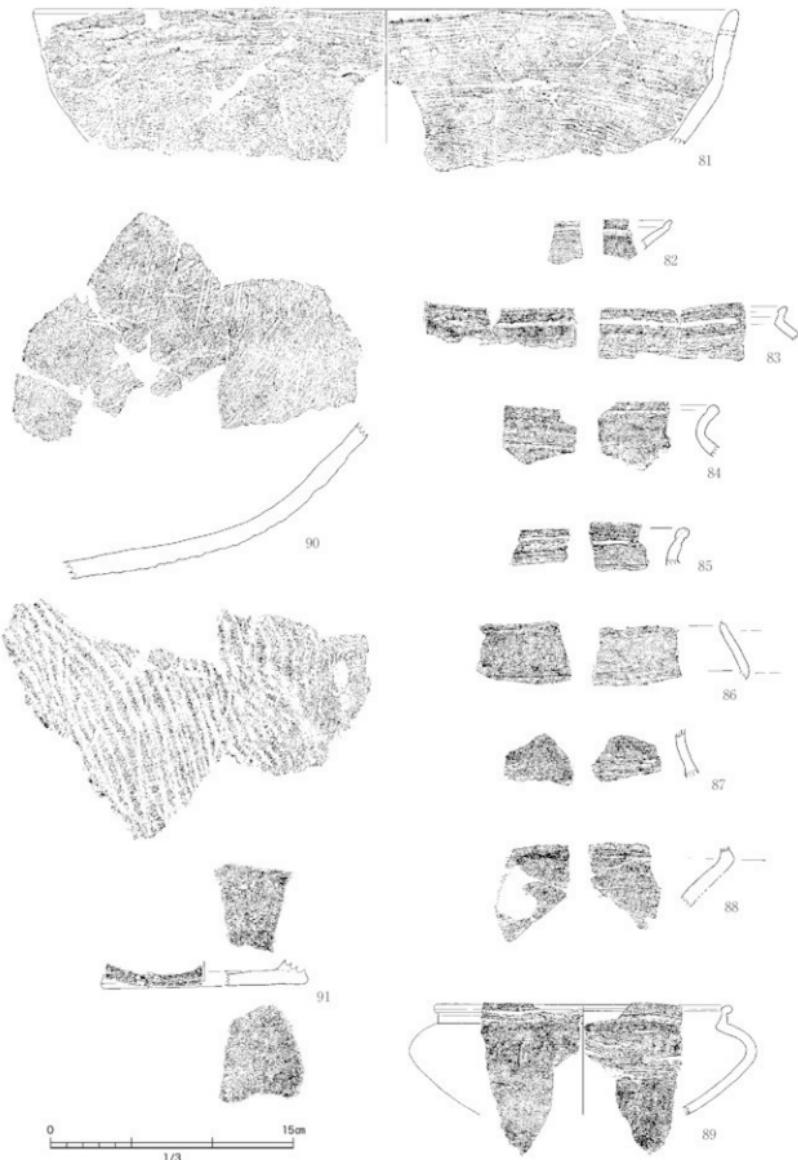
第17図 縄文時代晩期遺構分布図及び4号土坑実測図



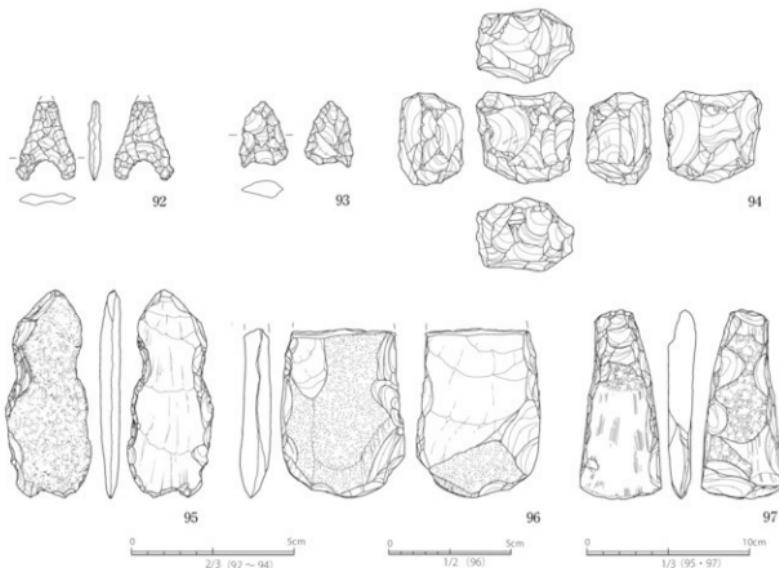
第18図 繩文時代後～晩期土器実測図



第19図 繩文時代晩期土器実測図(1)



第20図 繩文時代晩期土器実測図 (2)



第21図 繩文時代後～晩期石器実測図

内面とも横方向のミガキが施されている。83は口縁部で、口縁部にヒレ状の突起を有する。84は口縁部で、風化が著しいが、外面は横方向のミガキ、内面もミガキが施されている。外面に圧痕が複数みられる。85は口縁部で、全体的に灰黄色で、外面には沈線文が施される。86～87は胴部で、全体的に黒褐色を呈している。88は外面は横方向のミガキが施されて、全体的に煤が付着しており、胎土に2mm大の比較的大きな褐色粒をわずかに含む。89は口縁から胴部である。口縁部は外反し、胴部は逆「く」字形に屈曲して稜を形成している。器壁は薄く、口縁部下部に沈線文があり、口縁部は玉縁状に肥厚する。91は底部で、推定底径は約12.8cmである。外面、内面ともローリングにより調整不明である。色調は橙色である。

## (2) 石器（第21図92～97）

ここでは遺構埋土出土で、混入の可能性が高いなど、縄文時代の遺物であるか時期の特定が難しい石器を掲載する。

92～93は、いずれもチャート製の打製石核で、基部形態は92が深い凹基、93が平基である。94は桑ノ木津留産の黒曜石の石核で、打面転移を行い、複数の方向から剥片を作出している。95～97は、いずれもホルンフェルス製で、側縁部に剥離調整を施している。95・96は打製石斧、97は磨製石斧で、残存するものの形態は、95は有肩形、97は短冊形を呈する。95のみⅢ層出土で、他は時期の異なる遺構埋土や搅乱層出土である。

## 第5節 古墳時代の遺構と遺物

### 1 概要（第22図）

古墳時代の遺構としては、主にVI層（霧島御池降下軽石）上面で竪穴建物跡が8軒検出された。遺物は、竪穴建物跡の埋土や床面近くより土師器の甕や壺、高环、小型土器等が出土している。なお、色調や胎土、調整等の詳細については、遺物観察表を参考にされたい。

### 2 遺構

#### （1）竪穴建物跡

##### 1号竪穴建物跡（第23図～第25図）

調査区南側のF 6 グリッドにあり、付近にVI層が残存していないため、VII層上面で検出された。遺構の規模は、5.6m × 4.6m。隅丸方形プランで、主軸は西に約40°振っている。床面積は約20.8m<sup>2</sup>あり、本遺跡の中では規模の大きな竪穴建物跡である。貼床の厚さは約10cmである。主柱穴とみられる小穴は6基あり、その深さは30～42cmで、柱間距離は北西から南東方向に2m、北東から南西方向に1.4mとなる。北西部の壁際には1対の柱穴が検出され、この竪穴建物跡の出入り口の支えを果たす柱と推測される。貼床中央部には、焼土が広がっており、その中に炭化物も含まれていた。また、焼土の広がり以外の床面上から炭化材が複数確認された。これら炭化材（3試料）について年代測定を行ったところ、 $1710 \sim 1610 \pm 20$ 年<sup>14C</sup> BPの年代が得られた。較正年代については第IV章を参照されたい。

本遺構から出土した遺物は、床面付近から出土したものが多く、遺構のやや北側や東側から多く出土している。28点を図化した。

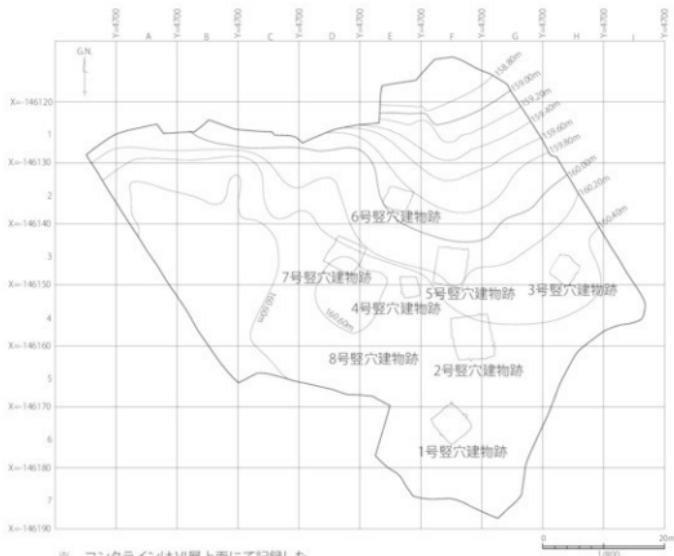
98～104は甕である。形態的には、口縁部が胴部からやや内湾気味に立ち上がり、外面に1条の貼付突帯を巡らすもの（98・99・100・101）と胴部中位に最大径を有する長胴で、頸部がくの字状に明確に屈するものの（103）の2種類がみられる。前者は粘土紐の接合痕跡が残っており、全体的な作りも粗雑である。胎土や調整、形状等から101と102は同一個体と思われる。102と104は底部であるが、いずれも平底を呈し、短く直立する底部から外方

に屈曲し、やや内湾しながら胴部が立ち上がっている。105～106は壺の肩部～胴部で、なで肩状の器形を呈し、106の外面には黒色付着物が見られる。107～115は高环であるが、全形をうかがうことができるものは109のみである。环部の形態的には、やや大型で、环部中程で不明瞭に屈曲し、口縁部に直線的に立ち上がるものの（107・108）と、小型で屈曲部が明瞭であり、屈曲部から斜め上方に直線的に立ち上がるものの（110）の2種類がみられる。次に脚部の形態的には、脚裾部は上方にやや屈曲して開くものの（109）と直線的に開くものの（113）、环部を反転したような形状の裾部を有するもの（115）がみられ、その中で、109の脚柱が著しく短いことが特徴である。环底部の充填部脚側の形態的には、108・110・113は、充填後に指などで凹ませず半球状を呈し、108・110・111は充填後に脚側から押して凹ませている。116・117は鉢の口縁部から胴部であり、116の口縁部は緩やかに内湾しているのに対して、117の口縁部は大きく開いている。117の外面に黒色物が付着し、口縁部内面付近に、種子状の圧痕が2ヶ所みられる。118～122は小型土器（壺）である。118・119は口縁部がやや内湾気味であるのに対し、120の口縁部は直線的に立ち上がっている。121は口縁部から頸部で、頸部と口縁部の境に段が付き、明瞭になっている。122は小型丸底壺で、頸部から口縁部へ直線的に広がっており、内面に3ヶ所ほど種子状の圧痕がみられる。123は砂岩製の敲石で、先端部に敲打痕がある。124は全長11.2cmの刀子である。

##### 2号竪穴建物跡（第26図～第27図）

調査区やや南側のF～G・4～5グリッドに位置し、VI層上面で検出された。遺構の規模は、7.0m × 6.0m。方形プランで、長軸は西に約10°振れ、床面積は約37m<sup>2</sup>あり、本遺跡の最大規模の遺構である。貼床があり、厚さは10～20cmほどある。床面上には壁帶溝と推定される溝も検出された。また、南側の壁付近より、たも石と思われる11個の砂岩の礫が出土した。中央部や南側で焼土が一部確認された。

本遺構から出土した遺物のうち23点を図化した。遺構の北東部で多く出土しており、床面付近から多く遺物が出土した。



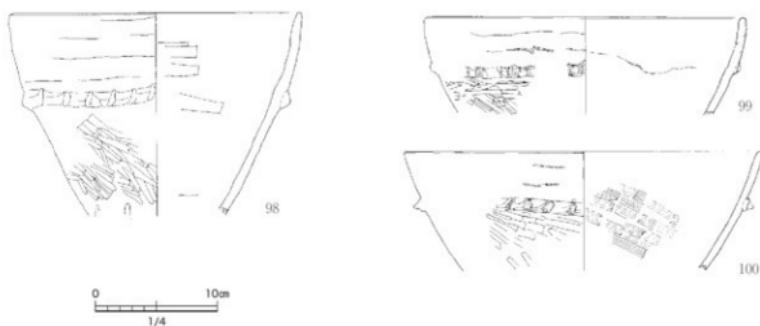
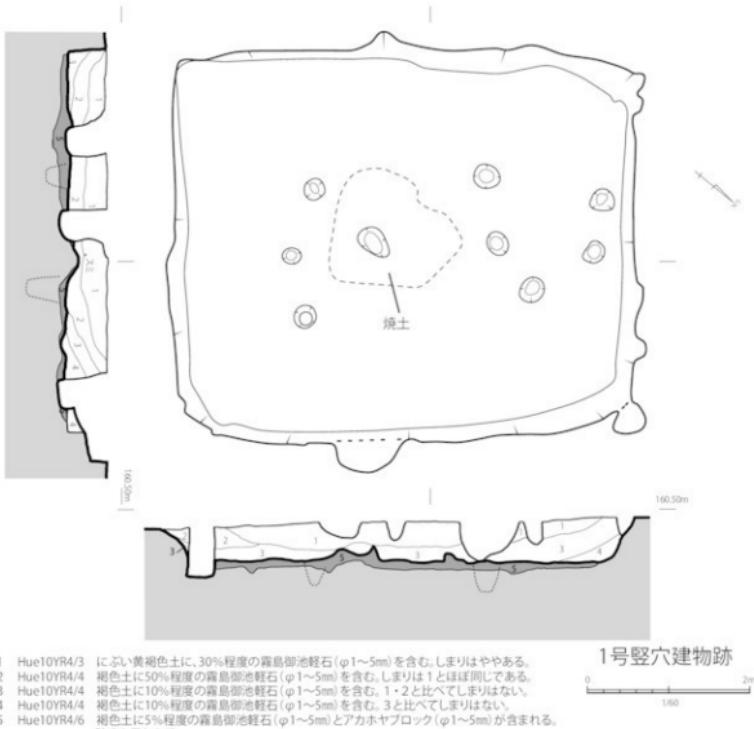
\* コンターラインはVI層上面にて記録した。

第22図 古墳時代遺構分布図

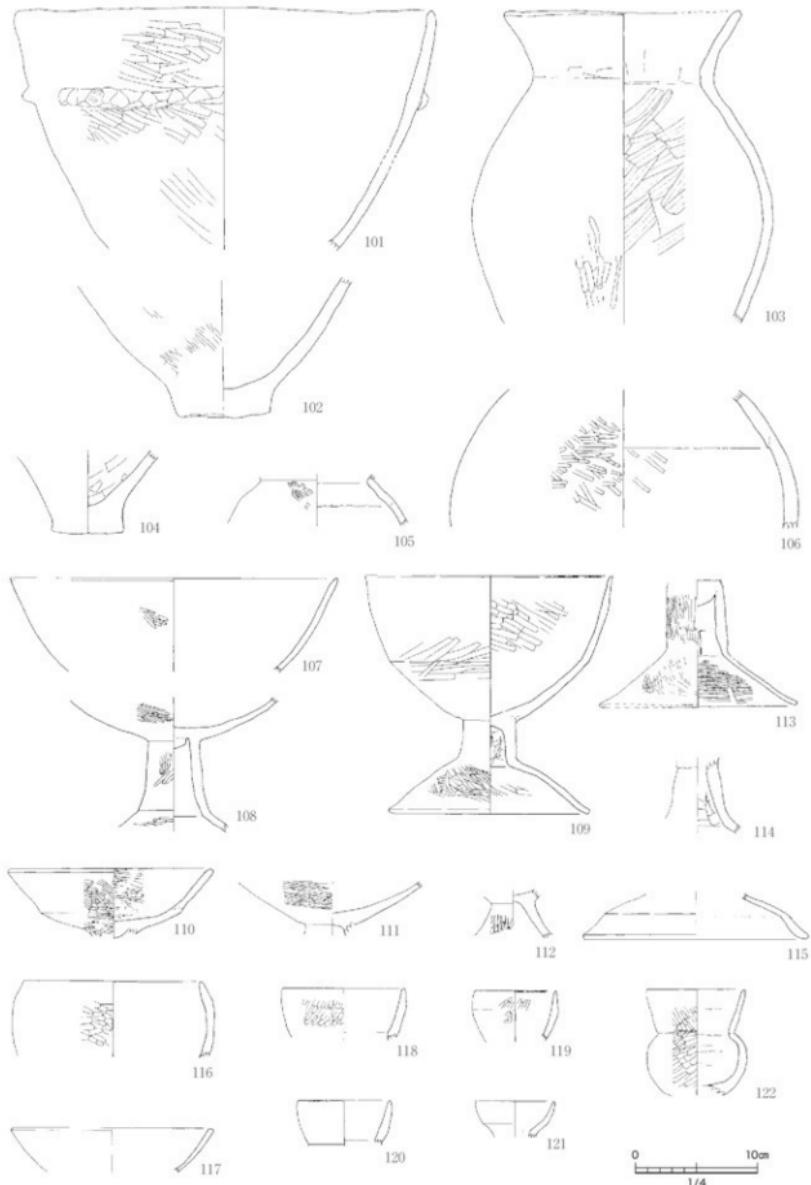
125～128は壺である。125・126の口縁部は、やや直線的に立ち上がっており、外面に1条の刻目貼付突帯を巡らせている。推定口径が約30cmを超える広口壺で、外面に煤が付着している。127・128は、壺の底部付近から底部で、平底の底部に黒色付着物がみられる。129・130は壺で、いずれもくびれ部に刻目突帯を巡らせ、刻目部分に布目痕が残っている。129の外面全体に丹塗りが施され、130の口唇部には沈線状の文様が施されている。131～138は高坏である。全形をうかがい知ることができる個体は138のみである。坏部の形態としては、屈曲部があまり見られず口縁部が直線的に立ち上がっているもの（132・134）と緩やかに屈曲して直線的に立ち上がっているもの（138）、明瞭な屈曲部からやや外反しているもの（131）の3類型がみられる。次に脚部の形態としては、脚柱部はやや外側に直線的に広がり、脚裾部との境に明瞭な屈曲が見られ、「ハ」の字状に聞く（136・137・138）。また、坏底充填部が確認されたもののうち、134・138は凹まず半球状を呈し、137は凹んでいる。139は鉢

で、底部は平底気味で体部は大きく開き、全体的に楕円形である。140～147は小型土器である。その中で、140・141の口縁部はやや内湾気味である。142は扁球形の体部に尖底で、体部の器壁は非常に薄く、外面に黒色付着物がみられる。143・146の底部内面は胴部と比べ、器壁が厚くなっている。145・146はいずれも平底の底部で、側面が外反しながら立ち上っている。147の内面は接合面で、器種や部位は不明である。148は全長3cm、幅1.5cm、厚さは0.8cm～1.2cmで、ほぼ長方形をした楔形の鉄製品である。  
3号竪穴建物跡（第28図）

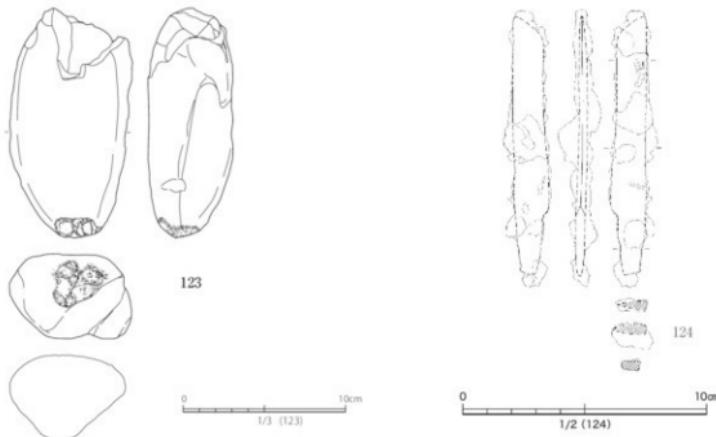
調査区東側のH 3グリッドのやや南側のⅣ層上面で検出された。遺構の規模は、3.6m×4.0mで、床面積は約13.7m<sup>2</sup>である。隅丸方形プランを呈する。この遺構の長軸は西に約50°振れている。貼床は約5～8cm程度で非常に薄い。主柱穴は遺構中央部と1m南東側にそれぞれ1基ずつあり、床面からの深さは0.25m、0.38mである。3号竪穴建物跡の北西部にある10号土坑が、3号竪穴建物跡を後後に削平している。また、3号竪穴建物跡の東側にある2号



第23図 1号竪穴建物跡実測図及び出土遺物実測図(1)



第24図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)



第25図 1号竖穴建物跡出土遺物実測図 (3)

堅穴状造構が後世に3号堅穴建物跡を削平した形跡  
がみられる。床面の中央部には焼けた粘土があった。

本遺構の遺物は、多くが検出面付近の埋土より出土した。そのうち、5点を図化した。

149・150は甕の底部で、いずれもレンズ状の平底である。151・152は高坏の坏部で、151は坏部の屈曲部から口縁部へ直線的に伸びている。153は小型土器で、口縁部はやや内湾している。

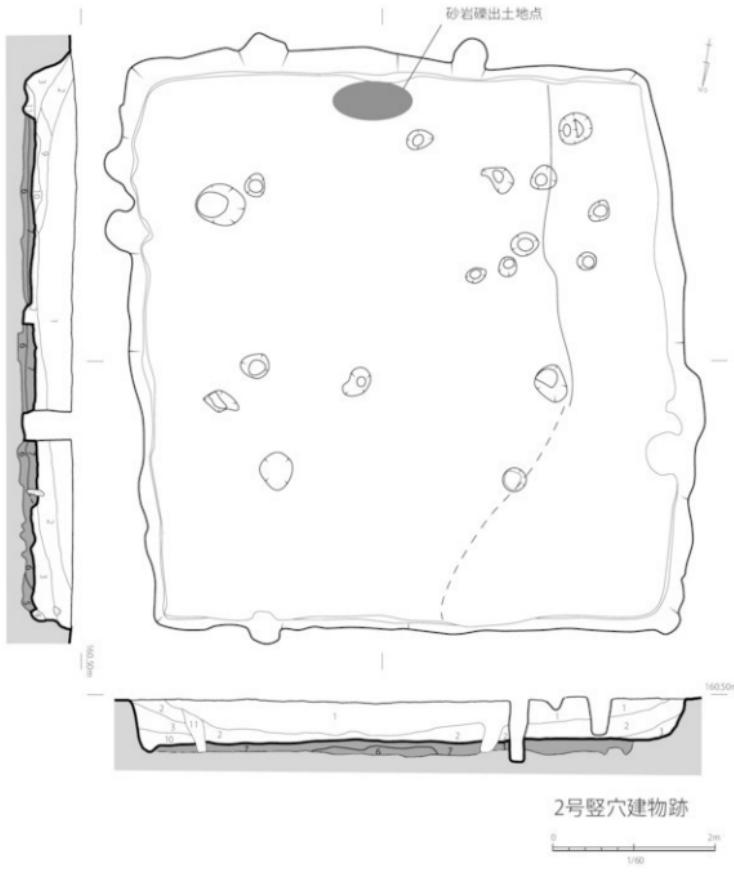
#### 4号堅穴建物跡 (第29図)

調査区中央部のE 3～E 4グリッドに位置し、造構の規模は、3.6m×2.6m、床面積は約9.4m<sup>2</sup>である。長方形プランであり、この造構の長軸は西に10°振れている。柱穴は北側に2基確認され、柱穴2基の深さは約30cm、柱穴間は80cm程度である。中央部のやや南側や2基の柱穴間に焼土が検出された。

本遺構から出土した遺物は、出土した地点としては中央部からやや南側が多く、ほとんどが床面付近から出土した。そのうち19点を図化した。

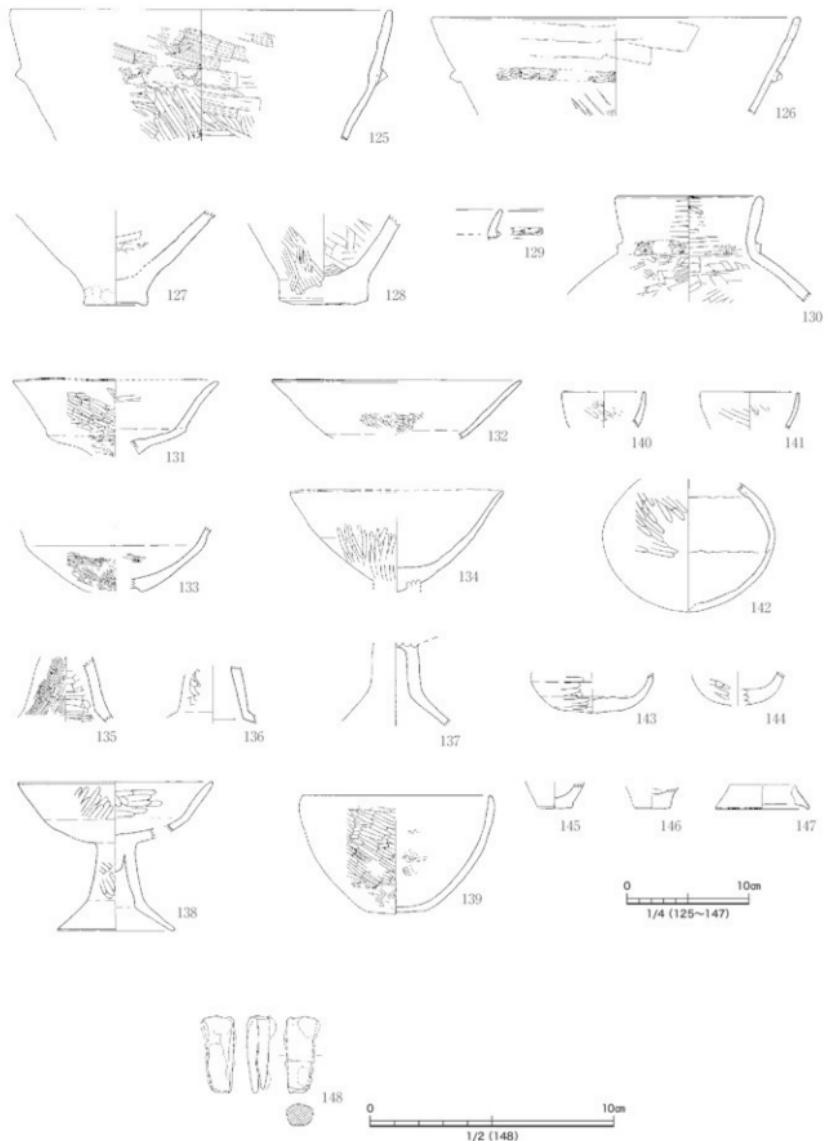
154・155は甕であり、そのうち154は全形をうかがい知ることができる資料である。154の頸部は緩やかに屈曲し、長胴気味の胴部で、丸底を呈する。胎土は5mm以下の褐灰色粒や赤褐色粒など大きめの砂が混入している。155の側面は外反しながら立ち上がり、底面との境が明瞭な平底となる。156・

157は丸底の壺である。156は胴部が球形を呈する。器壁が薄めだが、157の底部の器壁は厚く、内の中心付近に工具の圧痕が見られる。158～167は高坏である。坏部の形態としては、坏部の中ほどでわずかに屈曲し、口縁部がわずかに外反しているもの(158)と、屈曲しない楕円形のもの(159)がみられる。脚部の形態によると、脚柱部と裾部の境が明瞭な境の段が見られるもの(158)と脚柱部から裾部まで緩やかに外反し、スカート状に湾曲して聞くもの(161～164・167)に分けられる。また、裾部の中で坏部を反転したような形態の裾部を有するもの(166)もみられる。なお、167・172は羽口に転用したものである。167の裾部上部に、二次的被熱による変色が見られ、一部鉄滓が付着しており、172は脚柱部外面のほとんどが被熱し、灰色に変色しているとともに、一部は溶融の痕跡も見られる。坏底充填部が確認されたもののうち、158・162は凹まず半球状を呈し、160・163は凹んでいる。168・169は鉢で、168の胴部は内湾気味に開き、低い脚台を有する。169は小形の平底の底部である。170は小型土器の口縁部から胴部で、外面胴部に縱方向のヘラミガキが施されている。171は輪の専用羽口で、外面の全体的に熱を受け発泡しているとともに、内面には鉄が酸化し、赤色に変色している部分もある。173は

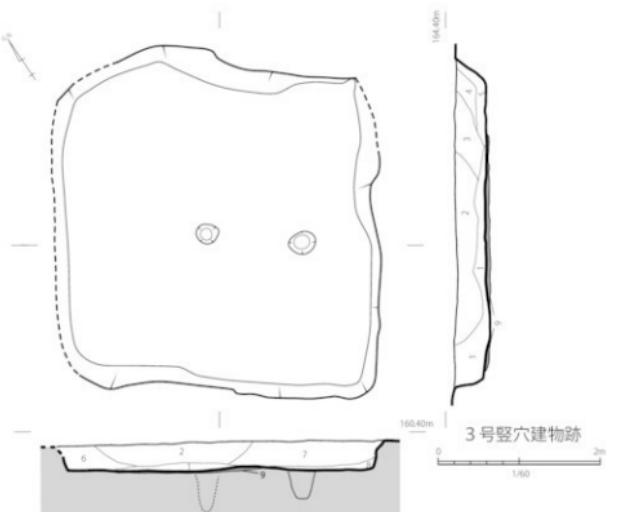


- 1 Hue10YR 4/3 にぶい黄褐色土に、30%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 5mm$ )を含む。しまりはややある。
- 2 Hue10YR 4/4 褐色土に、50%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 5mm$ )を含む。1とはほぼ同じ。
- 3 Hue10YR 4/4 褐色土に、30%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 5mm$ )を含む。1よりしまりがない。
- 4 Hue10YR 4/3 にぶい黄褐色土に、1%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1mm$ )を含む。3よりしまりがない。
- 5 Hue10YR 4/4 褐色土に、アカホヤブロック( $\varphi 2mm$ )を含む。
- 6 Hue10YR 4/6 褐色土に、霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 2mm$ )とアカホヤが一部含まれる。しまりがあり、貼床か。
- 7 Hue10YR 4/4 褐色土に、50%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 2mm$ )を含む。非常に硬い、貼床の一部か。
- 8 Hue10YR 4/3 にぶい黄褐色土に、50%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 5mm$ )を含む。1よりしまりがある。
- 9 Hue10YR 4/3 にぶい黄褐色土に、10%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 5mm$ )を含む。
- 10 Hue10YR 4/6 褐色土に、15%程度の霧島御池軽石( $\varphi 3\sim 5mm$ )を含む。しまりがある。
- 11 Hue10YR 4/4 褐色土に、10%程度の霧島御池軽石( $\varphi 1\sim 5mm$ )が含まれる。

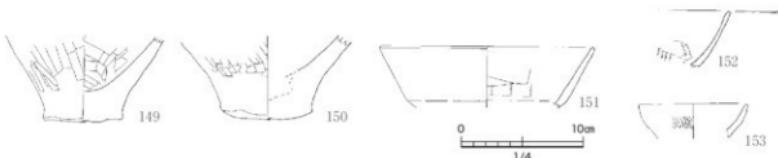
第26図 2号竖穴建物跡実測図



第27図 2号竖穴建物跡出土遺物実測図



- 1 Hue10YR 3/4 褐褐色土。とこみどろしきおりが強いくとこもあるが、全体的に弱い。 $\varphi 1\sim 10\text{cm}$ の霧島御池軽石を7%程度含む。
- 2 Hue10YR 4/3 にこい黄褐色土。しまりはあるが粘性は弱い。1どうろの霧島御池軽石を含むが $\varphi 1\sim 3\text{cm}$ 程度と細かい。
- 3 Hue10YR 4/3 褐褐色土。粘性しまりともになし。霧島御池軽石が全体的に均一に混じる。
- 4 Hue10YR 4/4 褐褐色土。粘性しまりともにもない。部分的に褐色と暗褐色が混じる。
- 5 Hue10YR 3/4 褐褐色土。粘性はあるがしまりは弱い。 $\varphi 1\text{mm}$ 程度の霧島御池軽石が細かく混じる。
- 6 Hue10YR 3/4 褐褐色土。しまりが弱く、全体的にボソボソした様子で、霧島御池軽石の混ざりも粒の大きさもまばらである。
- 7 Hue10YR 4/4 褐褐色土。粘性はないがやや堅くしまる。霧島御池軽石も7%程度含むが、粒子の大きさはバラバラである。
- 8 Hue10YR 4/3 褐褐色土。粘性土。霧島御池軽石の混じりもなく、しまりも弱い。
- 9 Hue10YR 2/3 黒褐色土。粘床か。硬直化しているところ、そうでないところがある。1~2cm程度の褐色ブロック、 $\varphi 1\text{mm}$ 程度の黒色土、霧島軽石など多く混じる。



第28図 3号竖穴建物跡実測図及び出土遺物実測図

棒状の鉄片で、最大長約1.6cm、最大厚0.5cmであり、174は三角形状の鉄片で、最大長2.8cm、最大厚0.6cmである。

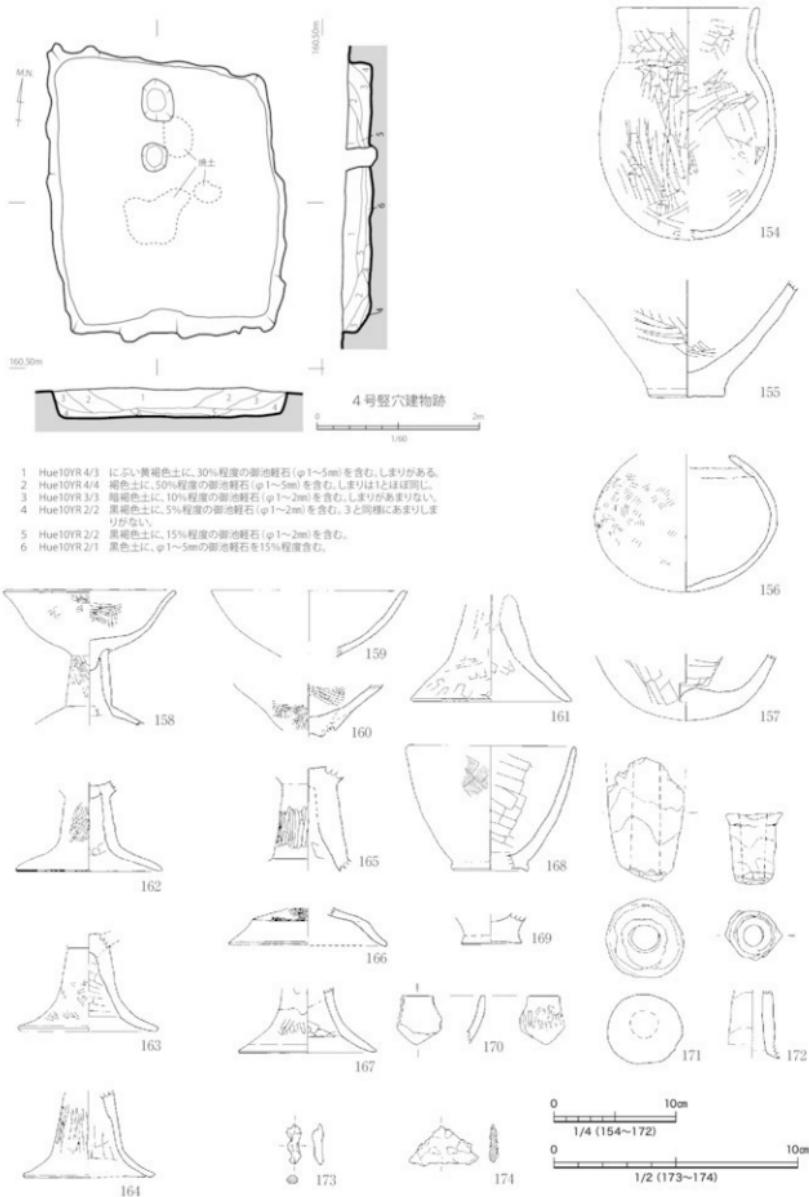
#### 5号竖穴建物跡（第30図～第34図）

調査区中央部のやや東側、F 3 グリッドに位置し、V層掘削中に検出された。この遺構の南東部にある5号土坑によって後世に削平されている。遺構の規模は、6.0m × 5.0m、床面積は約278nfである。方形プランで、この遺構の長軸は東に10°振れています。貼床の厚さは約10~20cmほどである。床面の中央部と南西部に焼土が検出され、中央部には、焼けた粘土の塊も出土した。また、床面中央部の一部に赤く

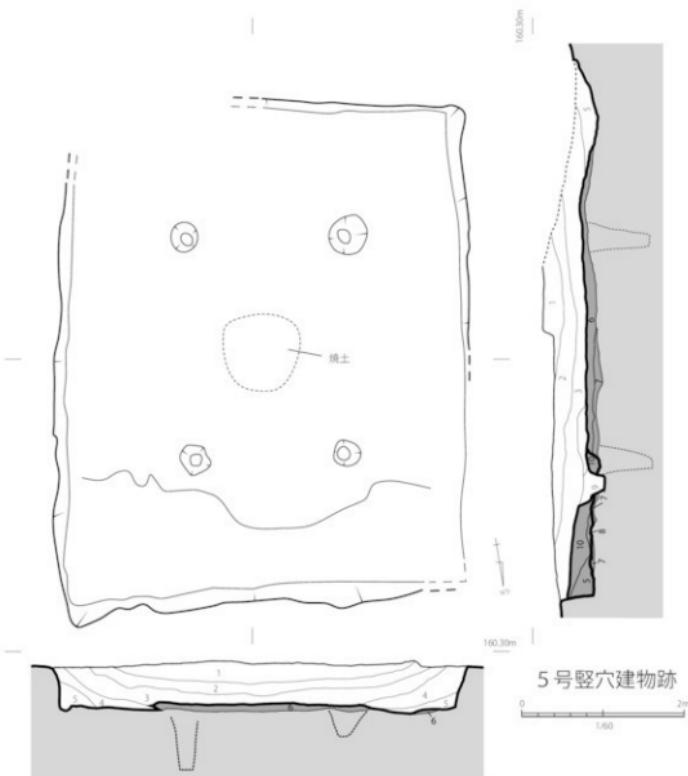
酸化した部もあった。主柱穴は4基確認されており、深さ約50~60cmのしっかりとしたピットである。遺構の北側のほぼ全面に検出面から10~40cmの深さに硬化面がみられた。中央部に向かうにつれて緩やかに下っており、ベッド状遺構の可能性も指摘できる。

本遺跡の竖穴建物跡の中で、最も多い遺物が出土し、その大半は床面から出土している。そのうち66点を図化した。

175~185は甕で、そのほとんどの外面に煤が付着していたことから、煮炊きの道具として使用していたと考えられる。甕のうち、全形をうかがい知ることができるものは180のみである。甕は、頸部に



第29図 4号竖穴建物跡実測図及び出土遺物実測図



- 1 Hue10YR 4/3 にぶい黄褐色土に、5%程度の御池軽石(φ1~5mm)が含まれる。しまりがあるない。
- 2 Hue10YR 4/4 黄褐色土に、10%程度の御池軽石(φ1~5mm)が含まれる。しまりがあるない。
- 3 Hue10YR 4/4 黄褐色土に、10%程度の御池軽石(φ1~5mm)が含まれる。しまりがある。
- 4 Hue10YR 4/4 黄褐色土に、50%程度の御池軽石(φ1~3mm)が含まれる。しまりがある。
- 5 Hue10YR 4/4 黄褐色土に、50%程度の御池軽石(φ1~3mm)が含まれる。しまりがある。
- 6 Hue10YR 2/3 黒褐色土に、5%程度の御池軽石(φ1~3mm)が含まれる。非常にしまりがある。貼床か。
- 7 Hue10YR 5/6 黒褐色土に、5%程度の御池軽石(φ1~3mm)が含まれる。御池軽石が50%以上含まれる。貼床か。
- 8 Hue10YR 4/4 黄褐色土に、5%程度の御池軽石が含まれる。一部軽石塊がある。
- 9 Hue10YR 3/4 黑褐色土に10%程度の御池軽石を含む。3.よししまりがない。
- 10 Hue10YR 4/4 黄褐色土に、50%程度の御池軽石が含まれる。硬化面で、非常に固い。

第30図 5号竖穴建物跡実測図

刻目貼付突帯があるもの（175・176・177・180・183）とないもの（181・182・184）に大別できる。刻目貼付突帯があるものの中でも、口縁部が緩やかに内湾するもの（175・176・177）と頭部がすさまり口縁部が直立するもの（180）、頭部から口縁部が外反するものの3類型がみられる。一方、貼付突帯がない一群では、頭部で「く」の字状に屈曲し口縁部は直線的に立ち上がっているもの（181・182）

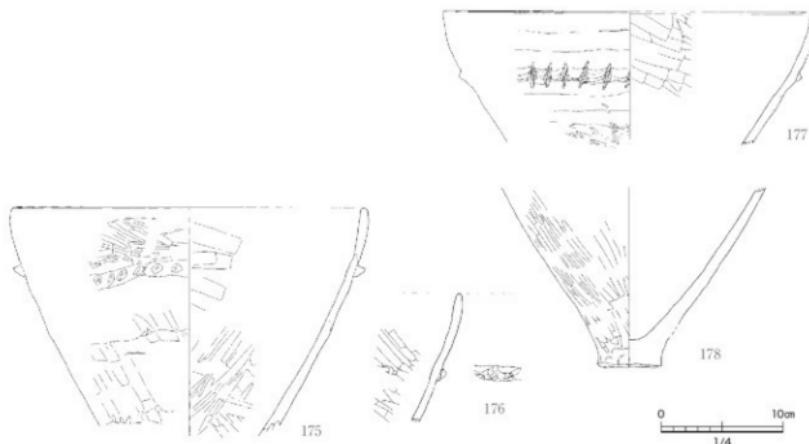
と頭部から緩く外反するもの（184）に分けられる。壺の底部として確認できるものは178・179・180・181・185であり、平底（178・179）と丸底（180・181・185）に分けられ、185の内外面に圧痕もみられる。186～196は壺である。形態的には、頭部に刻目貼付突帯が巡らせるもの（186・187）とないもの（188・189・191）がみられる。底部の形態としては、尖り気味の丸底（192・185）と丸底（193・

194) やや平底（195）がみられ、底部付近の器壁はいずれも非常に厚い。189の口縁部中程が屈曲し、上部は直立して二重口縁壺の様相を呈している。196は頸部から胴部で、扁球形を呈し、外面には被熱の痕跡もみられる。形状等から186と187、191と192はそれぞれ同一個体であると推測される。197～222は高壺で、そのうち壺部の形状等が確認できるものは197～210。脚柱部が確認できるものは209～222である。壺部の形態から分類すると、底部と口縁部の境があまりはっきりせず口縁が直線的にのびるもの（197・198・201・203・204・206・207）、底部と口縁部の境が比較的はっきりしており、口縁部が弱く外反するもの（199・200・205）がみられる。脚柱部の形態によると、219～222のいずれも脚柱部から裾部にかけて緩やかに外反して「ハ」の字状に広がっている。223～231は小型土器（いわゆる小型丸底壺）に類するものであり、そのうち223・224・225は全形をうかがい知ることができる。体部最大径が口径を上回り、体部が球形である。231の内面は多方向のミガキが施されて、指頭痕も観察できる。232～238は鉢である。232は口縁部がやや内傾するのに対し、233・234の口縁部はやや内傾し、

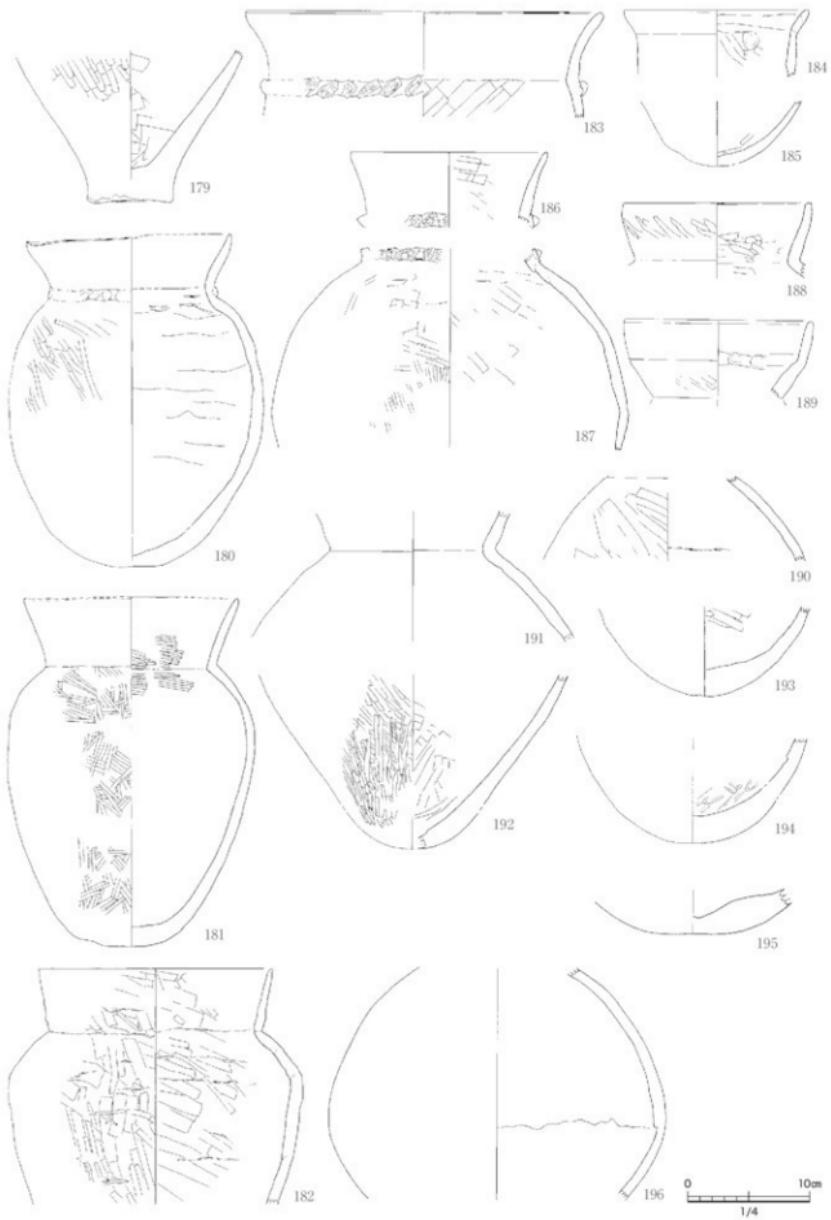
直立している。235の外面上には縦方向のミガキが施されている。236～238は平底で、236は細いコップ状を呈する。239は不明土製品で、工具で削られた痕跡が多数みられ、微細なガラス質の光沢粒を多量に含まれている。240は輪の専用羽口で、先端部は被熱により発泡している部分がある。先端部の内部に鉄が酸化して、赤色に変色している部分もみられる。241は砂岩製の敲石である。断面は楕円形状を呈し、上面中央部付近に敲き痕が見られる。広範囲に亘る赤褐色が模様のようにみられ、鉄分が付着したものと思われる。242は粘板岩製の棒状の砥石で、三角錐の形状を呈し3面に研磨痕が見られる。

#### 6号竪穴建物跡（第35図）

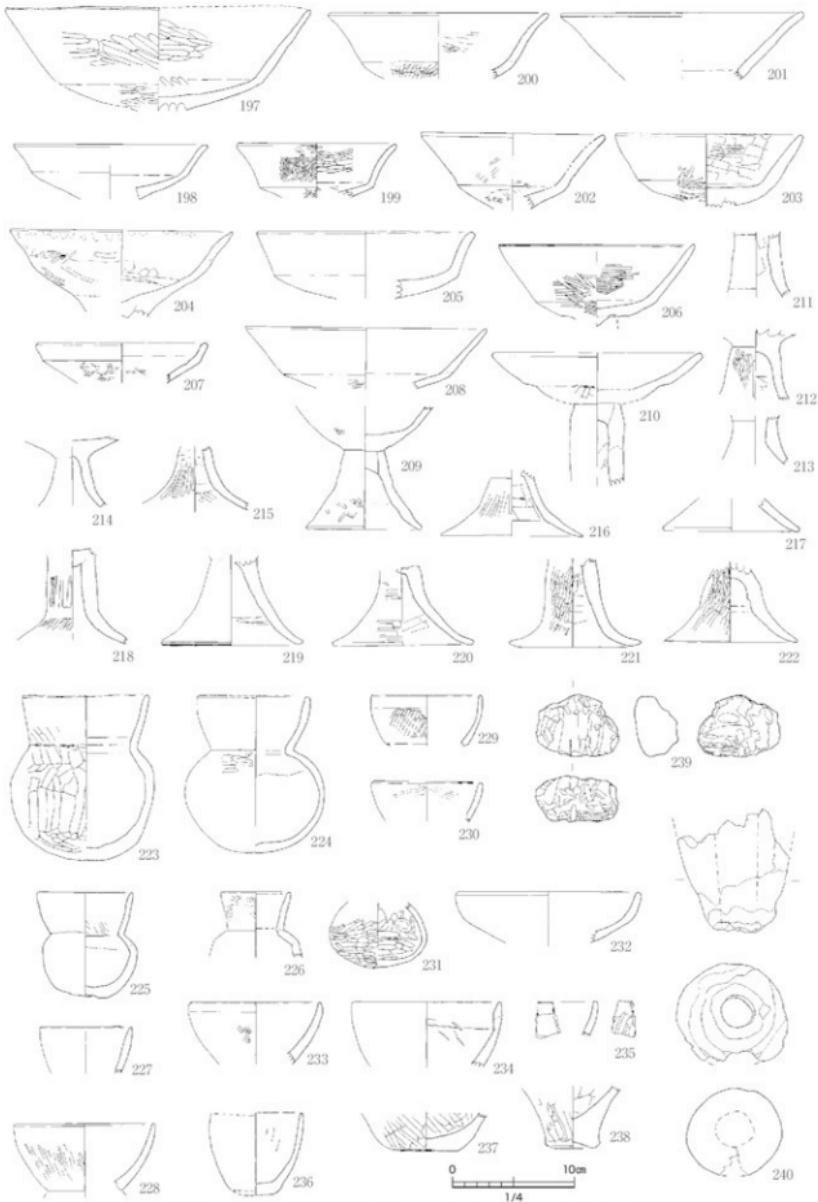
調査区北側のE 2 グリッド中央部に位置し、V層上面で検出した。遺構の規模は4.0m×3.4mの隅丸方形プランで、床面積は約13.6m<sup>2</sup>である。検出面から床面部分までは約20～25cm、この遺構の長軸は、西に約70°振れている。貼床ではなく、中央部から東側にかけて、一部硬化している部分がある。また、圓化はしていないが、焼土跡が認められた。上位の層から掘り込みのあるピットが多数あったが、この遺構の主柱穴と思われるピットは確認できなかった。



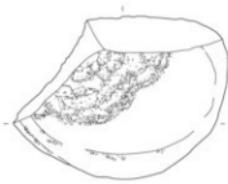
第31図 5号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第32図 5号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)



第33図 5号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)



241



242

0 5cm  
1/2

第34図 5号竪穴建物跡出土遺物実測図(4)

遺物は、本遺構のやや南側の床面付近から多く出土した。そのうち17点を図化した。

243~248は壺で、そのうち243~246は、口縁部は短く屈曲し、球胴状となる。すばまた頸部に刻目貼付突帯を巡らすもの（243）と刻目貼付突帯がないもの（244・245・248）に分けられる。また、底部の形状に着目すると、いずれも丸底を呈する（243・246・247・248）。243~244の外面には煤や黒色物が付着していることから、煮炊きの道具として使用されたと推測できる。249~255は壺である。そのうち特徴的なものとして頸部に貼付突帯を巡らす一群（249・250・254）と貼付突帯がないもの（251）が認められる。頸部から口縁部まで確認できる249・254はいずれも口縁部は直立し、頸部に1条の突帯が施されている。249・254の内面には、指頭痕が確認できる。251~253は形状等の特徴から同一個体であると推測される。底部が確認できる253・255は、いずれも丸底で、底部付近の器壁が厚くなる。本遺構で唯一出土した高壺が256である。壺部の口縁部は直線的に大きく開き、脚部は撥状に屈曲して開いている。257は脚台をもち壺部が外反する器形の鉢である。258は小型土器の口縁部、259は壺で、屈曲し口縁部は明瞭に外反している。

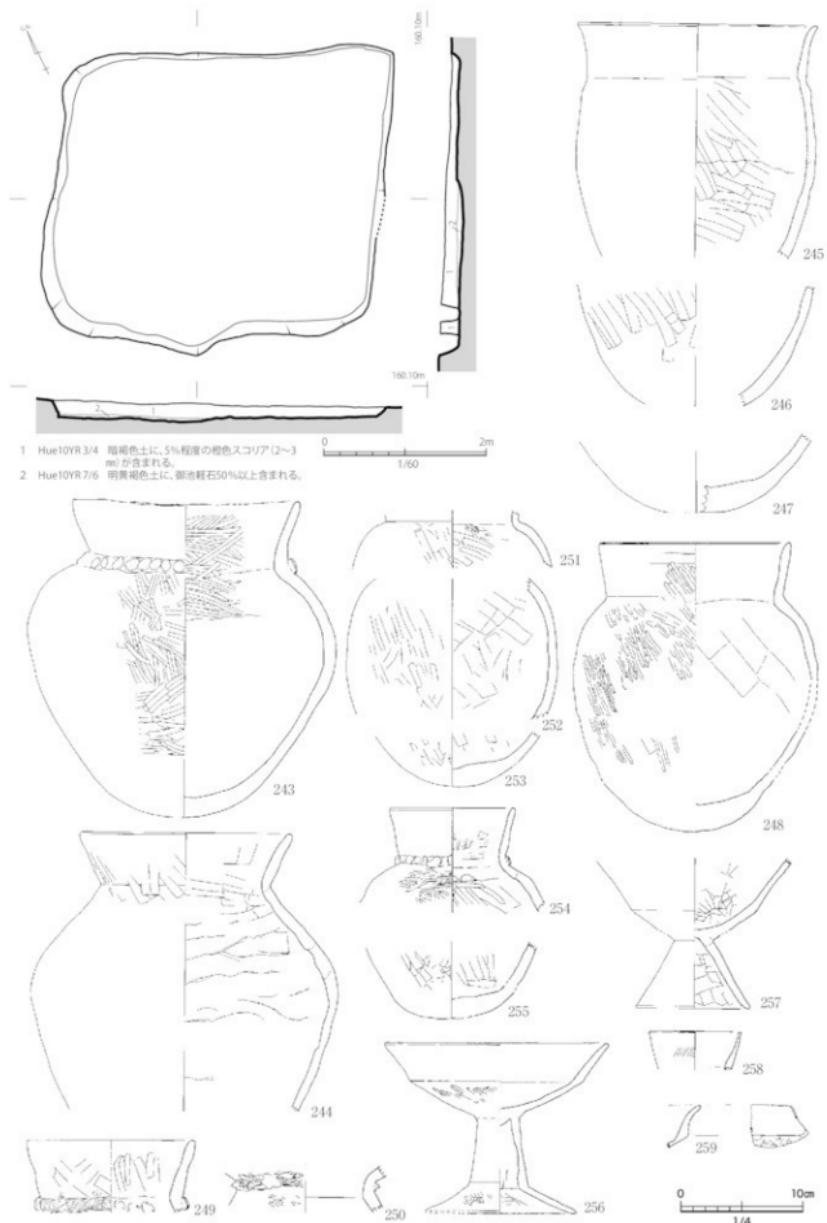
###### 7号竪穴建物跡（第36図～第38図）

調査区中央部、やや西側のD3・E3グリッドに位置し、Ⅲ層の前後半の調査区境で検出された。

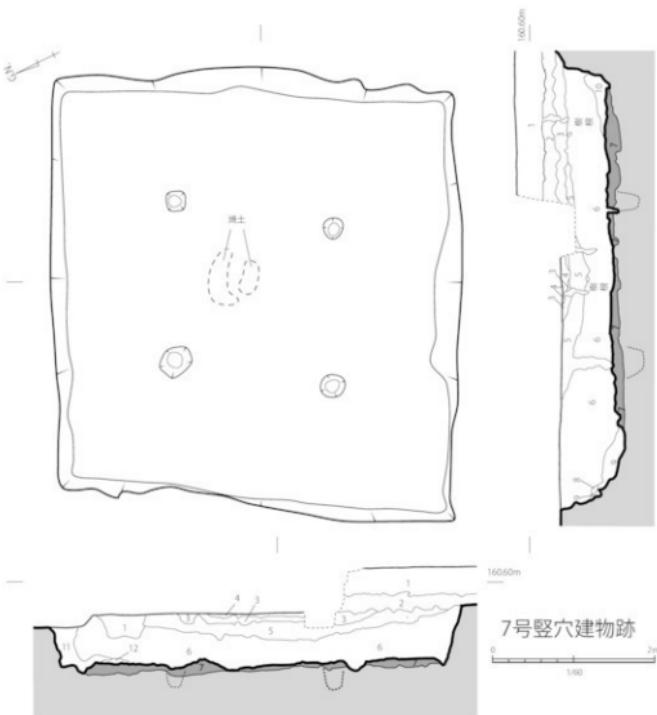
遺構の規模は5.4m×5.0mで、床面積は約24m<sup>2</sup>である。方形プランで、検出面から床面までの深さは60~70cm、この遺構の長軸は、西に約65°振れてい。貼床があり、その厚さは約10~22cm程度である。床面直上の中央部に焼土の広がりと焼けた粘土の跡が確認された。主柱穴のピットが4基検出され、その深さは25~35cmほどである。

本遺構から出土した遺物は、床面から出土したものは少なく、その多くが埋土中からの出土である。そのうち19点を図化した。

260~262は壺で、貼付突帯があるもの（261）とないもの（260）に分けられる。260は球形の胴部を呈する。口縁部にはナデが施され、262の外面に指頭痕がみられる。260・261の外面の全体的に煤が付着していることから、煮炊き用の道具として使用されていたことが明瞭である。263・264は壺で、263は二重口縁壺の頸部付近である。264は胴部から底部で、わずかにレンズ状に膨らみ、器壁が非常に厚い。265~276は高壺である。壺部と脚部に分けて形態を述べる。壺部の形態としては、265・266・267・268はいずれも壺部中程から直線的に伸びているが、屈曲部が明瞭なもの（265）と不明瞭なもの（266・267）がみられ、壺部は椀状になっている。269~276は脚部である。脚柱部のみの269を除く脚部の形態としては、脚柱部から裾部にかけて撥状に屈曲するもの（270・271・272）と屈曲が



第35図 6号竪穴建物跡実測図及び出土遺物実測図



- 1 基本土層Ⅰ層
  - 2 基本土層Ⅱ層
  - 3 Hue2.5Y 3/3
  - 4 Hue5Y
  - 5 Hue10YR 3/4
  - 6 Hue10YR 3/3
  - 7 Hue10YR 2/1～3/4
  - 8 Hue2.5Y 3/2
  - 9 Hue2.5Y 3/3
  - 10 Hue7.5YR 2/2
  - 11 Hue10YR 3/2
  - 12 Hue10YR 3/4
- 暗オリーブ褐色土に、わずかに霧島御池軽石を含む。全体に酸化還元したブロック土を含む  
オリーブ黒色土に、わずかに霧島御池軽石を含む。  
暗褐色土で、土質はやわらかく、酸化還元ブロックを含まない。  
暗褐色土に、黄褐色軽石粒が混じる。全体的に霧島御池軽石を多量(25~30%)含む。  
暗褐色土や黒褐色土、暗褐色土がブロック状に混和して、全体に霧島御池軽石粒を含む。貼床。  
黒褐色土に、黄褐色軽石粒が混じる。  
暗オリーブ褐色土に、黄褐色軽石粒が混じる。  
黒褐色土に、黄褐色軽石粒が混じる。

第36図 7号竖穴建物跡実測図

ゆるやかで「ハ」の字状に広がるもの（274・275・276）に分けられる。277・278は小型土器で、277の底部は側面が外反しながら立ち上がり、底面との境が明瞭な平底である。

#### 8号竪穴建物跡（第38図）

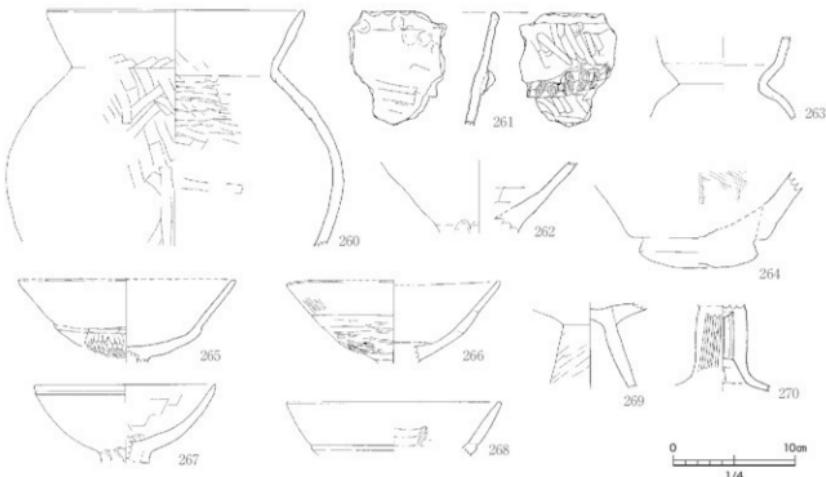
調査区中央部のやや南側のE 4～E 5グリッドに位置し、VI層上面で検出された。遺構の規模は約3.6m×3.2mで、床面積は約11.5m<sup>2</sup>である。隅丸方形プランで検出面から床面までの深さは約30～50cmほどである。この遺構の長軸は、西に約25°振れ、貼床を施し、その厚さは10cm程度である。また、周間にめぐる深さ約10cmの壁帶溝が確認された。床面直上の中央部には小規模の焼土の広がりと焼けた粘土の塊が検出された。

本遺構から出土した遺物は、非常に少量で、かつ小破片のものであった。

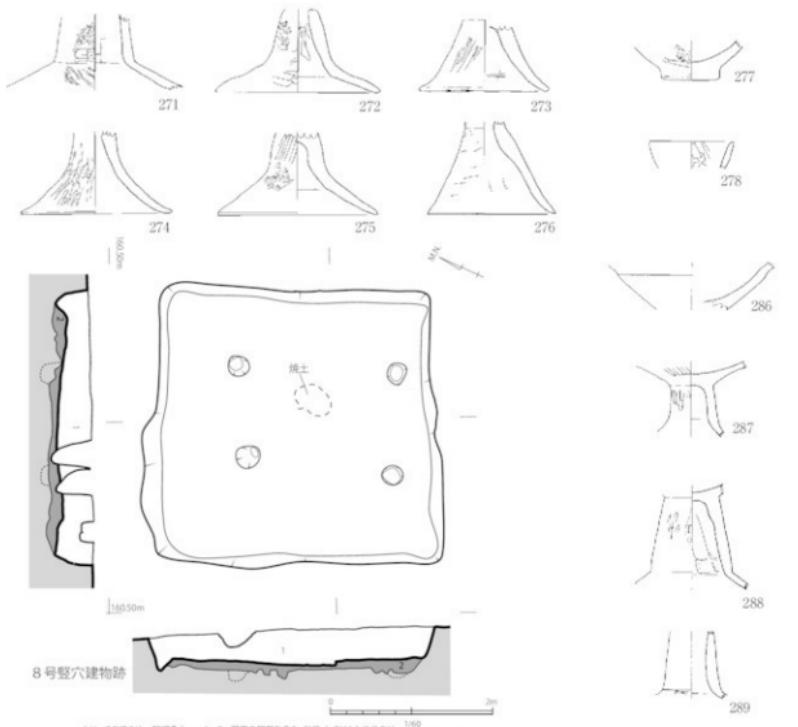
#### 3 竪穴建物跡以外から出土した遺物（第38図）

279～284は壺で、279は口縁部から胴部、280～284は胴部から底部である。279の口縁端部は内湾し、外面に施された突帯の刻目部分に布目の圧痕が認め

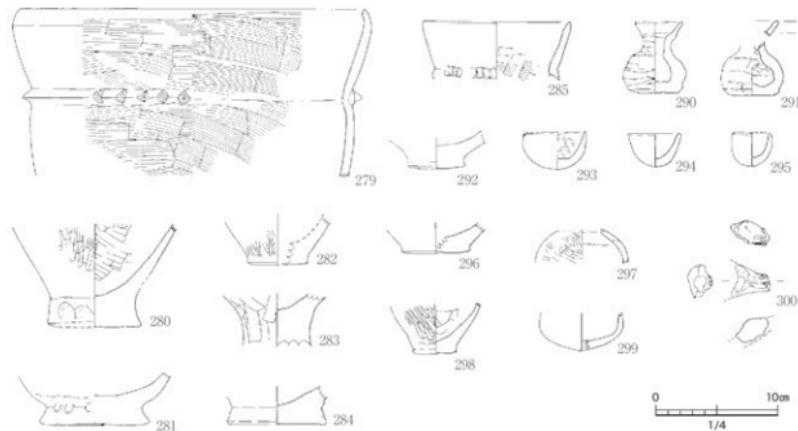
られる。280～282・284は平底で、281の外面の胴部から底部への屈曲部にナデが施され、内面には炭化物の付着もみられる。285は壺の口縁部から頸部で、口縁部は直線的に外反し、頸部付近に貼付突帯が施され、指頭痕がみられる。286～289は高壺で、287～289のいずれも裾部との境に明瞭な屈曲部分がみられる。また、289の内面に鉄分が付着している。290～299は小型土器である。全形をうかがうことができるものは、290のみである。くびれのある頸部の上部に段が見られ、口縁部はわずかに外反しており、器高は5.85cmと小さい。291の胴部屈曲部は明瞭な稜線を有する。292は平底の底部で、内面は剥離が多い。293～295は口縁部から底部で、球体を呈し、ほぼ丸底である。296は推定底径5.7cmの底部で、外面・内面とも主にナデが施されている。297は頸部から胴部で、外面は斜め方向のミガキが施されている。298は胴部から底部で、外面は斜方向のミガキが施されている。平底で、胎土に微細な雲母がわずかに含まれている。299は体部から底部で、形状から口縁部は内湾するものと推測される。300は杓子状土器の柄部で、一部黒変が観察できる。



第37図 7号竪穴建物跡出土遺物実測図



1)Hac759.3/4 塗刷色土 g1~3mm程度の粗石を含む、粘性、少し干ともややあり。  
2)Hac759.3/3 塗刷色土 粗石はと同時に多く混じる、粘性と想われる、粗度はあまりないが少しある。



第38図 7号竖穴建物跡出土遺物及び8号竖穴建物跡実測図、その他古墳時代土師器実測図

## 第6節 古代～中世の遺構と遺物

### 1 概要（第39図、第40図）

Ⅲ層及びⅥ層上面で多数の小穴が検出された（第39図）。このうち、古代以降に相当する明確な遺構としては、竪穴状遺構2基、掘立柱建物跡30棟、溝状遺構14条、道路状遺構5条、柵列7条、土坑5基があげられる。その中で、遺構から出土した遺物によって、古代から中世の遺構と認定できるものは竪穴状遺構1基、掘立柱建物跡14棟、溝状遺構8条、道路状遺構5条である（第40図）。遺物は、土師器をはじめ、貿易陶磁器、国産陶器、銅鏡など多数出土した。

### 2 遺構

掘立柱建物跡（第41図～第46図、第50図301～325、第51図326～345、第54図467～469、第70図551～552）

柱穴から出土した遺物や埋土の状況等から、古代～中世の掘立柱建物跡と認定したものは、14棟（1号～14号掘立柱建物跡）であった。これから項目ごとにみていく。なお、位置や種別、梁行、桁行等、詳細については観察表を参考にされたい。

柱穴の埋土については、1号～3号の掘立柱建物跡の柱穴の埋土は、黒褐色土の橙色バミスを少量含み、4号～14号の掘立柱建物跡の柱穴の埋土は、桜島文明軽石を20%以上含む。

建物の種別については、古代～中世の掘立柱建物跡のうち、総柱建物が3棟（10号11号・14号）で、側柱建物が11棟（1号・2号・3号・4号・5号・6号、7号、8号、9号、12号、13号）であった。なお、3号掘立柱建物跡は床束柱を持つ。

建物の規模については、問数でみると、掘立柱建物跡の全容が不明な5号・12号掘立柱建物跡以外では、2間×2間が半数の6棟、2間×3間が3棟、1間×5間、1間×4間、1間×2間がそれぞれ1棟ずつであった。身舎面積でみると、最大が42m<sup>2</sup>（1号）で、34m<sup>2</sup>（10号）、33m<sup>2</sup>（11号）、25m<sup>2</sup>（3号）、19m<sup>2</sup>（2号）、16m<sup>2</sup>（13号）、15m<sup>2</sup>（5号・7号）、13m<sup>2</sup>（6号・8号・9号）、12m<sup>2</sup>（4号）の順となる。20m<sup>2</sup>未満が8棟あり、小さめの掘立柱建物跡が多い。

庇の有無については、1号～3号掘立柱建物跡の

3棟は庇を有する。1号掘立柱建物跡には、身舎の東側に一面、2号・3号掘立柱建物跡には身舎の東西に二面の庇がそれぞれ付いている。掘立柱建物跡を構成している柱穴の全容が不明な12号掘立柱建物跡以外では、4号～11号、13号掘立柱建物跡には庇が付かない。

主軸については、建物主軸の方向から、大きく5つに大別できる。①群（N-0°～9°-E：1号・3号・4号）、②群（N-10°～14°-E：2号・5号・6号・7号）、③群（N-15°～19°-E：9号・10号）、④群（N-20°～24°E：8号・11号・13号）、⑤群（N-25°～：12号、14号）である。

掘立柱建物跡の柱穴から出土した遺物は、以下のとおりである。

1号掘立柱建物跡のSH 8から301、SH10から302が出土した。301は糸切り底を有し、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がっている壺である。302は、染付碗の口縁部で、外面に波濤文が施される。

2号掘立柱建物跡のSH 7から303の磁器皿が出土した。

3号掘立柱建物跡のSH 7から304、SH16から305、SH20から306、SH19から307が出土している。304は土師器壺の底部で、底部の切り離しは糸切りである。305は青磁碗で、内外面ともに無文で口縁外側を削って玉縁状となり、端反の器形である。306・307は瓦器の一部で、外面に菱形文様が見られる。

4号掘立柱建物跡のSH 4から308が出土した。これは土師器壺の口縁部から体部で、回転ナデが施されている。

5号掘立柱建物跡のSH 3からは309が出土した。同安窯系青磁皿で、内面見込みにジグザグ状の櫛点描文を有する。

6号掘立柱建物跡のSH 4から310・311が出土した。いずれも瓦器の体部から底部で、310の体部外形は直立させ、底部下端に凸線を1条巡らせており、底部縁辺に逆台形の足を貼り付けており、鋭い刃物の工具による接合痕が見られる。

7号掘立柱建物跡のSH 1からやりがんな（551）、釘（552）、SH 7から312の青磁碗が出土した。312

の内面見込みには、印文が施されている。

8号掘立柱建物跡のSH4から313の景德鎮窯系白磁皿、9号掘立柱建物跡のSH6から314の青磁碗、10号掘立柱建物跡のSH12から315の陶器底部がそれぞれ出土し、いずれも高台内面は露胎である。

11号掘立柱建物跡のSH2から316・320、SH10から317・322、SH4から318・321、SH7から467、SH8から319が出土した。316は青磁碗で、外面には雷文帯が施されている。317～319は青花碗で、318の見込みはやや窪む、いわゆる「蓮子（レンツ）碗」の器形で、外面には芭蕉葉文、内面見込みには文字が施されている。319は見込みに蛇の目釉剥ぎがみられる。320・321は青花皿で、外面に全容は不明であるが、文様が施されている。321は端反皿の器形である。322は華南系の青花盤で、内面に文様が施されている。469は古銭で、銭種は洪武通宝である。

12号掘立柱建物跡のSH3から青花碗の323が出土した。内面見込みに2条と外面には釉だれがみられる。

13号掘立柱建物跡のSH7から324・325が出土した。324は青磁碗で露胎である。325は青磁香炉で、筒状の器形を呈している。底部は腰折となり、外面に1条の沈線がみられる。

14号掘立柱建物跡のSH7から古銭（468）が出土した。銭種は洪武通宝である。また、SH6には柱材が遺存しており、分析の結果、樹種は広葉樹のイスノキであることが判明している。

#### 柵列（第41図～第43図・第45図・第46図）

柵列は、1号掘立柱建物跡の西側から南側に付帯するL字形の柵列の3号柵列、2号掘立柱建物跡の東側から南側に付帯するL字形の柵列の2号柵列、3号掘立柱建物跡の北側に付隨し、1列に並ぶ4号柵列、南側に付隨する5号柵列、10号掘立柱建物跡の西側に付帯する11号柵列があるが、柵列の柱穴から遺物が確認されておらず、細かな所属時代・時期の確証はない。

#### 小穴群（第39図・第51図326～336）

小穴から出土した遺物は326～336である。326・327は白磁で、326の口縁部は大きく外反している。

328～330は青磁である。329は口縁輪花状を呈し、腰で折れて外反し、口縁に三条の波状圖線を施す。330は腰部で屈曲し、見込みを蛇の目釉剥ぎする。331・332は青花である。331は皿で、口縁の内外面に界線、外面に草花文と思われる文様を施す。332は葵筋底で、見込みに菊花文と思われる文様を施す。333は陶器で、内面は自然釉が見られる。334は瓦器で、バケツ状の形状をし、底部に短い脚をもつ。335は土師器坏、336は土師器の小皿で、底部はいずれも糸切り底である。

#### 1号竪穴状遺構（第47図・第51図337）

調査区中央部やや南側のE4～E5グリッドに位置し、VI層上面から検出された。3.6m×2.6mの方形プランで、遺構の長軸は東に15°ふれ、床面積は約9.4m<sup>2</sup>である。貯床は中央部にあり、その厚さは0.1～0.2mほどである。埋土は黒褐色土が中心で、深く床面に近づくにつれ、灰黄褐色土となる。その中に、灰白色の粘土が広範囲に広がっている。粘土を除去した後、床面のやや北側・東側から柱穴が2基検出された。柱穴間の距離は0.6mで、柱穴の深さは床面から15cmと25cmである。そのうち、東側の柱穴から炭化材が確認され、年代測定を行ったところ340±20年<sup>14</sup>C BPの年代が得られた。本遺構から中世の青花の小片（337）が出土した。口縁部は大きく外反し、外面に文様が施されている。

#### 1号溝状遺構（第47図・第51図338～342）

調査区中央部やや南側にある。VI層上面で検出され、F4からE5グリッドへ向けて低くなる。遺構の規模は、長さが約6.0m、最大幅が1.0m、深さは全体的に0.1mほどで、最深部でも検出面から約25cmと浅い。遺構の埋土は桜島文明軽石を全体的に含む。遺構の底に水が溜まったような跡が複数認められ、凹凸がある。

遺構から出土した遺物は、338～342で、そのうち338・339は白磁である。338は器高が低く、外反する口縁部を持つ。全体的に灰色の不純物が見られる。景德鎮窯系白磁C類皿I-aに分類される。339は底部から直接ラッパ状に開く外反皿で、全体的に薄手である。340～342は陶器である。340は口縁部で、口唇部先端は丸くおさまる。341は壺で、外面

は自然軸、内面は無軸である。342は甕の体部から底部付近で、全体的に器壁が厚い。また、図化はしていないが銅鏡も出土している。図版30を参考されたい。

#### 2号溝状遺構（第48図・第51図342・343）

調査区北東部、H 2 グリッド付近の調査区外から北西部のG 2 グリッドとH 5 グリッドの南南西部へ向かう。途中が削平されており、H 3 区北東で2つに分流している。遺構の規模は、北西部へ向かう遺構の長さが約8.8m、最大幅が約1m、最深部は検出面から約10cm程度、南西部へ向かっている遺構の長さは約21.4m、最大幅は約1.8m、最深部は約20cmである。遺構の埋土には、桜島文明軽石が全体的に含まれる。

遺構に伴う遺物は342・343である。342がその大部分が1号溝状遺構から出土しているが、その一部が2号溝状遺構からも出土している。343は口縁部がやや内湾する碗であり、上田分類E類に相当する。342は1号溝状遺構の遺物と接合した点や埋土がどちらも桜島文明軽石であることなどから1号・2号溝状遺構は同時期の遺構である可能性が高い。

#### 1号道路状遺構（第48図）

調査区の北側F 1～F 2 グリッドに位置し、Ⅲ b 層上面で硬化面が検出された。検出した範囲で長さは約6.1m、最大幅は0.4mである。遺構の高低差は32.1cmであり、北側から南西方向へ上っていき、2号道路状遺構を避けるように延びている。遺構に伴う遺物は出土していない。

#### 2号道路状遺構（第49図）

調査区のF 1 グリッドから南西方向へ硬化面が延び、一度途切れ、再びその南西方向の延長線上に遺構が延びる。1号道路状遺構の南側に位置する。検出した遺構の長さは、北側は約14.8m、途切れているのが約2.6m、南側は約9.2mで、Ⅲ b 層上面から検出された。遺構の高低差は38.2cmである。遺構に伴う遺物は出土しなかった。1号道路状遺構と同じ層から検出され、1号道路状遺構と同様に、桜島文明軽石下以前の中世の前半段階の道路状遺構であると推測される。

#### 3号道路状遺構（第49図・第51図344）

調査区のE 2～C 3 グリッドに南西方向へ上る形状の道路状遺構で、波板状凹凸面が確認された。検出した範囲で長さは20.6mである。E 2 グリッドの本遺構から8.2mの部分まで前半調査区のⅣ層で、2号道路状遺構の南側の部分の直下から検出した。その以外の遺構は、後半調査区のVI層上面でそれぞれ検出した。波板状凹凸面の凹部は、平均10～20cm間隔で連続しており、深さは3～5cm程度である。本遺構の端同士の高低差は43.6cmである。なお、2号道路状遺構と走向が同じであるため、同一の遺構の可能性もある。遺構から出土した遺物の中で図化できるものは、344のみである。

#### 4号道路状遺構（第49図）

調査区北部D 1～D 2 グリッドへ上る形状の硬化面を検出しており、5号道路状遺構と並行してD 1 グリッドから南方向へ延びている。遺構の最下端から約6mの箇所で南西方向へ曲がっているが、5号道路状遺構に切られている。遺構の埋土は、Ⅲ b 層の黒褐色土が中心である。本遺構の端の高低差は82.3cmで、本遺構から出土した遺物はない。

#### 5号道路状遺構（第49図・第51図345）

調査区北部、D 1～D 2 グリッドで硬化面がほぼ一直線に南方向へ延びる形状の遺構である。本遺構の最下点の北端部から約5.4m付近で4号道路状遺構を切っている。本遺構の中で最も低い位置にある北端部は、4号道路状遺構の北端部より約23.6cm低い。本遺構の高低差は約99.2cmで4号道路状遺構よりも高低差が大きい。遺構の埋土は、4号溝状遺構と同様に、Ⅲ b 層の黒褐色土が中心である。この遺構の硬化面上から土師器の壺（345）が出土した。この土師器は、回転糸切りの底部をもち、形状から12世紀末～13世紀前半に時期比定されるため、本遺構の使用時期は中世の前半期である可能性が高い。また、4号道路状遺構との位置関係を考えると、4号溝状遺構→5号溝状遺構の順で構築されたが、時期差はあまり大きないと考えられる。

### 3 包含層等出土遺物（第52図～第54図346～472）

遺構以外から出土した古代～中世の遺物である。そのほとんどが、Ⅱ～Ⅲ層が残存していたE 1～G 1、E 2～G 2、F 3～G 3グリッドから出土した。

346～362は白磁である。346は厚めの口縁部で、釉内に気泡が目立つ。大宰府分類の碗IV-1 bに相当する。347は全体が灰色で腰部が大きく張り、口縁部が外反する碗である。新垣・瀬戸分類で福建・広東系白磁B類碗III類に相当する。348は口縁部がやや内湾する碗である。349・350は口縁部が大きく外反する碗、351は器高の低い皿で、腰部が張っており、森田分類E群に相当する。352～355は器高が低く、口縁部がやや内湾する皿で、森田分類D類に相当する。356は低い高台があり、底部から直接ラッパ状に直線的に開く皿で、高台は内側が斜めに削り出され疊付内端のみ接地する。内底は釉剥ぎされ、新垣・瀬戸分類で福建・広東系白磁のF類皿に相当する。357は皿の底部で、見込みに蛇の目釉剥ぎがある。358は底部下部から高台にかけて無釉で、底部中心部が盛り上がり、口縁部はやや内湾している。359は全体が灰白色の多角壺で、森田分類D群に相当する。360～361は皿の底部で、360は低い高台をもつ。361は逆台形の低い高台を持ち、疊付の外縁を削っている。新垣・瀬戸分類で福建・広東系白磁E類に相当する。

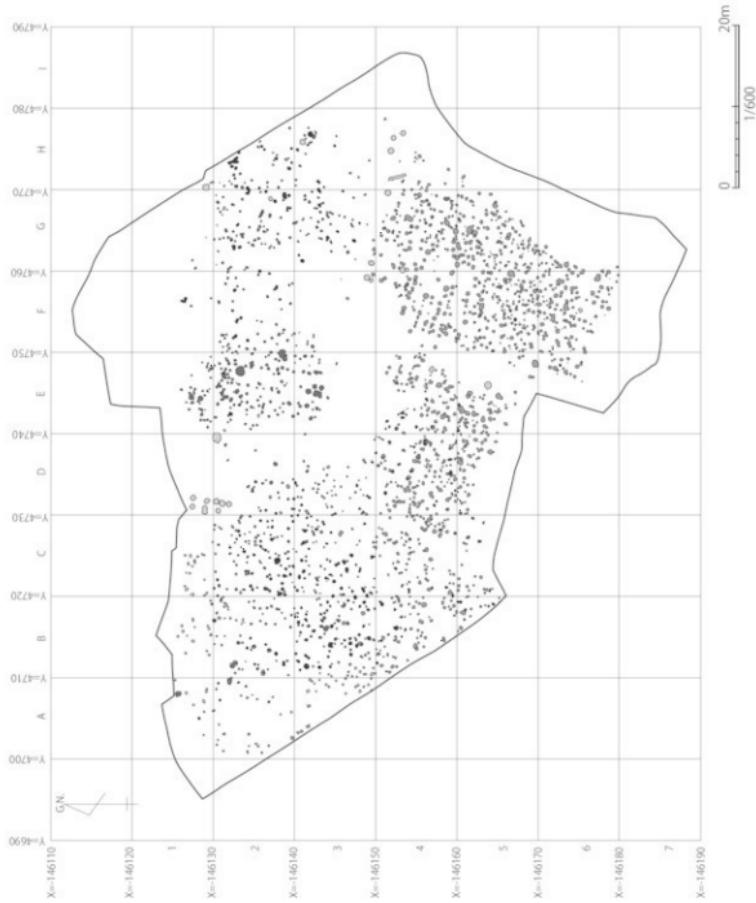
363～404は青磁である。363～370は外面ともに無文で、体部が丸みを持ち、口縁部は外反している。上田分類D類に相当する。371～376は蓮弁文をもつ碗で、371は線刻蓮弁文が施され、上田分類B II類、372は線描きによって剣頭のやや細い蓮弁文の一部かと思われる施文が見られ上田分類B III、373～376は線刻によって細い蓮弁文を施し、上田分類B IV類に相当する。

377～382は外面とも無文で、口縁部は内湾し、上田分類E類に相当する。381の外面とも釉がはじけた後が見られる。383・384は口縁部外面に簡略化した雷文帯を施す。雷文帯の形跡はほとんどなく、線刻で波のように描き、上田分類D類に相当する。385の高台疊付から内面にかけ無釉で、器壁は厚手の造りである。386～390は口縁部がわずかに

外反している皿である。その中で、389は腰部が屈曲しており、その形状から端反皿かと推測される。391は直線的に立ち上がる皿で、392は口縁部の形状から棱花皿の可能性が考えられる。393～397は口縁輪花状を呈し、数条の波状園線が施されている輪花皿である。398は高台内を蛇の目釉剥ぎする。399は見込みに印花文を施され、蛇の目釉剥ぎする。400～402は皿の底部で、402は高台内が露胎である。403は内面と底部は無釉で、体部は直立に近い。404も口縁から体部が直立になり、その形状から火入の可能性も考えられる。

405～421は青花である。405・406は、外面に文様を施し、内外面の口縁部に界線が見られる。407は外面に唐草文、408は見込みに牡丹の花をあしらう文様を施す。409は外面の口縁部に波濤文、体部に草花文を施し、直立に立ち上がっている。小野分類D群に相当する。410は内外面とも明オリーブ灰色で、口縁部に1条の界線を施す。411は口縁部に雷文を施す端反碗で、小野分類の碗B群IXに相当する。412は見込みに草花文、高台内に「大明年造」の文字を施す。413～420は皿である。413は口縁が外反し、外面に唐草文を描く端反皿である。415・416とも口縁部が外反する端反皿である。415の内面には十字花文、416の見込みには、玉取獅子が描かれている。413～416は小野分類皿B群に相当する。417は内面に十字花文、418の底部外面に宝相唐草文を描く。419・420は底部が碁笥底を呈し、小野分類C群に相当する。421は外面に草花文を描く瓶で、内面の一部に釉垂れが見られる。422～424は天目茶碗の口縁部から体部で、釉は概して粘性が高く、厚くかかる。422の口縁部に明瞭な屈曲がついて内湾し、423・424は体部に明瞭な屈曲が見られ、直線的に立ち上がる。425・426は須恵器で、同一個体である。推定底部が4.2cmの小壺で、頸部がすぼまり、内外面に回転ナデを施す。427～443は国産陶器の備前焼である。427は壺の口縁部で、断面長楕円形の玉縁状を呈する。重根分類（2005）によると、427は壺IV A期に相当する。428～431は壺あるいは壺で、428～430は体部付近、431は体部から底部である。432～436は、口縁部の

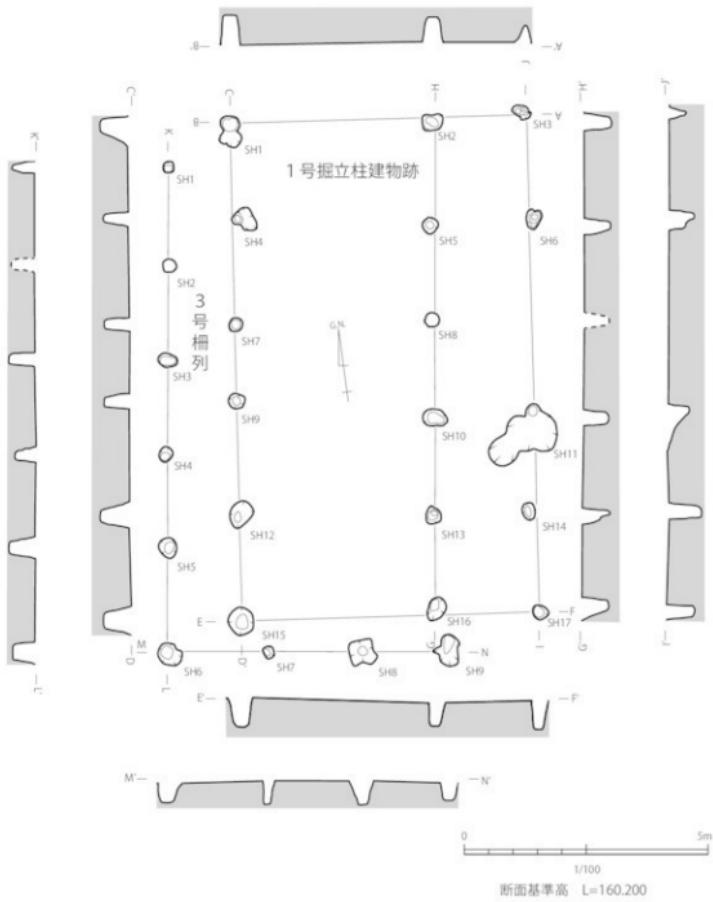
第39図 小穴群遺構分布図



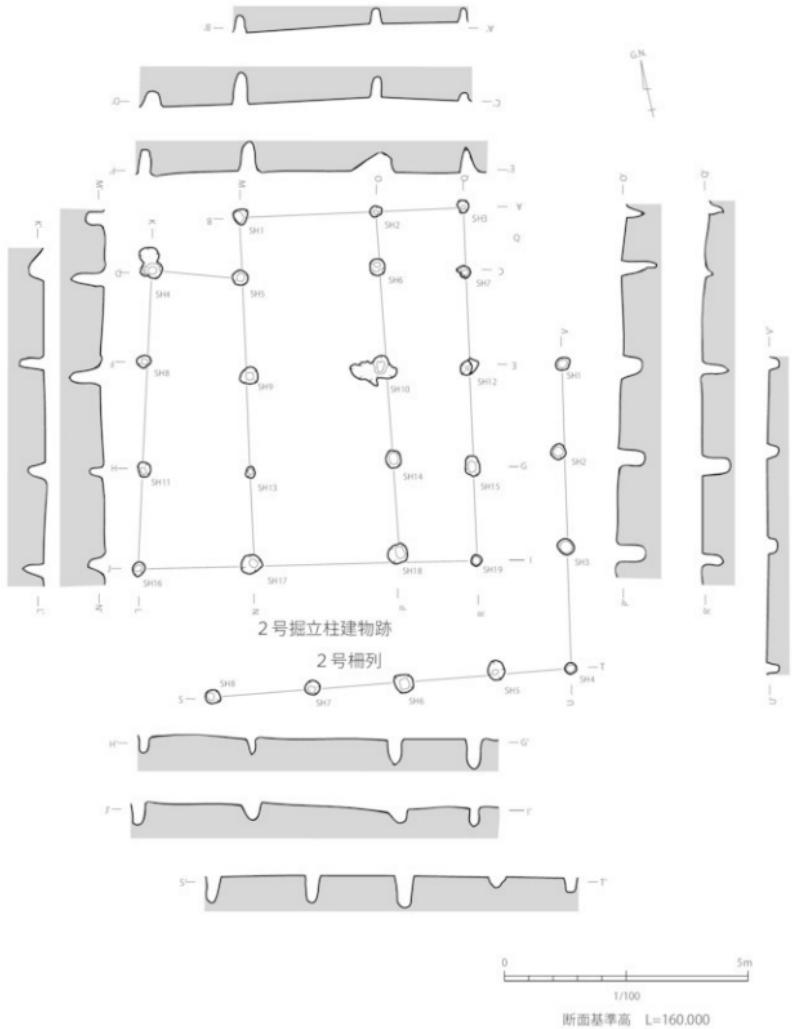


第40図 古代～中世遺構分布図

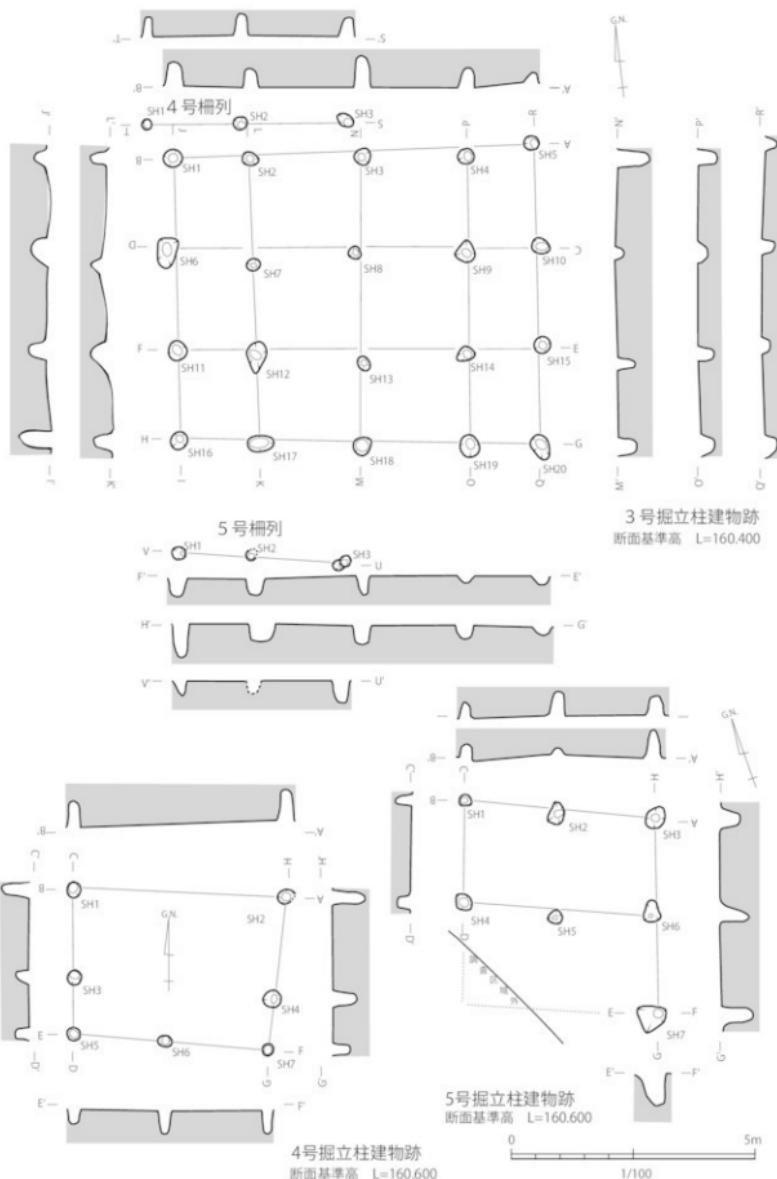
※コンターラインはVI層上面での記録  
(ただし、VI層の削平により一部VI層上面)



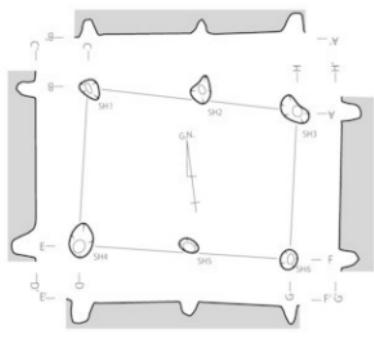
第41図 1号掘立柱建物跡及び3号柵列実測図



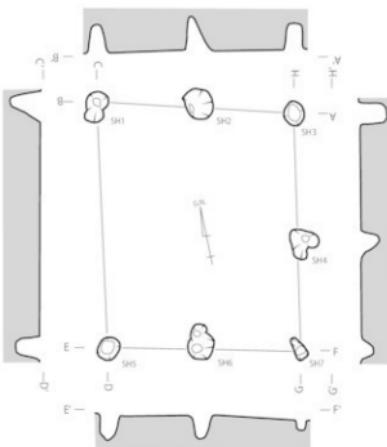
第42図 2号掘立柱建物跡及び2号柵列実測図



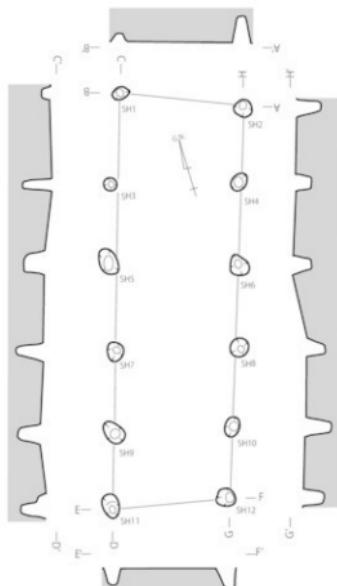
第43図 3号～5号掘立柱建物跡及び4号・5号柵列実測図



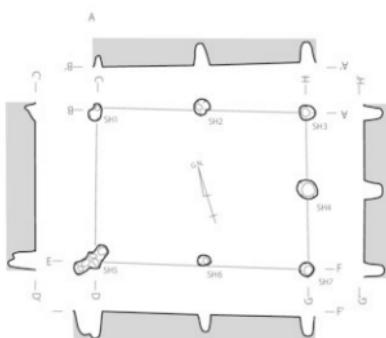
6号掘立柱建物跡  
断面基準高 L=160.600



7号掘立柱建物跡  
断面基準高 L=160.600



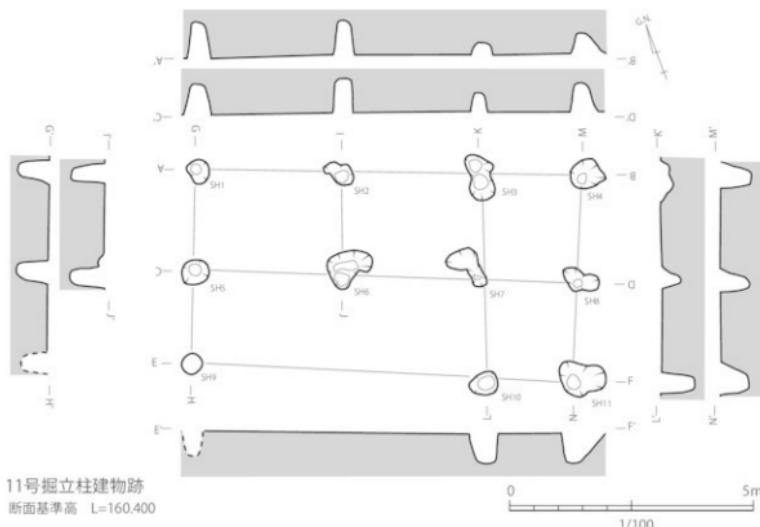
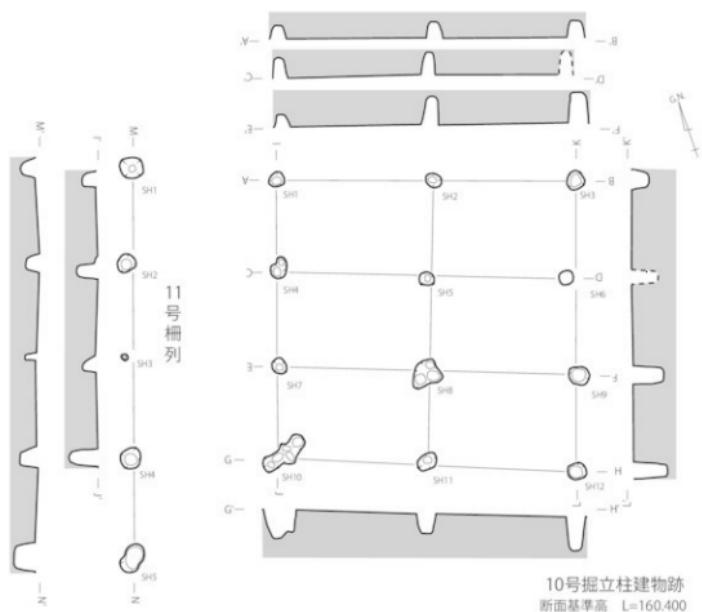
8号掘立柱建物跡  
断面基準高 L=160.400



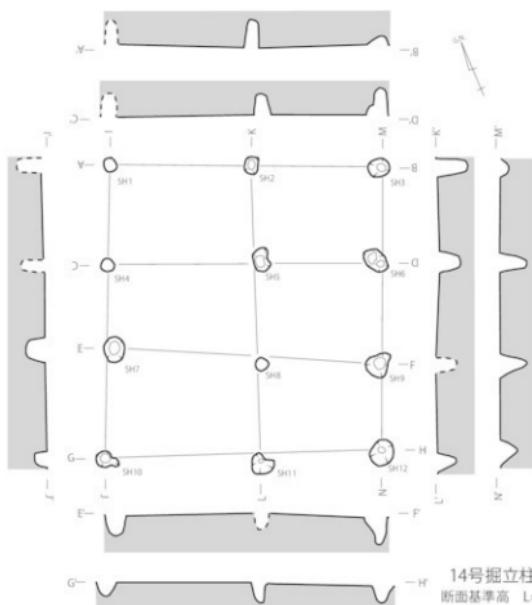
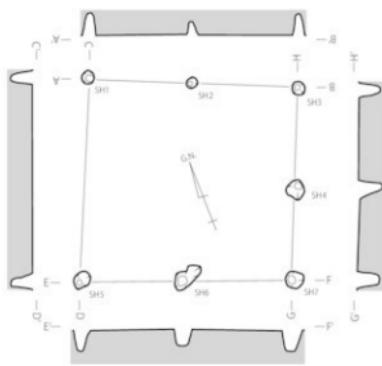
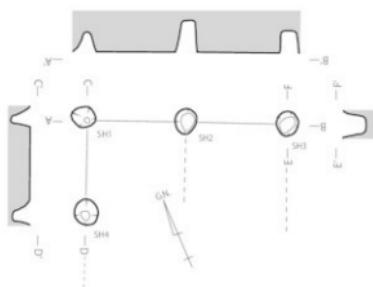
9号掘立柱建物跡  
断面基準高 L=160.400

0 5m  
1/100

第44図 6号～9号掘立柱建物跡実測図

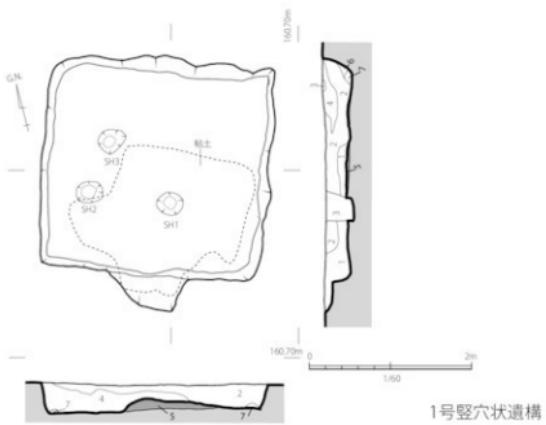


第45図 10号・11号堀立柱建物跡及び11号柵列実測図



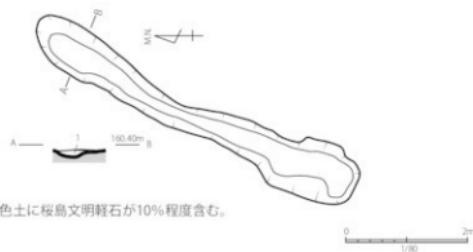
0 5m  
1/100

第46図 12号～14号堀立柱建物跡実測図



1号竪穴状遺構

- 1 Hue7.5YR 4/2 灰黄褐色土に、φ 5mm程度の霧島御池軽石、φ 1～2mmの橙色スコリアを5%程度含む。  
Hue7.5YR 8/1 灰白色土の粘土が2～10cm程の塊で含まれる。
- 2 Hue7.5YR 3/2 黒褐色土に、φ 1～3mm橙色スコリアを20%程度含む。
- 3 耕作土
- 4 Hue7.5YR 4/2 灰黄褐色土と黒褐色土が混じる。
- 5 霧島御池軽石と鬼界アカホヤ火山灰がまじる。(貼床)
- 6 霧島御池軽石
- 7 2とHue7.5YR 8/1 灰白色土が50%ほど混じる。
- 8 Hue10YR 3/2 黒褐色土で、しまりがあまりない。

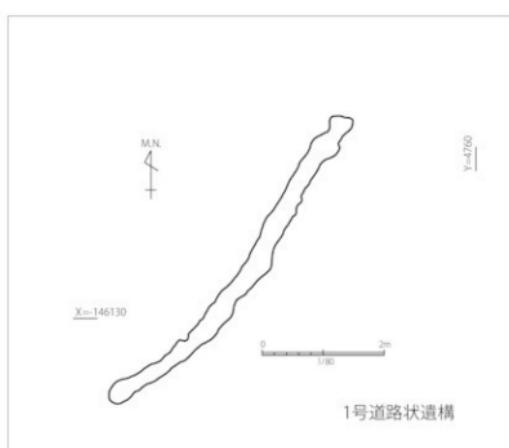


1号溝状遺構

第47図 1号竪穴状遺構及び1号溝状遺構実測図



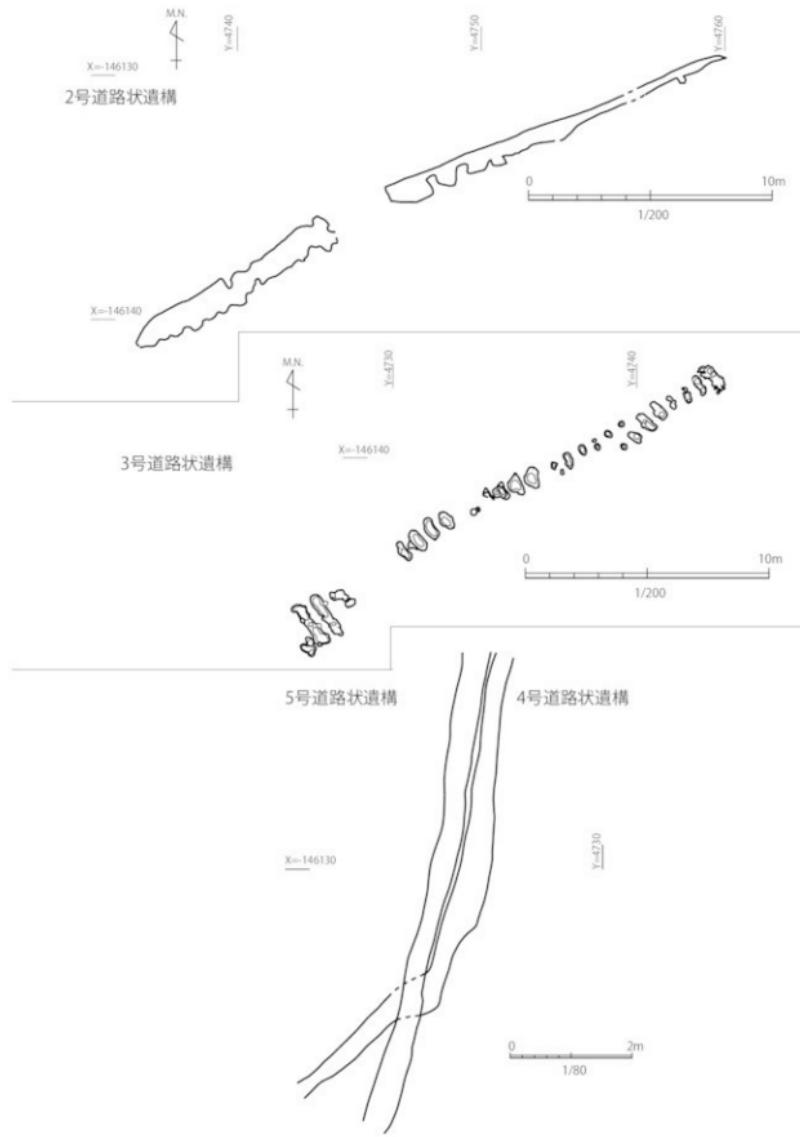
1 Hue10YR6/8 明黄褐色土に桜島文明  
軽石を3%程度含む。



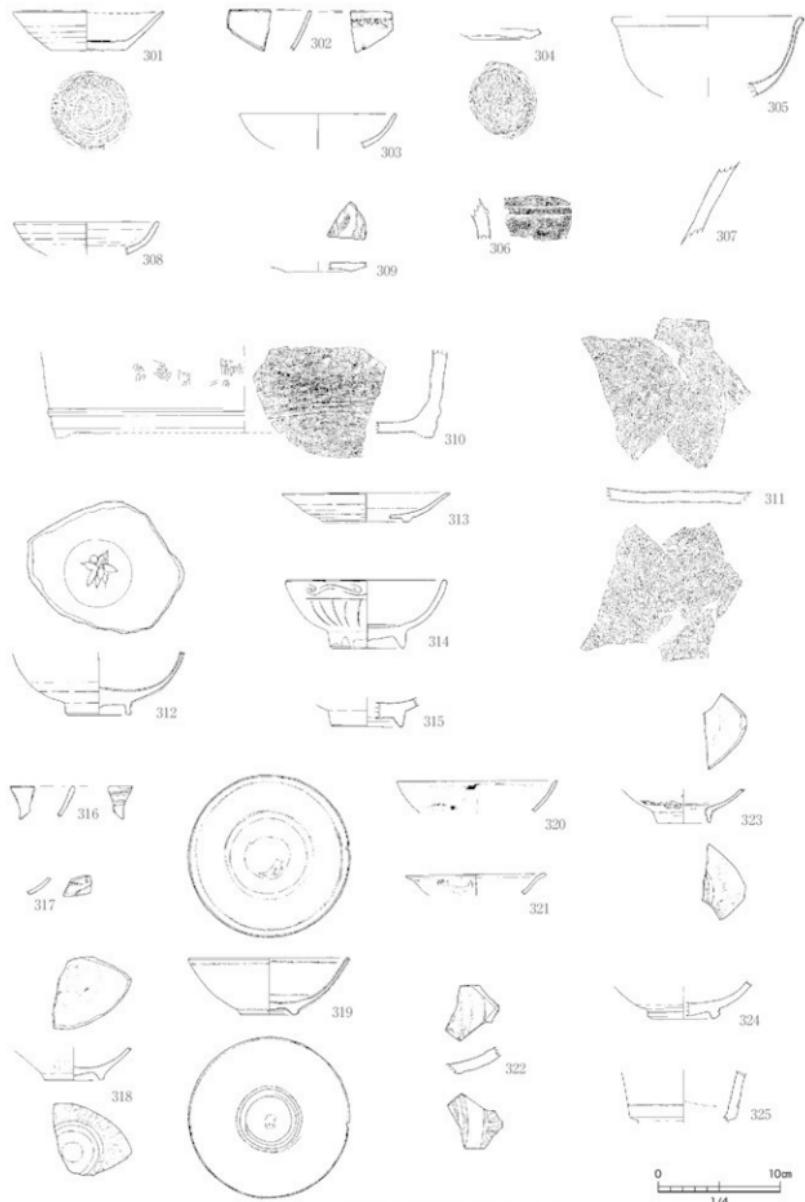
1 Hue10YR6/8 明黄褐色土に桜島文明  
軽石を3%程度含む。



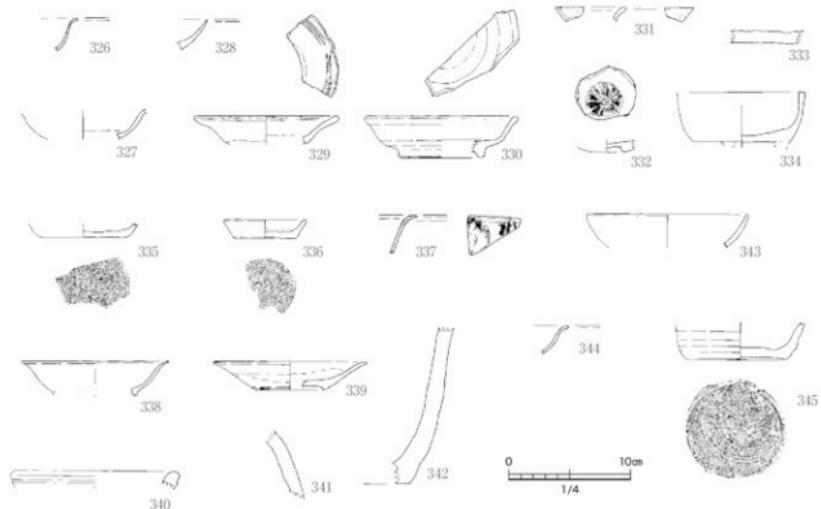
第48図 2号溝状遺構及び1号道路状遺構実測図



第49図 2号～5号道路状遺構実測図



第50図 遺構出土遺物実測図(1)

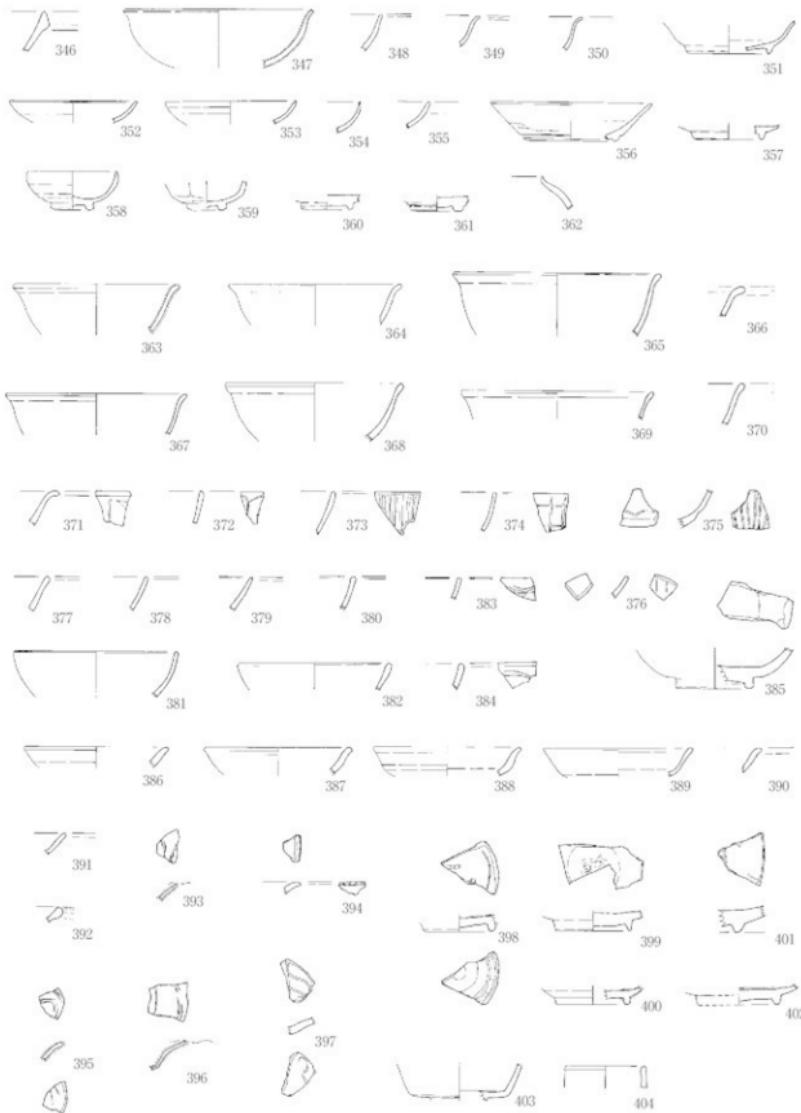


第51図 遺構出土遺物実測図(2)

内側がわずかに上に突出し、外側がつぶれて突出気味になっている。捕鉢IV A - 1に相当する。437は口縁部内側に屈曲部を持ち、その端部を上方へ大きく拡張したもので、これは捕鉢IV B - 2に相当する。438は口縁部がほぼ均一な厚さで上に伸びており、捕鉢IV B - 3に相当する。439・440は胴部で、5条以上の摺り目が見られる。441～443は体部から底部である。色調は441の内面は橙色、442・443は褐色あるいは明赤褐色である。いずれも内面に4条以上の摺り目が見られる。444～465は土師器で、そのほとんどが糸切り底である。444～447の色調が橙色をし、他の土師器と一線を画している。444・445は坏で、回転ナデが施されており、445には短い脚を持つ。446・447は同一個体であるが、残存が悪く器種は不明である。448は底部から口縁部まで直線的に立ち上がる。450の内外面に黒色物が付着し、451は体部で緩やかな屈曲が見られる。452～454は坏の体部から底部で、453・454の底部

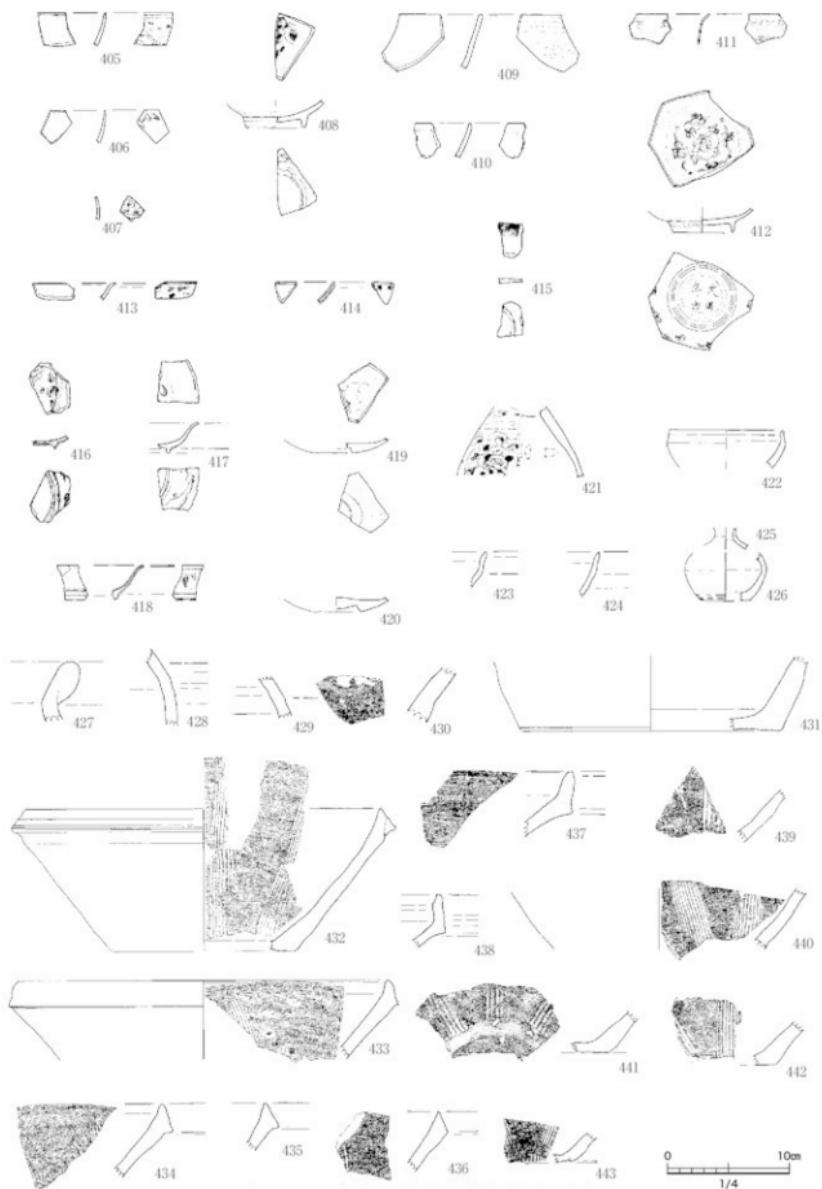
の器壁は薄い。453～455の胎土には、2mm以下の赤褐色粒がわずかに含まれている。

455・456は回転ナデによるロクロ目を顕著に残している。457・458は坏の底部で、回転ナデが施されている。本跡で出土した土師器の坏のうち、唯一458だけがヘラ切り底である。459～465は小皿で、459は底部から口縁部へほぼ直立に立ち上がっている。460～465は体部下部から底部である。462の内面には炭化物、外面には煤が付着している。466は滑石製の石鍋で、口縁部直下に直径6mmの穿孔が見られる。体部よりも口縁部の幅が太く、幾重にも削り出された形跡が見られ、加工痕が不揃いで粗雑さを感じ取られる。467～472は古銭である。470は北宋錢の熙寧元宝（1068年初鑄）、467・469・471・472は明錢の洪武通宝（1368年初鑄）の銘が確認できる。469・470・472の裏には文字はないが、471の背面には「治」の文字が確認できることから、大隅国加治木で製造された私鑄銭であると推測される。

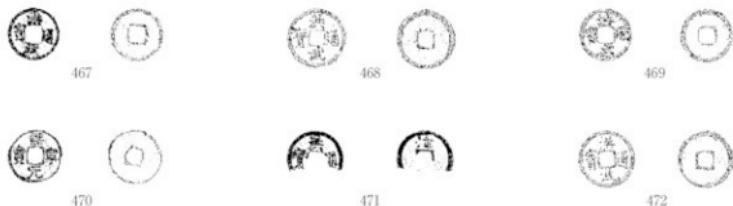
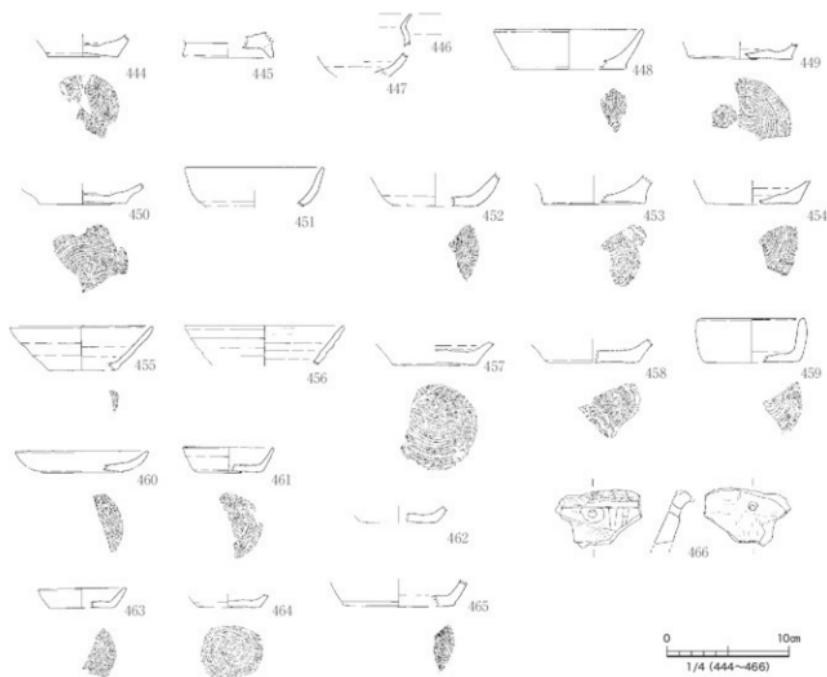


第52図 包含層等出土遺物実測図(1)





第53図 包含層等出土遺物実測図(2)



第54図 包含層等出土遺物実測図(3) 及び古銭拓影

## 第7節 近世の遺構と遺物

### 1 概要（第55図）

出土遺物により近世の遺構と認定できるものとして、掘立柱建物跡5棟、柵列1条、溝状遺構3条がある。

### 2 遺構

#### 掘立柱建物跡（第56図～第58図、第60図473～479）

柱穴から出土した遺物や埋土の状況等から、近世の掘立柱建物跡と認定したものは、5棟（15号～19号掘立柱建物跡）であった。なお、位置や種別、梁行、桁行等、詳細については第17～18表を参考にされたい。

柱穴の埋土は、いずれも桜島文明軽石を20%以上含む褐灰色土であった。建物の種別は、総柱建物が1棟（19号）、側柱建物が4棟（15号～18号）であった。建物の規模については、間数でみると、2間×2間が2棟、2間×5間、1間×2間、1間×3間がそれぞれ1棟ずつであった。身舎面積でみると、最大で49m<sup>2</sup>（16号）で、36m<sup>2</sup>（17号）、23m<sup>2</sup>（15号）、12m<sup>2</sup>（19号）、11m<sup>2</sup>（18号）の順となり、やや小さめの掘立柱建物跡が多い。庇の有無に関しては、15号掘立柱建物跡のみ庇を有しており、身舎の北・東・西側に三面の庇が付いている。主軸については、建物主軸の方向から、2つに大別できる。①群（N-21°～24°-E : 17号・18号・19号）、②群（N-25°～27°-E : 15号・16号）である。

建て替えは、15号～19号掘立柱建物跡の中では見られなかった。しかし、17号掘立柱建物跡については、後述する時期不明の29号掘立柱建物跡と主軸が同一であるが、柱穴の位置関係から建て替えの関係にある。

掘立柱建物跡の柱穴からは、15号掘立柱建物跡のSH 5から磁器の猪口（473）・やりがんな（553）、SH 2から磁器の小壺（474）が出土した。

473は磁器の猪口で、口縁部が外反し内外面ともに無文で、474は磁器の小壺で口縁部が外反している。16号掘立柱建物跡のSH 2から475が出土した。灰白色の口縁部で、外面には文様を描く。18号掘立柱建物跡のSH 5から薩摩焼の鉢である476が出土した。外反のち内方に強く折り返し、縁帯を形

成する口唇部で、上面に貝目痕を有する。19号掘立柱建物跡のSH 2から青白磁の皿（477）、磁器の碗の口縁部から体部（478）、底部（479）が出土した。477は灰白色で、低い器高であると推測される。478と479は、胎土や色調から同一個体であると思われる。

#### 柵列（第57図、第60図480）

柱穴から出土した遺物や埋土の状況等から、近世の柵列と認定したものは、1条（1号柵列）である。この中で、SH 4から低い器高の高台を持つ端反皿（480）が出土した。

#### 小穴（第39図・第60図481～482）

小穴のSH412、SH401から薩摩焼（481・482）が出土した。いずれも自然釉を施す。482の口縁部は大きく外反し、断面「く」の字状を呈する。口縁部上面に貝目を有し、口縁部直下に突帯が1条巡る。八幡遺跡（2005）の苗代川系陶器分類基準の捕鉢2に相当する。

#### 3号溝状遺構（第58図、第61図509）

調査区南部のG 7～G 5グリッドへ下っている遺構で、VI層上面で検出された。遺構の規模は、長さが約13.0mで、最大幅は約2.2m、最深部は検出面から約15cm程度と非常に浅い。遺構の埋土は、褐灰色土に文明軽石がまんべんなく混じる單一層である。遺構から出土した遺物は薩摩焼の捕鉢（509）で、5号溝状遺構から出土したものと接合できた。このことから、3号溝状遺構と5号溝状遺構は同時期の遺構と推測される。

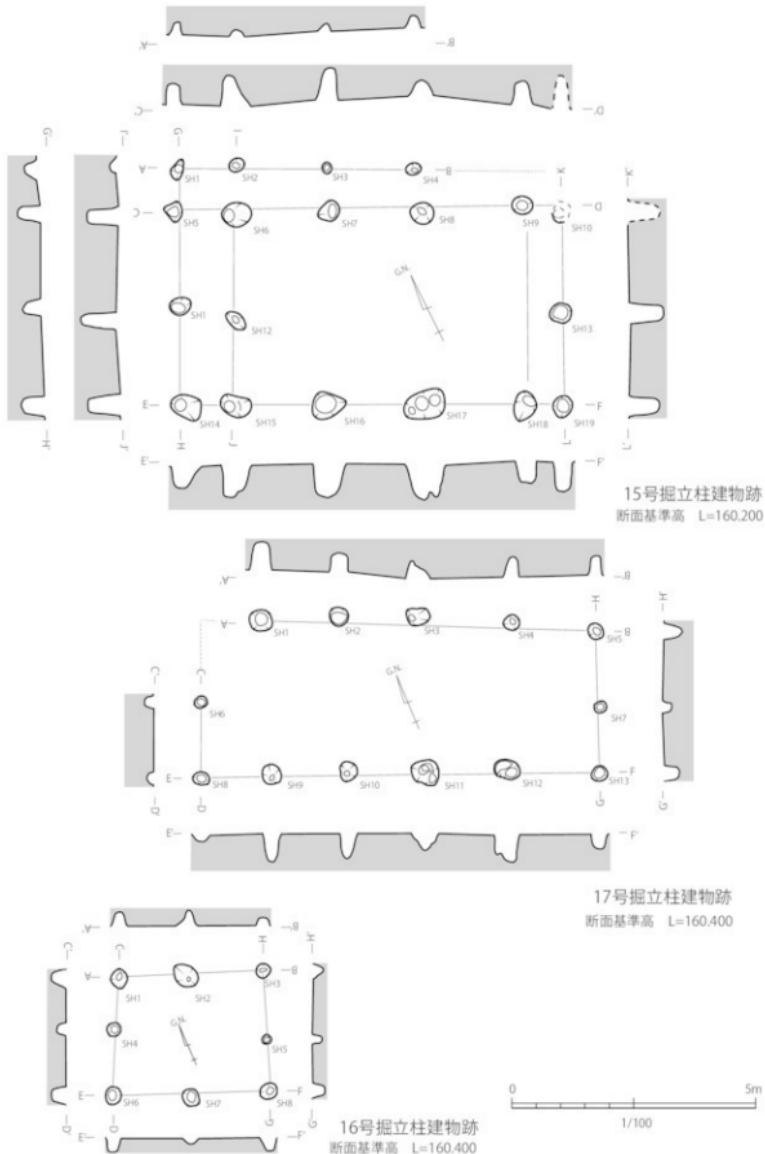
#### 4号溝状遺構（第59図、第61図483～488）

調査区西側のC 3～C 5グリッドで南へ下る遺構であり、VI層上面で検出された。遺構規模は、長さが約16mで、最大幅は約5mである。南にいくにつれ、その幅は広がっている。最深部は、検出面から約22cmと深い溝状遺構である。遺構の埋土は、3号溝状遺構と同様にまんべんなく桜島文明軽石が混じる。

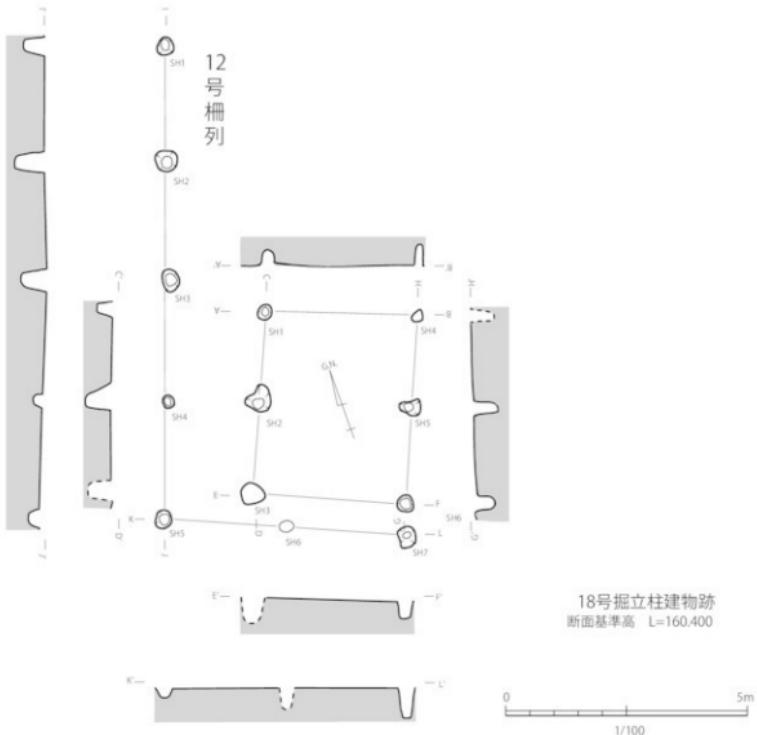
遺構から出土した遺物は、483～488である。483は磁器碗で、低い高台を持つ。484・485は陶器の口縁部で484はわずかに内湾、485はわずかに外反している。486は陶器の甕の胴部で、外面に自然釉

第55図 近世遺構分布図





第56図 15～17号掘立柱建物跡実測図



第57図 18号掘立柱建物跡及び12号柵列実測図

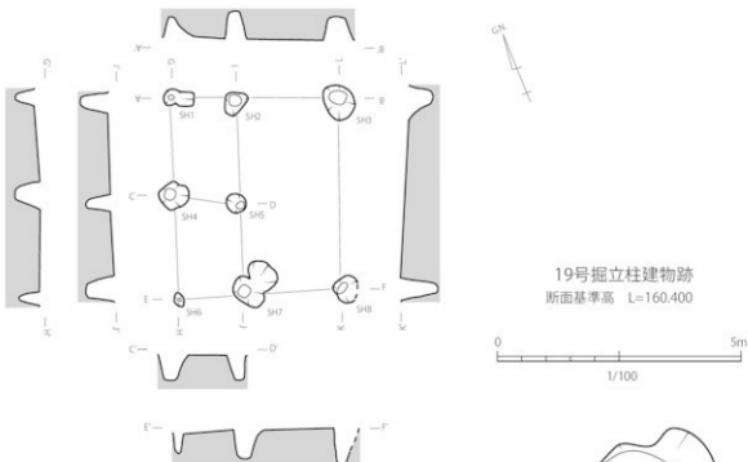
かかる。487は陶器の頸部から胴部で、頸部付近で明瞭な屈曲が見られる。488は長方形の粘板岩製の砥石である。断面は細長い二等辺三角形状を呈し、片面に研磨痕が見られる。

##### 5号溝状遺構（第59図、第61図489～512）

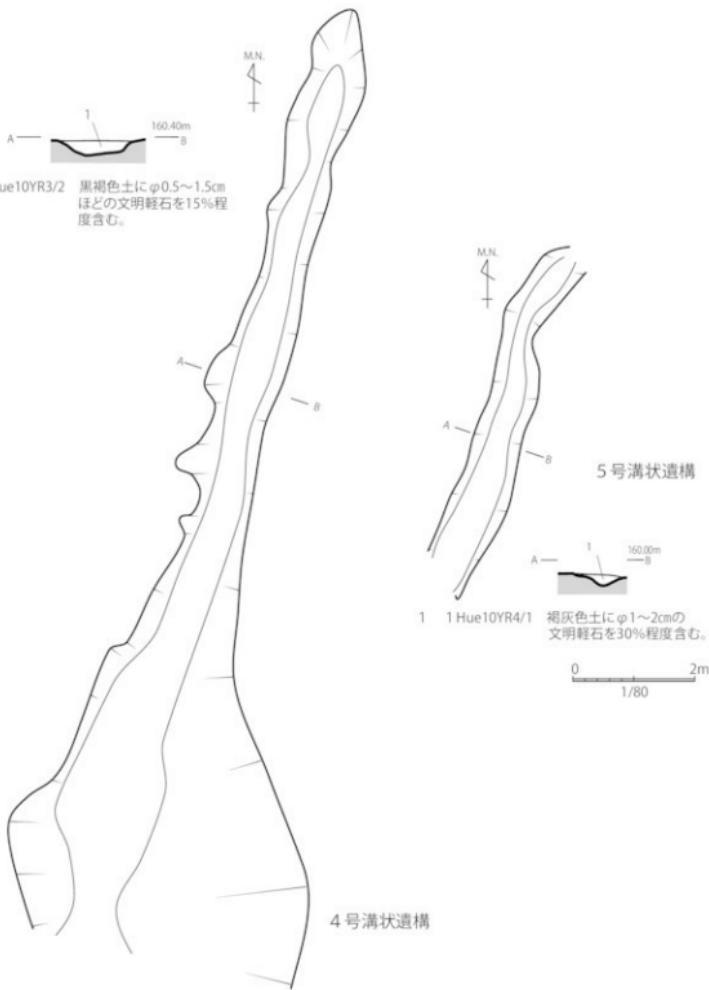
調査区南西部のB4グリッドのVI層上面で検出された。遺構規模は長さが約6m、最大幅は約1m、最深部は検出面から10cmと非常に浅い。

遺構から出土した遺物は、489～512である。489は磁器皿で、490はやや内湾した磁器の碗である。491は染付碗で外面に文様を施す。492～494は染付小壺で、492は高台がある。493と494は同一個体と思われ、高台内に「福」の文字を描く。495は陶器の碗で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎである。高台内

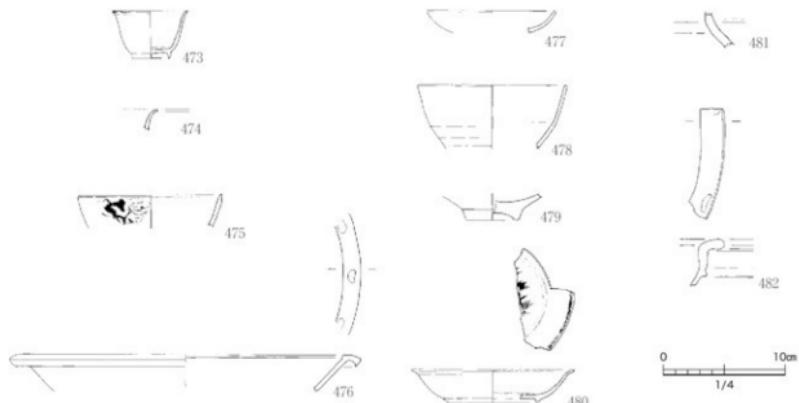
まで施釉され、龍門司系の薩摩焼である。496は高台付近以外に施釉され、外面は緑灰色の碗である。497～499はにぶい黄褐色をしている陶器で、498の見込みには蛇の目釉剥ぎを施す。500は全体的に灰白色で、褐色の斑点が見られる。501は陶器の底部で、内面に自然釉が施される。底部外面の豊付から外側に風車状に切り込みが見られる。502、503は陶器の皿で、口縁部は「く」の字に屈曲して外反する。見込みにケズリを利用した文様がみられる。504は陶器で、体部はふくらみ口縁直下で屈曲して外反している。505は陶器の甕か鉢で、下部は自然釉、上部と内面は無釉である。これは、4号溝状遺構から出土した487と同一個体と思われる。このことから4号溝状遺構と5号溝状遺構は同時期の遺構



第58図 19号掘立柱建物跡及び3号溝状遺構実測図



第59図 4号・5号溝状遺構実測図



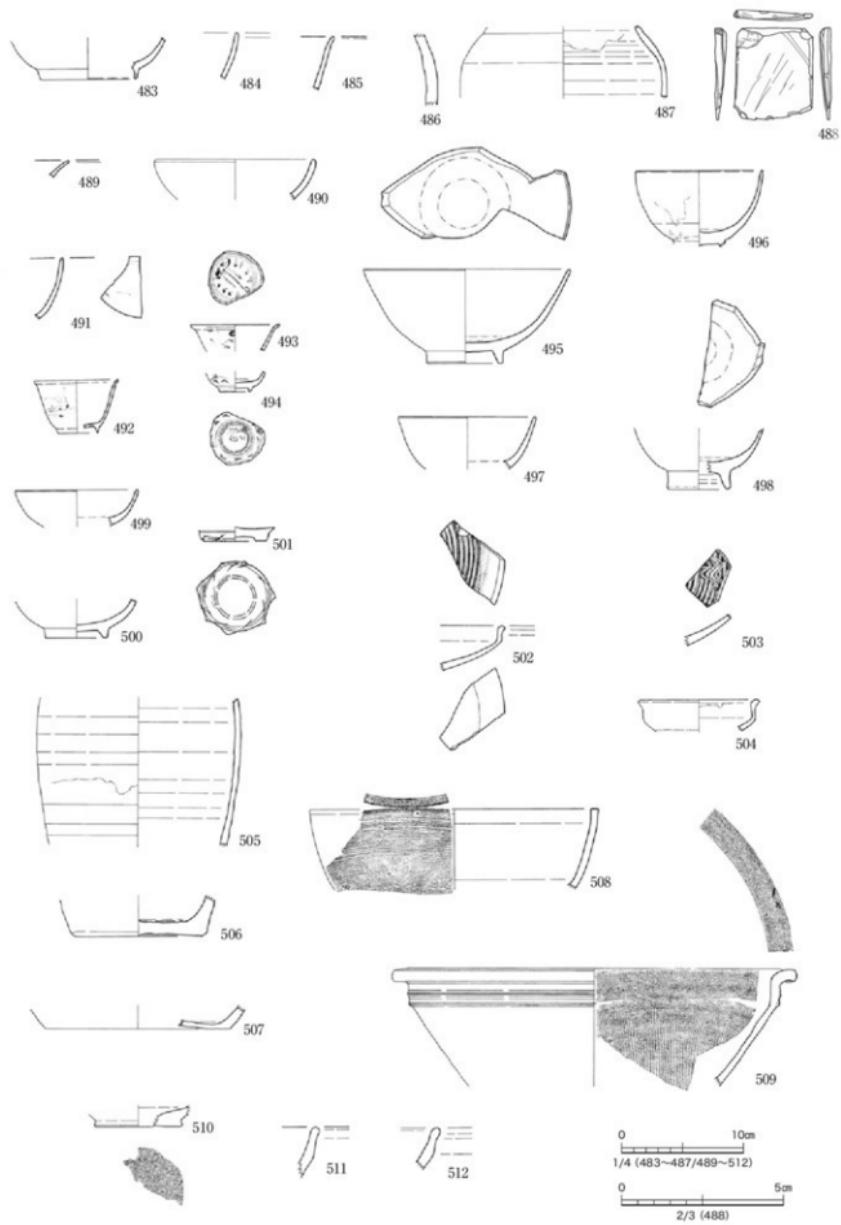
第60図 遺構出土遺物実測図(1)

と推測される。506・507は陶器の底部で、506の内面に回転ナデが施されており、底部外面には煤が付着している。508は陶器の口縁部から体部で、内外面に自然釉がみられる。全体的に暗赤褐色である。509は苗代川系擂鉢で、大きく外反し、断面「く」の字状を呈する。口縁部上面に貝目もみられる。八幡遺跡での分類によると、薩摩焼の苗代川系陶器擂鉢2に相当する。510～512は土師器で、510は壺の底部、511・512はやや内湾した鉢の口縁部である。

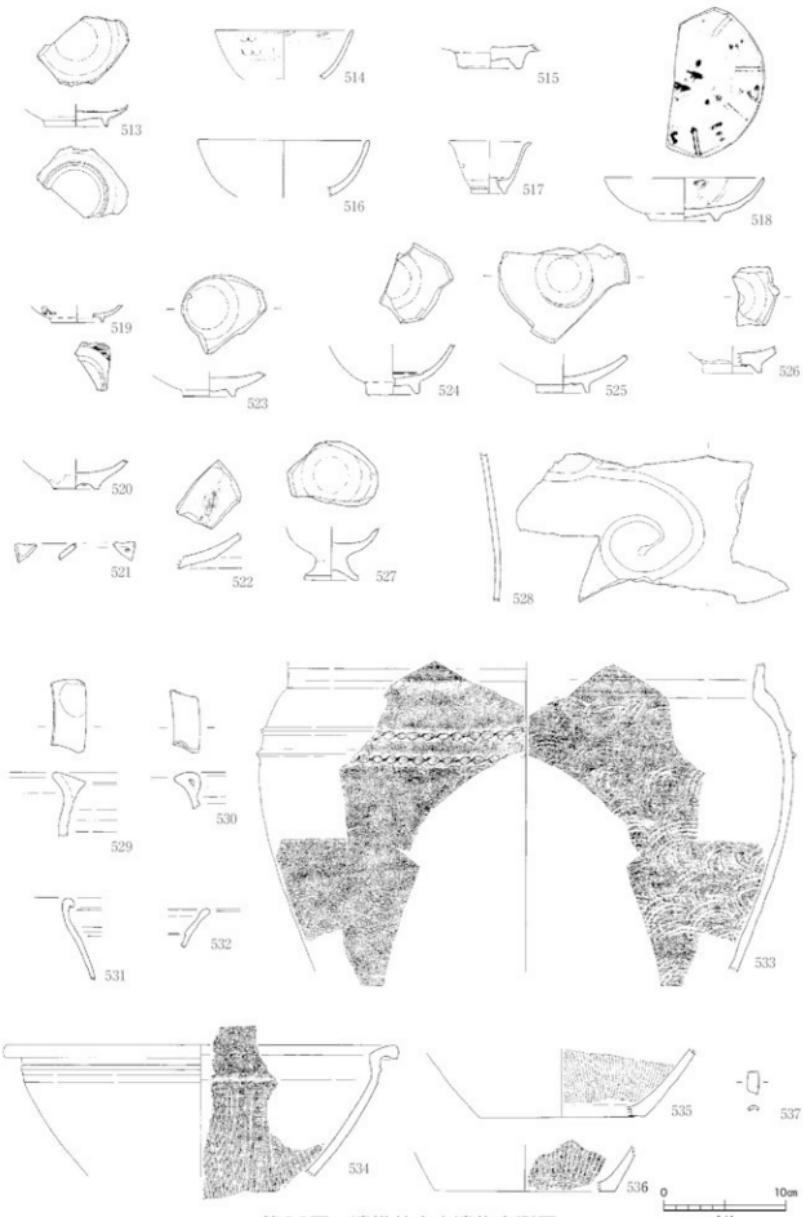
### 3 遺物（第62図513～537）

遺構に伴わない遺物として、513～537の15点を図化した。513は青花の高台がある皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎがある。内外面とも1条の界線がみられる。514は景德鎮窯系白磁で外面に「w」の文様を描く。515は白磁碗の底部で、高台内は露胎である。516は磁器の碗で、全体的に薄い施釉である。517は小壺で、高台外面に3条の界線がみられ、肥前系磁器である。518は肥前系の磁器皿で、内面口縁部から胴部、見込みに文様を描く。これは九州陶磁の福年（2000）によると、肥前系磁器皿のII-2期に相当する。519は磁器皿の胴部から底部で、低い高台をもつ。外面に赤絵具を使用した文様がみられ、九州陶磁福年の色絵・色絵素地の磁器皿II-2に相当する。520は陶器碗で、外面の胴部下

部から高台は露胎、一部釉だれがみられる。521・522は陶器の皿で、ともに鉄絵を描く。521は波状の口縁である。523～526は陶器の碗で、いずれも蛇の目釉剥ぎを施す。527も見込みに蛇の目釉剥ぎがある仏龕器で、523～527は薩摩焼の龍門司系である。528は陶器の体部で、渦巻状の鉄絵を描く。529は陶器壺の口縁部で、内湾の外方に強く折り返ことで、断面は逆L字を呈する。口縁部上面に貝目を有する。この口縁部の形状から、薩摩焼苗代川系陶器の壺2に相当する。530は陶器の口縁部で、その断面中央部に空洞がみられる。口縁部上面に貝目を有し、薩摩焼の苗代川系と思われる。531の口縁部は、内湾のち折り返し、体部上方に2条の凹線を施す。532は陶器擂鉢の口縁部で、口縁内側が肥厚している形状から、九州陶磁の肥前系擂鉢III期に相当する。533は綱状突帯がある陶器の壺で、内面の当て具痕が同心円文である。534は口縁部が大きく外反し、断面「く」の字状を呈する陶器の擂鉢である。外面には口縁直下に突帯が巡り、内面に1単位4条の摺り目がある。この形状から、薩摩焼苗代川系の擂鉢2に相当する。535・536は擂鉢の体部から底部で、内面に摺り目がみられる。537は馬の歯である。全長1.9mmで、形状は円筒形を呈し、色調は明緑灰色である。



第61図 遺構出土遺物実測図 (2)



第62図 遺構外出土遺物実測図

## 第8節 時期不明の遺構と遺物

### 1 概要（第63図）

遺構から時期を特定できる遺物が出土しなかったため、時期不明の遺構としたのが、掘立柱建物跡13棟、柵列6条、土坑6基、溝状遺構3条、竪穴状遺構1基である。

### 2 遺構

#### 掘立柱建物跡（第64図～第66図）

掘立柱建物跡については、小穴から出土した遺物から古代～中世、近世の掘立柱建物跡と認定したが、小穴から遺物が出土しなかった20号～32号掘立柱建物跡の13棟については、時期不明とした。なお、位置や種別、梁行、桁行等、詳細については観察表を参考にされたい。

柱穴の埋土については、いずれも桜島文明軽石を20%以上含む埋土であった。建物の種別については、総柱建物が2棟（25号、32号）、側柱建物が11棟（20号～24号、26～31号）であった。建物の規模については、間数でみると、1間×2間が4棟、1間×3間が2棟、1間×4間が2棟、2間×2間が4棟、2間×3間が1棟であった。次に身舎面積でみると、最大で60m<sup>2</sup>（30号）で、次いで30m<sup>2</sup>（29号）、22m<sup>2</sup>（32号）、20m<sup>2</sup>（31号）の順となり、20m<sup>2</sup>未満は9棟と小さめの掘立柱建物跡が多い。庇の有無については、32号掘立柱建物跡のみ、庇を有しており、身舎の北・西側に庇が2面付いている。主軸については、建物主軸の方向から、大きく2つに大別できる。①群（N-21°～23°-E：17号・18号・19号）、②群（N-26°～27°-E：15号・16号）である。

#### 柵列（第65図、第53図417・第70図539）

近世の遺物が出土した1号柵列以外の2号～12号柵列については、時期不明とした。ただし、2号～5号・11号柵列については、前述した古代～中世の掘立柱建物跡に付帯する柵列である可能性があるが、それ以外の6号～10号・12号柵列については、どれに付帯するかは不明である。

実長でみると、12号柵列の14.96mで最も長く、次いで10号の13.72mである。形状で見ると、2号、3号、12号柵列がL字状で、その他が直線状である。出土遺物は、1号柵列から青花皿（417）、7号柵

列から金床石（539）が出土した。

### 2 竪穴状遺構（第67図）

調査区東側、H 3 グリッドで、3号竪穴建物跡の東側を切っている遺構で、VI層上面で検出された。また、2号溝状遺構がこの遺構の東側を切っている。遺構の規模は、3.4m×2.0mの方形プランで、遺構の長軸は、東に55°ふれている。検出面から床面まで約0.4mで、床面積は約3.6m<sup>2</sup>と本遺跡の竪穴建物跡の中で、最も小さい。埋土は、床面近くの埋土まで全体的に文明降下軽石が含まれている。貼床もあり、その厚さは10cm程度である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

### 5号土坑（第67図）

調査区東側、H 3～I 3 グリッドに位置し、VI層上面から検出された。長軸約3.5m×短軸約3 mのほぼ円形を呈しており、遺構の埋土は、黄褐色土や褐色土、霧島御池軽石など、さまざまな土層が堆積していたが、遺構に伴う遺物は出土しなかった。

### 6号土坑（第68図）

調査区南側、F 6 グリッドの1号竪穴建物跡の南西部に位置し、VI層上面から検出された。長軸約1.2m×短軸約0.84mで、不整椭円形を呈しており、桜島文明軽石を多く含む埋土のビットが3基掘り込まれている。遺構の埋土は、検出面付近の上層は枯りのあるシルト質の黒色土に桜島文明軽石と霧島御池軽石が混じり、その下層に黒色土、にぶい褐色土の順に堆積している。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

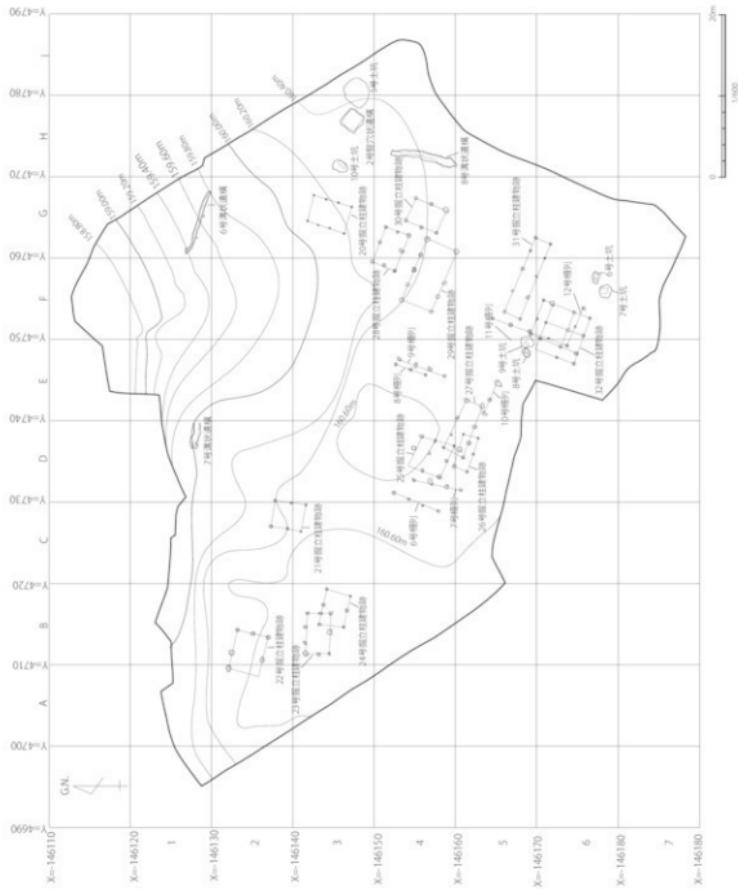
### 7号土坑（第68図）

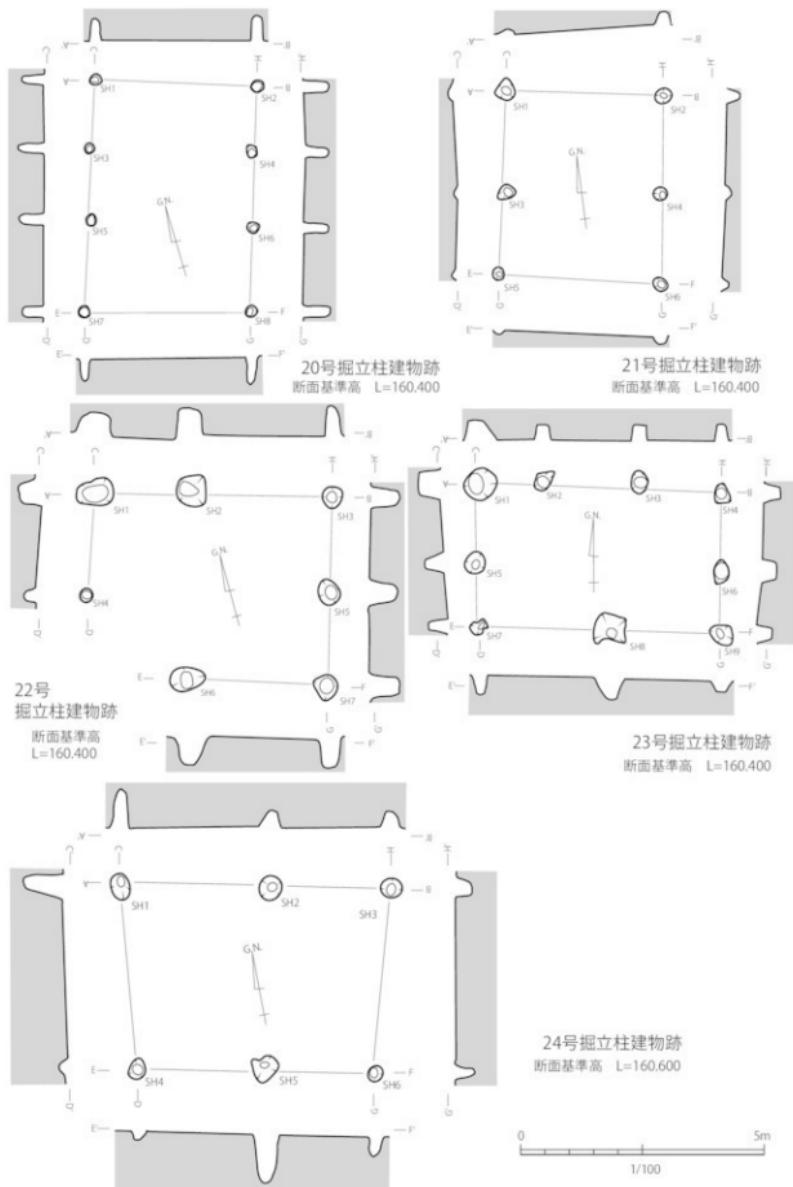
調査区南側、F 6 グリッドの1号竪穴建物跡の南部、6号土坑の南西に位置し、VI層上面から検出された。長軸約1.6m×短軸約1.46m、不整円形を呈しており、桜島文明軽石を多く含む埋土のビットが4基掘り込まれている。遺構の埋土は、黒褐色土に霧島御池軽石と桜島文明軽石が少量混じる單一層である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

### 8号土坑（第68図）

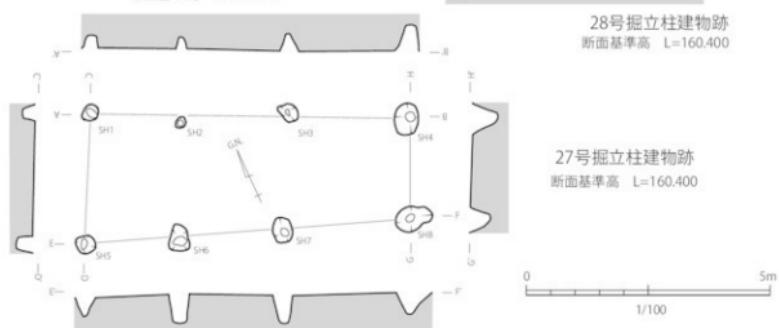
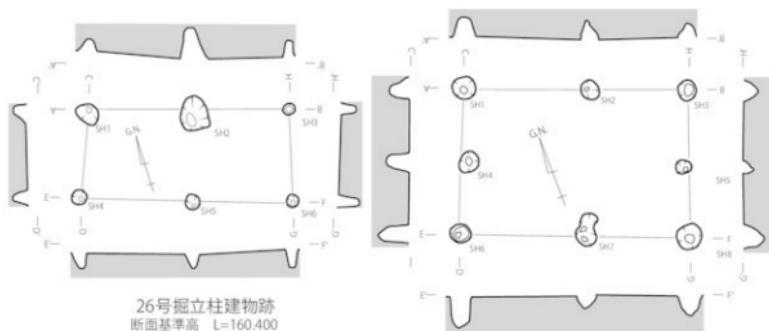
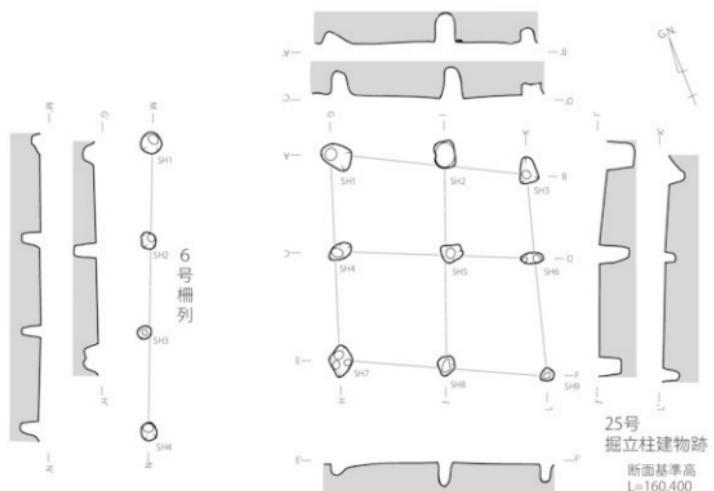
調査区やや南側、E 5 グリッドで、1号竪穴建物跡の北西部に位置し、VI層上面から検出された。長軸約1.16m×短軸約0.82m、椭円形を呈している。

第63図 時期不明遺構分布図

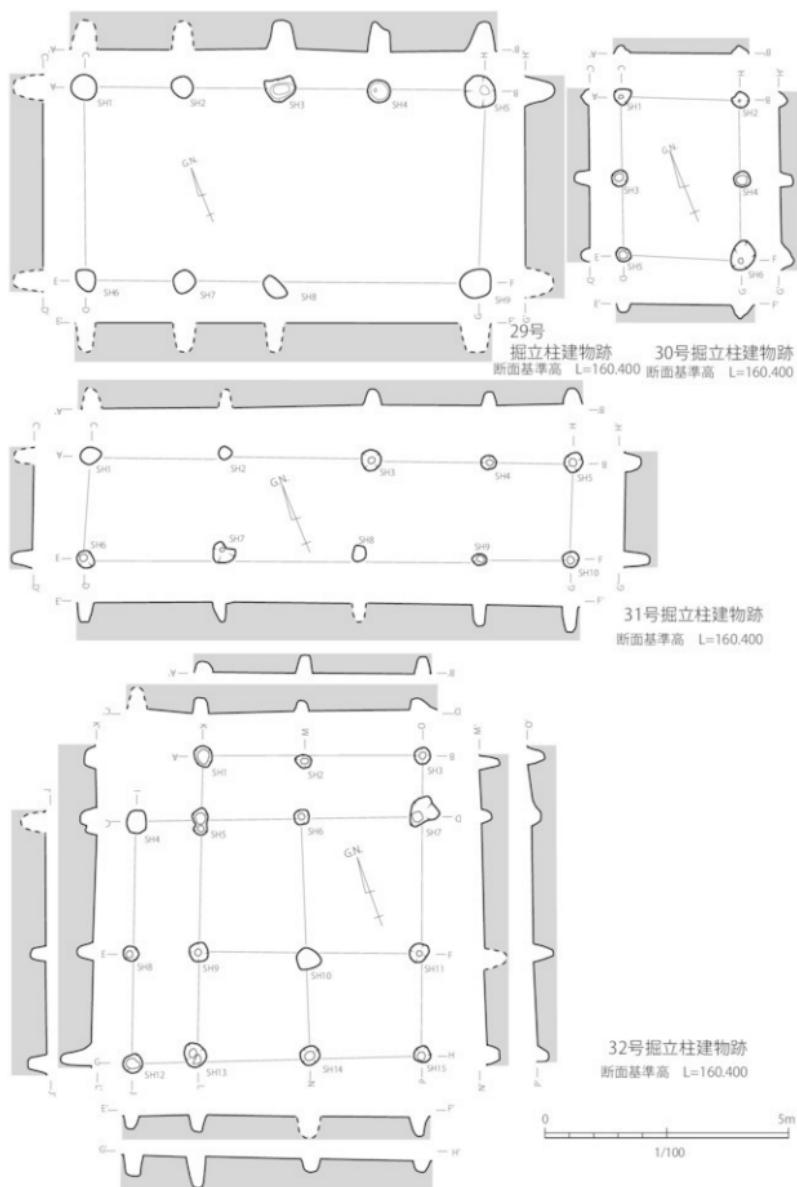




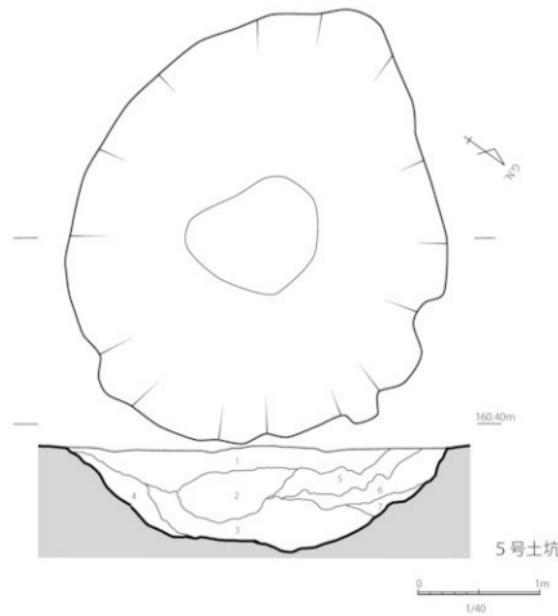
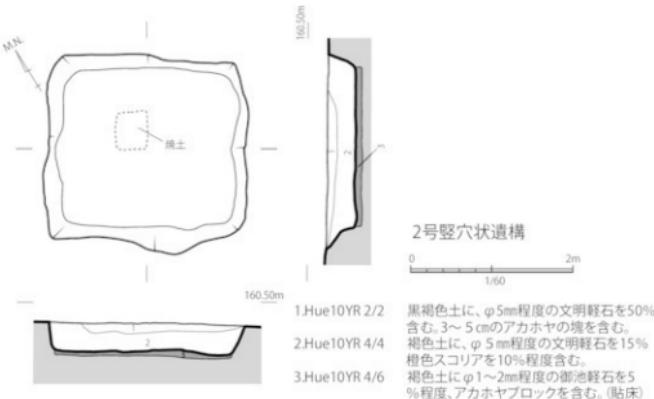
第64図 20号～24号掘立柱建物跡実測図



第65図 25号～27号堀立柱建物跡及び6号柵列実測図

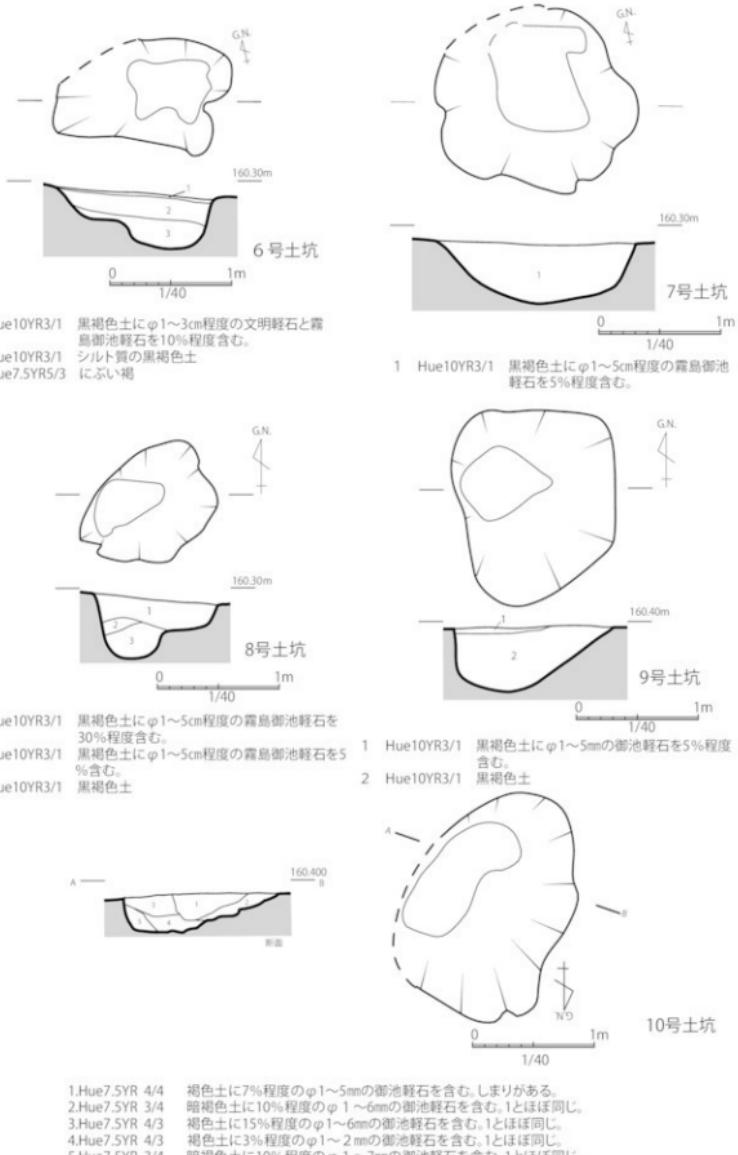


第66図 29号～32号堀立柱建物跡実測図



- 1.Hue10YR 4/3  
2.Hue10YR 4/4  
3.Hue10YR 4/4  
4.Hue2.5YR 5/6  
5.Hue10YR 3/3  
6.Hue2.5Y 3/1  
7.Hue2.5Y 3/1
- 黄褐色土 全体にわずかに黄橙色と灰色バニスを含む。  
褐色土 1と含有物は同じ $\varphi 1\sim 2\text{cm}$ の黄褐色土ブロックを多量に含む。  
黄褐色軽石粒混褐色土 2と似ているが全体的に霧島御池軽石を多量に含む。  
黄褐色軽石粒 霧島御池軽石主体の堆積。  
暗褐色土 1と似ているが、霧島御池軽石をより多く含む。  
黄褐色軽石粒混黒褐色土 全体に多量の霧島御池軽石粒を含む。  
黄褐色軽石粒混黒褐色土 6と似ているが、黒褐色土が $\varphi 1\sim 2\text{cm}$ のブロック状になっている。

第67図 2号竪穴状遺構及び5号土坑実測図



第68図 6号～10号土坑実測図

遺構の埋土は、上層に黒褐色土に霧島御池降下軽石を含み、下層に黒褐色土が堆積している。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

#### 9号土坑（第68図）

調査区やや南側、E 5～F 5グリッドにあり、8号土坑の東部に位置し、VI層上面から検出された。長軸は約1.64m×短軸約1.3m、不整形を呈している。遺構の埋土は、上層に黒褐色土中に霧島御池軽石がわずかに含み、それ以外は黒褐色土が堆積している。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

#### 10号土坑（第68図）

調査区の東側、H 3グリッドにあり、3号堅穴建物跡の北西部に位置する。長軸は約1.9m×短軸約1.2m、梢円形を呈する。遺構の埋土は、褐色土を主としている。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

#### 6号溝状遺構（第69図）

調査区の北東部、G 1グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出した。遺構の規模は、長さが約8.4m、最大幅は約0.4m、最深部は検出面から約40cmである。遺構の埋土は、黒色土に橙色バミスを含むⅢ b層である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

#### 7号溝状遺構（第69図）

調査区北部、D 1グリッドに位置し、VI層上面で検出されたが、この遺構の東側については不明である。遺構の規模は、検出された範囲では、長さが約3.2m、最大幅は約1.6m、最深部は検出面から約15cmと非常に浅い。遺構の底は凹凸が激しく、水が溜まったような跡も見られる。遺構の埋土は、4号溝状遺構と同様に文明降下軽石がまんべんなく含まれている。遺構に伴う遺物は出土しなかった。埋土の状況から、桜島文明軽石降下後の溝状遺構であるが、明確な時期の特定ができなかった。

#### 8号溝状遺構（第69図）

調査区の東側のH 4グリッドに位置し、VI層上面で検出された。遺構の規模は、長さが約8.2m、最大幅が約1.2m、最深部は検出面から8cmほどである。遺構の埋土は、6号溝状遺構と同様に褐灰色土に文明軽石がまんべんなく混じる。遺構に伴う遺物は出土しなかった。埋土の状況から、桜島文明軽石降下後の溝状遺構であるが、明確な時期の特定ができな

かった。

#### 3 遺物（第70図538～554）

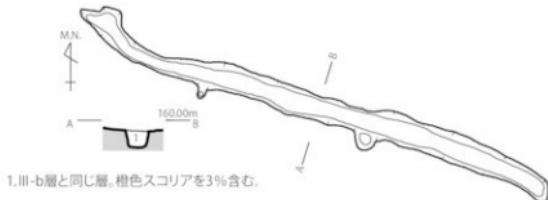
時期不明の遺物として、以下のものがある。538は土製品で、一部焼成痕がみられる。潤離面に蓋の圧痕があり、器表面に工具ナデのような調整を施す。539～550は石器である。539は砂岩製の金床石である。7号櫛列のSH 4から出土した。540は粘板岩製の磨製石鎌の欠損品である。台形状を呈し、中央部には2ヶ所の穿孔がみられる。541は胎土に金雲母を多量に含む花崗岩製の磨石である。542～548は砥石である。542は粘板岩製で、表はほぼ全面と裏の半面に砥面がみられる。543は木目模様のリソイダイ製で、いわゆる天草砥石である。台形状に近く、両面に砥面がみられる。544は三角形状に破損し、表に砥面がみられる砂岩製の砥石である。545～547は粘板岩製である。545は表面と側面に砥面がみられ、546は棒状を呈し、表面のみ砥面がみられる。547は長方形状を呈し、砥面に溝状の研磨痕がみられる。548は砂岩製縛状の砥石である。1面のみ砥面がみられ、少量であるが鉄片が付着している。549は溶結凝灰岩製石臼の上臼である。周縁部から中心軸までを含む全体の約1/3が残存しており、上面には皿面が平坦で、下面には摺面がみられる。側面には把手穴も確認できる。550は砂岩製の茶臼の一部である。551～554は鉄製品である。553はやりがんなで、重量は27.8gと出土している鉄関連製品の中で最も重い。554は釘と思われ、断面は梢円形を呈する。

## 引用・参考文献

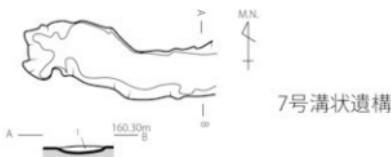
- 相美伊久雄 2000「深浦式系土器の再検討」「人類史研究」第12号
- 新垣力・瀬戸哲也 2005「沖縄における14~16世紀の中国産白磁の再整理」「沖縄埋文研究」3
- 上田秀夫 1982「14~16世紀の青磁の分類について」「貿易陶磁器研究」No.2、日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」「貿易陶磁器研究」No.2日本貿易陶磁研究会
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005「大坪遺跡」鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013「福荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第177集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014「船追遺跡・高吉B遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第180集
- 梶畠光博 2002「考古資料から見た鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」「第四紀研究」
- 梶畠光博 2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」「宮崎考古」第19号
- 重根弘和 2005「中世の備前焼」「備前市歴史民俗資料館紀要7」
- 瀬戸哲也 2013「沖縄における14~15世紀中国陶磁編年の再検討」「中近世土器の基礎研究」25
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲也 2007「沖縄における貿易陶磁器研究~14~16世紀を中心に~」「沖縄埋文研究5」
- 堂込秀人 1997「南九州縄文晚期土器の再検討~入佐式と黒川式の細分~」「鹿児島考古」第31号
- 外山隆之・原田亜希子 2004「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」「宮崎考古」第19号
- 乗岡実 2000「備前焼擂鉢の編年について」「第3回中世備前焼研究会資料」
- 東川忠美 2000「陶器の編年 4. 壺・甕」「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会
- 備前窯詳細分布調査報告書 2013 備前市埋蔵文化財調査報告11
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1995「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ~南部地域北半部の調査~」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000「竹ノ内遺跡」
- 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2003「八幡遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第70集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008「筆無遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012「塙見城跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第210集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2013「平峰遺跡（3次調査）」宮崎県埋蔵文化財センター報告書第219集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2013「宮ヶ迫遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第228集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016「大年遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第237集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016「笠ヶ崎遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第240集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016「中床丸遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第239集
- 吉本正典 2012「黒川式土器の歴史的位置」「九州考古学会」第87号

報告書番号	調査時番号	報告書番号	調査時番号
1号渠下道構	SI 5	5号渠下道構	SE 6
2号渠下道構	SI 7	6号渠下道構	SE 7
3号渠下道構	SI 1	7号渠下道構	SE 8
4号渠下道構	SI 2	8号渠下道構	SE10
5号渠下道構	SI 3	9号渠下道構	SE11
6号渠下道構	SI 4	1号道路状道構	SG 1
1号堅穴建物跡	SA 2	2号道路状道構	SG 2
2号堅穴建物跡	SA 3	3号道路状道構	SG 3
3号堅穴建物跡	SA 4	4号道路状道構	SG 4
4号堅穴建物跡	SA 7	5号道路状道構	SG 5
5号堅穴建物跡	SA 8	1号土坑	SC20
6号堅穴建物跡	SA 9	2号土坑	SC22
7号堅穴建物跡	SA10	3号土坑	SC26
8号堅穴建物跡	SA11	4号土坑	SC18
1号穴状道構	SA 6	5号土坑	SC 3
2号堅穴状道構	SA 5	6号土坑	SC10
1号渠下道構	SE 1	7号土坑	SC11
2号渠下道構	SE 2	8号土坑	SC13
3号渠下道構	SE 3	9号土坑	SC14
4号渠下道構	SE 4		

第1表 遺構番号と調査時番号の対応表



6号溝状遺構



7号溝状遺構

1 Hue10YR3/1 黒褐色土にφ5~10mm程度の文明軽石を10%程度含む。



1 Hue10YR4/3 にぶい黄褐色に30%程度のφ1~7mmの文明軽石と霧島御池軽石を含む。しまりがあり、非常に硬い。

第69図 6号～8号溝状遺構実測図



第70図 その他時期不明遺物及び鉄製品実測図

器種番号	器種	形態	色と状況	器表の調査・文様		内面	内面	断土の状況	型式・その他の
				外面	内面				
1	深鉢	口	灰褐色 表面の茶褐色斑状変化 底面の茶褐色斑状変化 その上に黒褐色斑による変化	器表の方向の茶褐色ナメ 底面の方向の茶褐色ナメ	底面 (30174-2) (30193-3)	底面 (30174-2) (30193-4)	1mm以下の褐色の茶褐色斑、灰褐色、褐色斑を少部分、1mm以下の透明光沢部、黒褐色をわずかに含む。	断土10cm 底面内側刷毛上層	
2	深鉢	脚	灰褐色 表面の茶褐色斑状変化 底面の茶褐色斑状変化 その上に黒褐色斑による変化	器表の方向の茶褐色ナメ 底面の方向の茶褐色ナメ	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色を多部分に含む。		
3	深鉢	脚	灰褐色 器表の茶褐色斑状変化 底面の茶褐色斑状変化	器表の茶褐色ナメ 底面の茶褐色ナメ	底面 (30174-3) (30193-4)	底面 (30174-3) (30193-4)	2mm以上の透明光沢部、黒褐色を少部分含む。2mm以下の透明光沢部、褐色をわずかに含む。		
4	深鉢	脚	灰褐色 器表の茶褐色斑状変化 底面の茶褐色斑状変化	器表の茶褐色ナメ 底面の茶褐色ナメ	底面 (30174-5) (30193-5)	底面 (30174-5) (30193-5)	2mm以上の透明光沢部、黒褐色、褐色斑を少部分含む。2mm以下の透明光沢部をわずかに含む。		
5	深鉢	脚+柄	灰褐色 表面の茶褐色斑状変化 底面の茶褐色斑状変化	器表の茶褐色ナメ 底面の茶褐色ナメ	底面 (30174-7) (30193-7)	底面 (30174-7) (30193-7)	3mm以下の透明光沢部、2mm以下の褐色斑を少部分含む。3mm以下の透明光沢部をわずかに含む。	断土10cm 底面内側刷毛上層	
6	深鉢	脚	灰褐色 有丁目跡の方向の茶褐色斑状変化	器表の方向の茶褐色ナメ 底面の方向の茶褐色ナメ	底面 (30174-4) (30193-4)	底面 (30174-4) (30193-4)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色、褐色斑を少部分含む。	断土10cm 底面内側刷毛上層	
7	深鉢	口	灰褐色 器表の茶褐色斑状変化	器表の茶褐色	底面 (30174-3) (30193-4)	底面 (30174-3) (30193-4)	2mm以上の透明光沢部、1mm以下の褐色斑を少部分含む。1mm以下の透明光沢部含む。4mm以下の透明光沢部を少部分含む。2mm以下の透明光沢部をわずかに含む。	断土10cm 底面内側刷毛上層	
8	深鉢	口	灰褐色 表面の茶褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-8) (30193-8)	底面 (30174-8) (30193-8)	1mm以下の透明光沢部、灰褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 底面内側刷毛上層	
9	深鉢	脚+柄	灰褐色斑状変化 表面によもぎ印	ナメ	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	1mm以下の透明光沢部を含む。黒褐色の透明光沢部をわずかに含む。		
10	深鉢	口	灰褐色 器表の茶褐色斑状変化 底面の茶褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-5) (30193-5)	底面 (30174-5) (30193-5)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 底面内側刷毛上層	
11	深鉢	口	灰褐色 器表の茶褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-7) (30193-7)	底面 (30174-7) (30193-7)	1mm以下の透明光沢部、2~1mmの透明光沢部を少部分含む。	断土10cm 底面内側刷毛上層	
12	深鉢	脚	灰褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-4) (30193-4)	底面 (30174-4) (30193-4)	1mm以下の透明光沢部を含む。1mm以下の透明光沢部をわずかに含む。	下部式	
13	深鉢	脚	ナメ 器表の茶褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-7) (30193-7)	底面 (30174-7) (30193-7)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色、褐色斑を含む。	下部式	
14	深鉢	脚+柄	灰褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-5) (30193-5)	底面 (30174-5) (30193-5)	1mm以下の透明光沢部を含む。2~1mmの透明光沢部を少部分含む。	断土10cm 下部式	
15	深鉢	脚	器表の茶褐色斑状変化 脚の茶褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色を含む。	下部式	
16	深鉢	脚	灰褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-3) (30193-3)	底面 (30174-3) (30193-3)	2mm以下の透明光沢部を多部分に。3mm以下の透明光沢部をわずかに含む。		
17	深鉢	口	多方向の茶褐色斑状変化	ナメ地の方向の茶褐色斑状変化	底面 (30174-4) (30193-4)	底面 (30174-4) (30193-4)	1mm以下の透明光沢部を多部分に。2mm以下の透明光沢部を含む。	ナメ地式	
18	深鉢	口	多方向の茶褐色斑状変化	ナメ地の方向の茶褐色斑状変化	底面 (30174-5) (30193-5)	底面 (30174-5) (30193-5)	1mm以下の透明光沢部を多部分に。2mm以下の透明光沢部を含む。	ナメ地式	
19	深鉢	口	多方向の茶褐色斑状変化	ナメ地の方向の茶褐色斑状変化	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	1mm以下の透明光沢部を多部分に。2mm以下の透明光沢部を含む。	ナメ地式	
20	深鉢	脚	多方向の茶褐色斑状変化+ナメ	器表の茶褐色斑状変化+ナメ	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-7) (30193-7)	黒褐色と茶褐色、黒褐色斑を含む。1mm以下の透明光沢部を含む。	断土10cm 下部式	
21	深鉢	脚	6号青石	ナメ地化斑状変化	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	6号青石の茶褐色斑状変化を含む。1mm以下の透明光沢部を含む。		
22	深鉢	脚	6号青石 茶褐色 縞模様	器表の茶褐色斑状変化 底面の茶褐色斑状変化 縞模様の茶褐色斑状変化	底面 (30174-3) (30193-3) (3-4)	底面 (30174-3) (30193-3) (3-4)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色を含む。	断土10cm 下部式	
23	深鉢	口+脚	縞模様の茶褐色斑状変化 器表の茶褐色斑状変化 脚の茶褐色斑状変化でない複数点が2点	器表の茶褐色斑状変化+ナメ	底面 (30174-3) (30193-3)	底面 (30174-3) (30193-3)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 下部式	
24	深鉢	脚	6号青石 茶褐色斑状変化ナメ 脚の茶褐色斑状変化	器表の茶褐色斑状変化 脚の茶褐色斑状変化	底面 (30174-3) (30193-3)	底面 (30174-3) (30193-3)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 下部式	
25	深鉢	脚+柄	茶褐色斑状変化	器表の茶褐色斑状変化	底面 (30174-2) (30193-2)	底面 (30174-2) (30193-2)	1mm以下の透明光沢部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 下部式	
26	深鉢	脚	茶褐色斑状変化	器表の茶褐色斑状変化	底面 (30174-3) (30193-3)	底面 (30174-3) (30193-3)	1mm以下の透明光沶部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 下部式	
27	深鉢	脚	茶褐色斑状変化 脚の茶褐色斑状変化+ナメ 脚の茶褐色斑状変化+茶褐色斑状変化の茶褐色斑状変化	器表の茶褐色斑状変化	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	1mm以下の透明光沶部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 下部式	
28	深鉢	口+脚	ナメ 器表の茶褐色斑状変化+ナメ 脚の茶褐色斑状変化、脚から離れた茶褐色斑状変化 脚の茶褐色斑状変化	器表の茶褐色斑状変化	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	1mm以下の透明光沶部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 下部式	
29	深鉢	口	6号青石 茶褐色斑状変化	ナメ	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	1mm以下の透明光沶部、黒褐色、褐色斑を含む。	断土10cm 下部式	
30	深鉢	脚	6号青石 茶褐色斑状変化	ナメ地の方向の茶褐色斑状変化	底面 (30174-6) (30193-6)	底面 (30174-6) (30193-6)	黒褐色と茶褐色の透明光沶部を含む。	断土10cm 下部式	

第2表 土器観察表1



第4表 土器觀察表3

番号 番号	基盤	部品	表土剖面 H-G-L-H	器表調査-文様		色調 外面 内面	地質 外面 内面	器表の特徴	型式-その他の 特徴
				外面	内面				
202	黒	灰	I型堅物	器表の向うのナガ ナガ	ナガ	灰青-暗 (SYT 7-4)	灰青-暗 (SYT 7-4)	器表にナガの模様が複数個を有する。5mm の幅のナガ、表面は光沢を有する。1mm以下の厚 さの白色の陶衣を有する。	素面底板(2.2) 丸底平-1.2 丸底平-2.2 筒状底-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
302	黒	白-黒	I型堅物	斜め-縦方向のナガ 一面に横柱状による斜め-縦方向のナガ	横方向のナガ+ヒダ	暗 (SYT 6-4)	灰青-暗 (SYT 6-4)	2mm以下の横柱、横斜柱、斜め色絞り、灰の色 絞り、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 1.2 丸底平-2.2 筒状底-2.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
303	黒	白-黒	I型堅物	工具による斜め方向のナガ	工具による斜め方向のナガ	灰青-暗 (SYT 7-4)	淡青灰 (SYT 8-6)	工具による斜め方向のナガ	素面底板(2.2) 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
304	黒	白-黒	I型堅物	工具による斜め方向のナガ	工具による斜め方向のナガ	灰青-暗 (SYT 7-4)	淡青灰 (SYT 8-6)	工具による斜め方向のナガ	素面底板(2.2) 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
305	黒	白-黒	I型堅物	横柱のナガ+ヒダ	横柱のナガ	暗 (SYT 6-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱、横斜柱、斜め色絞り、灰の色 絞り、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
306	黒	白-黒	I型堅物	斜め-横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2mm以下の横柱、横斜柱、斜め色絞り、灰の色 絞り、透明光沢を有する。	素面底板(2.2) 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
307	高岡	白-黒	I型堅物	斜め-横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	淡青灰 (SYT 8-6)	2-3mmの横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	素面底板(2.2) 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
308	高岡	白-黒	I型堅物	ナガ-横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 8-6)	2-3mmの横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
309	高岡	白-黒	I型堅物	工具のナガ+ヒダ	ナガ	暗 (SYT 7-4)	淡青灰 (SYT 8-6)	1mm以下の横柱、横斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
310	高岡	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2mm以下の横柱群、3mm以下の横柱群、 斜め柱+ヒダからなる。2mm以下の横柱による斜め光 沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
311	高岡	白-黒	I型堅物	ナガ-横柱による斜め-横柱	ナガ	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2-3mmの横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
312	高岡	白-黒	I型堅物	ナガ-横柱による斜め-横柱	ナガ	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2-3mmの横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
313	高岡	白-黒	I型堅物	ナガ-横柱による斜め-横柱	ナガ	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
314	高岡	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
315	高岡	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
316	高岡	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
317	高岡	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
318	小野人 (新石器)	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
319	小野人 (新石器)	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
320	小野人 (新石器)	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
321	小野人 (新石器)	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
322	小野人 (新石器)	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
323	小野人 (新石器)	白-黒	I型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	1mm以下の横柱群、平行斜柱、斜め色絞り、1mm以下の 横柱、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
324	黒	白-黒	2型堅物	ナガ-横柱による斜め-横柱	ナガ	ナガ (SYT 7-4)	淡青灰 (SYT 7-4)	2mm以下の横柱群、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
325	黒	白-黒	2型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2mm以下の横柱群、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
326	黒	白-黒	2型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2mm以下の横柱群、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
327	黒	白-黒	2型堅物	横柱による斜め-横柱	横柱による斜め-横柱	暗 (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2mm以下の横柱群、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。
328	黒	白-黒	2型堅物	ナガ-横柱による斜め-横柱	ナガ	ナガ (SYT 7-4)	暗 (SYT 7-4)	2mm以下の横柱群、透明光沢を有する。	丸底平-2.2 丸底平-1.2 筒状底-2.2 表面に入り組 みがある。

第5表 土器観察表4

器種 名	器種 形	目次 番号	器種調査・文書		内面 内面	内面 内面	器の構造	型式-その他の 倉
			外面	内面				
120 磁 11-11 2号型丸 縦横割合變文	ヨコナガ 縦横割合變文	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-7)	1mm以下の透明色、白色光沢、黒鉛筆で墨跡を含む。	現存率-1-8(1個) 表面に墨跡有り。		
130 磁 11-10 2号型丸 縦横割合變文 ナガのナガのナガ	縦横割合のナガ 多分のナガナガ 縦横割合のナガナガ	縦横割合のナガ 多分のナガナガ 縦横割合のナガナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-7)	2mm以下の透明色、白色光沢、黒鉛筆で墨跡を含む。	現存率-1-5(1個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
131 高周 磁 2号型丸 縦横割合	ヨコナガ 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-7)	1mm以下の透明色、薄透明白、白色光沢、黒鉛筆で墨跡を含む。	現存率-1-8(1個) 表面に墨跡有り。		
132 高周 磁 2号型丸 縦横割合のナガ ナガのナガ 縦横割合のナガ	縦横割合のナガ ナガのナガ 縦横割合のナガ	縦横割合のナガ ナガのナガ 縦横割合のナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-7)	1mm以下の透明色、薄透明白、白色光沢、白色光沢を多く含み、1mm以下の透明色を含む。	現存率-1-8(1個) 表面に墨跡有り。		
133 高周 磁 2号型丸 縦横割合のナガ ナガのナガ	縦横割合のナガ ナガのナガ	縦横割合のナガ ナガのナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-7)	1mm以下の透明色、薄透明白、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-2(2個) 表面に墨跡有り。		
134 高周 磁 2号型丸 縦横割合のナガ ナガのナガ	縦横割合のナガ ナガのナガ	縦横割合のナガ ナガのナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-7)	1mm以下の透明色、薄透明白、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-5(2個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
135 高周 磁 2号型丸 丁字な縦方向のナガ	縦横割合のナガ 縦横割合のナガ	縦横割合のナガ ナガのナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-7)	縦横割合のナガを含み、1mm以下の透明色、白色光沢を多く含む。	現存率-1-3(3個) 表面に墨跡有り。		
136 高周 磁 2号型丸 工具ナガ	工具ナガ	工具ナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明色、薄透明白、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-8(8個) 表面に墨跡有り。		
137 高周 磁-10 2号型丸 ナガのナガナガ	ヨコナガ 工具ナガナガ	ナガ 縦横割合のナガ ナガのナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明色、白色光沢、白色光沢を少量含む。-5 mm以下の透明色をわずかに含む。	現存率-1-2(2個)		
138 高周 磁-10 2号型丸 縦横割合のナガナガ	縦横割合のナガナガ	縦横割合のナガナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	縦横割合のナガを含み、1mm以下の透明色、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-5(5個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
139 磁 11-10 2号型丸 ナガのナガ	ヨコナガ 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明色、薄透明白、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-4(4個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
140 小型土 器 11 2号型丸 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガのナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明色、薄透明白、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-10(10個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
141 小型土 器 11 2号型丸 縦横割合のナガ	ヨコナガ 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガ-100	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明光沢をわずかに含む。	現存率-1-1(1個)		
142 小型土 器 11-10 2号型丸 縦横割合のナガ	縦横割合のナガ	縦横割合のナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明光沢、薄透明白、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-2(2個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
143 小型土 器 11-10 2号型丸 縦横割合のナガ	縦横割合のナガ	縦横割合のナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明光沢を含み、1mm以下の透明色、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-2-2(2個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
144 小型土 器 11 2号型丸 丁字なナガ	縦横割合のナガ	縦横割合のナガ	縦 (3316.7-6)	縦 (3316.7-6)	1mm以下の透明光沢、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-1(1個)		
145 小型土 器 11 2号型丸 丁字なナガ	丁字なナガ	丁字なナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-6)	1mm以下の透明光沢を含み、1mm以下の透明色、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-1(1個)		
146 小型土 器 11 2号型丸 丁字なナガ	工具ナガ	工具ナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-6)	1mm以下の透明光沢、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-2(2個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
147 小型土 器 11-10 2号型丸 ヨコナガ	ヨコナガ	ナガ	横 (3316.7-6)	横 (3316.6-1)	2mm以下の透明色、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-2-3(3個) 1.0mm 表面に墨跡有り。		
148 磁 11-10 2号型丸 縦横割合のナガナ ナガのナガ	縦横割合のナガナ ナガのナガ	縦横割合のナガナ ナガのナガ	縦 (3316.6-4)	縦 (3316.6-5)	1mm以下の透明光沢、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-1(1個) 表面に墨跡有り。		
149 磁 11-10 2号型丸 ヨコナガ	ヨコナガ 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-4)	縦 (3316.6-5)	1mm以下の透明光沢、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-1(1個) 表面に墨跡有り。		
150 磁 11-10 2号型丸 縦横割合のナガナ ナガのナガ	縦横割合のナガナ ナガのナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-4)	縦 (3316.6-5)	1mm以下の透明光沢、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-1(1個) 表面に墨跡有り。		
151 磁 11-10 2号型丸 ヨコナガ	ヨコナガ 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-4)	縦 (3316.6-5)	1mm以下の透明光沢、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-1(1個) 表面に墨跡有り。		
152 磁 11-10 2号型丸 縦横割合のナガ	ヨコナガ 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-4)	縦 (3316.6-5)	1mm以下の透明光沢、白色光沢、白色光沢を多く含む。	現存率-1-1(1個) 表面に墨跡有り。		
153 小型土 器 11-10 3号型丸 ヨコナガ	ヨコナガ 縦横割合のナガ	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-6)	縦 (3316.6-6)	1mm以下の透明光沢を含む。2mm以下の透明色、白色光沢をわずかに含む。	現存率-1-1(1個)		
154 磁 11-10 4号型丸 縦横割合のナガナ ナガのナガ(點打の點)	縦横割合のナガナ ナガのナガ(點打の點)	縦横割合のナガナ ナガのナガ(點打の點)	縦 (3316.6-4)	縦 (3316.6-5)	1mm以下の透明光沢、白色光沢を多く含む。2mm以下の透明光沢、白色光沢をわずかに含む。	現存率-1-1(1個) 表面に墨跡有り。		
155 磁 11-10 4号型丸 縦横割合のナガナ ナガのナガ(點打の點)	縦横割合のナガナ ナガのナガ(點打の點)	ヨコナガ ナガ	縦 (3316.6-4)	縦 (3316.6-5)	1mm以下の透明光沢、白色光沢を多く含む。2mm以下の透明光沢、白色光沢をわずかに含む。	現存率-1-1(1個) 表面に墨跡有り。		

第6表 土器観察表5

第7表 十器觀察表6

第8表 土器觀察表 7

第9表 十器觀察表8

器種名	器種	形態	主色	器物調査・文書		位置	地質	出土の状況	型式・その他の
				外観	内観				
226 小型丸底盆	口一側	多穿壁盆	赤褐色と茶色	ステラ状の網状ナメ	青 （215X7.6）	青 （215X7.6）	2m以下の褐色地帯、白色地帯、灰白色地帯、白色地帯を含み、4cm~2mmの黒褐色斑点をわずかに含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.7	
227 小型丸底盆	口	多穿壁盆	赤褐色	ステラ状の網状ナメ	青 （315X6.6）	青 （315X6.6）	1m以下の褐色地帯、白色地帯、薄褐色地帯を含み、4cm~2mmの黒褐色斑点をわずかに含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.4	
228 小型丸底盆	口	多穿壁盆	赤褐色と茶色	ステラ状の網状ナメ	青 （215X7.6）	青 （215X7.6）	2m以下の褐色地帯、白色地帯、灰白色地帯、黑色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.4	
229 小型丸底盆	口	多穿壁盆	赤褐色と茶色と茶色と茶色	ステラ状の網状ナメ	青 （215X7.6）	青 （215X7.6）	1m以下の褐色地帯、灰褐色地帯、白色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.2 (3層)	
230 小型丸底盆	口	多穿壁盆	赤褐色	ナメ無し	青 （215X7.6）	青 （215X7.6）	1m以下の褐色地帯、白色地帯、黑色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6	
231 小型丸底盆	口一側	多穿壁盆	エコナメ	エコナメ	青 （215X7.4） （215X7.4）	青 （215X7.4） （215X7.4）	2m以下の褐色地帯、白色地帯、灰白色地帯、1cmの黒褐色地帯、3cmを含む。褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.5 （1層・側面の褐色地帯、1cmの黒褐色地帯を含む）	
232 小型丸底盆	口	多穿壁盆	赤褐色と茶色	エコナメ	青 （215X7.4）	青 （215X7.4）	2m以下の褐色地帯、白色地帯、灰白色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.5 （1層・側面の褐色地帯、1cmの黒褐色地帯を含む）	
233 小型丸底盆	側一側	多穿壁盆	同様ナメ	同様ナメ	青 （215X7.4） （215X7.4）	青 （215X7.4） （215X7.4）	1m以下の褐色地帯、褐色をオクタ基の光沢部を含む。	西側・背後・赤褐色の付着部 西側壁 1.5	
234 尾	口一側	多穿壁盆	エコナメ	エコナメのナメ	青 （215X6.6） （215X6.6）	青 （215X6.6） （215X6.6）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2m~3mmの白色地帯、1m以下の褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.4 (3層) 側面の付着部	
235 尾	口	多穿壁盆	エコナメ	褐色のナメ	青 （215X7.6）	青 （215X7.6）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2m~3mmの白色地帯、1m以下の褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6 (3層) 側面の付着部	
236 尾	口一側	多穿壁盆	エコナメ	褐色のナメ	青 （215X7.4） （215X7.4）	青 （215X7.4） （215X7.4）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2mmの白地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6 (3層) 側面の付着部	
237 尾	口	多穿壁盆	エコナメ	褐色のナメ	青 （215X7.6）	青 （215X7.6）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2mmの白地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6 (3層) 側面の付着部	
238 尾	口	多穿壁盆	茶色	褐色の工具柄	青 （215X7.4） （215X7.4）	青 （215X7.4） （215X7.4）	2m以下の褐色地帯、白色地帯、灰白色地帯、褐色地帯を含む。褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6 (3層) 側面の付着部	
239 尾	口	多穿壁盆	褐色の工具柄	褐色の工具柄	青 （215X6.6）	青 （215X6.6）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、4cm~5mmの白色地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.5 (3層) 側面の付着部	
240 尾	口	多穿壁盆	褐色の工具柄	褐色の工具柄	青 （215X6.4）	青 （215X6.4）	4cm以下の褐色地帯、3cmの白地帯、3cmの白地帯を含む。4cm以下の褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.5 (3層) 側面の付着部	
241 箱舟形	口	多穿壁盆	茶色	褐色の工具柄	青 （215X7.3） （215X7.3）	青 （215X7.3） （215X7.3）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2m~3mmの白色地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6 (3層) 側面の付着部	
242 尾	口一側	多穿壁盆	エコナメ	褐色の工具柄	青 （215X7.4） （215X7.4）	青 （215X7.4） （215X7.4）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、5cm以下の褐色地帯を含む。褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.5 (3層) 側面の付着部	
243 尾	口	多穿壁盆	茶色	褐色の工具柄	青 （215X6.4）	青 （215X6.4）	1m以下の褐色地帯、白色地帯、1cmの白地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6 (3層) 側面の付着部	
244 尾	口一側	多穿壁盆	茶色	褐色の工具柄	青 （215X6.4） （215X6.4）	青 （215X6.4） （215X6.4）	1m以下の褐色地帯、白色地帯、1cmの白地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.7 (3層) 側面の付着部	
245 尾	口	多穿壁盆	茶色と茶色と茶色	褐色の工具柄	青 （215X6.4） （215X6.4） （215X6.2）	青 （215X6.4） （215X6.4） （215X6.2）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2cm~3cmの白色地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 1.3 西側壁の一部に赤褐色付着 側面から土	
246 尾	側一側	多穿壁盆	茶色	褐色の工具柄	青 （215X5.3） （215X5.3）	青 （215X5.3） （215X5.3）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2cm~3cmの白色地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 1.3 西側壁の一部に赤褐色付着 側面から土	
247 尾	側一側	多穿壁盆	茶色	褐色の工具柄	青 （215X5.3）	青 （215X5.3）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、2cm~3cmの白色地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 1.3 西側壁の一部に赤褐色付着 側面から土	
248 尾	口一側	多穿壁盆	茶色と茶色と茶色	褐色の工具柄	青 （215X6.2）	青 （215X6.2）	褐色をオクタ基の光沢部を含み、4cm~5mmの白色地帯、褐色地帯を含む。	東北1層 3dm 西側壁 1.6 (3層) 側面から土	

第10表 土器観察表9

第11表 十器觀察表10

### 第12表 土器觀察表11

番号 部屋 番号	基盤 部屋	部屋	地上計測		地下測量・丈尺		基盤	地層	取土の特徴	測定-その他
			(G+1m)	外縁	内縁	外縁				
206 小型 室	軸-底	E.4.V	斜方柱(木)、 楕円柱(木)		直角柱	G.II-06 (30Y 7-4)	G.II-06 (30Y 7-4)		2m以上の地盤柱を含み、2m以上の木柱、 2m以上の楕円柱を含む。直角柱を含む。 斜方柱や楕円柱の木柱を多く含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
208 小型 室(壁)	軸-底	S.2.4	ナガル	直角柱(木)		G.II-06 (30Y 7-3)	G.II-06 (30Y 7-4)		直角柱やナガルの木柱を多く含み、2m以上の 木柱を含む。2m以上の楕円柱を含む。直角柱を 多く含む。	内-外側に初期柱子 直角柱と楕円柱を含む。
209 石子模 王殿屋	軸	H.2.3	ナガル(木)	ナガル	楕円柱	直角柱- (30Y 7-2)	直角柱- (30Y 7-2)		1m以上の楕円柱、直角柱、直角柱、透明光沢 が少部分。	一度押せん
210 第 1号	口-軸	M1.8 E.2.2 E.2.3	1号館 M1.8 E.2.2 E.2.3	回転柱	直角柱		直角柱 (30Y 7-2)		直角柱やナガルの木柱を多く含み、1m以下の木柱 を含む。直角柱を含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
202 葉花 軸	口	L.1.10	楕円柱	直角柱	直角柱	(G.II-1)	(G.II-1)	楕円柱	楕円柱	楕円柱
203 前庭 室	口	2号館 M1.7	楕円-糊みうらり	楕円-糊みうらり	直角柱	G.II-07 (30Y 7-2)	G.II-07 (30Y 7-2)	糊品	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2	
204 第 2号	軸	2号館 M2.7	回転柱 ナガル 楕円柱	回転柱 ナガル	直角柱- (30Y 7-2)	直角柱- (30Y 7-3)	直角柱- (30Y 7-4)		1mm以上の楕円柱、直角柱、直角柱をナガル の木柱に混じる。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
205 砂場 軸	口-外	3号館 M1.8	楕円柱	直角柱	直角柱	G.III-01 (30Y 6-2)	G.III-01 (30Y 6-2)		1m以上の直角柱を含む。直角柱を含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
206 天井 軸	口	3号館 M1.8 E.1.2 E.1.3	天井支柱 楕円柱	楕円柱	直角柱	G.III-01 (30Y 6-1) (30Y 6-2)	G.III-01 (30Y 6-1)		複数の直角柱とナガルを含み、1m以上の木柱、 直角柱を含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
207 天井 軸	口	3号館 M1.9	丁寧なナガル	楕円柱(木)	直角柱	G.III-01 (30Y 6-1) (30Y 6-2)	G.III-01 (30Y 6-1)		複数の直角柱とナガルを含み、2m以上の木柱を 含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
208 第 4号	口-外	4号館 M2.4	楕円柱	回転柱	直角柱	直角柱- (30Y 6-1)	直角柱 (30Y 6-2)		1m以下の直角柱と直角柱、天井柱と直角柱。 直角柱を含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
209 砂場 軸	口	5号館 M1.3	楕円柱	楕円柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	楕円柱	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2	
210 天井 丸柱	外-軸	L.2.6 S.3.4	楕円柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)		2m以上の直角柱、直角柱、直角柱、直角柱を含む。 直角柱を含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
211 天井 丸柱	外	6号館 M1.4	ナガル	ナガル	直角柱	G.II (30Y 6-2)	G.II (30Y 6-2)		2m以上の直角柱を含む。直角柱を含む。	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
212 砂場 軸	外-軸	7号館 M1.7	楕円柱	直角柱	直角柱	G.II-07 (30Y 6-2)	G.II-07 (30Y 6-2)	楕円柱	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2(底面)	
213 衣装 庫	口-軸	8号館 M1.4	楕円柱(木)直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 7-1)	G.II (30Y 7-1)	楕円柱	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2	
214 砂場 軸	口-軸	9号館 M1.6	楕円柱 天井柱(木)直角柱	直角柱	直角柱	G.II-01-02 (30Y 6-2) (30Y 6-2)	G.II-01-02 (30Y 6-2) (30Y 6-2)	直角柱	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2(底面)	
215 衣装 庫	口	10号館 M2.12	楕円柱	直角柱	直角柱	(G.Y.1)	(G.Y.1)	楕円柱	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2(底面)	
216 砂場 軸	口-軸	11号館 M1.2	楕円柱	直角柱	直角柱	G.II-07-08 (30Y 6-2)	G.II-07-08 (30Y 6-2)	楕円柱	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2(底面)	
217 砂場 軸	口	11号館 M1.1	楕円柱(木)の底板 直角柱	直角柱	直角柱	G.II-08	G.II-08	直角柱	測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2	
218 砂場 軸	外-軸	11号館 M1.4	楕円柱 直角柱 直角柱(木)	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
219 砂場 軸	口-軸	12号館 M1.8	楕円柱	直角柱内-外直角柱 直角柱内-外直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-2)	G.II (30Y 6-2)	直角柱	1m以上の直角柱を含む。	1H:32cm 測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
220 砂場 軸	口-軸	12号館 M1.8	楕円柱内-外直角柱	直角柱内-外直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)			1H:32cm 測定1H:32cm 測定2H:3/4m 柱高:1-2
221 砂場 軸	口	S.204 M1.5	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-2)	G.II (30Y 6-2)	直角柱	直角柱	直角柱
222 砂場 軸	口	S.205 M1.7	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
223 砂場 軸	口-軸	S.207 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
224 衣装 庫	口	S.208 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
225 砂場 軸	口-軸	S.209 M1.3	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
226 衣装 庫	口	S.210 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
227 衣装 庫	口-軸	S.211 M1.4	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
228 衣装 庫	口-軸	S.212 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
229 衣装 庫	口-軸	S.213 M1.4	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
230 衣装 庫	口-軸	S.214 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
231 衣装 庫	口-軸	S.215 M1.3	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
232 衣装 庫	口-軸	S.216 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
233 衣装 庫	口-軸	S.217 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
234 衣装 庫	口-軸	S.218 M1.4	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
235 衣装 庫	口-軸	S.219 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱
236 衣装 庫	口-軸	S.220 M1.1	楕円柱 直角柱	直角柱	直角柱	G.II (30Y 6-1)	G.II (30Y 6-1)	直角柱	直角柱	直角柱

第13表 土器観察表12





器種 名	器種 形	測定 寸法 (mm)	主な特徴 (記号)	器種調査・文書		内面 内面	内面 内面	出土の状態	型式-その他の 類
				外面	内面				
407 陶瓦 箱	箱形 箱	—	陶器 瓦人 身中空	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
408 陶瓦 箱	B-E 箱	E-E 順次	陶器 瓦人 身中空 内側底の2条の溝縫	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	横径:430mm 残存率:1/4(底面)
409 陶瓦 箱	E	E-E 順次	陶器 瓦人 身中空 1条の溝縫 底文式-身中空	陶器 瓦人 1条の溝縫	陶器 瓦人 1条の溝縫	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	残存率:1/10
410 陶瓦 箱	E	E-E I	陶器 瓦人 身中空 底文式の内側に1条 下に2条の溝縫	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
411 陶瓦 箱	E	E-E II	陶器 瓦人 身中空 底文式の内側に1条 下に2条の溝縫	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
412 陶瓦 箱	B-E	E-E	陶器 瓦人 身中空 内側底の2条の溝縫- 瓦文式-身中空	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	横径:430mm 残存率:1/4(底面)
413 陶瓦 箱	E	C-E I	陶器 瓦人 身中空 内側底の2条の溝縫	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	残存率:1/10
414 陶瓦 箱	E	E-E I	陶器 瓦人 身中空 1条の溝縫 身中空	陶器 瓦人 1条の溝縫	陶器 瓦人 1条の溝縫	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
415 陶瓦 箱	E	E-E II	陶器 瓦人 身中空 1条の溝縫 身中空	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
416 陶瓦 箱	E	E-E III	陶器 瓦人 身中空 2条の溝縫	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	残存率:1/7~1/8
417 陶瓦 箱	E-E	E-E	陶器 瓦人 1条の溝縫 身中空	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	残存率:1/10
418 陶瓦 箱	E-E	E-E	陶器 瓦人 2条の溝縫 瓦文式-身中空	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
419 陶瓦 箱	B-E	G-E	陶器 瓦人	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	残存率:1/4(底面) 変形部:13mm 底面厚:1mm
420 陶瓦 箱	E	F-E	陶器 瓦人 身中空	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	変形部:4mm 横径:430mm 底面厚:1.4mm 底面幅:14mm
421 陶瓦 箱	E	F-E	陶器 瓦人 身中空	陶器 瓦人	陶器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	内底:一端-腹窓 残存率:1~4(底面)
422 瓦器 箱	E-E	E-E	瓦器 瓦人	瓦器 瓦人	瓦器 瓦人	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	変形部:12mm 残存率:1~4(底面)
423 瓦器 箱	E-E	E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
424 瓦器 箱	E-E	E-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
425 瓦器 箱	E-E	E-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
426 瓦器 箱	E-E	E-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	
427 瓦器 箱	E	D-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面 2段以上-底面
428 瓦器 箱	E	G-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面
429 瓦器 箱	E	E-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面
430 瓦器 箱	E	E-E I	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面
431 瓦器 箱	E	E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	部分的に底面 部分的に底面
432 瓦器 箱	E-E	E-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面 2段以上-底面
433 瓦器 箱	E	E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面 2段以上-底面
434 瓦器 箱	E-E	E-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面
435 瓦器 箱	E-E	E-E I	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	2段以上-底面
436 瓦器 箱	E-E	G-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	1段以上-底面 1段以上-底面
437 瓦器 箱	E	G-E	瓦器	瓦器	瓦器	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	W600 (260) H.1 W600 (260) T.1	横長	1段以上-底面 1段以上-底面

第16表 土器観察表15

編番 番号	基盤 基盤	部品 部品	測定位置 測定位置 (H-G+T)	器物調査-文様		基層 外層 内層	取扱の特徴	形式-その他の 属性			
				外層							
				内層	外層						
430	縁置 底盤	口	H	白地彫 白地彫	織目ナガ	にじ(白)・赤色 (SYE 3-4)	赤色 (SYE 4-6)	2mm以下(口)の赤色、織目な白地を少部分 にすりけた。			
429	縁置 底盤	身	E 1.3	織目ナガ複ナガ	織目ナガ複ナガ	黒色 (SYE 4-7)	黒色 (SYE 4-7)	2mm以下(口)の黒色、織目な黒色を少部分 にすりけた。			
440	縁置 底盤	身	E	織目ナガ複ナガ	複ナガ	にじ(白)・赤色 (SYE 3-4)	にじ(白)・赤色 (SYE 4-5)	2mm以下(口)の赤色を、2mm以下(口)の黒色、織 目な黒色、2mm以下(口)の白地をすりけた。			
431	縁置 底盤	身-瓶	F 2.3	織目ナガ ナガ	複ナガ	黒色 (SYE 4-6)	黒色 (SYE 7-6)	2mm以下(口)の通透光沢、白色地、織目な黒色を 2mm以下(口)の黒色をすりけた。			
432	縁置 底盤	身-瓶	F 2.3	織目ナガ ナガ	複ナガ	にじ(白)・黒 (SYE 6-6)	にじ(白)・赤色 (SYE 5-3)	2mm以下(口)の赤色、2mm以下(口)の白地を、織 目な白地をすりけた。			
433	縁置 底盤	身-瓶	G 2.3	工芸によるナガ ナガ	織目ナガ	黒地 (SYE 5-3)	黒地 (SYE 4-7)	2mm以下(口)の黒色、1mm以下の白地を、に じ(白)・赤色を。			
434	土器蓋 身	身-瓶	E 2.3	織目ナガ ハクセキ複ナガ	織目ナガ	黒 (SYE 6-6)	黒 (SYE 6-6)	2mm以下(口)の黒色、黒地光沢、1mm以下の 黒色をすりけた。			
435	土器蓋 身	身-瓶	E 2.3	織目ナガ	織目ナガ	黒 (SYE 6-6)	黒 (SYE 6-6)	2mm以下(口)の黒色、黒地光沢をすりけた。			
436	土器蓋 身	身-瓶	E 2.3	織目ナガ	複ナガ	黒 (SYE 7-7)	黒 (SYE 6-6)	1mm以下(口)の黒色、黒地光沢をすりけた。			
437	土器蓋 身	身-瓶	F 2.3	織目ナガ	織目ナガ	黒 (SYE 7-7)	黒 (SYE 6-6)	1mm以下(口)の黒色、黒地光沢をすりけた。			
438	土器蓋 身	身-瓶	G 2.3	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	黒 (SYE 8-8)	黒 (SYE 8-8)	1mm以下(口)の赤色、黒地光沢、織目な 赤色をすりけた。2mm以下(口)の白地。			
439	土器蓋 身	身	複ナガ	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	黒 (SYE 7-7)	黒 (SYE 6-6)	織目な赤色の光沢をすりけた。2mm以下(口) の赤地光沢、1mm以下の赤地光沢をすりけた。			
440	土器蓋 身	身	G 2.3	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	黒地 (SYE 6-6)	黒地 (SYE 8-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢、2mm以下(口)の黑 地光沢をすりけた。			
431	土器蓋 身	身-瓶	F 2.3	織目ナガ	織目ナガ	黒地 (SYE 8-8)	黒地 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
432	土器蓋 身	身-瓶	G 2.3	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	黒地 (SYE 6-6)	黒地 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢、2mm以下(口)の黑 地光沢をすりけた。			
433	土器蓋 身	身-瓶	G 2.3	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	黒 (SYE 6-6)	黒 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
434	土器蓋 身	身-瓶	H 1.3	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	黒 (SYE 8-8)	黒 (SYE 8-8)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
435	土器蓋 身	身-瓶	G 2.3	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	黒地 (SYE 8-8)	黒地 (SYE 8-8)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
436	土器蓋 身	身-瓶	D 3.3	織目ナガ	織目ナガ	黒地 (SYE 8-8)	黒地 (SYE 8-8)	1mm以下(口)の黒地、黒地光沢、織目な黒色の 光沢をすりけた。			
437	土器蓋 身	身	E	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	にじ(白)・赤色 (SYE 7-7)	にじ(白)・赤色 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。2mm以下(口) の赤地光沢、2mm以下(口)の白地。			
438	土器蓋 身	身	G 2.3	織目ナガ ハクセキ複ナガ	織目ナガ	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。2mm以下(口) の赤地光沢、2mm以下(口)の白地。			
439	土器蓋 身	身	F 1.3	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	にじ(白)・黒 (SYE 6-6)	にじ(白)・黒 (SYE 6-6)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
440	土器蓋 小口	身	G 2	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
441	土器蓋 小口	身	G 3.3	タコナガ 織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
442	土器蓋 小口	身	D 3.3	タコナガ 織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
443	土器蓋 小口	身	D 3.3	タコナガ 織目ナガ 赤地ナガ	タコナガ	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	織目な赤色の光沢をすりけた。1mm以下の黒地 光沢、2mm以下(口)の赤地光沢をすりけた。			
444	土器蓋 小口	身	G 2	織目ナガ 赤地ナガ	織目ナガ	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	にじ(白)・黒 (SYE 7-7)	1mm以下(口)の黒地、黒地光沢、織目な黒色の 光沢をすりけた。			
445	土器蓋 小口	身	B 2	タコナガ 織目ナガ 赤地ナガ	タコナガ	黒 (SYE 6-6)	黒 (SYE 6-6)	1mm以下(口)の通透光沢、2mm以下(口)の黒地光 沢、2mm以下(口)の白地。			
446	土器蓋 小口	身	C 2	タコナガ 織目ナガ 赤地ナガ	タコナガ	黒 (SYE 6-6)	黒 (SYE 6-6)	1mm以下(口)の通透光沢、2mm以下(口)の黒地光 沢、2mm以下(口)の白地。			
447	土器蓋 小口	身	C 2	タコナガ 織目ナガ 赤地ナガ	タコナガ	黒 (SYE 6-6)	黒 (SYE 6-6)	1mm以下(口)の通透光沢、2mm以下(口)の黒地光 沢、2mm以下(口)の白地。			
448	土器蓋 小口	身	D 2	タコナガ 織目ナガ 赤地ナガ	タコナガ	黒 (SYE 6-6)	黒 (SYE 6-6)	1mm以下(口)の通透光沢、2mm以下(口)の黒地光 沢、2mm以下(口)の白地。			

第17表 土器観察表16

測量番号	基準	測定	測定位置	器物調査実績		内面	外面	内面	外面	測定の指標	型式-その他の
				外面	内面						
473	縦断 基準	□-Ⅰ-Ⅲ	03面頭付孔 5	縦断	縦断	白 (33W-1)	白 (33W-1)	横高	白 (33W-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
474	縦断 基準	□-Ⅱ-Ⅲ	03面頭付孔 2	縦断	縦断 直入	白 (33W-1)	白 (33W-1)	横高	白 (33W-1)	横高 幅9.5cm 厚さ3.5cm 底径3.5cm 残存率: 4.5%	
475	横	□-Ⅰ-Ⅲ	03面頭付孔 2	縦断	縦断 直入	縦オーバーハンプ (33W-1)	縦オーバーハンプ (33W-1)	横高	縦オーバーハンプ (33W-1)	横高 幅9.5cm 厚さ3.5cm 底径3.5cm 残存率: 4.5%	
476	縦断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	03面頭付孔 5	自然断	自然断	白 (33W-1)	白 (33W-1)	横高	白 (33W-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
477	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	03面頭付孔 2	縦断	縦断 直入	白 (33W-1)	白 (33W-1)	横高	白 (33W-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
478	縦断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	03面頭付孔 2	縦断	縦断 直入	横高	横高 (33W-1)	横高	横高 (33W-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
479	横	□-Ⅰ-Ⅲ	03面頭付孔 2	縦断	縦断 直入	横高	横高 (33W-1)	横高	横高 (33W-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
480	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	1号横付孔 4	縦断	縦断 直入	白 (33W-1)	白 (33W-1)	横高	白 (33W-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
481	横	■-Ⅰ-Ⅲ	503面 (33-4)	自然断	自然断	横高 (33W-3-2)	横高 (33W-3-2)	横高	横高 (33W-3-2)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	横高を両側斜、透明光沢をわずかに含む。
482	縦断 横基	□-Ⅰ-Ⅲ	504面 (33-4)	自然断	自然断	横オーバーハンプ (33W-3-2)	横オーバーハンプ (33W-3-2)	横高	横オーバーハンプ (33W-3-2)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
483	縦断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	4号横孔	縦断	縦断 直入	白 (33W-7-2)	白 (33W-7-2)	横高	白 (33W-7-2)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
484	横断 横基	□-Ⅰ-Ⅲ	4号横孔	縦断	縦断 直入	横高	横高 (33W-3-4)	横高	横高 (33W-3-4)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
485	横断 横基	□-Ⅰ-Ⅲ	4号横孔	縦断	縦断 直入	白 (33W-6-2)	白 (33W-6-2)	横高	白 (33W-6-2)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
486	横断 横基	□-Ⅰ-Ⅲ	4号横孔 03面ナマリ	縦断ナマリ	縦断 直入	白 (33W-4-1)	白 (33W-4-1)	横高	白 (33W-4-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	2mm以下のおよび、透明光沢をわずかに含む。
487	横断 基+側	□-Ⅰ-Ⅲ	4号横孔 5号横孔	自然断	自然断 直入ナマリ	横高	横高 (33W-3-1)	横高	横高 (33W-3-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	横高をわずかに含む。
488	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	3号横孔	縦断	縦断	白 (33W-7-1)	白 (33W-7-1)	横高	白 (33W-7-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
489	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	3号横孔	縦断	縦断 直入	白 (33W-7-1)	白 (33W-7-1)	横高	白 (33W-7-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	1mm以下のおよび、透明光沢をわずかに含む。
490	横断 横基	□-Ⅰ-Ⅲ	3号横孔	縦断	縦断 直入	横高 (33W-3-2)	横高 (33W-3-2)	横高	横高 (33W-3-2)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
491	縦断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	503面 (33-4)	縦断	縦断 直入	ナマリ横ナマリ	ナマリ横ナマリ	横高	横高 (33W-7-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
492	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔	縦断	縦断	白 (33W-8-1)	白 (33W-8-1)	横高	白 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
493	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔	縦断	縦断 直入	白 (33W-8-1)	白 (33W-8-1)	横高	白 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
494	横断 横基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔	縦断	縦断 直入	横高 (33W-8-1)	横高 (33W-8-1)	横高	横高 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
495	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 1	縦断	縦断 直入ナマリ	横高	横高 (33W-8-1)	横高	横高 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
496	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 1	縦断	縦断 直入ナマリ	横高	横高 (33W-8-1)	横高	横高 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
497	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 1	縦断	縦断 直入	横高	横高 (33W-8-1)	横高	横高 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
498	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 1	縦断	縦断 直入ナマリ	横高	横高 (33W-8-1)	横高	横高 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
499	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 1	縦断	縦断 直入ナマリ	横高	横高 (33W-8-1)	横高	横高 (33W-8-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
500	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 1	縦断	縦断 直入ナマリ	横高	横高 (33W-7-1)	横高	横高 (33W-7-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	横高(全体)に透明光沢あり。
501	横	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔	縦断	縦断 直入ナマリ	横高	横高 (33W-7-1)	横高	横高 (33W-7-1)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	
502	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 縦基	縦断 直入	横高	横高 (33W-3-4)	横高 (33W-3-4)	横高	横高 (33W-3-4)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	横高を透明光沢をわずかに含む。
503	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 縦基	縦断 直入	横高	横高 (33W-3-4)	横高	横高	横高 (33W-3-4)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	横高を透明光沢をわずかに含む。
504	横断 基	□-Ⅰ-Ⅲ	5-3号横孔 縦基	縦断 直入	横高	横高 (33W-3-4)	横高	横高	横高 (33W-3-4)	横高 幅10.6cm 厚さ3.6cm 底径3.6cm 残存率: 4.5%	横高を透明光沢を含む。

第18表 土器観察表17

番号 番号	器種	形態	出土状況		器物調査・文様		色調	形状	形状の特徴	形式・その他の 特徴
			H-G+地		外縁	内縁				
305	新石 器時代	三足圓底 陶瓦	自然陶 表面 凹凸面	無	無	無	黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	1mm以下の細かな凹凸、1mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸をわずかに含む。	黒褐色 1-5 No.0715-15-解体
306	新石 器	5号圓底 I	手平	無	無	無	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	1mm以下の細かな凹凸、1mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸を少々含む。 Ae.7mmの細かな凹凸をわずかに含む。	黒褐色 3-4 黒褐色 3-4 (解体)
307	新石 器	5号圓底 II	自然陶	無	無	無	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	無	黒褐色 3-4 (解体)
308	新石 器	口一側 C.5.1	手平 自然陶	無	無	無	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	2mm以下の細かな凹凸、1mm以下の細かな凹凸を含む。	黒褐色 220mm 高さ: 1-3 (解体)
309	新石 器	口一側 5号圓底 凹凸面の自然陶	手平 凹凸面 自然陶	無	無	無	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	黒褐 (SYV 5-/1) 黒褐 (SYV 5-/2) 黒褐 (SYV 5-/3)	2mm以下の細かな凹凸、1mm以下の細かな凹凸を含む。 黒褐色をわずかに含む。	黒褐色 220mm 高さ: 1-4 (解体)
310	土器	灰	5号圓底 陶瓦状	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1) 黒褐 (SYV 7-/1)	黒褐 (SYV 6-/1) 黒褐 (SYV 7-/1)	1mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸、黒褐色、Ae.6mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 220mm 高さ: 1-4 (解体)
311	灰	口一側 I	5号圓底 陶瓦状	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1) 黒褐 (SYV 6-/2)	黒褐 (SYV 6-/1) 黒褐 (SYV 6-/2)	1mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸、黒褐色、Ae.6mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 220mm 高さ: 1-4 (解体)
312	灰	口一側 I	5号圓底 陶瓦状	無	無	無	黒褐 (SYV 7-/1) 黒褐 (SYV 7-/2)	黒褐 (SYV 7-/1) 黒褐 (SYV 7-/2)	1mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸を含む。	黒褐色 1 (手平)
313	青石 器	手一底	-	無	無	無	黒褐 (SYV 8-/1)	黒褐 (SYV 8-/1)	無	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
314	白底 陶器	口一側 I	5号圓底 陶瓦状	無	無	無	黒褐 (SYV 8-/1)	黒褐 (SYV 8-/1)	無	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
315	白底 陶器	灰	陶瓦 陶瓦の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 7-/2)	黒褐 (SYV 7-/2)	無	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1-2
316	新石 器	口一側 4号圓底 陶瓦の内側	深い陶器	無	無	無	黒褐 (SYV 8-/1)	黒褐 (SYV 8-/1)	無	黒褐色 1-2
317	新石 器	口一側 陶瓦	陶瓦 2条の茎葉	無	無	無	黒褐 (SYV 7-/1)	黒褐 (SYV 7-/1)	無	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
318	新石 器	口一底 I	陶器 口一底-陶器上部の一部陶器が不十分	無	無	無	黒褐 (SYV 7-/1)	黒褐 (SYV 7-/1)	無	黒褐色 120mm 高さ: 3.5mm 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1-2 更衣
319	新石 器	脚一底	-	無	無	無	黒褐 (SYV 8-/1)	黒褐 (SYV 8-/1)	無	黒褐色 4mm 高さ: 1-4
320	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 8-/1)	黒褐 (SYV 8-/1)	2mm以下の細かな凹凸、1mm以下の細かな凹凸をわずかに含む。	黒褐色 25mm 高さ: 1-2 (手平)
321	新石 器	I	G.2.8	無	無	無	黒褐 (SYV 7-/1)	黒褐 (SYV 7-/1)	無	黒褐色 1 (手平)
322	新石 器	灰	I	5号圓底 陶瓦状 表面	無	無	黒褐 (SYV 8-/1)	黒褐 (SYV 8-/1)	2mm以下の細かな凹凸をわずかに含む。	更衣
323	新石 器	脚一底 灰	陶器 脚一底	無	無	無	黒褐 (SYV 8-/1)	黒褐 (SYV 8-/1)	無	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
324	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 7-/1)	黒褐 (SYV 7-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
325	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 (手平) 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
326	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
327	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
328	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
329	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
330	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
331	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
332	新石 器	脚一底 I	陶器 脚一底-陶器の内側	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	無	黒褐色 4.5mm 高さ: 1-2 黒褐色 4.5mm 黒褐色 4.5mm
333	新石 器	I	G.2.4 脚底	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	1mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸を含む。	更衣
334	新石 器	I	陶器 脚底	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	1mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸を含む。	更衣
335	新石 器	I	C.2.1	陶器	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	2mm以下の細かな凹凸、細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
336	新石 器	I	陶器 脚底	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
337	新石 器	I	陶器 脚底	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
338	新石 器	I	陶器 脚底	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
339	新石 器	I	陶器 脚底	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)
340	新石 器	I	陶器 脚底	無	無	無	黒褐 (SYV 6-/1)	黒褐 (SYV 6-/1)	細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸、黒褐色、Ae.5mmの細かな凹凸を含む。	黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平) 黒褐色 1 (手平)

第19表 土器観察表18

器種 名	器種	形狀	色・状況 外・内・縁	器の調査・文様		内面	外面	断面の形態	器式・その他
				外面	内面				
336	陶器 盤類	口一帯 1	端縁	端縁 内面 縁部	端縁 内面 (336 A-2) (336 B-2)	端縁 (336 A-2)	端縁 (336 A-2)	1mm以下の灰白色鉢、白化部をわずかに含む。 内面(336 B-2)は1mmの暗紅色。	端縁(336 A-2) 内面(336 B-2)
337	陶器 盤類	身一帯 3.9.1	端縁 端縁内に自然縫 縫	端縁 内面	端縁 (337 A-1) (337 B-1) (337 C-1) (337 D-1)	端縁 (337 A-1) (337 B-1) (337 C-1) (337 D-1)	端縁 (337 A-1) (337 B-1) (337 C-1) (337 D-1)	4mm以下の灰白色鉢、3mm以下の灰白色 端縁、1mm以下の透明光沢をわずかに含む。	直径100-120mm 高さ10-14mm
338	陶器 盤類	身一帯 3.2.1	端縁	端縁	端縁 (338 A-1) (338 B-1) (338 C-1) (338 D-1)	端縁 (338 A-1) (338 B-1) (338 C-1) (338 D-1)	端縁 (338 A-1)	1mm以下の灰白色、無色鉢、透明光沢を含む。	直径100mm
339	瓦の軸		端縁		端縁 (339 A-1) (339 B-1)	端縁 (339 A-1)	端縁 (339 A-1)		
340	土器底	5.2			端縁 (340 A-1) (340 B-1)	端縁 (340 A-1) (340 B-1)	端縁 (340 A-1)		最大幅90mm 最大高73mm 最大厚3mm 最大厚102mm

第20表 土器観察表19

編號 番号	器種	時期	石器	測定値	遺跡・部位	W. D. (cm)	W. H. (cm)	W. T. (cm)	W. G. (cm)
27	石製石器	新石器	セリス型穿孔器	F. 6	穿孔	3.0	2.0	0.3	1.3
28	石製石器	新石器	チート	F. 6	1号型六瓣穿孔器	2.8	1.8	0.4	0.8
29	石製石器	新石器	石斧	B. 1	穿孔	2.1	1.3	0.3	0.7
30	石製石器	新石器	セリス型穿孔器	C. 2	穿孔	1.7	1.4	0.3	0.5
31	石器	新石器	穿孔石器	A. 2	穿孔	1.9	1.7	0.8	1.8
32	石器	新石器	チート	C. 4	穿孔	2.2	2.1	0.6	2.3
33	スクリーパー	新石器	穿孔石器	C. 5	穿孔	3.4	0.9	1.4	0.1
34	石製石器	新石器	穿孔石器	B. 1	穿孔	4.1	3.5	0.8	0.6
35	磨石	新石器	穿孔石器	B. 3	穿孔	2.8	1.8	0.2	1.0
36	石器	新石器	チート	F. 4	2号型六瓣穿孔器	2.4	1.8	0.4	0.8
37	骨製石器	新石器	チート	H. 2	3号型六瓣穿孔器	2.0	1.9	0.3	1.4
38	石器	新石器	穿孔石器	D. 4	3号型六瓣穿孔器	2.8	1.9	0.4	2.0
39	石器	新石器	セリス型穿孔器	—	穿孔	3.7	3.3	0.9	1.0
40	石器	新石器	セリス型穿孔器	E. 6	穿孔	0.9	0.9	1.2	0.4
41	骨製石器	新石器	セリス型穿孔器	F. 2'	穿孔	11.0	10.8	1.7	1.0
42	磨石	古墳	研磨	F. 6	1号型六瓣穿孔器	34.1	23.5	5.2	87.0
43	磨石	古墳	研磨	F. 4	2号型六瓣穿孔器	8.7	8.8	4.1	30.0
44	研石	古墳	研磨	F. 3	3号型六瓣穿孔器	7.0	3.2	1.7	3.8
45	研石	中世	研磨	C. 4	4号型六瓣穿孔器	4.8	4.1	0.6	1.0
46	金剛石	不明	研磨	D. 4	7号型六瓣穿孔器	3.6	22.9	3.9	18.0
47	セリス型穿孔器	不明	研磨	F. 6	3号型六瓣穿孔器	2.4	2.3	0.2	1.7
48	磨石(鐵石器)	不明	研磨	—	穿孔	5.9	3.8	4.1	14.0
49	研石	不明	研磨	D. 4	5号型六瓣穿孔器	5.8	4.9	1.2	5.8
50	研石	不明	研磨	H. 2	3号型六瓣穿孔器	9.9	5.3	3.0	20.0
51	研石	不明	研磨	D. 4	3号型六瓣穿孔器	8.5	7.3	3.5	25.0
52	研石	不明	研磨	C. 4	1号	4.9	2.7	1.4	3.0
53	研石	不明	研磨	G. 2	8号	8.1	2.2	1.5	4.7
54	研石	不明	研磨	E. 2	2号	6.0	2.2	0.8	2.0
55	研石	不明	研磨	D. 4	50.127	15.4	10.8	4.3	390.0
56	研石	不明	研磨	D. 4	50.128	25.6	16.6	17.0	320.0
57	研石	不明	研磨	E. 6	50.91	32.2	14.4	5.0	260.0

第21表 石器・石製品観察表

編號 番号	器種	出土地點	直通	通幅	高さ (cm)	内径 (cm)	外径 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	その他
407	洪武銅鑄	1号型六瓣穿孔器S1.7	圓	1300	23.9	10.2	6.3	1.3	1.3	定形品
408	洪武銅鑄	1号型六瓣穿孔器S1.7	圓	1300	24.0	20.7	6.1	1.3	2.2	定形品
409	洪武銅鑄	2号型六瓣穿孔器S1.7	圓	1300	21.7	10.1	6.2	1.4	1.3	定形品、鏡面の鋸歯が無い。
410	明季元年	0.2 (m)φ	圓	1000	25.0	19.4	9.9	1.3	1.6	定形品、「明季」が半字。
411	洪武銅鑄	1.5 (m)φ	圓	1300	23.2	10.1	14.0	1.4	1.3	規格寸1・2・3に1.5(m)の文字。
412	洪武銅鑄	圓孔	圓	1300	23.4	10.3	5.3	1.6	1.3	定形品

第22表 古錢観察表

編號 番号	器種	出土地點	最大直徑	最大厚	最大厚	重量 (g)
126	刀子	1号型六瓣穿孔器上	11.2	—	—	0.7
128	刀子	2号型六瓣穿孔器上	11.5	—	—	—
130	刀子	4号型六瓣穿孔器上	14.0	—	—	0.7
174	刀子	4号型六瓣穿孔器上	16	—	—	0.45
308	半刀	2号型六瓣穿孔器S1.1	11.9	1.25	1.2	2.4
302	刀	2号型六瓣穿孔器S1.1	5.0	—	—	0.5
303	半刀	13号型六瓣穿孔器S1.5	90	—	—	27.0
304	刀	0.2 (m)φ	—	—	—	0.4

第23表 鉄製品観察表

第24表 埼立柱物跡一覧表

柱名	直径	高さ	幅員	面積	重心	地盤強度		柱頂	柱底	柱間距	柱高
						(単位) [m]	(単位) [m]				
ST1/ST2	1.0	800	1+1.5	500	800/1.5	800/1.5	800/1.5	1.0/2.0	1.0/2.0	1.0/2.0	1.0/2.0
ST1/ST3	2.0	800	1+1.4	800	800	800	800	2.0/3.0	2.0/3.0	2.0/3.0	2.0/3.0
ST1/ST4	2.0	800	1+1.2	800	800	800	800	2.0/2.7	2.0/2.7	2.0/2.7	2.0/2.7
ST1/ST5	2.0	800	1+1.3	800	800	800	800	2.0/2.4	2.0/2.4	2.0/2.4	2.0/2.4
ST1/ST6	4.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	4.0/8.0	4.0/8.0	4.0/8.0	4.0/8.0
ST1/ST4-5	3.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	3.0/6.0	3.0/6.0	3.0/6.0	3.0/6.0
ST1/ST6	6.0	800	1+1.2	800	1.00	1.00	1.00	6.0/12.0	6.0/12.0	6.0/12.0	6.0/12.0
ST1/ST5	7.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	7.0/14.0	7.0/14.0	7.0/14.0	7.0/14.0
ST1/ST5-6	8.0	800	1+1.2	800	1.00	1.00	1.00	8.0/16.0	8.0/16.0	8.0/16.0	8.0/16.0
ST1/ST6	9.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	9.0/18.0	9.0/18.0	9.0/18.0	9.0/18.0
ST1/ST6	10.0	800	2+3	900	1.80	1.80	1.80	10.0/20.0	10.0/20.0	10.0/20.0	10.0/20.0
ST1/ST6	11.0	800	2+3	900	1.80	1.80	1.80	11.0/22.0	11.0/22.0	11.0/22.0	11.0/22.0
ST1/ST6	12.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	12.0/24.0	12.0/24.0	12.0/24.0	12.0/24.0
ST1/ST6	13.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	13.0/26.0	13.0/26.0	13.0/26.0	13.0/26.0
F/S	1.0	800	2+3	900	1.80	1.80	1.80	1.0/8.0	1.0/8.0	1.0/8.0	1.0/8.0
F/S-3	3.0	800	1+1.3	800	1.00	1.00	1.00	3.0/14.0	3.0/14.0	3.0/14.0	3.0/14.0
F/S-4	4.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	4.0/22.0	4.0/22.0	4.0/22.0	4.0/22.0
F/S-5	5.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	5.0/27.0	5.0/27.0	5.0/27.0	5.0/27.0
F/S-6	6.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	6.0/32.0	6.0/32.0	6.0/32.0	6.0/32.0
F/S-7	7.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	7.0/37.0	7.0/37.0	7.0/37.0	7.0/37.0
F/S-8	8.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	8.0/42.0	8.0/42.0	8.0/42.0	8.0/42.0
F/S-9	9.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	9.0/47.0	9.0/47.0	9.0/47.0	9.0/47.0
F/S-10	10.0	800	2+3	900	1.80	1.80	1.80	10.0/52.0	10.0/52.0	10.0/52.0	10.0/52.0
F/S-11	11.0	800	2+3	900	1.80	1.80	1.80	11.0/57.0	11.0/57.0	11.0/57.0	11.0/57.0
F/S-12	12.0	800	2+3	900	1.80	1.80	1.80	12.0/62.0	12.0/62.0	12.0/62.0	12.0/62.0
F/S-13	13.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	13.0/67.0	13.0/67.0	13.0/67.0	13.0/67.0
F/S-14	14.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	14.0/72.0	14.0/72.0	14.0/72.0	14.0/72.0
F/S-15	15.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	15.0/77.0	15.0/77.0	15.0/77.0	15.0/77.0
F/S-16	16.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	16.0/82.0	16.0/82.0	16.0/82.0	16.0/82.0
F/S-17	17.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	17.0/87.0	17.0/87.0	17.0/87.0	17.0/87.0
F/S-18	18.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	18.0/92.0	18.0/92.0	18.0/92.0	18.0/92.0
F/S-19	19.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	19.0/97.0	19.0/97.0	19.0/97.0	19.0/97.0
F/S-20	20.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	20.0/102.0	20.0/102.0	20.0/102.0	20.0/102.0
F/S-21	21.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	21.0/107.0	21.0/107.0	21.0/107.0	21.0/107.0
F/S-22	22.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	22.0/112.0	22.0/112.0	22.0/112.0	22.0/112.0
F/S-23	23.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	23.0/117.0	23.0/117.0	23.0/117.0	23.0/117.0
F/S-24	24.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	24.0/122.0	24.0/122.0	24.0/122.0	24.0/122.0
F/S-25	25.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	25.0/127.0	25.0/127.0	25.0/127.0	25.0/127.0
F/S-26	26.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	26.0/132.0	26.0/132.0	26.0/132.0	26.0/132.0
F/S-27	27.0	800	1+1.3	800	1.00	1.00	1.00	27.0/137.0	27.0/137.0	27.0/137.0	27.0/137.0
F/S-28	28.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	28.0/142.0	28.0/142.0	28.0/142.0	28.0/142.0
F/S-29	29.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	29.0/147.0	29.0/147.0	29.0/147.0	29.0/147.0
F/S-30	30.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	30.0/152.0	30.0/152.0	30.0/152.0	30.0/152.0
F/S-31	31.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	31.0/157.0	31.0/157.0	31.0/157.0	31.0/157.0
F/S-32	32.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	32.0/162.0	32.0/162.0	32.0/162.0	32.0/162.0
F/S-33	33.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	33.0/167.0	33.0/167.0	33.0/167.0	33.0/167.0
F/S-34	34.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	34.0/172.0	34.0/172.0	34.0/172.0	34.0/172.0
F/S-35	35.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	35.0/177.0	35.0/177.0	35.0/177.0	35.0/177.0
F/S-36	36.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	36.0/182.0	36.0/182.0	36.0/182.0	36.0/182.0
F/S-37	37.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	37.0/187.0	37.0/187.0	37.0/187.0	37.0/187.0
F/S-38	38.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	38.0/192.0	38.0/192.0	38.0/192.0	38.0/192.0
F/S-39	39.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	39.0/197.0	39.0/197.0	39.0/197.0	39.0/197.0
F/S-40	40.0	800	2+2	900	1.80	1.80	1.80	40.0/202.0	40.0/202.0	40.0/202.0	40.0/202.0

## 第IV章 自然科学分析の結果

### 第1節 自然科学分析の概要

高樋遺跡から採取された資料について自然科学分析を行った。分析内容は、樹種同定1点、放射性炭素年代12点、火山灰分析1点である。それぞれの分析の委託先は、凡例に明記し、以下に分析結果を掲載する。

### 第2節 樹種同定

#### はじめに

本報告では、高樋遺跡（宮崎県都城市）の小穴より出土した木材の樹種同定を行うことにより、当時の用材に関わる資料を作成する。

#### 1 試料

試料は、中世以降に形成された小穴より出土した未炭化の木材1点（試料13）である。

#### 2 分析方法

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

#### 3 結果

木材は、広葉樹のイスノキに同定された。解剖学的特徴等を記す。

- ・ イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)  
マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほぼ単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管の多くは、内部に着色物質が充填されている。道管は隔壁穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は、独立帶状または短波線状で、放射方向にはほぼ等間隔に配列する。

### 4 考察

木材は、中世以降に形成された小穴から出土しており、柱材に由来する可能性がある。この木材は、広葉樹のイスノキに同定された。イスノキは、関東以西の暖温帶性常緑広葉樹林中に生育する常緑高木である。木材は極めて重硬・緻密で、比重は国産材の中でも最も重い部類に入る。重硬なことから強度が高く、保存性も高い。試料が柱材とすれば、強度・保存性が高いことが利用の背景に考えられる。

イスノキを柱材に利用する例は、堂道遺跡（山口県）の鎌倉～室町時代とされる掘立柱建物跡、川北遺跡（香川県）の古墳時代末期～平安時代の柱材、波多江遺跡（福岡県）の戦国～江戸時代初期とされる柱材、御笠川南条坊遺跡（福岡県）の鎌倉時代とされる柱材、東那珂遺跡（福岡県）の古墳時代末期～平安時代初期とされる柱材、久米遺跡（佐賀県）の鎌倉時代とされる柱材、田川遺跡（長崎県）の室町時代とされる柱材、古麓城跡（熊本県）の戦国～江戸時代初期とされる柱材、紙屋城址遺跡（宮崎県）の戦国～江戸時代初期とされる柱材、天神遺跡（宮崎県）の江戸時代とされる柱材等の事例がある（伊東・山田,2012）。現在、イスノキが多く分布する九州地方の事例が多く、宮崎県の事例も2例認められる。

### 文献

- 林昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I,木材研究・資料31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II,木材研究・資料32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III,木材研究・資料33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV,木材研究・資料34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V,木材研究・資料35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.
- 島地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998.  
広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修)、海青社、122p.[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

### 第3節 放射性炭素年代測定

#### 1 測定対象試料

高樋遺跡は、宮崎県都城市梅北町1011番地ほかに所在し、台地上の先端部付近に立地する。測定対象試料は、集石遺構や堅穴建物跡等の遺構から出土した炭化物12点である(第25表)。

試料の時期は、1が縄文時代前～中期、2が縄文時代早期知覧式土器の時期、3が縄文時代早期(アカホヤ火山灰の下位)、4～6は古墳時代、7～12が中世以降と推定されている。アカホヤ火山灰(K-Ah)は、7300年前に降下したとされる(町田・新井2011)。

#### 2 測定の意義

遺跡、遺構の年代を明らかにする。

#### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸(AAA:Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と第24表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HO XII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(第25表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stu IV er and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は  $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第25表に、補正していない値を参考値として第26・27表に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表25に、補正していない値を参考値として表26、27に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めた値。

い<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第26・27表、第71、72、73図に示した。なお、暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを見示すために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表され、ここでは前者を第26・27表、第71・72図に、後者を第28表、第73図に示した。

## 6 測定結果

測定結果を第26～28表、第71～73図に示す。較正年代は、すべての試料についてcal BC/ADで算出し、縄文時代の試料(1～3)についてはさらにcal BPでも算出した。以下の説明では、縄文時代の試料(1～3)をcal BPの値(第28表、第73図)、他の試料はcal BC/ADの値(第26表、第71・72図)で記述する。

縄文時代とされる集石遺構から出土した試料1～3の<sup>14</sup>C年代は、1が $4530 \pm 30$ yrBP、2が $8890 \pm 30$ yrBP、3が $5830 \pm 30$ yrBPである。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、1が $5305 \sim 5069$ cal BP、2が $10156 \sim 9929$ cal BP、3が $10119 \sim 9774$ cal BPの間に各々複数の範囲で示され、1が縄文時代中期初頭から前葉頃、2、3が縄文時代早期前半頃に相当する(小林編2008)。土器型式とおむね整合する結果と見られ、3については火山灰との上下関係とも調和的である。

古墳時代とされる竪穴建物跡から出土した試料4～6の<sup>14</sup>C年代は、4が $1710 \pm 20$ yrBP、5が $1610 \pm 20$ yrBP、6が $1630 \pm 20$ yrBPである。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、4が $263 \sim 384$ cal AD、5が $404 \sim 531$ cal AD、6が $386 \sim 503$ cal ADの間に各々2つの範囲で示され、4が古墳時代前期から中期頃、5、6が中期から後期頃に相当する(佐原2005)。いずれも推定される時期の範囲内となつたが、これらは同じ竪穴建

物跡の床面付近から出土した試料であるため、4が5、6に比べてやや古い値を示した点が注意される。これについては、次に記す古木効果と、較正曲線の地域差が影響している可能性がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採等で死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。ここで測定された試料4～6には樹皮が確認されていないことから、最外年輪より内側の部位が測定された可能性があるため、本来同年代の樹木に由来する試料であっても、古木効果によって見かけ上の年代差が生じる可能性がある点に注意を要する。

また、試料4が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾嵩2009、坂本2010など)。その日本産樹木のデータを用いて試料4の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代よりも新しくなる可能性がある。

中世以降とされる試料7～12の年代は、古い試料12、中間の試料7、11、新しい試料8～10の3群に分かれる。古い試料12の<sup>14</sup>C年代は $610 \pm 20$ yrBP、暦年較正年代( $1\sigma$ )は $1305 \sim 1395$ cal ADの間に3つの範囲で示され、中世に相当する(佐原2005)。中間の年代となった試料7、11の<sup>14</sup>C年代は、2点とも $340 \pm 20$ yrBP、暦年較正年代( $1\sigma$ )は、7が $1494 \sim 1631$ cal ADの間に3つの範囲、11が $1495 \sim 1631$ cal ADの間に3つの範囲で示され、中世から近世頃に相当する(佐原2005)。新しい試料8～10の<sup>14</sup>C年代は、8が $130 \pm 20$ yrBP、9が $110 \pm 20$ yrBP、10が $140 \pm 20$ yrBPである。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、いずれも17世紀後葉から20世紀前半頃の間に複数の範囲で示され、近世から近代頃に相当する(佐原2005)。いずれも推定される時期の範囲内となっている。なお、試料8～10の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(第27表下の警告参照)。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Liber Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-161353	No. 1	3号集石遺構 墓土	炭化物	AAA	-24.59 ± 0.22	-4,530 ± 30	-56.88 ± 0.20
IAAA-161354	No. 2	1号集石遺構 墓土	炭化物	AAA	-25.50 ± 0.33	-8,890 ± 30	-33.05 ± 0.13
IAAA-161355	No. 3	2号集石遺構 墓土	炭化物	AAA	-25.45 ± 0.23	-8,830 ± 30	-33.29 ± 0.14
IAAA-161356	No. 4	1号堅穴建物跡 墓土(床面付近)	炭化物	AAA	-30.02 ± 0.23	-1,710 ± 20	-80.84 ± 0.24
IAAA-161357	No. 5	1号堅穴建物跡 墓土(床面付近)	炭化物	AAA	-29.85 ± 0.30	-1,610 ± 20	-81.83 ± 0.25
IAAA-161358	No. 6	1号堅穴建物跡 墓土	炭化物	AAA	-28.67 ± 0.24	-1,630 ± 20	-81.59 ± 0.25
IAAA-161359	No. 7	1号堅穴式遺構 住柱SH 2 墓土	炭化物	AAA	-27.84 ± 0.22	-340 ± 20	-95.85 ± 0.25
IAAA-161360	No. 8	29号副立柱建物跡 SH16 墓土	炭化物	AAA	-28.38 ± 0.27	-130 ± 20	-98.37 ± 0.27
IAAA-161361	No. 9	29号副立柱建物跡 SH16 墓土	炭化物	AAA	-25.62 ± 0.26	-110 ± 20	-98.63 ± 0.25
IAAA-161362	No. 10	14号副立柱建物跡 SH16 墓土	炭化物	AAA	-28.37 ± 0.27	-140 ± 20	-98.25 ± 0.27
IAAA-161363	No. 11	ビット SH 90 墓土	炭化物	AAA	-29.24 ± 0.24	-340 ± 20	-95.86 ± 0.26
IAAA-161364	No. 12	ビット SH 97 墓土	炭化物	AAA	-27.46 ± 0.26	-610 ± 20	-92.71 ± 0.24

第25表 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1 σ 曆年年代範囲	2 σ 曆年年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-161353	4,530 ± 30	56.93 ± 0.19	4,532 ± 27	3396calBC-3327calBC (17.7%) 3228calBC-3226calBC (0.9%) 3219calBC-3175calBC (26.1%) 3161calBC-3120calBC (22.5%)	3361calBC-3346calBC (31.1%) 3241calBC-3104calBC (64.3%)
IAAA-161354	8,890 ± 30	33.02 ± 0.13	8,893 ± 32	8207calBC-8168calBC (15.5%) 8120calBC-8032calBC (30.6%) 8025calBC-7780calBC (17.1%)	8223calBC-7960calBC (95.4%)
IAAA-161355	8,840 ± 30	33.26 ± 0.14	8,834 ± 34	8170calBC-8117calBC (17.7%) 7982calBC-7825calBC (50.5%)	8203calBC-8106calBC (24.2%) 8095calBC-8077calBC (9.0%) 8012calBC-7786calBC (61.7%) 7767calBC-7761calBC (0.5%)
IAAA-161356	1,790 ± 20	80.01 ± 0.23	1,708 ± 23	263calAD-275calAD (11.1%) 330calAD-384calAD (57.1%)	255calAD-302calAD (26.3%) 316calAD-396calAD (69.1%)
IAAA-161357	1,690 ± 20	81.02 ± 0.24	1,610 ± 24	404calAD-431calAD (31.2%) 491calAD-531calAD (37.0%)	395calAD-476calAD (53.3%) 481calAD-536calAD (42.1%)

第26表 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代 cal BC/AD) [1]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-161358	1,700 $\pm$ 20	80.97 $\pm$ 0.24	1,634 $\pm$ 24	386calAD-429calAD(65.9%) 499calAD-503calAD(2.2%)	344calAD-435calAD(77.0%) 455calAD-469calAD(2.0%) 487calAD-538calAD(16.4%)
IAAA-161359	390 $\pm$ 20	95.29 $\pm$ 0.25	340 $\pm$ 21	1494calAD-1524calAD(22.8%) 1559calAD-1602calAD(31.8%) 1614calAD-1631calAD(13.6%)	1474calAD-1531calAD(33.1%) 1539calAD-1635calAD(61.7%)
IAAA-161360	190 $\pm$ 20	97.69 $\pm$ 0.26	132 $\pm$ 21	1682calAD-1696calAD(11.1%)* 1722calAD-1737calAD(8.7%)* 1806calAD-1817calAD(7.7%)* 1831calAD-1879calAD(28.2%)* 1916calAD-1936calAD(12.5%)*	1678calAD-1765calAD(35.1%)* 1773calAD-1775calAD(0.6%)* 1800calAD-1892calAD(44.2%)* 1908calAD-1940calAD(15.9%)*
IAAA-161361	120 $\pm$ 20	98.51 $\pm$ 0.24	110 $\pm$ 20	1694calAD-1710calAD(10.8%)** 1718calAD-1727calAD(6.0%)** 1813calAD-1890calAD(46.7%)** 1910calAD-1917calAD(4.7%)**	1685calAD-1733calAD(27.4%)** 1805calAD-1896calAD(55.4%)** 1903calAD-1928calAD(12.9%)**
IAAA-161362	200 $\pm$ 20	97.57 $\pm$ 0.26	141 $\pm$ 21	1686calAD-1697calAD(10.2%)* 1726calAD-1764calAD(30.2%)* 1801calAD-1814calAD(7.6%)* 1806calAD-1877calAD(16.6%)* 1917calAD-1928calAD(13.6%)*	1670calAD-1707calAD(15.8%)* 1719calAD-1779calAD(28.1%)* 1798calAD-1826calAD(11.8%)* 1832calAD-1886calAD(22.8%)* 1913calAD-1944calAD(16.9%)*
IAAA-161363	410 $\pm$ 20	95.02 $\pm$ 0.26	339 $\pm$ 21	1495calAD-1524calAD(22.0%)* 1559calAD-1602calAD(33.5%)* 1615calAD-1631calAD(12.7%)	1475calAD-1636calAD(96.4%)*
IAAA-161364	650 $\pm$ 20	92.21 $\pm$ 0.23	608 $\pm$ 20	1305calAD-1327calAD(28.0%)* 1342calAD-1364calAD(27.7%)* 1384calAD-1395calAD(12.5%)	1299calAD-1370calAD(75.5%)* 1380calAD-1401calAD(19.9%)

[参考値]

\* Warning: Date may extend out of range

Warning: Date probably out of range

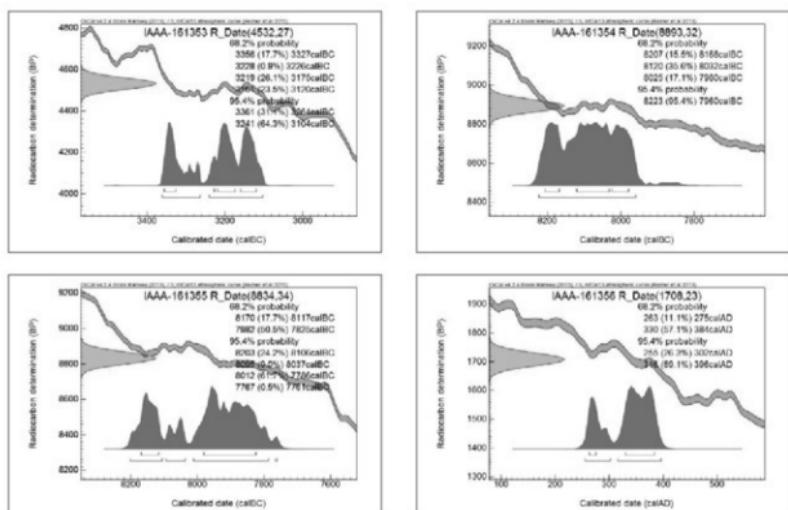
\*\* Warning: Date probably out of range

(これらの警告は校正プログラム OxCalが発するもので、試料の $\delta^{13}\text{C}$ 年代に対応する較正年代が、当該較年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。\*,\*\*の順にその可能性が高くなる。)

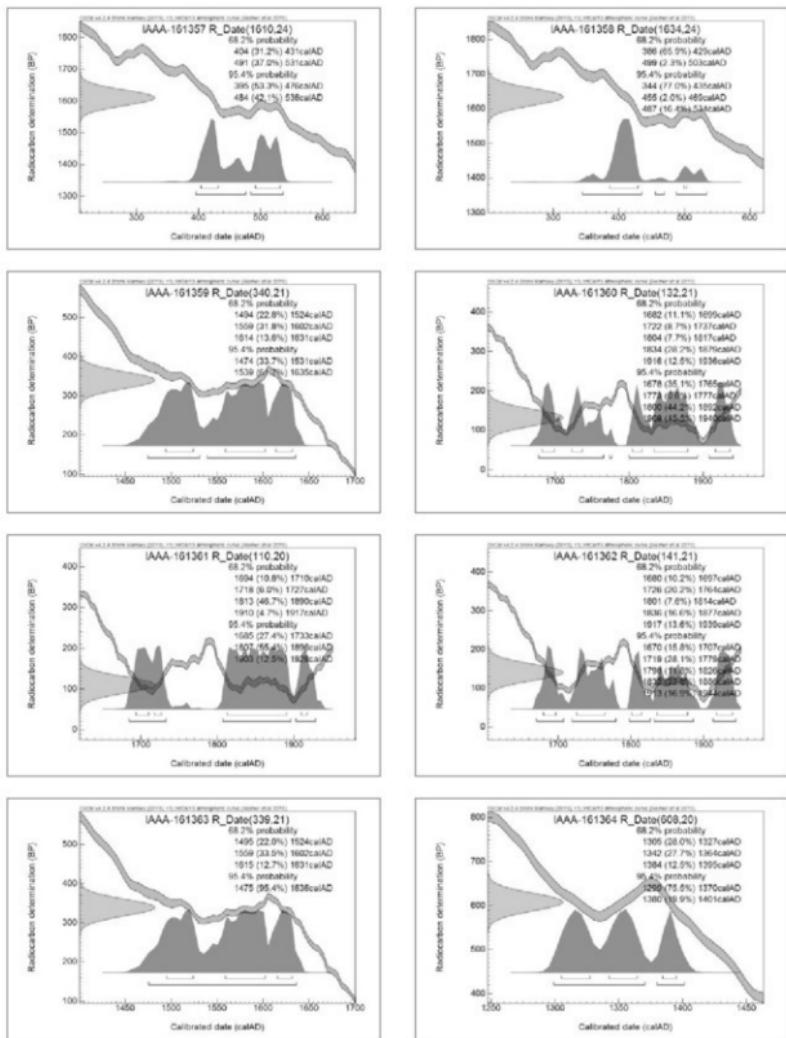
第27表 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代 cal BC/AD) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-161353	4,530 ± 30	56.93 ± 0.19	4,532 ± 27	5305calBP-5276calBP (17.7%) 5177calBP-5175calBP (0.9%) 5168calBP-5124calBP (26.1%) 5110calBP-5099calBP (23.5%)	5310calBP-5213calBP (31.1%) 5190calBP-5053calBP (64.3%)
IAAA-161354	8,900 ± 30	33.02 ± 0.13	8,893 ± 32	1015calBP-10117calBP (15.9%) 10009calBP-9981calBP (35.6%) 9974calBP-9929calBP (17.1%)	10172calBP-9909calBP (95.4%)
IAAA-161355	8840 ± 30	33.26 ± 0.14	8834 ± 34	10119calBP-10066calBP (17.7%) 931calBP-9774calBP (50.5%)	10152calBP-10055calBP (24.2%) 10044calBP-9986calBP (9.0%) 9961calBP-9735calBP (61.7%) 9716calBP-9710calBP (0.9%)

第28表 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代 cal BP) (3)

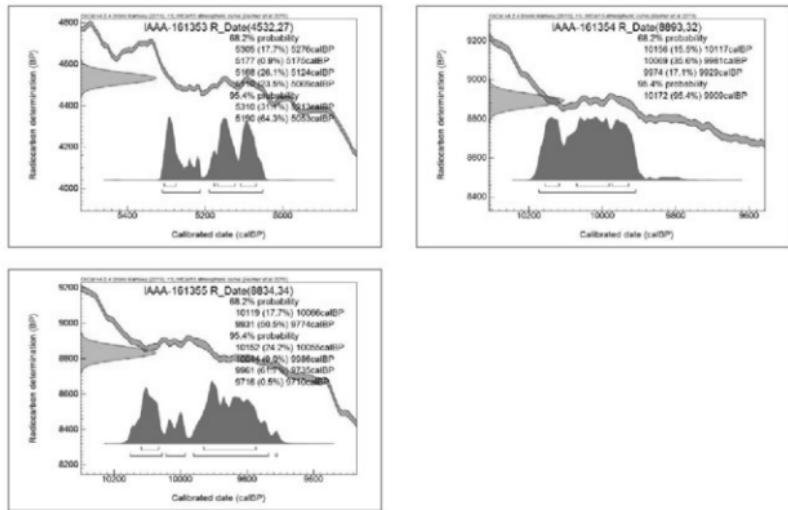


第71図 曆年較正結果 (1)



暦年較正年代グラフ (cal BC/AD、参考)

第72図 暦年較正結果 (2)



暦年較正年代グラフ (cal BP、参考)

第73図 暦年較正結果 (3)

## 第4節 火山灰分析

### はじめに

本報告では、高橋遺跡（宮崎県都城市）の調査区内で検出された火山噴出物（テフラ）とされる堆積物を対象とし、その碎屑物の特性を捉え、給源火山や噴出年代が明らかにされているテフラとの対比を行なう。

### 1 試料

試料は、F1グリッドから採取された褐色スコリアとされる堆積物1点（試料14）である。肉眼観察では、明黄褐色を呈する軽石まじりの火山灰土である。

### 2 分析方法

#### (1) テフラ検出分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

#### (2) テフラ組成分析

試料に水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が $1/16\text{mm}$ より小さい粒子を除去する。

水洗後に乾燥させ、篩別して、得られた粒径 $1/4\text{mm}$ ~ $1/8\text{mm}$ の砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方、重液分離により得られた軽鉱物分については、火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、上述したテフラ検出分析と同様の形態分類を行う。

#### (3) 屈折率測定

屈折率の測定は、テフラ検出分析処理後に得られた砂分から摘出した軽石を対象とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

## 3 結果

#### (1) テフラ検出分析

分析結果を第29表に示す。処理後の砂分には多量の軽石が認められた。軽石は、最大径約5mm、白色を呈し、発泡は良好なものが多く、同色で発泡やや良好なものも混在する。軽石の中には、斜方輝石の斑晶を包有するものも認められた。また、砂分中には無色透明の軽石型を呈する火山ガラスも極めて微量検出された。

#### (2) テフラ組成分析

分析結果を第30表、第74図に示す。重鉱物組成は、斜方輝石が多く、次いで不透明鉱物が中量程度含まれ、少量の單斜輝石を伴い、極めて微量の角閃石を含む。軽鉱物は、火山ガラスとその他に分けて計数した。火山ガラスでは、少量の軽石型が検出され、極微量のバブル型も認められた。その他の軽鉱物は、斜長石や風成塵起源の石英や長石類の鉱物片・岩石片等である。

#### (3) 屈折率測定

測定結果を第75図に示す。レンジはnl510-1513であり、nl511に高い集中度を示す。

試料番号	スコリア	火山ガラス				軽石		
		量	量	色調・形態	量	色調・発達度	最大粒径	
14	-	+		cl+pm	++++	W-g>W->gtopx	5.0	

凡例 - :含まれない, (+) :きわめて微量, + :微量, ++ :少量, +++ :中量, +++++ :多量.

cl:無色透明, br:褐色, bav:バブル型, mid:中間型, pm:軽石型.

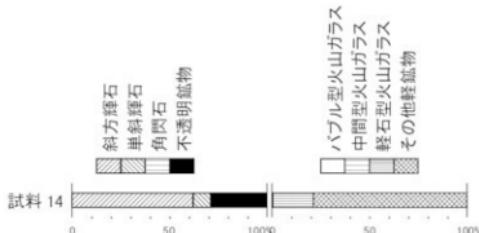
W:白色.

g:良好, sg:やや良好, sh:やや不良, b:不良. 最大粒径はmm. topx:斜方輝石斑晶包有.

第29表 テフラ検出分析結果 (1)

試料番号	斜方輝石	斜方輝石	单斜輝石	角閃石	不透明鉱物	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他の軽石	合計
14	155	23	1	71	250	1	0	52	197	250	

第30表 テフラ検出分析結果 (2)



第74図 重鉱物組成及び火山ガラス比

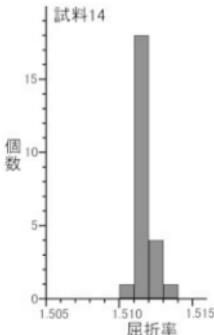
#### 4 考察

発掘調査所見において橙色スコリアとされた試料は、テフラ検出分析により軽石を多量に含む堆積物であることが確認されたことから、軽石質テフラの降下堆積物が降下後の搅乱を受けながらも土壤中に残存したものである可能性がある。

この試料は、軽石質テフラであること、採取された層位が霧島御池テフラ（Kr-M）よりも上位とされていること、および高樋遺跡の地理的位置を踏まえると、桜島を給源とするテフラに由来する可能性がある。なお、検出された軽石が、Kr-Mの再堆積物である可能性については、重鉱物組成において角閃石がほとんど含まれないことと、Kr-Mの火山ガラスの屈折率n1.508-1.511（町田・新井2003）よりも若干高いレンジであることから、その可能性は低いと考えられる。

Kr-Mと桜島テフラとの層位関係について、永追ほか（1999）により、鹿児島県の肝属平野においてKr-Mの下位にSz-7が確認されている。したがって、Kr-Mよりも上位と考えられる桜島起源のテフラとしては、Sz-6より上位のテフラが考えられる。発掘調査では、Sz-3とされている15世紀の文明テフラが土層断面に確認されていることから、今回分析された軽石質テフラは、Sz-6、Sz-5、Sz-4のいずれかに対比される可能性がある。これらのうち、Sz-6とSz-4は桜島の東方あるいは東南東方向の狭い範囲にのみ分布し、Sz-5は桜島から北方向に向かって分布している（小林・江崎,1997）。このようなテフラの分布と高樋遺跡の地理的位置を考慮すると、今回検出されたテフラはSz-5に対比される可能性がある。

ただし、これら桜島起源のテフラの噴出年代については次のような課題があり、注意を要する。奥野（2002）においては、Sz-5の噴出年代が暦年で5600年前、Sz-5より下位であるSz-7の噴出年代が5000年前とされ、層位的に矛盾すると指摘されている。また、Kr-Mの噴出年代は4600年前とされ、Sz-5の年代値はこれよりも古い。



第75図 火山ガラスの屈折率測定結果

#### 文献

- 古澤明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別,地質学雑誌,101,123-133.
- 小林哲夫・江崎真美子,1997,桜島火山,噴火史の再検討,月刊地球19,227-231.
- 町田洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 永追俊郎・奥野充・森脇広・新井房夫・中村俊夫,1999,肝属平野の完新世中期以降のテフラと低地の形成,第四紀研究,38,163-173.
- 奥野充,2002,南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代,第四紀研究,41,225-236.

## 第V章 総括

高槻遺跡では、弥生時代を除く縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物が確認された。そこで、最終章である本章では、確認された各時代の遺構・遺物をもとに、それぞれの時代の様相について、若干の考察を加え、まとめとしたい。

### 第1節 縄文時代

高槻遺跡の所在地である都城市梅北町あるいは隣接する安久町内などに所在する都城盆地南部の遺跡において、櫻島末吉テフラを包含する黒褐色土層中あるいはその下位層で早期の遺構・遺物が検出される例が多い。本遺跡においても、2基の集石遺構が検出されている。この集石遺構の掘り込み内から炭化物が出土しており、放射性炭素年代を行ったところ早期に含まれる較正年代が得られ、2基の集石遺構の間にさほど時期差がないことが判明している。

遺物をみると、貝殻文円筒形土器として、早期前葉の椿ノ原式土器（1～5）、早期中葉の下剣峯式土器（10～14）、早期後半の窓ノ神式土器（15）、そして円筒形を呈するとみられる椿円押型文土器（16）が出土し、2点の石鏃も出土している。早期の遺物の量は少なく、出土土器で示されるとおり時期幅が大きいことから断続的な生活の痕跡と考えられる。集石遺構の疊については、元々小ぶりな自然疊で、被然を繰り返し受けていないことが推測される。

縄文時代前～中期の遺構は、霧島御池軽石の下位層で検出された土坑3基、集石遺構4基があり、遺物としては深浦式土器と石鏃、石匙、スクレイバー、磨石が確認されている。縄文時代前期から中期にかけての都城市内の遺跡は少なく、これは鬼界アカホヤ火山灰降下の影響も一因と考えられる。当該期の遺跡として知られているのは、南横市町の加治屋A遺跡や、本遺跡と隣接する筆ヶ崎遺跡などであり、筆ヶ崎遺跡からは、縄文時代前葉から中期前葉に含まれる広義の曾畠式系土器や深浦式土器が出土している。並行する縱方向の突帯文や列点文、押引文

など、当該期の土器群の文様要素を備えており、丸底で砲弾形に近い器形が推定できる個体もある。高槻遺跡から出土した土器群も、器形、文様など、概ね筆ヶ崎遺跡と共通する特徴を持つ土器群と位置づけられよう。なお、3号集石遺構の掘り込み埋土から炭化材が検出されており、放射性炭素年代測定では較正年代で約3,200～3,300calBPの年代が得られている。このように、筆ヶ崎遺跡出土資料も含めて、未だ断片的ながら、当地域における鬼界アカホヤ火山灰降下後、植生の回復に向かう時期の人々の生活の痕跡を捉えられたことは大きな成果であった。

縄文時代晩期の遺構は土坑1基のみである。遺物としては、黒川式の深鉢や浅鉢、組織痕土器が確認されている。無刻目突帯文を有する深鉢・鉢や孔列土器の存在からみて、全体的には黒川式でも新しい段階の土器群と考えられるが、浅鉢の中に口縁部外面に沈線文を巡らせるものがあり、時期幅も認められる。なお、黒川式期の遺跡で土坑が数多く検出されることはずで指摘されており（東2006）、都城市内でも大塙第1遺跡や平峰遺跡などで検出例がある。また、孔列土器は、九州南東部では少ない貫通する孔列を有するものである。

縄文時代全時期の石器組成を概観すると、遺跡から抽出した縄文時代の石器15点のうち6点（40%）が石鏃の狩猟具であり、磨石の植物調理用石器は1点（7%）、石匙2点（13%）、スクレイバー1点（7%）、使用痕剥片1点（7%）などの加工工具が20%であり、狩猟具の割合が高い傾向が観察できる。

### 第2節 古墳時代

今回、方形の竪穴建物跡8軒とそれらに伴う土師器が多数出土した。出土した土器群は、その形態や製作技法などから、いわゆる成川式土器の特徴を色濃く有する。ここでは、まず、土器の様相を器種別に記述して時期比定を行った後に、竪穴建物の特徴に言及したい。

#### (1) 出土土器の特徴

成川式土器の壺の型式は、内外面ともに屈曲部の稜線が残るものから、屈曲部分が緩やかになり、直立に近いが端部が緩く外反するか、もしくは短く外

反する形態を経て、口縁部が直立もしくは内湾気味になる筒貫式の段階（古墳時代後期）に変化すると考えられている（中村2015）。高橋遺跡から出土した広口の甕10点の特徴をみると、そのほとんどが筒貫式段階の甕の形態と類似している。甕の底部に着目すると、底部の形状が明確な遺物は20点のうち、平底のものが14点、丸底あるいは凸レンズ状のものが6点となっている。薩摩・大隅地域に分布する成川式土器は、脚台付きの甕が特徴の一つであるが、本遺跡では平底が主で、脚台付きの甕は出土していない。これは都城市内の平峰遺跡や大年遺跡も同様であり、さらには加久藤盆地の様相も同じである（甲斐2015）。

また、甕の特徴として、外面の仕上げとなる器面調整を行っていないことから、粘土紐を積み上げた際の接合痕が外面に幾重にも残っている。口縁端部の仕上げも甘く、丸みを帯びて指おさえ痕が残っているものもあることから、器面調整や仕上げ方の粗雑化の傾向が認められる。この点も、平峰遺跡などと共に通する特徴である。

古墳時代の土器器の中では、最も高い割合で出土したのは高環である。ここで、坏部は平峰遺跡の報告における分類基準、脚部裾は近沢（2016）のそれに則って分類する。坏部の形態は、外形によって、A群：底部と口縁部の境が明晰で口縁は強く外反する、B群：底部と口縁部の境は比較的はっきりしており、口縁は弱く外反する、C群：底部と口縁部の境があまり明晰でなく、口縁が直線的にのびる、D群：底部と口縁部の境が不明瞭で、底部から口縁部にかけて内湾する、の4類型を設定する。これらの分類基準が判別できる25点を対象としたところ、A群は0点、B群は11点（44%）、C群は12点（48%）、D群は2点（8%）となり、C群、B群の順で多く出土したことが分かった。平峰遺跡の報告では、坏部の底部と口縁部の境の段の退化と、坏底部の丸底化を指摘し、A群→B群→C群→D群に変化したと考えている。次に、脚部裾は、脚a：脚部が脚柱部と脚裾部に分かれ、脚柱部は直線的もしくはエンタシス状で脚裾部は伏せた皿状のもの、脚b：脚部が脚柱部と脚裾部に分かれ、脚柱部は直線

的もしくはエンタシス状で脚裾部には一段の段が形成されるもの、脚c：坏部との接合点から裾部にかけてハ字状にやや外反しながら開くもの、との3類に分類する。これらの分類基準が判別できるものは30点あり、脚aは8点（27%）、脚bは2点（6%）、脚cは20点（67%）と脚cが最も多く出土している。脚cは古墳時代中期後半～後期が主体であり（近沢2016）、この点からも、遺跡形成の主時期が推定できる。

小型土器は、ほとんどの堅穴建物跡で出土しており、特に2号堅穴建物跡から8点、5号堅穴建物跡から9点に加え、包含層から杓子状土器が出土している。南九州では土器のミニチュア品や土製品が成川式土器のセットの中に含まれている。これらは実用品としては小さく、そのほとんどが祭祀用の道具である（中村2015）。これらのことから、本遺跡内において建物単位の何らかの祭祀が日常的に行われていたことが指摘できる。

## (2) 堅穴建物跡の時期

次に、各堅穴建物跡の時期について、遺構の床面から出土した遺物を中心に、甕や高环、壺、鉢、小型丸底壺について中村（2002）、近沢（2016）の成川式土器・土器編年や1号堅穴建物跡の床面付近の炭化材の年代測定結果も参考にしながら考えてみたい。

改めて述べるまでもなく、床面直上の遺物は堅穴建物跡の時期を決定付ける重要な資料となる。古墳時代に属する本遺跡の8軒の堅穴建物跡の出土遺物の中で、3号及び8号堅穴建物跡を除いて床面直上から出土した遺物は数多くあった。ただし、同一遺構出土であっても型式幅が認められる場合もあり、時期比定した資料の中から最も時期が下る個体を堅穴建物跡の所属時期の指標とした。その結果、1号・2号・4号・6号・7号堅穴建物跡は5世紀後半から6世紀前半の時期に比定される。3号・8号もそれぞれ1号・6号・7号と主軸が揃うため、ほぼ同時期の可能性が高いと考える。一方、5号堅穴建物跡は6世紀中期以降の構築と推測される。全体としてみても、古墳時代中期後半（5世紀後半）～後期前半（6世紀前半）におさまる建物群と考えられる。

### (3) 出土土器の器種構成

今回の調査で出土した古墳時代の土師器の中で報告書に掲載したものは、178点である。それらについて甕、壺、高坏、鉢、小型土器（杓子状土製品も含む）、に分けてみると、甕は35点（20%）、壺は24点（13%）、高坏は69点（39%）、鉢は13点（7%）、小型土器は35点（20%）、その他2点（1%）で、高坏が約4割で、多く占めている。甕の中で頸部が確認できる22点のうち、13点（約60%）が突帯を有する甕であることから特徴である。

また、古墳時代の須恵器が1点も出土していない点も特筆すべきであろう。南九州では笠貫式時期の堅穴建物から須恵器の杯などが出土するもののきわめて少なく、生活の容器として普及していたとは考え難い。5～6世紀の南九州では須恵器生産が未だ行われておらず、一般集落レベルまで流通が行き届かなかったと考えられている（広瀬2015）。都城盆地南部に位置する本遺跡においても同様の状況が指摘できよう。

### (4) 堅穴建物跡の火廻について

古墳時代の堅穴建物の火廻としては、が<sup>フ</sup>や竈があり、5世紀には竈が普及する地域が多いが、同時期の南九州には導入されていない。南九州の5～6世紀の堅穴建物は、概ね3～5m四方の方形プランで中央に炉を設置する例が多い（広瀬2015）。本遺跡で検出された8軒の堅穴建物跡は、すべての堅穴建物跡の中央部付近から焼土の広がりが確認されるとともに、焼けた粘土塊も検出されたことから、地床炉である可能性が高い。

### (5) 鉄器生産について

鉄器生産関連製品が複数の堅穴建物跡から出土していることは、本遺跡において注目すべき点である。4号堅穴建物跡は、輪の羽口、高坏脚部の転用羽口、鉄片、5号堅穴建物跡は輪の専用羽口、団化していないが小片の鉄滓、鉄片が出土し、さらに鉄器のメントテナンスに欠かせない砥石も共伴している。また、1号、2号、8号堅穴建物跡の埋土からも鉄滓や鉄片の小片が出土している。これらのことから、集落内において、何らかの鉄の生産が行われていたことは確実である。古墳時代中期（5世紀）の宮城県と

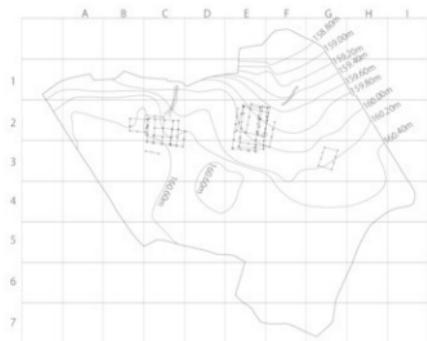
鹿児島県において、高坏の転用羽口が出土しており、4～5世紀の鍛冶炉の多くが堅穴建物跡同様の家屋の床面に造られた直径1m未満の円形の屋内炉であるとされている（野島1997）。しかし、平峰遺跡でも鉄滓や高坏の脚部転用羽口などの鍛冶関連の遺物が検出されているが、羽口が出土する建物跡内で鍛冶炉と考えられる強く被熱した炉跡の検出はなかつた。本遺跡においても、地床炉の可能性がある痕跡はあったものの、鍛冶炉と思われる痕跡ではなく、遺構内より金床石等の工具が見つかっていない。さらに、輪の専用羽口や高坏脚部の転用羽口が出土した4号、5号堅穴建物跡からは、煮沸用で煤の付着した甕、貯蔵用の壺、食器用の高坏も多数共伴している。このことから、4号、5号堅穴建物跡は鍛冶工房跡とするよりも、住居跡として捉え、日常生活の一環として鍛冶行為が行われ、小鍛治的な様相を呈していたのではないかと考えたい。

## 第3節 古代～中世

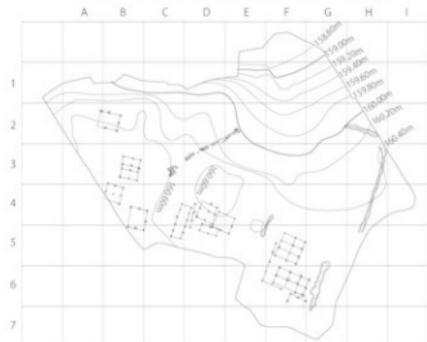
本遺跡からは掘立柱建物跡が多数検出された。その中で、遺物を伴う古代～中世の掘立柱建物跡を14棟、近世のものは5棟としたが、時期不明の13棟を含め、ここでは主軸や埋土も合わせてその配置等について考えていく。

古代～中世のI群は、埋土が黒褐色土に橙色バミスを含み、主に南北より西偏約10°以下、II群は、埋土に桜島文明軽石を含み、主に南北より西偏10°以上～20°以下、近世は、埋土に桜島文明軽石を含み、主に南北より西偏約20°以上とした。全体的に、掘立柱建物跡の主軸は時代が進むにつれて、徐々に西に振れる傾向にあると考えられる（第76図）。

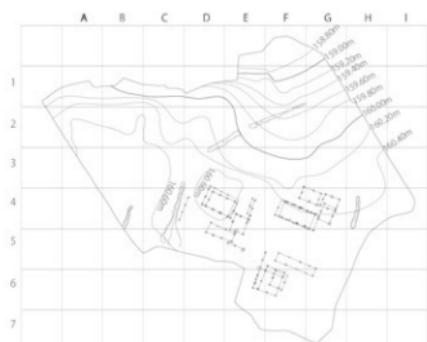
まず、古代～中世（桜島文明軽石降下以前）において、形成された群が6棟の集落のI群である。3号掘立柱建物跡は二面庇を付帯する総柱建物であることから、I群の中では主殿的な建物であり、4号・21号掘立柱建物跡は、付属建物としての機能があつたのではないかと推測される。ただ、1号・2号掘立柱建物跡も側柱建物であるが、庇が付帯し、身舎面積も比較的大きい建物であることから、母家に近い形の建物である可能性も指摘できる。なお、1号



I群：中世前半（文明軽石降下前）の遺構群



II群：中世後半（文明軽石降下後）の遺構群



III群：近世の遺構群

0  
1/1200  
40m

第76図 古代～中世以降の遺構群の変遷

と2号掘立柱建物跡は建て替えが行われているが、どちらが早く建てられたかについては不明である。出土遺物については桑畑（2004）や小野分類（1982）から15世紀に比定される。また、掘立柱建物跡へと通じる道路状遺構も同時期であろう。これら掘立柱建物跡の立地としては、北側に集中しているが、なぜ、北側に掘立柱建物跡が並んでいるのか。それは高槻遺跡の北北東約600mにある、遮るものが多く一望できる梅北城と関係があるのではないかと考えられる。高槻遺跡の南側にある篠ヶ崎遺跡では、14～15世紀前半頃の中世段階には丘陵を利用した一連の施設構造物を形成するとともに、特定身分の者に関連した場所として、施設構造物は防御施設を備えた居館またはそれに類する場所であった可能性を指摘している。その後、15世紀後半には、廃絶されたと考えられている。ただし、篠ヶ崎遺跡の居館的な掘立柱建物跡に比べて柱穴は細く、高槻遺跡ではより簡素な施設群であったと推測される。

次いで、中世の後半期の桜島文明軽石降下後に形成された建物群がII群である。I群に比べて、全体的に南側の平坦な場所に建てられており、2間×2間の庇のない欄柱建物が多い。また、3号溝状遺構の西側周辺は、複数回建て替えが行われていることが分かる。1号竪穴状遺構の床面から出土した炭化材は、年代測定の結果、較正年代で16世紀中葉～17世紀前葉の結果が得られている。高槻遺跡では中世末～近世初頭にも施設は存在したが、梅北城との関係で建物がより奥に退いたとも考えられる。

篠ヶ崎遺跡では、当時貴重だった龍泉窯系青磁・白磁・天目茶碗をはじめとする陶器が数多く出土している。貿易陶器の出土遺物として、青磁では上田分類（1982）D類やE類の14～16世紀初頭、白磁では森田分類（1982）や景德鎮窯系などの15～16世紀、青花では小野分類（1982）の皿B群やC皿群の15～16世紀、国産陶器（備前焼）では擂鉢IV A-2やIV B-2・3の14～16世紀初頭と時期比定できる。本遺跡でも、中世の貿易陶器が小片ではあるものの数多く出土していることから、篠ヶ崎遺跡で想定された特定身分の者に関連する施設と関係するものかもしれない。

## 第4節 近世以降

本遺跡から掘立柱建物跡が多数検出された中で、近世の遺物を伴う掘立柱建物跡5棟と埋土・主軸の関係からII群以外の時期不明の6棟を含めて、一群の遺構群とする。

まず、中世II群の建物群よりも全体的にやや中央部へ移動している。その中で、8号溝状遺構の西側では、複数個所において建物の建て替えが行われたと思われる。これらの建物は、縦柱建物ではなくすべて側柱建物で、小規模な建物が多い。遺物は、国産陶器（薩摩焼）の龍門司系の甕や擂鉢などから、18世紀後半～19世紀に時期比定できる。

## 第5節 結語

今回は、台地状の地形の一部を範囲とする発掘調査であったが、縄文時代早期から近世に至る都城盆地南部地域の歴史的な地域相の一端を捉えることができたことは大きな成果である。今後も継続して実施される都城志布志道路関連の発掘調査の成果とあわせて、都城盆地南部の歴史がより明確になっていくものと期待される。

## 引用・参考文献

- 相美伊久雄 2004 「成川式土器」の器種組成について(予察)・杯形土器の様相を中心に-』『縄文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター今塩屋毅行・松永幸寿 2002 「日向における古墳時代中～後期の土師器-宮崎平野部を中心にして-』『古墳時代中～後期の土器-その編年と地域性- 第5回九州前方後円墳研究会 発表要旨資料』第5回九州前方後円墳研究会実行委員会上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁の分類について』『貿易陶器研究』No.2 日本貿易陶磁研究会小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代』『貿易陶器研究』No.2日本貿易陶磁研究会甲斐康大 2015 「成川式土器の北のひろがり』『成川式土器ってなんだ?』鹿児島大学総合研究博物館鎌田浩平 2009 「成川式土器の地域編年』『南の縄文・地域文化論考 新東見一代表遺曆記念論文集』

中巻

- 黒川忠広 2012「鹿児島県における古墳時代の鍛冶  
関連資料の紹介」『鹿児島県立埋蔵文化財センター  
研究紀要』
- 梶畠光博 2004「都城盆地における中世土師器の編  
年に関する基礎的研究Ⅰ」「宮崎考古」第19号
- 近沢恒典 2016「都城盆地における古墳時代の土器  
について」『宮崎平野地域の考古資料に関する編年  
的研究Ⅱ』宮崎考古学会
- 外山隆之・原田亜希子 2004「都城市における中世  
掘立柱建物跡の類型化」「宮崎考古」第19号
- 中村直子 1987「成川式土器再考」「鹿大考古」第6  
号
- 中村直子 2002「薩摩・大隅、古墳時代中・後期の土  
器」・その編年と地域性・』第5回九州前方後円  
墳研究会 発表要旨資料』第5回九州前方後円墳  
研究会実行委員会
- 中村直子 2009「7・8世紀の成川式土器」「南の縄  
文・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集」  
中巻
- 中村直子 2015「祭祀と成川式土器」「成川式土器っ  
てなんだ?」鹿児島大学総合研究博物館
- 野島 永 1997「弥生・古墳時代の鉄器生産の一様  
相」「たたら研究」第38号
- 橋本達也 2015「成川式土器と鹿児島の古墳時代研  
究」「成川式土器ってなんだ?」鹿児島大学総合研  
究博物館
- 東 和幸 2006「鹿児島における縄文時代の課題」  
『南九州縄文通信』17
- 広瀬和雄 2015「成川式土器と前方後円墳」鹿児島  
大学総合研究博物館
- 本田道輝 1997「南部九州における脚台付甕の底部  
成形について」「人類史研究」第9号
- 森田 勉 1982「14~16世紀の白磁の型式分類と  
編年」「貿易陶磁器研究」No.2、日本貿易陶磁研究  
会
- 都城市史編さん委員会編 2006「都城市史」資料編  
考古 都城市
- 都城市史編さん委員会編 2006「都城市史」通史編  
中世近世 都城市

宮崎県埋蔵文化財センター 2013「平峰遺跡(3次調  
査)」宮崎県埋蔵文化財センター報告書第219集

宮崎県埋蔵文化財センター 2016「笠ヶ崎遺跡」宮  
崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第240集

宮崎県埋蔵文化財センター 2016「大窪第一遺跡」  
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第238集





高槻遺跡近景(遺跡北から金御岳方面を望む)



1号竪穴建物跡遺物出土状況(東より)



1号竪穴建物跡完掘状況(南より)



2号竪穴建物跡遺物出土状況(北東より)



2号竪穴建物跡完掘状況(北より)



3号竪穴建物跡完掘状況(南より)



4号竪穴建物跡遺物出土状況(北より)



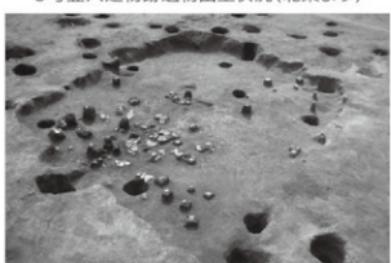
4号竪穴建物跡完掘状況(北より)



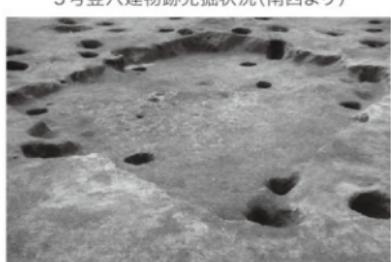
5号竪穴建物跡遺物出土状況(北東より)



5号竪穴建物跡完掘状況(南西より)



6号竪穴建物跡遺物出土状況(東より)



6号竪穴建物跡完掘状況(東より)



7号竪穴建物跡完掘状況(東より)



8号竪穴建物跡完掘状況(西より)



1号竪穴状遺構完掘状況(北より)



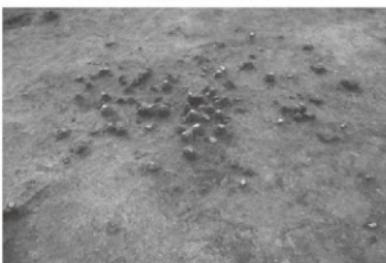
2号竪穴状遺構土層堆積状況(北より)



1号集石遺構検出状況(北西より)



2号集石遺構検出状況(東より)



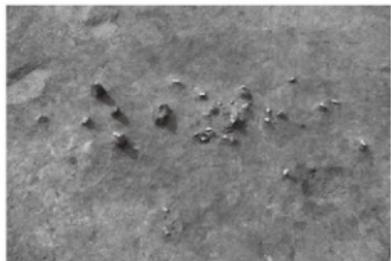
3号集石遺構検出状況(東より)



4号集石遺構検出状況(東より)



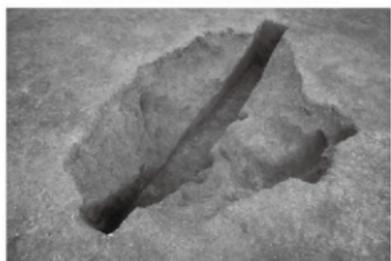
5号集石遺構検出状況(北東より)



6号集石遺構検出状況(北東より)



1号土坑完掘状況(東より)



2号土坑完掘状況(南西より)



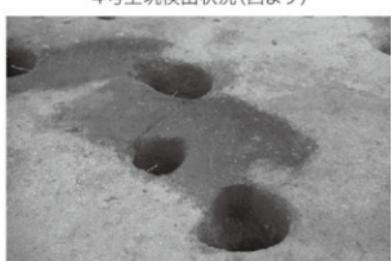
3号土坑完掘状況(北西より)



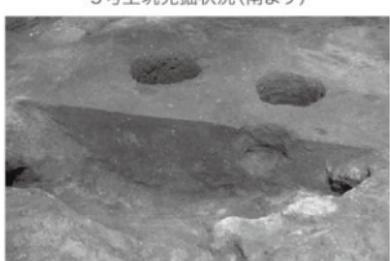
4号土坑検出状況(西より)



5号土坑完掘状況(南より)



6号土坑検出状況(南より)



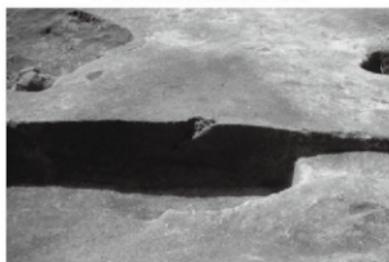
7号土坑土層断面(東より)



8号土坑完掘状況(北より)



9号土坑完掘状況(東より)



10号土坑土層断面(北より)



1号溝状遺構遺物出土状況(北より)



2号溝状遺構完掘状況(南より)



3号溝状遺構検出状況(北より)



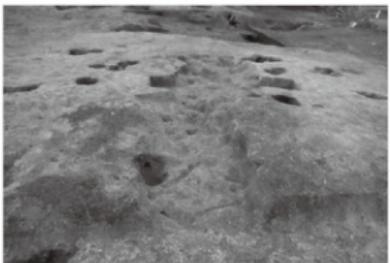
4号溝状遺構完掘状況(北東より)



5号溝状遺構完掘状況(北東より)



6号溝状遺構完掘状況(北西より)



7号溝状遺構完掘状況(南より)



8号溝状遺構完掘状況(南より)



1号道路状遺構検出状況(東より)



2号道路状遺構検出状況(南東より)



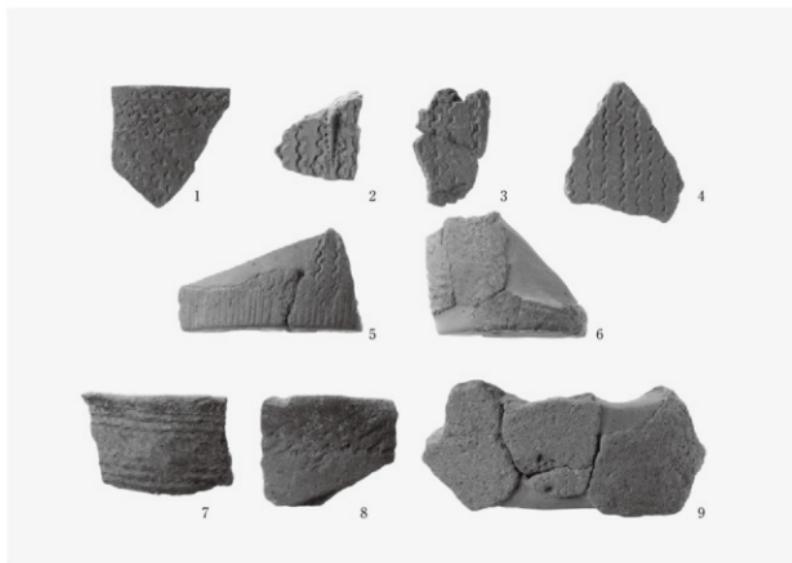
3号道路状遺構完掘状況(東より)



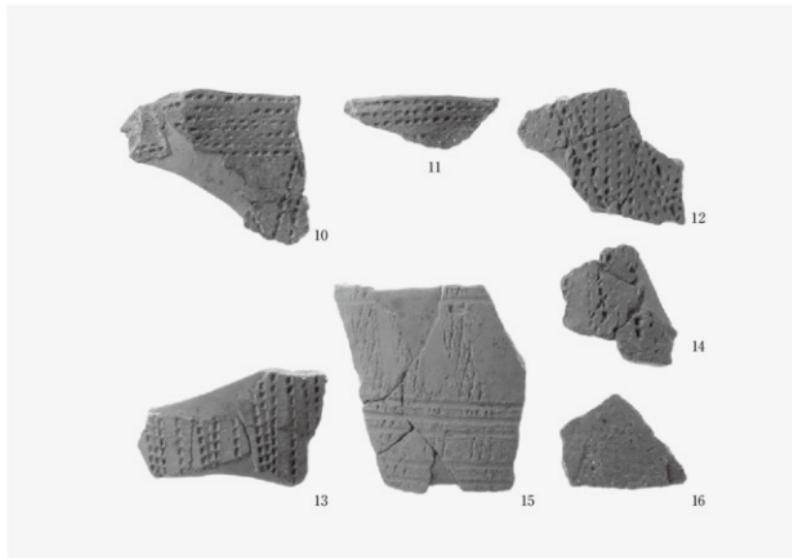
4号・5号道路状遺構完掘状況(南西より)



発掘作業の様子

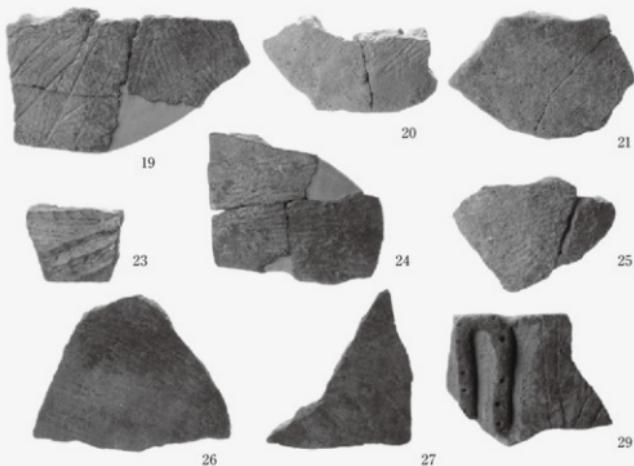


縄文土器(早期) 1

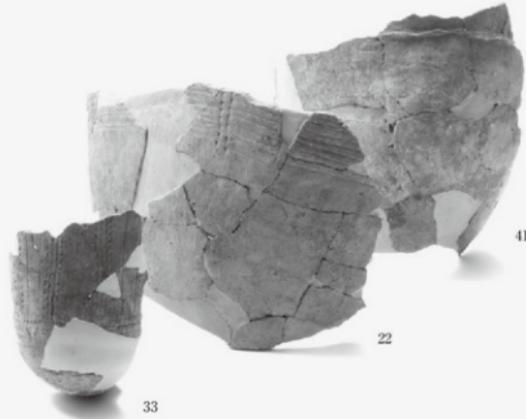


縄文土器(早期) 2

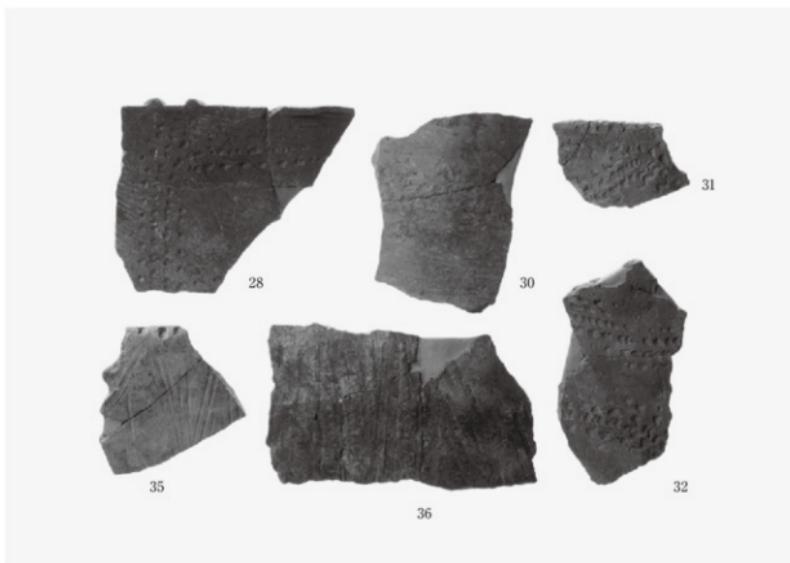
圖版八



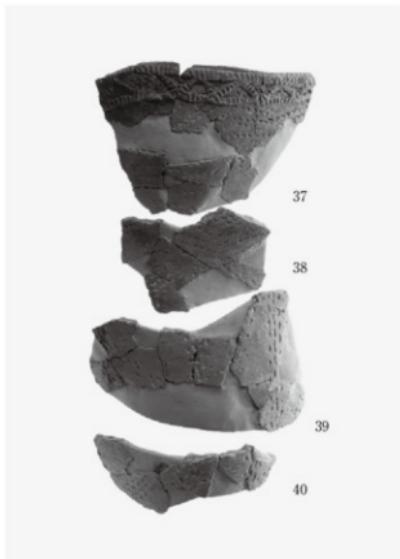
繩文土器(前～中期) 1



繩文土器(前～中期) 2



縄文土器(前～中期) 3



縄文土器(後～中期) 4



43

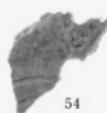


44

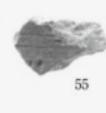


45

縄文土器(前～中期) 5



54



55



56



57



58



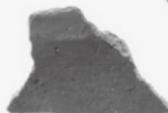
59



60



61



62



63



64



65



66

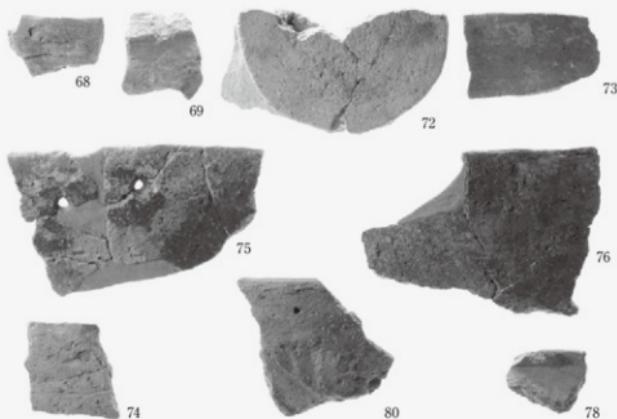


67

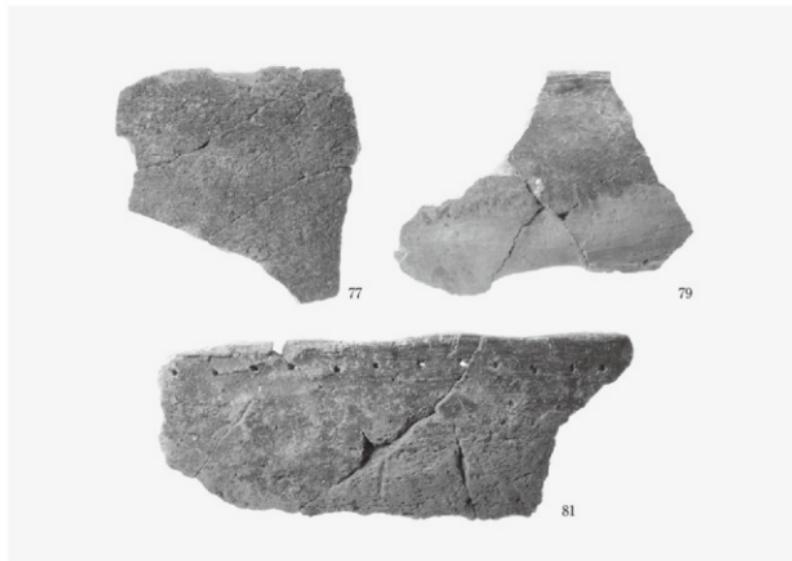
縄文土器(後～晩期) 1



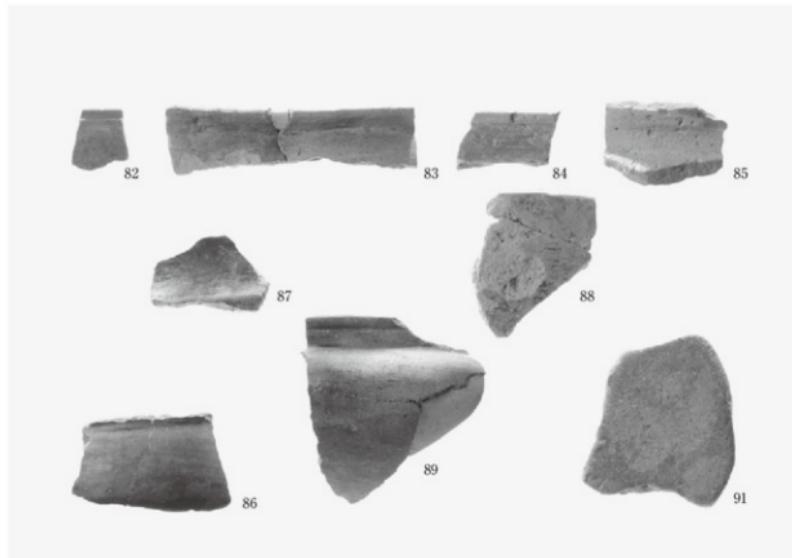
縄文土器(後～晚期) 2



縄文土器(後～晚期) 3



縄文土器(後～晩期)4



縄文土器(後～晩期)5



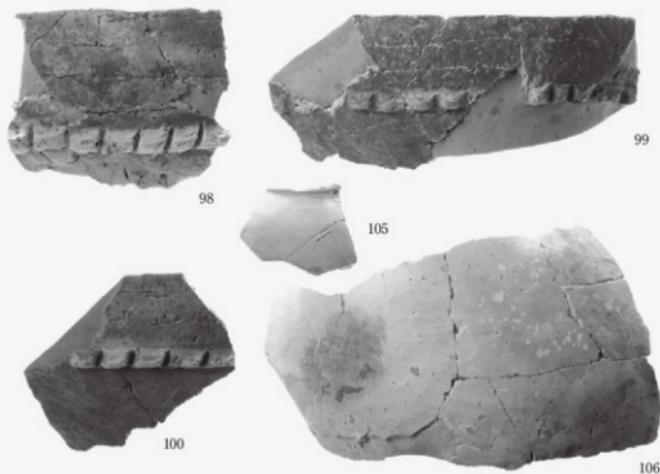
90

縄文土器(後～晚期) 6

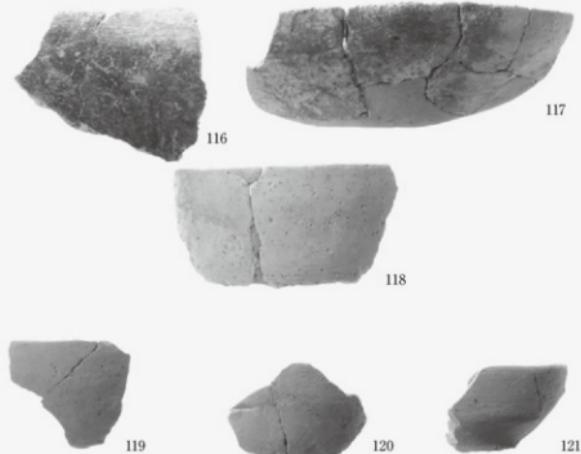


70

縄文土器(晚期) 7



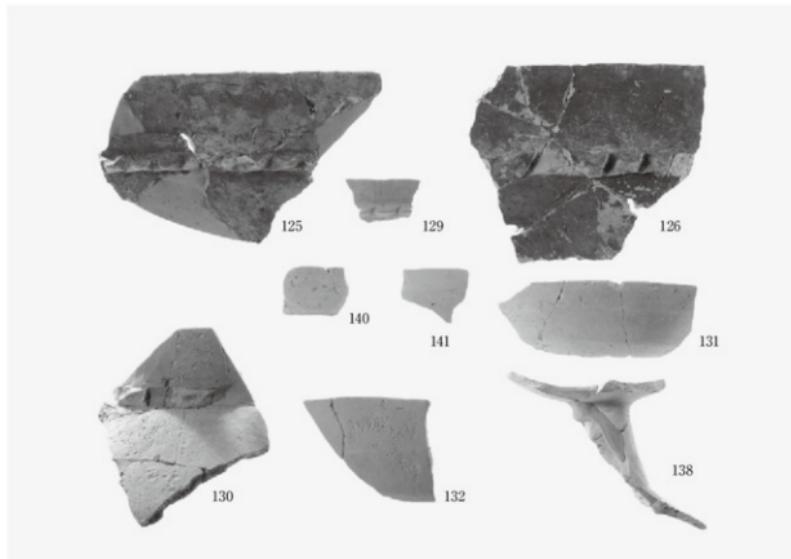
1号竪穴建物跡出土遺物1



1号竪穴建物跡出土遺物2



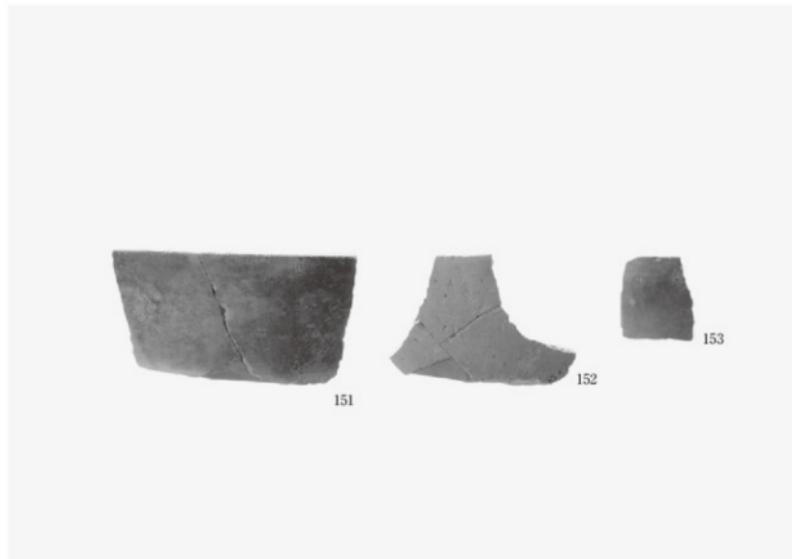
1号竖穴建物跡出土遺物3



2号竖穴建物跡出土遺物1



2号竖穴建物跡出土遺物2



3号竖穴建物跡出土遺物1



3号竖穴建物跡出土遺物2



4号竖穴建物跡出土遺物



5号竪穴建物跡出土遺物1



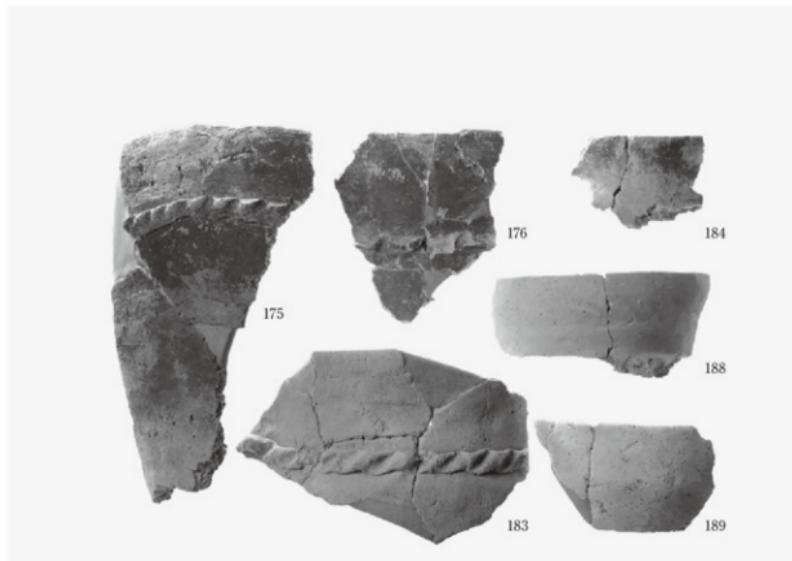
5号竪穴建物跡出土遺物2



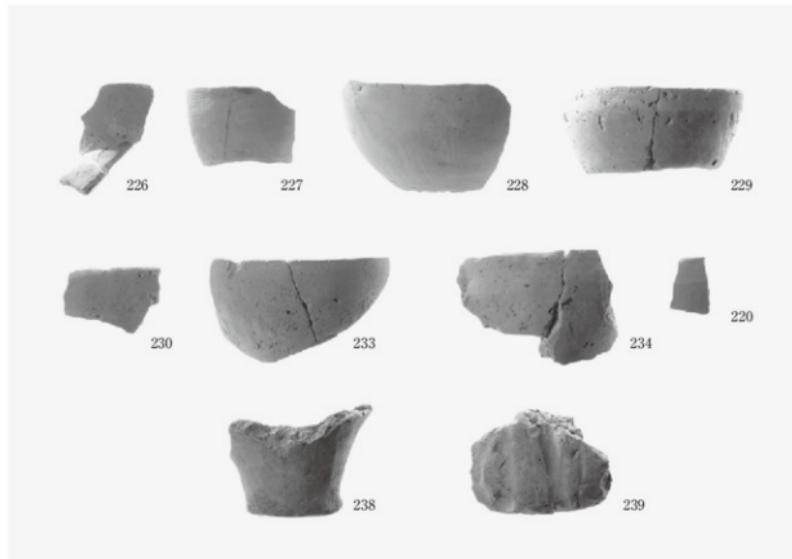
5号竖穴建物跡出土遺物3



5号竖穴建物跡出土遺物4



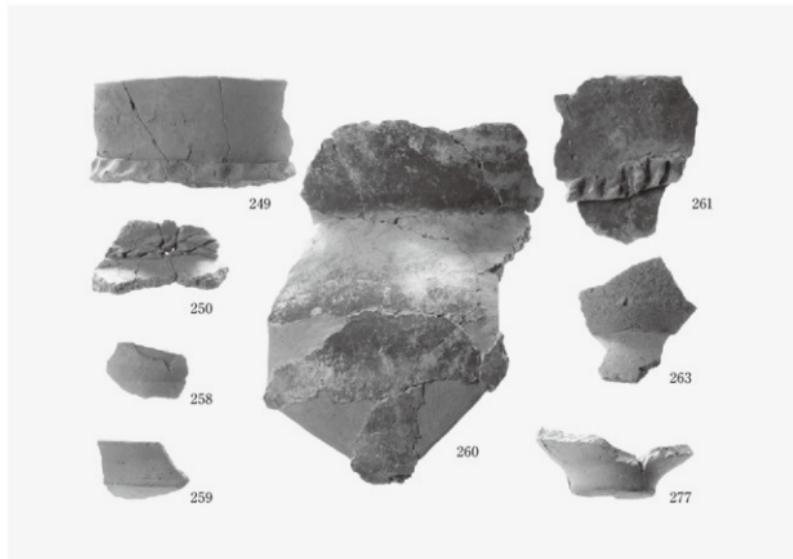
5号竪穴建物跡出土遺物5



5号竪穴建物跡出土遺物6



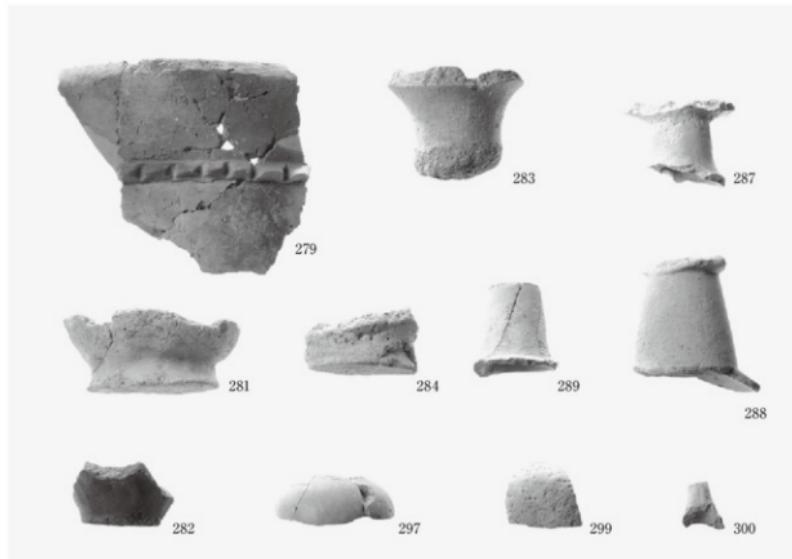
6号竖穴建物跡出土遺物1



6号竖穴建物跡出土遺物2



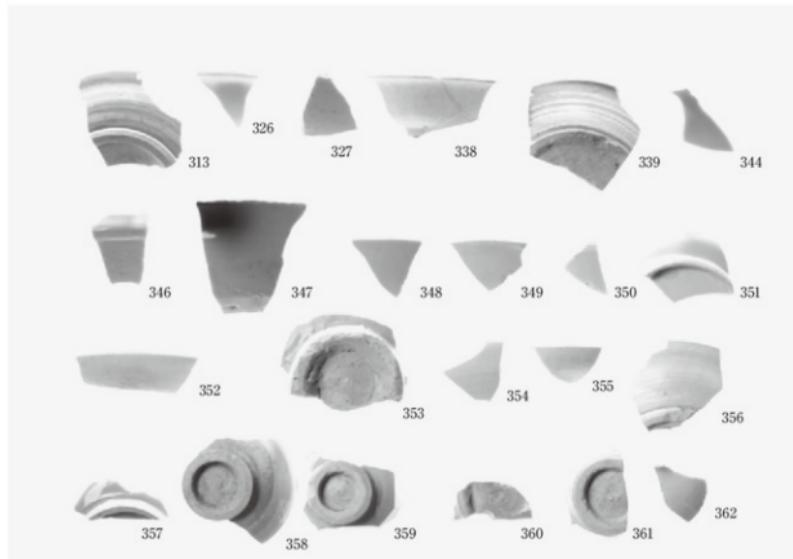
7号竪穴建物跡出土遺物



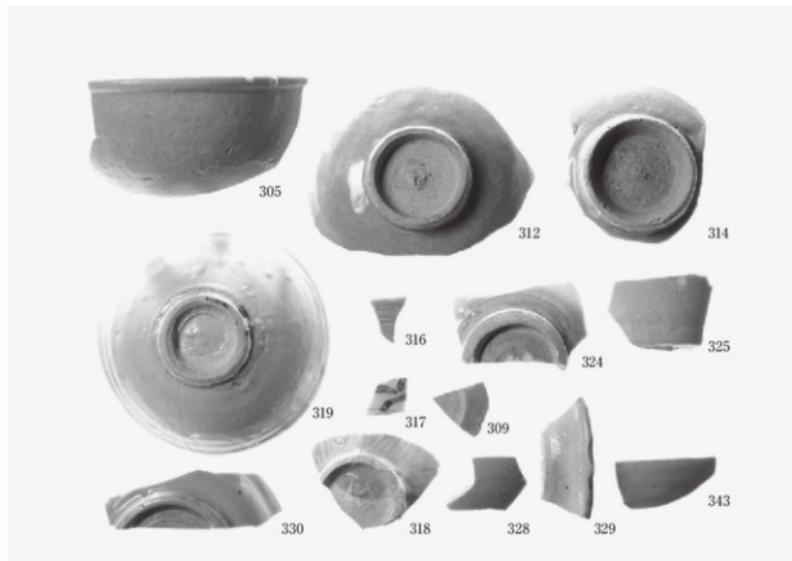
遺構以外からの出土遺物(古墳時代土師器) 1



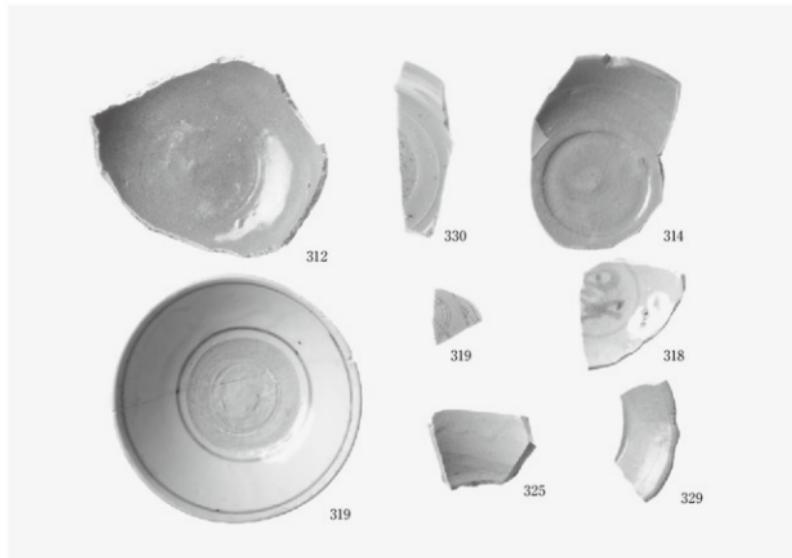
遺構以外からの出土遺物(古墳時代土師器)2



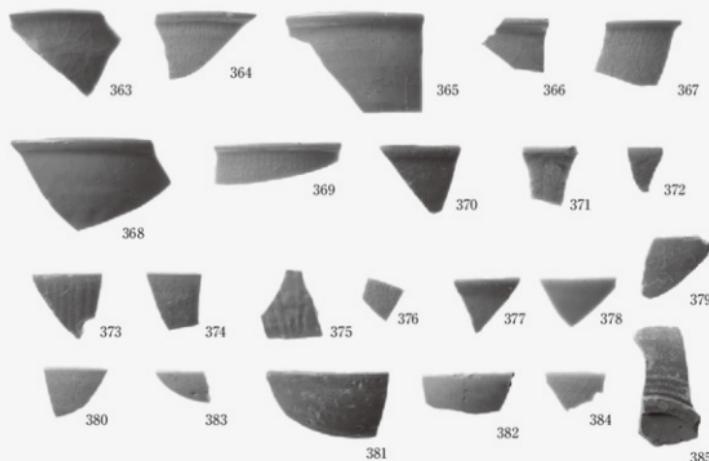
白磁(外面・底部)



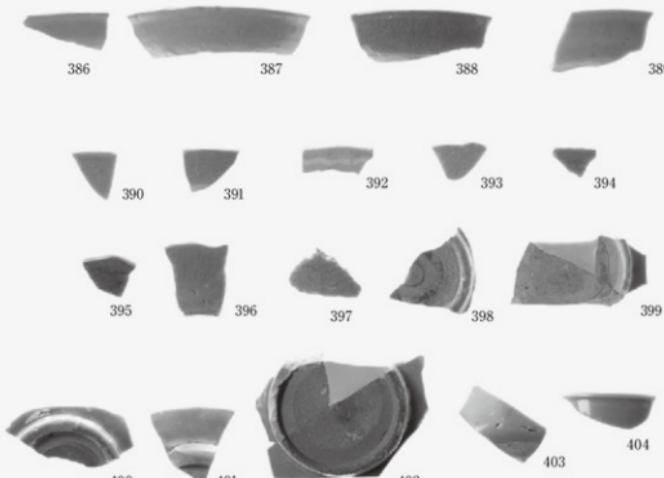
青磁1(外面・底部)



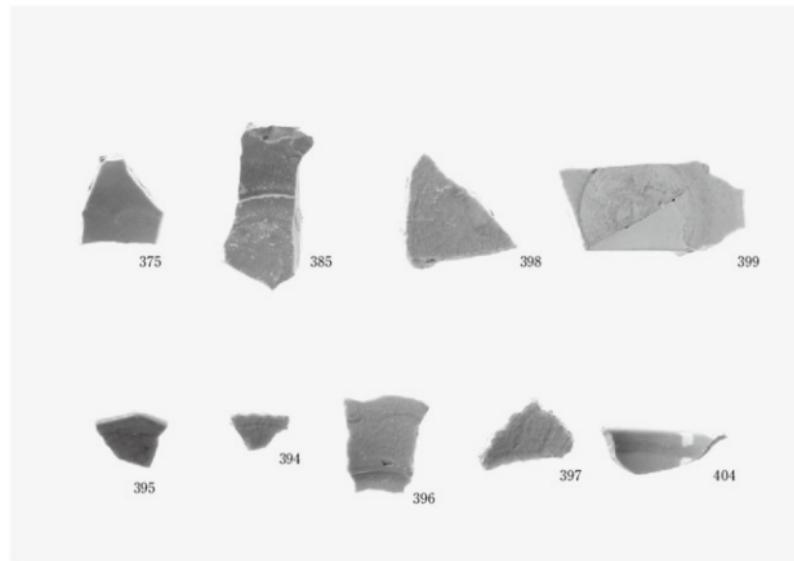
青磁2(内面)



青磁3(外面・底部)



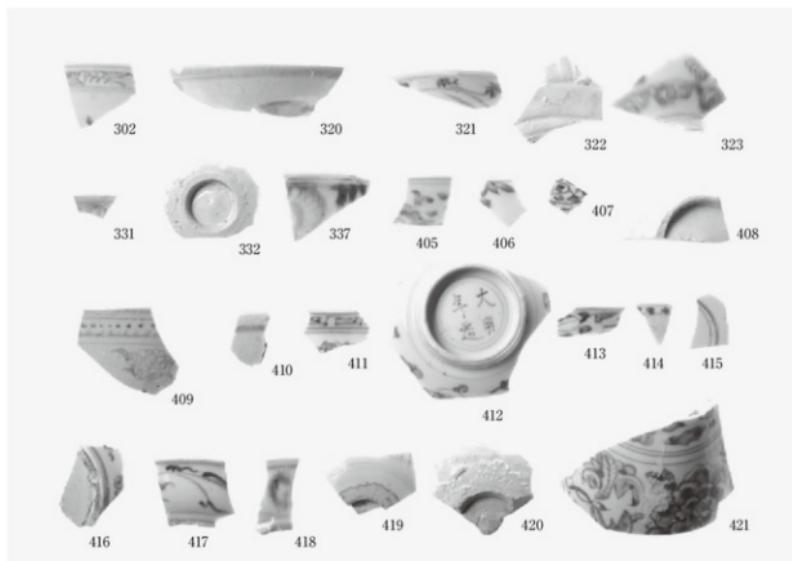
青磁4(外面・底部)



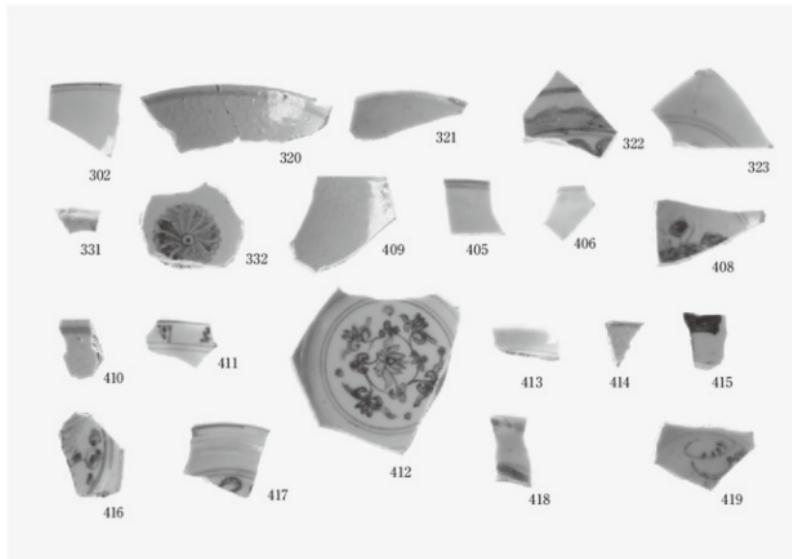
青磁5



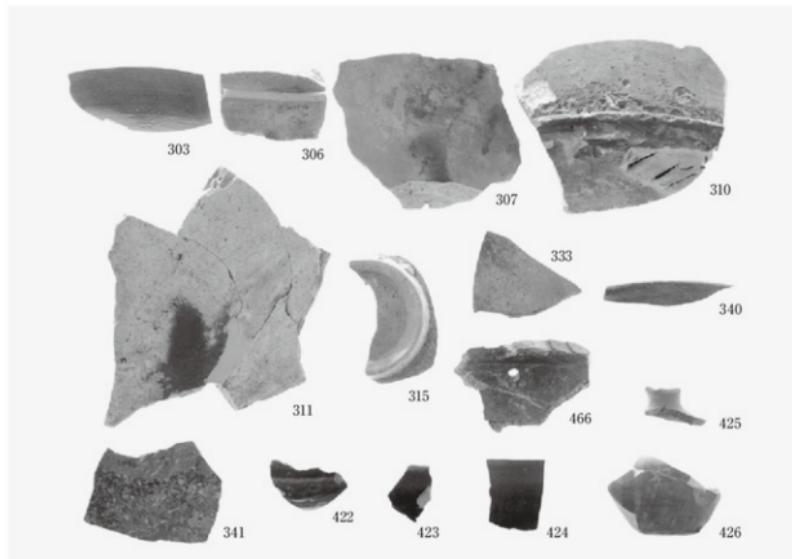
青磁6



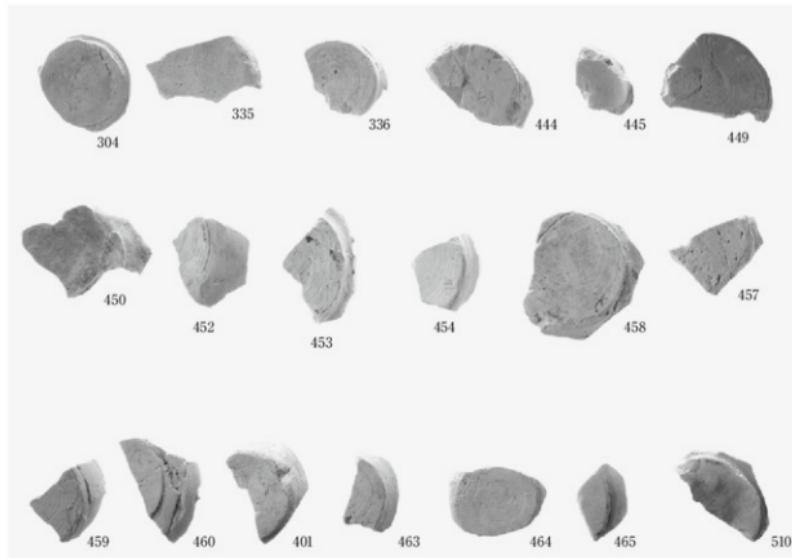
青花1



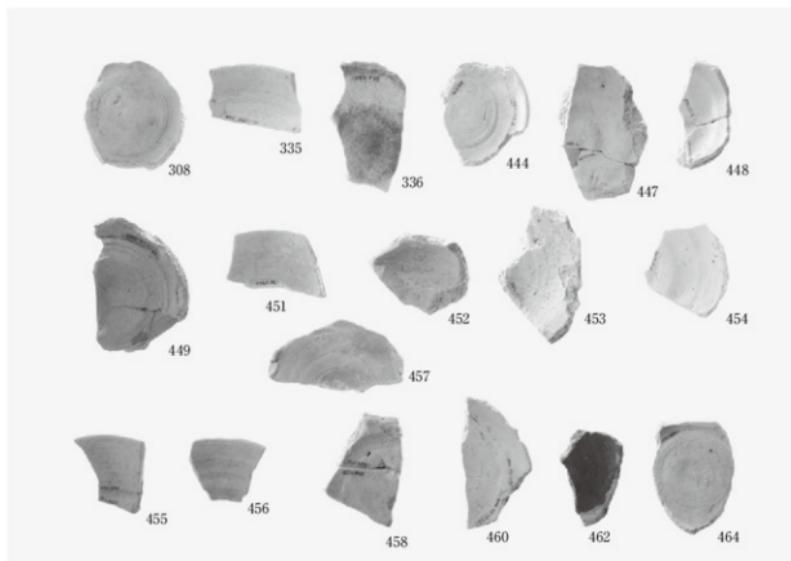
青花2



陶器・瓦器等



土師器1(外面)



土師器2(内面)



土師器・瓦器



467



468



469



470



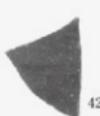
471



472



古錢



430



437

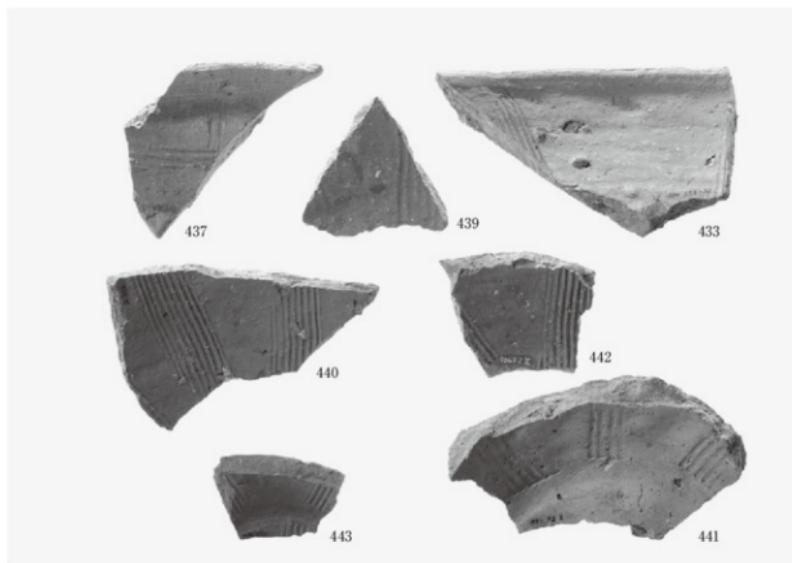


438

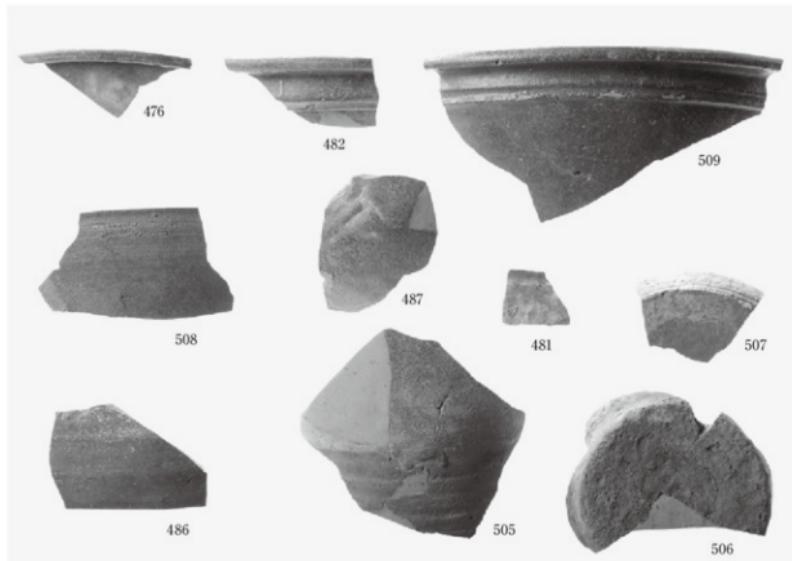


439

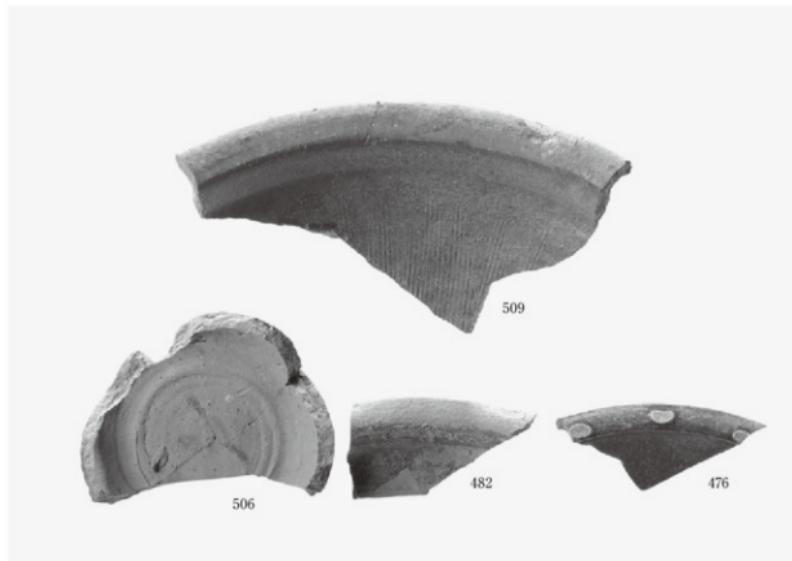
中世陶器1(外面)



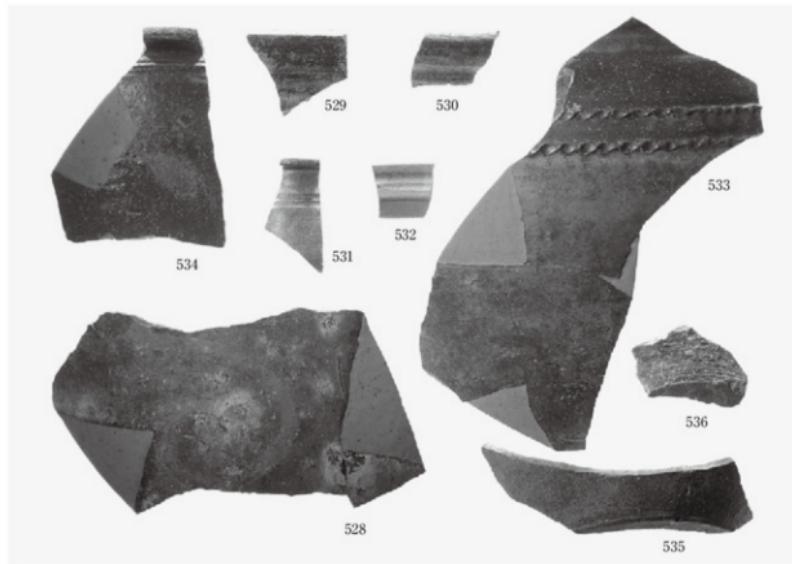
中世陶器2(内面)



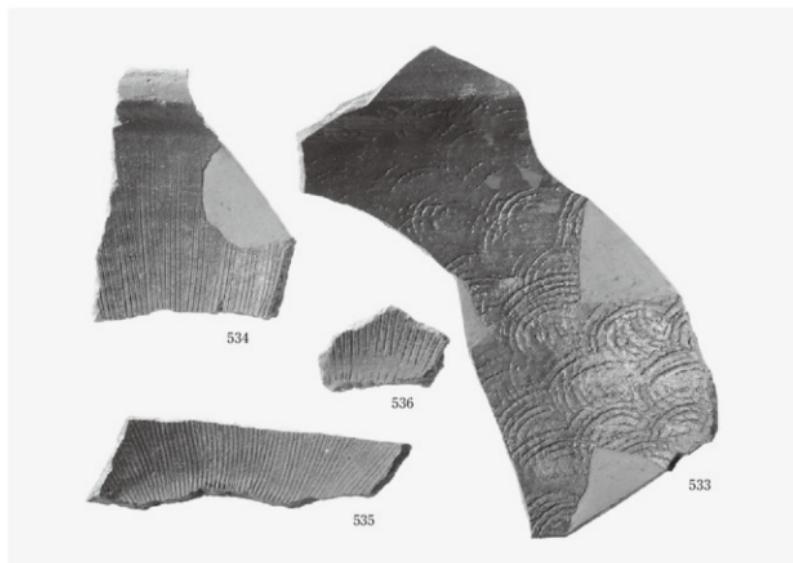
近世陶器1(外面・底部)



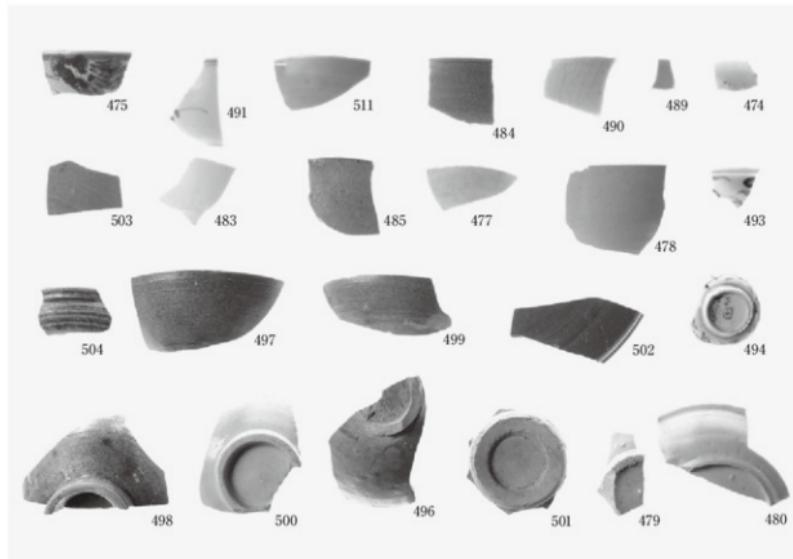
近世陶器2(内面)



近世陶器3(外面)

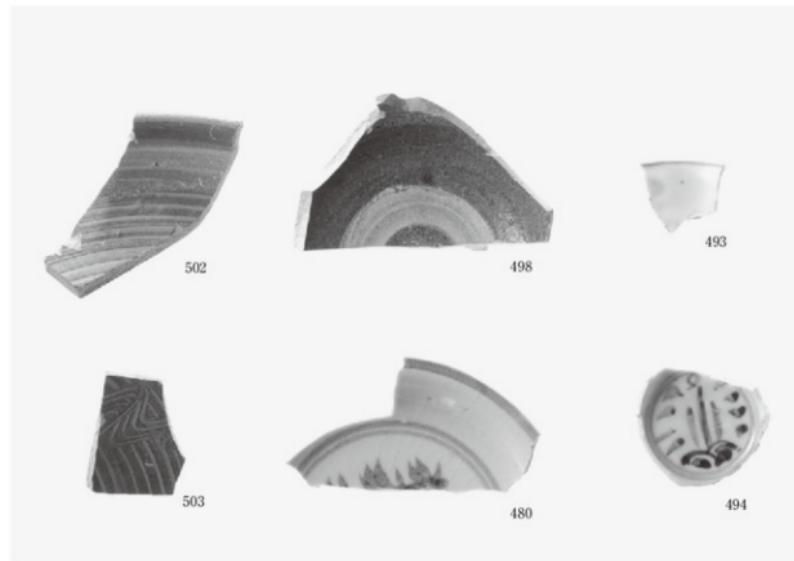


近世陶器4(内面)

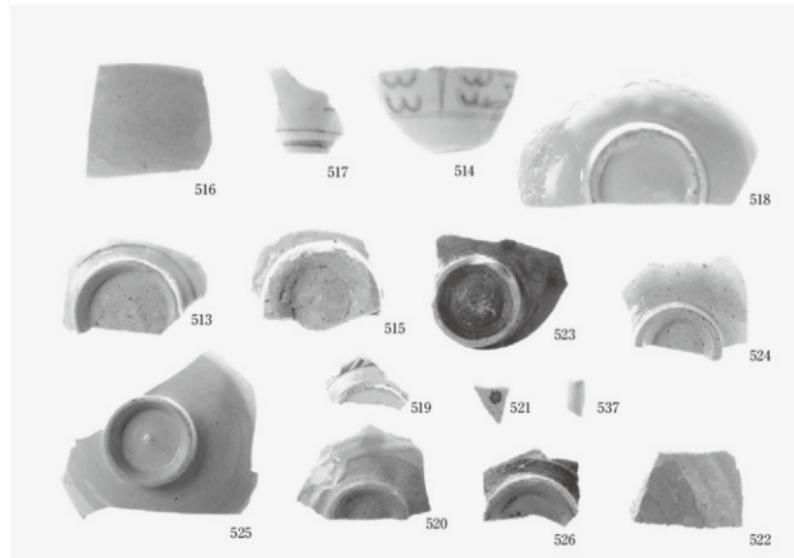


近世磁器1

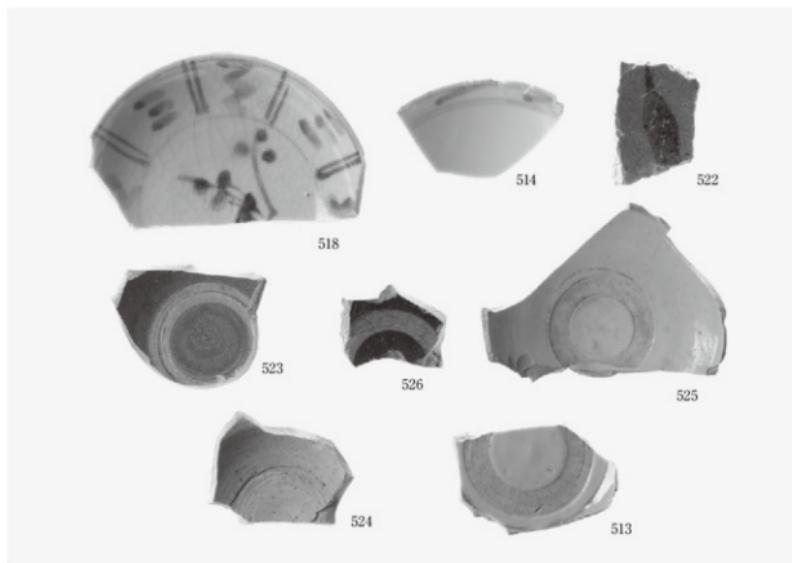
圖版三四



近世磁器2



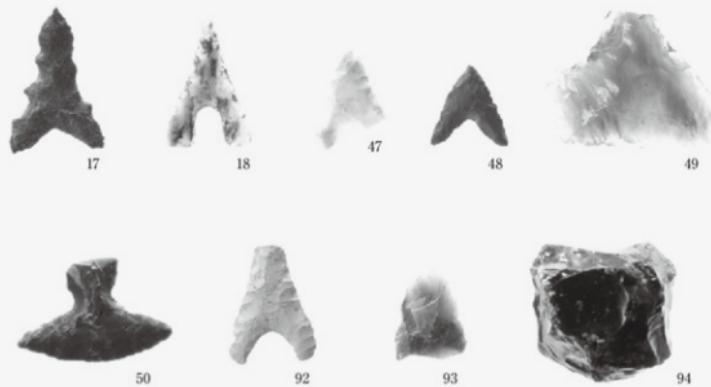
近世磁器3



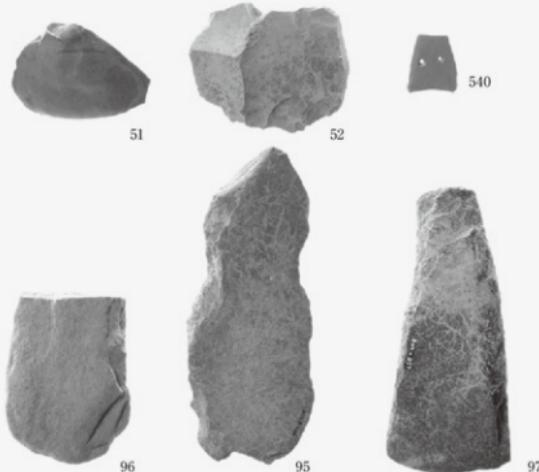
近世磁器4



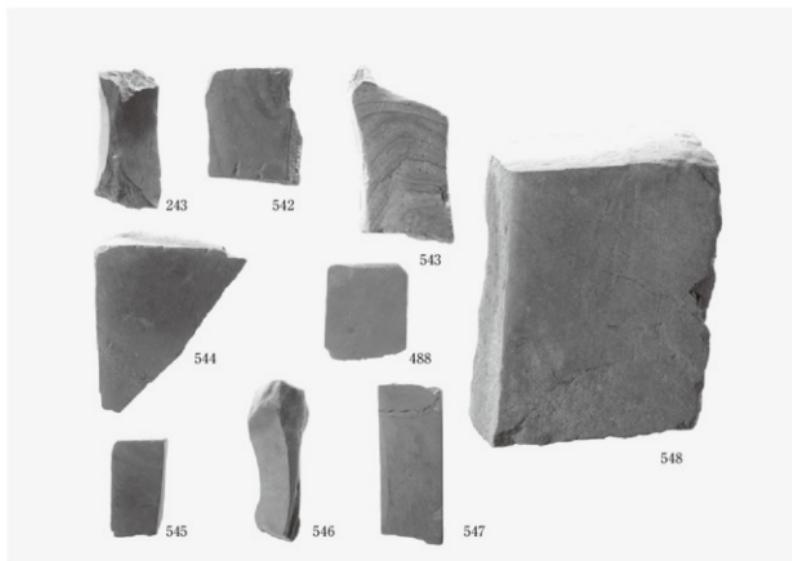
近世磁器5



繩文時代石器



石器



時期不明石器

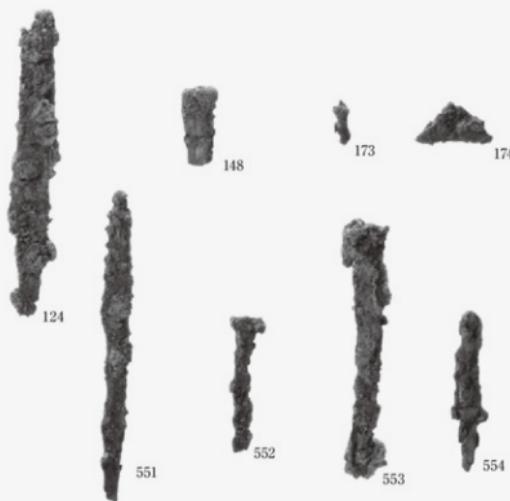


石臼



539

金床石



鐵製品

## 報 告 書 抄 錄

---

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第243集

## 高 樋 遺 跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）梅北工区道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4

2018年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 株式会社ながと

〒882-0856 宮崎県延岡市出北4丁目2479番地

TEL 0982(33)4001 FAX 0982(21)5963

---

---



Miyakonojo City

# TAKAHI Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefecture Archaeological Center  
Vol.243

2 0 1 8

Miyazaki Prefecture Archaeological Center